
遊戯王デュエルモンスターズGX 闇に選ばれし者

sufia

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王デュエルモンスターズGX 闇に選ばれし者

【Nコード】

N8586P

【作者名】

s u f f i a

【あらすじ】

デュエルアカデミアに入学した一人の少年

彼にはある特別な力があった・・・それは「闇の浄化」

そんな力を持った少年が遊城十代や仲間達と様々な戦いに挑む・・・
オリジナルキャラを交えた二次小説のため、苦手な方はリターンを
感想・意見をお待ちしています。

TURN 1 (前書き)

どうも！無茶な同時投稿です！

リリなの二次小説も書いていますのでそちらもお願いします！

TURN 1

Turn 1 《実技試験・闇に選ばれし少年》

童実野町のとある駅、電光掲示板には遅延の情報が流れている

「まさか、こんな目に遭うなんてな・・・」

駅を見上げながら呟く少年

《災難でしたな、若？》

何もない場所から少年に語りかけるなぞの声

「まったくだな。これじゃあ確実に遅刻だな・・・ま、事情話せば分かってもらえるだろ。行くか」

その声に返事を返し、時計を確認しながら目的地へと歩き出す少年

「受験番号三番 きたがみときや 北上時谷です。来る途中で電車が止まってしまい遅れました」

デュエルアカデミア試験会場で受付の係員に受験票を見せながら経緯を説明する時谷

「そうか、それなら仕方ないな。中にはこちらから連絡しておいてあげるから、会場へ行くといい」

「ありがとうございます」

許可をもらい、礼を言って中へ入っていく時谷

「『スカイ・スクレイパー・シュート』!!」
エレメンタリーロー

「お、E・HEROか？」

会場に着くと受験生の一人が試験官とのデュエルに勝っていた

「ガッチャ! 楽しいデュエルだったぜ! 先生!!」

崩れ落ちる試験官に決め台詞っぽいものを決めている少年

(あいつ、面白い奴かも)

少し興味の沸いた時谷

《若、『ソツチ』の気が?》

(ないから!!)

失礼な謎の声を即座に否定する時谷。そうしていると

「次、受験番号三番!!」

「はい!」

呼ばれ、リングに上がる時谷。

その途中、先ほどの受験生とすれ違う

「おめでとう」

「ああ、お前も頑張れよ!」

「ああ、サンキュ」

短く言葉を交わす二人

「さっきのは、マグレなノ〜ネ！今度こそワタクシの実力を見せ付けてやる〜ノデス！！」

先ほどの試験官が時谷を指差し宣言する

「受験番号三番、北上時谷です。よろしくお願いします」

気にせずに自己紹介する時谷

「ヌ！？ワタクシ〜ハ、デュエルアカデミア実技指導責任者のクロノス・デ・メディチなノ〜ネ」

律儀に自己紹介を返すクロノス
二人がディスクを構える

「「デュエル！」」

時谷 LP 4000

クロノス LP 4000

「俺のターン！ドロー！」

手札を確認する時谷

「手札から、ダーク・パーシアスを捨ててダーク・グレファアを守備表示で特殊召喚！」

ダーク・グレファアー 守備力 1600

「特殊召喚デス〜ト!?!」

「ダーク・グレファアーは手札からレベル5以上の闇属性モンスターを捨てることで、特殊召喚することが出来る!さらに、ダーク・グレファアーの効果発動!手札から闇属性モンスター一体を捨てることで、デッキから闇属性モンスター一体を墓地に送る!手札からネクロ・ガードナーを捨て、デッキからダーク・ホルス・ドラゴンを墓地に送る!そしてモンスターを守備表示でセット!カードを一枚伏せてターンエンド!」

1ターン目から手札を大量に消費する時谷

時谷 LP 4000

場 ダーク・グレファアー 守備 1600

伏せモンスター一体

伏せ一枚

手札一枚

「ワタクシのターン、ドロ〜!」

胸元からカードを引くクロノス

「手札から、古代の機械兵士アンティーク・ギアソルジャーを召喚ナノ〜ネ」

古代の機械兵士 攻撃力 1300

「古代の機械アンティーク・ギアデッキか・・・」

アンティークギアは攻撃時に相手の魔法・罠の発動を不能にする効果がある

「更に手札から魔法カード、『デュアルサモン二重召喚』を発動し、手札を一枚捨てて『コストダウン』も発動スルゝノ」

「すげえコンボ・・・」

（感心してる場合ですか、若？）

時谷の呟きにあきれる謎の声

「そして、古代の機械兵士を生け贄に、古代の機械巨人を召喚シマゝス」
アンティーク・ギアゴーレム

時谷の眼前に巨人が現れる

古代の機械巨人 攻撃力 3000

「バトルなノゝネ。古代の機械巨人でダーク・グレファアに攻撃ナノゝネ！『アルティメット・パウンド』！ちなみに、古代の機械巨人は守備モンスターを攻撃したときに、貫通ダメージを与えマゝス！！」

拳を振り下ろす巨人

「それなら、墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！墓地のこのカードをゲームから除外することで相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする！」

墓地からカードを抜き、ポケットにしまうと、ネクロ・ガードナーの幻影が巨人の腕を弾き返した

「フン、ターンエンドなノ〜ネ」

クロノス LP 4000

場 古代の機械巨人 攻撃 3000

伏せなし

手札一枚

「俺のターン、ドロ〜!・・・よし!来た!!」

カードを確認し、ふいに笑う時谷

(何を引いたノ〜ネ?)

時谷の様子を伺うクロノス

「俺はモンスターを反転召喚!執念深き老魔術師!こいつはリバー
スしたとき、相手モンスター一体を破壊する!対象は古代の機械巨
人!」

黒い渦に飲み込まれ消滅する機械巨人

「マァ〜ンマミィ〜ヤァ〜!?ワタクシの古代の機械巨人ガ〜!?!」

口をあんどぐり開けて驚愕するクロノス

「まだだ!俺はダーク・グレファアと執念深き老魔術師の二体を生
け贄に、堕天使ゼラートを召喚!」

時谷の場に赤黒い羽を携えた堕天使が舞い降りる

堕天使ゼラート 攻撃力 2800

(行くぜ！相棒！)

《は、参りましょう、若》

「そして、リバーズカード、オープン！『リビングデットの呼び声』
！墓地のダーク・ホルス・ドラゴンを特殊召喚！」

ゼラートの隣に黒い竜が降り立つ

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000

「すげえ！上級モンスターを一気に二体召喚したぞ！」

「かっこいい〜！」

時谷のプレイングに周りがざわめきたつ

「バトルだ！堕天使ゼラートでダイレクトアタック！『闇の波動』
！」

《ハァ！！》

ゼラートが手をかざすと黒い衝撃波をクロノスに放った

「グヌウ！！」

クロノス LP 4000 ↓ 1200

「これで終わりだ！ダーク・ホルス・ドラゴンでダイレクトアタック！！『ダーク・メガフレイム』！！！」

ホルスの口から漆黒の炎が吐かれ、クロノスに真っ直ぐ向かっていく

「ぺ〜ペロンチ〜ノォ〜!!」

クロノス LP 1200 ↓ 0

「そこまで！勝者、受験番号三番 北上時谷！」

審判の手が上がり、時谷の勝利を告げる

「ま、こんなもんだろう」

【??? side】

「すごい・・・ノーダメージで勝っちゃった・・・」

観覧席から時谷のデュエルを眺めている受験生の女子、
鈴原 すずはら 実由 みゆ

「あ・・・」

時谷の元へ一人の男子が近づき二人で笑いあっていた

「あの人は、彼の前にデュエルしていた・・・知り合いなのかな?・
・・・!？」

時谷に視線を戻したとき突然顔が赤くなった
時谷がとてもいい顔で笑っていたのだ

「か・・・かっこいい!!」

思わずそう呟いた

「実由？」

「ひゃう!？」

突然肩を叩かれ、変な声を挙げる

「ど、どうしたの？」

振り向くと、困惑気味な顔をしている友人がいた

「ああ、明日香か〜びっくりさせないでよ〜」

「肩を叩いただけじゃない」

不満の声にため息をこめて返す天上院てんじょういん 明日香あすか

「で、どうかしたの？」

「あっと、・・・その・・・彼、なんだけどね？」

「彼?・・・ああ、北上時谷・・・だっけ？」

実由の目線の先を辿り確認する明日香

「彼がどうしたの？」

「うん、あのクロノス先生にノーダメージで勝っちゃったじゃない? すごいなあ・・・って」

「そうね・・・すごい引き運ね・・・」

明日香の感想に頷く実由

明日香はそんな実由の顔を見てある違和感を覚えた

「実由、大丈夫？ 顔が赤いわよ？」
「え！？」

明日香の指摘に顔を抑える実由。その様子に明日香は

「・・・ああ、そうゆうこと・・・」

確信を持って意地悪く笑う

その顔にますます顔が赤くなる実由

「ま、がんばりなさい。応援してあげるから」

「明日香・・・うん！ 私、頑張る！！」

明日香の言葉に拳を握り宣言する実由
すずはら
鈴原 実由、人生初の一目惚れである。

【時谷 side】

実由が明日香に応援されている（弄られている）頃

「さて・・・と」

リングを降りる時谷の前にさっきの受験生が近づいてきた

「やったな！」

「ああ、サンキュ」

称賛に短く返す時谷

「自己紹介がまだだったな。俺、遊城十代^{ゆうぎじゅうだい}！十代でいいぜ！よろしくな！」

「俺は北上時谷だ。時谷でいい、こちらこそな」

互いに自己紹介する

「すげえなお前！あんなコンボ初めてみたぜ！」

興奮気味に語る十代

「運が良かっただけさ」

《いえいえ、実力ですよ、若？》

「ん？なあ時谷、お前のそれって・・・」

時谷の横を指差す十代

「は？十代・・・お前まさか・・・ゼラートが見えるのか？」

「ああ、見えるぜ。俺にも・・・ハネクリボー！」

《クリクリ》

十代が呼ぶと後ろから羽の生えたクリボーがふわふわ飛んでいた

（俺のほかにも精霊連れてる奴がいるんだ・・・）

《そのようすな》

感心した様子の時谷とゼラート

「そんなことよりさ！今度俺とデュエルしようぜ？」

「デュエルを？」

突然の申し出に首を傾げる時谷

「ああ、お前みたいな強い奴と闘ってみたいんだ！」

キラキラした目で語る十代

「ふむ・・・いいよ。やろう」

「ほんとか!？」

時谷の言葉を即座に確認する十代

「ああ、楽しそうだ」

「やったぜ! 絶対だからな!!」

「ああ!!」

互いにいい顔で拳を合わせる

これが、北上時谷と遊城十代の出会いだった・・・

《若、やはり『ソッチ』の気が・・・?》

(だからないっての!!)

TURN 1 (後書き)

どうも！

初デュエルの相手はクロノス先生でした！

ちよつと展開が無理やりかな・・・？ま、大丈夫でしょう！

ちなみに、主人公の時谷君のデッキは作者のデッキを基にしていますが辻褄を合わせるためにアニメオリジナルのカードや、禁止カードを使ったりしますが大目に見てくださいとありがたいです。

ではまた次回！

あ、こっちでは次回予告はしないのであしからず

TURN 2 (前書き)

さあ、こちらも第二話の投稿です！

この小説のコンセプトでもある「横取りデュエル」！最初のターゲットは誰だ！？

まあ、原作見てたら大体予想はつくんですが・・・

TURN 2

Turn 2 《出会い・アカデミア初デュエル》

実技試験から数週間後・・・

海の上を走る一隻の船、船体にはデュエルアカデミアの校章が描かれていた

「しかし、島を丸々学校にするなんて・・・あの人もいろいろ目茶苦茶だよな・・・」

《たしかに・・・》

船のデッキで、設立者である人の顔を思い浮かべながら苦笑いをする時谷

「ほんと、金持ちのやることはわからないねえ・・・」

《若、それは若が言っではいけないかと・・・》

自分のことを棚上げしている時谷を咎めるゼラート

「そうだな・・・それに、俺も将来・・・」

言葉が続けようとしたとき

「おっ！時谷！！」

「ん？」

十代が手を振りながら一人の男子とともにやってきた

「おう、十代・・・と、そっちは？」

十代の後ろに立っている眼鏡の背の低い男子を見ながら聞く時谷

「僕は、丸藤^{まるふじ} 翔^{しょう}ツス、翔^{しょう}って呼んで欲しいツス。よろしくツス！」

「ああ、北上時谷だ、時谷でいい。よろしくな」

互いに自己紹介

「時谷！着いたら早速デュエルしようぜ！」

「着いたら入学式やら、クラス分けやらでデュエルする暇ないんじゃないか？」

ハイテンションの十代に淡々と語る時谷

「あ、そうか・・・」

その言葉に落ち着きを取り戻す十代

島に付く間三人で談笑を続けた

島に着き、それぞれのクラスが発表された

十代と翔はオシリスレッドの赤い制服を、時谷はラーイエローの黄色い制服を着ていた

「よお、一番」

三人で再び雑談をしていると後ろから声をかけられた

「三沢！」

「? 誰だ?」

突然の登場に首を傾げる時谷

「おれは、三沢^{みさわ} 大地^{だいち}。君と同じライイエローだ」

「ふーん、俺は北上時谷だ、時谷でいいぜ。ところで、『一番』って何のことだ?」

先ほどの三沢の発言の確認をする時谷

「十代がそう宣言したのさ」

「ああ、この学園の一番になるんだ!!」

三沢の言葉に自信満々に答える十代それを聞いた時谷は

「すごい自身だな」

あくまで冷静だった

《若もあれぐらい熱くなればよろしいのでは?》

(俺はいいよ。今のままで)

ゼラートの提案を一蹴りする時谷

入学式が終わり十代と翔の二人とともに学校内の探検をしている時谷すると、突然十代が走り出した

「おい、十代?」

「あっちでデュエルのおいがする!」

そういつて走り去る十代

「待てって！・・・行くぞ、翔」

「う、うん！」

十代を追って走り出す二人

追いついた先は、アカデミアのデュエルリンクだった

「すごい！これ最新型のデュエルリンクだ！」

「すげえぜ！！時谷！ここでデュエルしようぜ？」

ウキウキしながら誘う十代

「そうだな・・・もう後は歓迎会だけみたいだし、やるか？」

実はちょっと楽しみにしている時谷

「だめだだめだ！！ここはオシリスレッドやラーイエローなんかが使って良い所じゃない！」

突然乱入するオベリスクブルーの男子生徒二人

二人と口論を始める十代。するとそこへ

「どうした？」

「あ！万丈目さん！！」

振り向くといかにも偉そうな態度をしているブルーの男子がいた

「誰だ？あいつ？」

「さあ？」

翔に聞くが翔も分からない様子

「貴様ら！未来のデュエルキング、万丈目さんを知らないのか！」

「「知らない」「」」

三人同時に答える

「何をしているの？あなた達」

「騒がしいよ？」

二人の女性の声が聞こえ、全員が注目すると、青い制服を着た女子が二人立っていた

「次から次へと・・・」

若干うんざり気味の時谷

「天上院君と鈴原君か。なに、この三人に身の程というものを教えて差し上げていたのさ」

「もうすぐ、新生の歓迎会が寮であるわ」

「早く戻ったほうがいいんじゃないの？」

万丈目の言葉を軽くスルーして続ける女子二人

「チッ！おい！行くぞ！」

取巻きを引き連れて去っていく万丈目

「あなた達も戻ったほうがいいわ。歓迎会が始まるわよ?」

「やべ!翔、戻るぞ!」

「あ、待ってよ!アニキ!」

走り去っていく十代と翔

「俺も戻るかね・・・」

時谷も戻ろうとすると

「あ、あの!」

「ん?」

急に呼び止められる。振り向くと先ほどの女生徒の一人、実由が立っていた。若干顔が赤い

「なに?」

「え・・・えっと・・・これ!」

紙を突きつける実由。そこには氏名とアドレスと電話番号が書いてあった

「・・・メアドの交換?俺と?」

時谷の問いにコクンと頷く実由

「・・・ダ、ダメ?」

上目遣いで聞いてくる実由

「うっ！・・・い、いや、別にいいけど・・・ほい」

女性の必殺技に戸惑いながらメモ用紙に自分のメアドと電話番号を書いて渡す時谷

「あ、ありがとう！！」

満面の笑顔で例を言う実由

「お、おう。じゃ、じゃあな」

その表情に顔を背け、去っていく時谷

寮への帰り道に実由から貰った用紙の名前を確認する時谷

「鈴原・・・実由・・・か」

《若、一目惚れですか？》

「っ！！？」

核心を突くゼラートの言葉に一気に顔が赤くなる時谷

《おやおや、凶星ですか？若？》

「う、うるさい！」

寮まで散々ゼラートに弄られ、ぐったりと疲労を溜め込んで歓迎会に参加した時谷だった

歓迎会の後部屋に戻った時谷はPDAを取り出し早速実由にメール

を打つことにした

《早速ですか・・・せっかちですね?》

「くっ!!ゼラート、デッキから抜いてやろうか?」

《構いませんが、戦力はガタ落ちですよ?若?》

わずかな反撃も皮肉で返されている

その最中にもメールを打ち終わり送信する

内容は簡単な自己紹介的な内容である

《自己アピールですか、最初が肝心ですからね》

「ゼラート・・・お前いい加減に!!・・・ん?」

いい加減腹が立ってきて立ち上がる時谷

そのときPDAが鳴り出した

名前を確認する時谷。そこには見覚えのある名前があった

「万丈目か・・・」

メールを展開する時谷

『やあ、ラーイエローの3番君。午前0時に先ほどのデュエルリンクで待っている。互いのベストカードを賭けたアンティールでデュエルだ。遊城十代も呼んでいる、勇気があるなら来るといい』

「・・・なめられたもんだな・・・」

PDAを閉じてそう呟いた時谷

《受けますか?若》

「当然！」

ゼラートの問いに即答する時谷

そのままデッキを持ってデュエルリンクへ向かう
途中で十代と翔と合流し、一緒に向かった

扉をくぐるとすでに万丈目たちが立っていた

「よく来たと褒めてやろう！北上時谷！」

「うるさい・・・」

わずかに怒りを籠めながら睨む時谷

「ふん！どんなカードを賭けるんだ？」

少しびびったが、いつもの調子で語る万丈目

「こいつだ」

そういつて出したカードは堕天使ゼラートだった

「時谷！そいつは！！」

「大丈夫だ・・・俺は負けない！」

（これで、さっきのはチャラだ、ゼラート）

《ええ、分かっていますとも。若》

ゼラートも納得の様子

「お前のは？」

「ふっ・・・こいつだ」

出したカードはタイラント・ドラゴン

「さあ、始めよう！」

「「デュエル!!」」

万丈目	LP	4000
時谷	LP	4000

「俺のターン、ドロー!ふっ!」

自分の手札を見てほくそ笑む万丈目

「俺はリボーン・ゾンビを守備表示で召喚!」

リボーン・ゾンビ	守備力	1600
----------	-----	------

「カードを二枚セットし、ターンエンドだ!」

万丈目	LP	4000
-----	----	------

場	リボーン・ゾンビ	守備	1600
---	----------	----	------

伏せ二枚

手札三枚

「俺のターン!ドロー!」

時谷がカードを引いた瞬間

「あなた達、何をやっているの!?!」

「こんな時間にデュエルするなんて校則違反だよ!」

明日香と実由が入ってきて注意するが時谷は

「大丈夫だ、もう終わる」

そう宣言した。その言葉に万丈目は

「何を言っている！1ターンで終わらせれるものか！！」

時谷の言葉に怒りを露にする

「いや、終わるさ！！手札から、ダーク・ホルス・ドラゴンを捨てて、ダーク・グレファアを攻撃表示で特殊召喚！！」

ダーク・グレファア 攻撃力 1700

「きたか・・・」

実技試験のことを思い出す万丈目

「そして、ダーク・グレファアの効果発動！手札からダーク・シムルグを捨てて、デッキから堕天使ゼラートを墓地へ送る！」

次々とカードを墓地に送る時谷

「なんでネクロ・ガードナーを捨てないんスカ？」

時谷のプレイを不思議に思う翔

（何かの布石か？）

万丈目も不思議そうに見ている

「俺の墓地に、闇属性モンスターが三体の場合のみ、こいつを特殊召喚出来る！来い！ダーク・アームド・ドラゴン！！」

ホルスとは別の漆黒の竜が現れる

ダーク・アームド・ドラゴン 攻撃力 2800

「攻撃力2800だと！？」

突然の上級モンスターの召喚に驚く万丈目

「すげえ！」

「あんなにいても簡単にモンスターを呼び出すなんて」

「さすがっス！！」

時谷の戦法を嬉しそうに見守る十代と翔と感心しながら見ている明日香と実由

「だが！それだけではこの俺に勝つのは不可能だ！！」

（俺の場には聖なるバリアーミラー・フォースーにリビングデッドの呼び声。負けはない！！）

そう確信していた万丈目だったが

「言ったろ？このターンで終わらせるって」

不適に笑う時谷

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果発動！！墓地の闇属性モンスターを一体ゲームから除外することで、場のカードを一枚破壊できる！」

「なに！？」

万丈目の場には三枚のカード、そして時谷の墓地には三体のモンスターがいる

「墓地の三体のモンスターをゲームから除外！お前の場のカード三枚を破壊する！！『ダーク・ジェノサイド・カッター』！！」

墓地の三体のモンスターが黒い球体となり、ダーク・アームド・ドラゴンに取り込まれ、そのまま吐き出されて万丈目のカードたちに向かい、破壊される

「馬鹿な！！」

「まだだ！魔法カード、『次元融合』を発動！俺は2000のライフを払い、互いに除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する！だが、お前のモンスターはいない！蘇えれ！ダーク・ホルス・ドラゴン！ダーク・シムルグ！堕天使ゼラート！」

空間に亀裂が入りその中から三体のモンスターが現れる

時谷 LP 4000 ↓ 2000

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000

ダーク・シムルグ 攻撃力 2700

堕天使ゼラート 攻撃力 2800

「そ、そんな!!」

時谷のモンスター達の威圧に怯む万丈目

「終わりだな・・・全モンスターで万丈目にダイレクトアタック!
!」

「うっ! うわああああ!!」

猛攻に吹き飛ばされる万丈目

万丈目 LP 4000 ↓ 0

「人を舐めると痛い目を見るって覚えておきな」

立ち去ろうとする時谷

「ま、待て! アンテイルールは・・・!」

「いらねえよ」

そう言って十代達のもとへ降りる時谷

「やったな! 時谷!!」

「すごいっス!!」

「ああ、サンキュ」

いまだに興奮している十代達を見ながら小さく笑う時谷

「あ、あの・・・北上君・・・」

「ん? ああ、鈴原・・・」

呼ばれて振り返ると少し顔を赤くした実由が立っていて同じく顔が少し赤くなる時谷

「か、かつこよかったよ!!」

振り絞った声で感想を言う実由

「お、おう。ありがとうな」

上擦った声で返す時谷。しかし、突然

「いけない!ガードマンよ!!」

明日香の声で現実に取り戻される

「まずいな・・・急いで逃げるぞ!!」

何とかばれずに脱出に成功した

「ふう、もう大丈夫だろう」

「ええ」

「サンキューな、えっと・・・」

「ああ、天上院明日香よ、明日香でいいわ」

「ああ、俺は・・・」

「知ってるわ、北上時谷。時谷でいいんでしょう?」

「ああ、かまわない」

先に台詞を言われてしまい頷くしかない時谷

「あ、あの！私のことは実由でいいからね！！」

顔を赤くしながら割り込んでくる実由

「お、おう。俺のことも、時谷って呼んでくれな？み、実由？」

「う、うん！と、時谷・・・君・・・」

顔を赤くしながら名前で呼び合う二人。周りの三人（と一体）は完全に空気に

その後、このまま解散することになり、それぞれの寮へ帰っていった帰りしな、実由は時谷と昼食の約束を取り付け、時谷も頷いて帰った

その次の日

約束どおり実由と昼食を摂るために中庭にやって来た時谷

「時谷君、購買行かないの？」

そう、二人は購買へは行かずに昼休みになってすぐに来ていた

「ああ、大丈夫だ。飯なら俺が作ってきたから」

そう言って包みを二つ取り出す時谷。その一つを実由の手に乗せて

「ほい、実由の分！」

と渡した

「えっ！？時谷君、料理できるの！？」

「ああ、結構得意だぞ？」

心底驚いている実由

「い、意外・・・」

「そうか？」

実由の感想を不思議そうに聞く時谷

「開けてもいい？」

「当たり前だろ？何のための弁当だよ」

少し笑いながら答える時谷

「そ、それじゃあ・・・」

開けてみると・・・中身は卵焼きやほうれん草の御浸しなどオーソドックスなおかずが彩り鮮やかに入っていた

「す、すごい！！」

「さ、早く食べようぜ？」

食事を始める二人

味は、時谷が胸を張るように最高の味だった

一品一品を手作りされていて細かい味付けもされていた

「ごちそうさま！時谷君、すごくおいしかったよ？」

「ああ、ありがとう。また作ってくるな？」

時谷がそう言うとき実由は少し考えた後

「あ、あのね・・・時谷君・・・」

「ん？」

「その・・・今度は私が作ってくるよ！時谷君みたいにすごくないけど、一生懸命作るから！！」

そう宣言した

「ああ、楽しみにしてる」

「うん！！」

時谷の言葉に満面の笑顔で頷く実由だった

TURN 2 (後書き)

どうも！第二話でした！

やゝ時谷君と実由ちゃん、ラブラブですねゝ書いててこっちが疲れ
ました・・・

キャラたちの台詞が違うのは作者がうる覚えだからです

さ、ということで「横取りデュエル」のターゲットは万丈目君でし
た！

今後も十代君や他の原作キャラ達のデュエルを掻っ攫っていきます
よゝ！

さて、今回のデュエルの見所はなんと言っても1ターンキルでしょ
うか？

ライフが4000だから出来ることですね・・・8000じゃこう
はいきません。ダムドの強さはハンパないですね・・・

ダムドの効果名や前回のゼラート達の攻撃名は遊戯王Wikiで見
た元のモンスター達の攻撃名や効果名に『ダーク』とつけただけの
なんとも安直設定・・・その辺のボキャブラは御座いません・・・
すいません・・・

ではまた次回！

TURN 3 (前書き)

さあ、第三話です。

今回は横取りしません！ヒロインとデュエルします！

TURN 3

Turn 3 《VS実由 光と闇のデュエル》

万丈目との一件から一週間、だんだんと慣れてきた授業を受ける時谷
昼食を十代たちや実由と共に摂り、午後からは体育の時間なので専
用教室で授業を受けていた

「十代、翔はどうしたんだ？」

何時も十代と一緒にいるはずの翔がいないので十代に確認する時谷

「さあ？トイレじゃねえか？」

十代がそう答えると、少し浮かれた様子の翔がやってきた

「ああ、アニキ！時谷君！」

「翔？何かあったのか？」

様子のおかしい翔に聞いてみる時谷

「いやいや！なんでもないっスよ！ただ今日はいい気分なんスよ！」

「そ、そうか。よかったな」

《若、あまり関らないほうが良いかと・・・》

（そうだな・・・人の幸せを邪魔するのは良くないしな）

ゼラートの忠告に素直に従う時谷

《ええ、若も邪魔されたら怒るでしょう？》

(うるさいよ!!)

余計な一言に怒る時谷

翔は授業が終わると同時に姿を消していた

心配しても仕方がないので何時ものように実由を女子寮の近くまで送り届けたあとイエロー寮に戻った時谷

夕食後、自室にて

「さてっと・・・新しいデッキでも作るか」

そういつて、あまっているカードを取り出しデッキ作りを開始する
時谷

「よし!こんなところかな」

作り終え、一息ついたころPDAに着信が入る

「十代から?もしもし?」

『時谷か?翔が・・・翔が捕まっちゃった!!』

「は?なんだそれ?」

よく分からずに聞き返す

十代によれば明日香から翔が女子寮の風呂を覗いていてそれを現行犯で捕まえたので返して欲しければ湖まで来るようにということだった

「わかった。すぐ行く」

上着を羽織り、部屋を出る時谷

途中で十代と合流し、ボートで湖の中程へむかう二人湖にはすでに明日香と実由、そして他に二人の女子がいた

「あ、アニキ〜！時谷くん！」

縄で縛られていた翔が二人を呼ぶ

「翔！お前何やってんだよ？」

呆れがちに尋ねる十代その横で

「よう！実由！」

「時谷君！！」

普通に挨拶してる二人

「実由さん？この殿方はどちら様ですか？」

「なんか、すごく親しそうですけど？」

後ろで翔を抑えていた二人が実由に聞いてきたので、差し障りない程度に時谷を紹介する実由

「まあ、そうなんですか。ワタクシ、浜口ももえと申します。よろしく願います」

「私は枕田ジュンコよ」

「北上時谷だ、時谷でいい。ところで実由、本当に翔が覗いてたのか？」

自己紹介を済ませ実由に確認する時谷

「私も翔君がそんな事するなんて思えないんだけど」

「翔、どうなんだ？」

十代に聞かれ、翔は事情を話す

ロッカーの中に手紙があり差出人が明日香で内容が夜に女子寮に来るようにという所謂お誘いの手紙だったそうで、その手紙を確認すると、明らかに女性の筆跡とは思えない字で書かれていた
当然、明日香もそんな手紙を出した覚えはないらしい

「なあ、翔は覗いてないんだから放してくれよ！」

「ダメよ！」

十代の懇願もバツサリ切り捨てるジュンコ

「ねえ、ならあたし達とデュエルしない？あなた達二人が勝ったら翔君を放して、このことも黙っていてあげる。どう？」

「いいぜ、そのデュエル乗った!!！」

十代は乗り気だった

「なら、俺の相手は・・・」

「私だよ!!！」

実由が手を挙げて立候補する

「実由か・・・いいぜ、やろう！」

「うん！」

ボートの上では狭いので陸に上がり、十代と明日香、時谷と実由の

順番でデュエルをすることになった

十代はE・HEROの融合コンボで明日香のプリマデッキに勝利して次に時谷たちの番となった

「行くぜ！実由！！」

「負けないよ！時谷君！！」

「「デュエル！！」」

実由 LP 4000

時谷 LP 4000

「レディファーストだ、実由からでいいぜ！」

紳士な時谷

「それじゃ、私のターン！ドロー！モンスターをセット！カードを三枚伏せて、ターンエンド！」

実由 LP 4000

場 伏せモンスター一体

伏せ三枚

手札二枚

「俺のターン！ドロー！手札から永続魔法『漆黒のトバリ』を発動！このカードはドローフェイズにドローしたカードだが闇属性モンスターだったとき互いに確認し墓地に送ることで新たにカードをドローできる！さらに手札から終末の騎士を召喚！」

時谷の場に鎧を纏った騎士が現れた

終末の騎士 攻撃力 1400

「終末の騎士の効果発動！このモンスターが通常召喚、反転召喚、特殊召喚されたとき、デッキから闇属性モンスターを墓地に送る。俺はネクロ・ガードナーを墓地に送る！」

「攻撃を一度だけ無効に出来るモンスター・・・」

「バトル！終末の騎士で守備表示モンスターに攻撃！行け！」

手に持った剣で、カードを切り裂く終末の騎士

「リバース効果発動！メタモルポット！」

「何！？」

「互いに手札を全て捨て、手札が五枚になるようにドローする！」

お互いに手札を交換する

「なら、俺はカードを二枚伏せて、ターンエンド！」

時谷 LP 4000

場 終末の騎士 攻撃 1400

漆黒のトバリ 伏せ二枚

手札三枚

「私のターン！ドロー！」

引いたカードを見て頷く実由

「手札から魔法カード！『光の援軍』！！」

「な!?! 『光の援軍』・・・ライトロードか!?!」

「そうだよ、デッキの上から三枚を墓地に送り、デッキからライトロードと名の付くモンスターを手札に加える。ライトロード・パラディン・ジェインを手札に加える!そしてさらに手札から魔法カード『ソーラーエクステンジ』を発動!手札からライトロードと名の付くモンスター、ライトロード・ビースト・ウルフを捨てて、新たに二枚ドロ!そして上から二枚を墓地に送る」

「どんどん墓地が増えていきやがる・・・」

展開のスピードに驚いている時谷

「この瞬間、ライトロード・ビースト・ウルフの効果発動!デッキから墓地に送られたとき、特殊召喚できる!」

実由の場に槍と盾を持った獣戦士が現れる

ライトロード・ビースト・ウルフ 攻撃力 2100

「くそ!ウルフが出やがったか!?!」

「さらに手札から、ライトロード・パラディン・ジェインを召喚!」

白い甲冑を纏った騎士が現れる

ライトロード・パラディン・ジェイン 攻撃力 1800

「これ以上出させるか!罠カード発動!『激流葬』!!モンスターが召喚、反転召喚、特殊召喚されたときに発動!フィールド上のモンスターすべてを破壊する!!!」

「えっ!?!きゃあ!?!」

ジェインとウォルフ、そして時谷の終末の騎士が濁流に飲み込まれる

「これで！」

小さくガッツポーズする時谷

「まだ終わりじゃないよ？」

そういうと実由は笑っていた

「ジェインが墓地に送られたことで私の墓地に四種類以上のライトロードが墓地に揃った！これで、このモンスターを特殊召喚できる！現れよ！裁きの龍^{ジャッジメント・ドラグーン}！！」

神々しい光に包まれ白銀の龍が舞い降りる

裁きの龍 攻撃力 3000

「来たか、ライトロードの最終兵器！！」

「裁きの龍の効果発動！！ライフを1000ポイント払うことで裁きの龍以外のカードをすべて破壊する！！」

実由 LP 4000 ↓ 3000

裁きの龍から白く輝く光が放たれる

「くう！！」

輝きに目を瞑る時谷、その間に漆黒のトバリと伏せカードが破壊される

(くそ！リビングデットの呼び声が！！)

「バトル！裁きの龍で時谷君にダイレクトアタック！！さあ！ネクロ・ガードナーの効果は？」

攻撃態勢に入る裁きの龍、後ろで効果発動の確認をする実由

「・・・効果は使わない。通すぜ・・・」

「えっ！？」

時谷の決断に実由だけでなく、十代達も驚いていた

「いいの？」

「ああ、来いよ」

実由の最終確認に頷き受け入れる体勢に入る時谷
そのまま裁きの龍の攻撃を真っ向から受けた

「ぐうううう！！！！」

時谷 LP 4000 ↓ 1000

「ふう・・・さすがだぜ、実由」

「え？」

攻撃が終わった後、突然褒めだす時谷

「この学校に来てから、俺のライフを削ったのは、お前が初めてだぜ？」

そう、クロノスも、万丈目も、一度として時谷に攻撃を届かせてはいなかった。（万丈目のときはコストによりライフは減ったが戦闘ダメージはゼロ）

「でも、それは時谷君がわざわざ通したからで・・・」

ネクロ・ガードナーを使えばライフは減らなかったはずなのは確かだった

「まあ、その理由はこれからわかるぜ？さ、まだお前のターンだぜ？」

「あ、っとカードを二枚伏せて、裁きの龍の効果でエンドフェイズにデッキの上から四枚を墓地に送る。これでターンエンドだよ」

実由 LP 3000

場 裁きの龍 攻撃 3000

伏せ二枚

手札三枚

「行くぜ！俺のターン！ドロー！！俺の墓地に五体以上闇属性モンスターがいて、場にモンスターがいない時こいつを特殊召喚する。来い！ ダーク・クリエーター！！」

黒く染まった創世神^{ザ・クリエーター}が現れる

ダーク・クリエーター 攻撃力 2300

「五体！？だからネクロ・ガードナーを！？」

時谷の考えを見抜いた実由

「ああ、ネクロを入れて丁度五体だったんでな。さあ、いくぜ！ダイク・クリエーターの効果発動！墓地の闇属性モンスター一体を指定する、そして墓地の闇属性モンスターを除外することで指定したモンスターを特殊召喚する！俺は、堕天使ゼラートを指定してダイク・アームド・ドラゴンを除外する！蘇れ！ゼラート！！」

《参る！》

堕天使ゼラート 攻撃力 2800

「堕天使ゼラートの効果発動！手札から闇属性モンスターを捨てることで相手モンスターをすべて破壊する！俺はジャイアント・オークを捨てる！行け！ゼラート！！『闇の光芒』！」

《先ほどの札だ》

ゼラートの剣から雷が放たれ裁きの龍を飲み込む

「裁きの龍が！！」

「バトルだ！ゼラートで、ダイレクトアタック！！『闇の波動』！！」

《はああああ！！！！》

衝撃波を飛ばすゼラート

「くっ！！」

実由 LP 3000 ↓ 200

「ダーク・クリエーターでダイレクトアタック!!」

雷撃を放つクリエーター

「させない!! リバースカードオープン!! 永続罠、『閃光のイリ
ュージョン』!! 墓地のライトロードを特殊召喚する! 来て!! ラ
イトロード・エンジェル・ケルビム!!」

実由の場に白い衣を纏い白い光に包まれた天使が舞い降りる

ライトロード・エンジェル・ケルビム 攻撃力 2300

（ん? あのモンスター・・・他のやつと感じが違う?・・・もしか
して）

「なあ、実由・・・そいつ、まさか・・・?」

疑問に思い実由に問いかける時谷

「・・・やっぱり気付いたね。時谷君・・・君の考えてる通りだよ
!」

「そっか・・・」

実由の言葉に納得する

「詳しい話はまた今度、ね?」

「ああ、そうだな。バトルは中断する!」

攻撃態勢を解くクリエーター

「何とか、耐えられた!!」

安堵のため息を吐く実由だったが、

「まだだぜ、実由!!」

「えっ!?!」

思わず顔を上げる実由

そこには、自分の好きな笑顔をしている時谷だった

「メインフェイズ2に移行!! 俺はダーク・クリエイターを生贄に、邪帝ガイウスを召喚!!」

クリエイターを闇が飲み込みその中から新たなモンスターが現れた

邪帝ガイウス 攻撃力 2400

「帝モンスター!?!」

「そうだ、ガイウスは生贄召喚に成功したとき、フィールド上のカード一枚をゲームから除外する!そして、それが闇属性モンスターだった場合、相手に1000ポイントのダメージを与える!!俺が除外するのは、ガイウス自身だ!!」

ガイウスは自身が作り出した闇の穴に飲み込まれていく

「闇属性モンスターを除外したことにより、相手に1000ポイントのダメージを与える!!」

「くっ!!ああああ!!!!」

あまりの衝撃に座り込んでしまう実由

実由 LP 200 ↓ 0

「よっしゃ！時谷の勝ちだぜ！！」

「良かったっス」

十代と翔が喜んでいるのを横で聞きながら実由に駆け寄る時谷

「実由、大丈夫か？」

「うん・・・負けちゃったかあ・・・結構いい線行っただけだなあ」

落ち込んでいる実由それを見た時谷は

「いや、実由は強いよ」

そういいながら手を差し伸べる時谷

「ほら、立てるか？」

「あ・・・ありがとう。きやつ！！」

手をとったのを確認し、実由を引き起こすが、勢いでバランスを崩し時谷の方へ倒れこんでしまう実由
倒れないように支えたが、それが、抱き合っているような状態になってしまっていた

「ご、ごめんなさい！！」

「い、いや・・・こっちこそ・・・強くしすぎたな。ごめん・・・」

互いに顔が真っ赤になり俯いてしまう。周りの人間がまたしても空気

「ん、ん!!」

「「っ!!」?」

明日香の咳払いに現実に戻される二人

「さて、約束どおり、翔君は返すわね。後、報告もしないから安心してね?」

取り繕うように言う明日香

「おう! サンキューな、明日香! さて、翔、時谷、帰ろうぜ?」

明日香に礼を言い、帰っていく三人。しかし、時谷だけ振り返り

「実由!!」

突然名を呼ぶ

「は、はい!」?

驚いて声が裏返る実由

「さっきの話の続き、明日の昼飯の時な?」

「うん!!」

ちやっかり昼食の約束まで取り付けながら去っていく時谷

その後、ももえやジュンコから長時間に及ぶ質問攻めが実由に待っていた。

TURN 3 (後書き)

どうも！いかがでしたか？

だんだんラブコメっぽくなってきましたね！

いつの時代だ？って感じですよ！

作者のボキャブラの無さのせいで、こんな安っぽいものになってしまいました・・・

まあ、なにはともあれヒロイン実由ちゃんのデッキは、もはや二次小説ではお馴染みの「ライトロード」でした！

いや〜コンセプトがわかりやすくていいね！

それでもね・・・初手でメタモル伏せたり、次のターンから援軍やらエクスチェンジやら使い始めるのは少し強引かな・・・？と書いてて思いました・・・ライトロードってあんまり事故起きないんですよ・・・そんなことは無いのかな・・・？

漆黒のトバリも出ただけで、意味無いんじゃないかな・・・最後はバーンかよ・・・ってね・・・思ったりもします・・・

愚痴っても仕方ありませんね・・・精進します！！

ではまた次回！！

TURN 4 (前書き)

第四話にして十代とデュエルです！

今回はあとがきで少し遊びます！

TURN 4

Turn 4 《馴れ初め・試験準備》

実由とのデュエルの翌日。時谷は実由と十代を誘って学園の中庭で昼食を摂っていた

「それじゃあ、改めて紹介するね。ケルビム！」

《はい、姫様》

実由に呼ばれると、一瞬の光の後に一人の女性が立っていた

「おー！これが実由の精霊か！！」

《クリクリ〜！》

興奮気味の十代とハネクリボー

「そうだよ、私が小さいときからずっと一緒なんだ」

《皆様、よろしくお願いします》

実由の説明を受け挨拶をするケルビム、時谷は先程のケルビムの言葉について聞く

「ところで、『姫様』って？」

実由は時谷の質問に頬を少し掻きながら

「あー……昔からそう呼ぶんだよね……止めてっていったるんだけどね……」

実由の言葉に納得しながらそっと肩を叩く時谷

「実由、その気持ちよく分かるよ」

「本当に？」

時谷の言葉に顔を上げる実由

「ああ、俺もゼラートからずっと『若』って呼ばれてるからな。そんな立場でもないのに・・・」

隣を少し睨みながら語る時谷。しかしゼラートは

《いいではないですか、若。お慕い申している証です》

少し『若』の所を強調しながら語る

《ゼラートの言うとおりですよ、姫様？》

「うん。そうだね」

ケルビムの親愛の証だと思うことにした実由。時谷は

「ゼラートのは完全にからかつてるだけだろ？」

《何を仰いますか、若。こんなにもお慕いしているというのに・・・

》

「芝居が嘘臭いんだよ・・・」

時谷とゼラートの漫才もおなじみになりつつあった

「ところで、実由はいつから精霊が見えるんだ？」

十代が思い出したように聞く

「えっと、小学校二年生位の頃にデュエルを始めてその時からかな。パパとママにカードを買ってもらってデッキを作ってたからカードが光って、そこからケルビムが出てきたの」

懐かしそうに語る実由

「なるほどな、その頃からライトロードデッキなのか？」

いつの間にか戻っていた時谷がそう質問する

「うん。ずっと一緒にいるからもう家族みたいなものの。時谷君の方は？」

「俺か？俺も似たようなもんだな。デッキ組んでたら突然回りが暗くなった感覚がしてさ、突然だったから驚いて目を閉じたんだ。したら俺を呼ぶ声がして、目を開けたらいきなりゼラートが立ってたんだよ」

あのかきは驚いたなあと遠い目をする時谷

「それからだな、闇のデッキを使うようになったのは」

「「へえ」」

実由と十代が同時に相槌を打つ

それから、十代のハネクリボーは武藤遊戯から貰ったことを話したり、それを聞いた実由が驚きの大声を発したり、いろいろなことを話した

「そういえば、もうすぐ月一試験だね」

思い出したように二人に確認する実由

「ああ、確かにな」

日程を思い出しながら頷く時谷その横で

「え！？試験！！？」

すっかり忘れていたのか驚愕する十代

「おいおい大丈夫かよ十代？たしか明後日からだぞ」

「マジかよ！？どうしよう・・・」

顔が青くなっていく十代

月一試験では、成績しだいで上級クラスへの昇級が可能なため、全生徒が猛勉強しているはずである

もちろん、時谷もその一人

「しょうがないな。勉強会でもするか」

「そうだね」

時谷の提案に頷く実由

「二人とも、サンキュー！！！」

涙を流しながら感謝する十代

その後、三沢と翔、明日香も誘って時谷の部屋で勉強会を行った

「ああ・・・もうだめだ・・・」

始まって二時間ほどで十代がダウンした

「少し、休憩にしよう」

三沢の言葉に各々が休憩に入る

「そういえば、実技試験もあるんだよね？」

「ああ、筆記の後にあるな」

十代の言葉に答える時谷

「だったら、そっちの準備もしなきゃな！」

そう言って立ち上がる十代、そして時谷のほうを向き

「時谷！デュエルしようぜ！！」

「は？俺？」

指名され驚く時谷

「ああ、約束だったろ？」

「そうだったな・・・よし、ちよつとした息抜きにやろう」

時谷も立ち上がり、二人で部屋を出て行く

「あっ！アニキ、待ってよ」

「俺も、是非参考にさせてもらおう」

「明日香、私達もいきましょ？」

「そうね。わかったわ」

他の四人も着いていく

寮前のデュエル場で向き合う二人

「行くぜ！時谷！！」

「ああ、来い！十代！！」

「「デュエル！！」」

時谷 LP 4000
十代 LP 4000

「俺の先攻！ドロー！！手札から永続魔法、『漆黒のトバリ』発動！！さらにダーク・グレファアを召喚！」

ダーク・グレファア 攻撃力 1700

「そして、ダーク・グレファアのモンスター効果、手札からネクロ・ガードナーを捨てて、ダーク・ホルスをデッキから墓地へ！カードを一枚伏せて、ターンエンド！！」

時谷 LP 4000

場 ダーク・グレファア 攻撃 1700

漆黒のトバリ 伏せ一枚

手札二枚

「俺のターン！！手札から魔法カード、『融合』発動！！手札のフエザーマンとバーストレディを融合！来い！！E・HEROフレイム・ウィングマン！！」

十代の二体のモンスターが渦に呑み込まれ、その中心から緑色の体に、腕に竜のような頭をつけたモンスターが現れた

E・HEROフレイム・ウィングマン 攻撃力 2100

「いきなりか・・・相変わらずのドロー運だな」

「へへっ！まあな！！バトルだ！フレイム・ウィングマンでダーク・グレファアーに攻撃！『フレイム・シュート』！！」

体に炎を纏い突進するフレイム・ウィングマン

「リバースカード、オープン！！罠カード『炸裂装甲』リアクティブアーマー！攻撃モンスターを破壊する！！」

苦しみながら爆発していった

「マジかよ・・・なら、クレイマンを守備表示で召喚！」

石でできた戦士が現れた

E・HEROクレイマン 守備力 2000

「さらにカードを一枚セットして、ターンエンドだ！」

十代 LP 4000

場 E・HEROクレイマン 守備 2000

伏せ一枚

手札一枚

「俺のターン！ドロー！！『漆黒のトバリ』の効果発動！引いたカードはダーク・クルセイダー！墓地に送って新たにドロー！そして、ジャイアント・オークを攻撃表示で召喚！！」

棍棒を持ったモンスターが現れた

ジャイアント・オーク 攻撃力 2200

「バトル！ジャイアント・オークでクレイマンに攻撃！」

棍棒で殴られ、爆発するクレイマン

「さらに、ダーク・グレファアでダイレクトアタック！！」

剣を構え、十代に向かうグレファア

「罨発動！！『ヒーロー見参』！相手は自分の手札を一枚選びそれがモンスターカードなら特殊召喚できる！俺の手札は一枚だ、E・HEROエッジマンを特殊召喚！」

十代の場に黄金の戦士が現れた

E・HEROエッジマン 攻撃力 2600

「モンスターが召喚されたからバトルは中断する。バトルフェイズ終了時攻撃したジャイアント・オークは守備表示になる。カードを

一枚伏せて、ターンエンド！」

時谷 LP 4000

場 ダーク・グレファアー 攻撃 1700

ジャイアント・オーク 守備 0

漆黒のトバリ 伏せ一枚

手札一枚

「俺のターン！ドロー！！エッジマンでジャイアント・オークに攻撃！『パワー・エッジ・シュート』！！！」

エッジマンの右ストレートにより破壊されるジャイアント・オーク

「エッジマンは守備モンスターを攻撃したとき、貫通ダメージを与える！！！」

「ぐっ！！！」

顔をしかめる時谷

時谷 LP 4000 ↓ 1400

「どうだ、時谷！ターンエンド！」

十代 LP 4000

場 E・HEROエッジマン 攻撃 2600

伏せ無

手札一枚

「俺のターン！ドロー！！リバースカード、オープン！！『リビングデッドの呼び声』！墓地のダーク・ホルス・ドラゴンを特殊召喚

！」

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000

「行くぜ！十代！ダーク・ホルス・ドラゴンでエッジマンを攻撃！
！『ダーク・メガフレイム』！！」

黒炎を吐くホルス、炎に飲み込まれて消滅するエッジマン

「さらに、ダーク・グレフアーでダイレクトアタック！！」

十代に切りかかるグレフアー

「ぐわあ！！」

十代 LP 4000 ↓ 1900

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

時谷 LP 1400

場 ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃 3000

ダーク・グレフアー 攻撃 1700

漆黒のトバリ 伏せ一枚

手札一枚

「俺のターン！ドロー！！よし！きたぜ！」

カードをうれしそうに見る十代

「E・HEROスパークマンを召喚！」

マスクをかぶった青色のHEROが現れた

E・HEROスパークマン 攻撃力 1600

「更に手札から魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！このカードは墓地、または場のE・HEROを除外することで融合することが出来る！俺は、墓地のフレイム・ウイングマンとスパークマンを融合！！」

十代の墓地が光り、フレイム・ウイングマンとスパークマンが渦に飲み込まれる。

「現れろ！E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン！！」

渦の中から光を全身に纏ったヒーローが降りてきた

E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン 攻撃力 2500

「シャイニング・フレア・ウイングマンの効果！墓地のE・HERO一体につき攻撃力を300ポイントアップする！俺の墓地には四体のE・HEROがいる！よって1200ポイントアップ！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン 攻撃力 2500 ↓ 3700

「攻撃力3700！？」

攻撃力の高さに驚く時谷

「さっきのお返しだ！シャイニング・フレア・ウイングマンでダーク・ホルス・ドラゴンを攻撃！『シャイニング・シュート』！」

光を纏い、突進するシャイニング・フレア・ウイングマン

「させない！墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動！墓地から除外して攻撃を無効にする！」

ホルスを幻影が包み攻撃を弾く

「やっぱ簡単には通らないか・・・ターンエンド！」

十代 LP 1900

場 E・HERO シャイニング・フレア・ウイングマン 攻撃
3700

伏せ無

手札無

「俺のターン！」

ドローしたカードを確認し

「『漆黒のトバリ』の効果発動！引いたカードはダーク・ネフティス！墓地に送り更にドロー！次はダーク・シムルグ！墓地に送りドロー！今度は魔道戦士ブレイカー！ドロー！邪帝ガイウス！ドロー！執念深き老魔術師！ドロー！闇の仮面！ドロー！ダーク・ヴァルキュリア！ドロー！・・・ここまでだ」

怒涛のドロースト

「ダーク・グレファアを生贄にダーク・パーシアスを召喚！」

黒い人馬が現れた

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900

「攻撃力1900じゃシャイニング・フレア・ウイングマンに勝てないっすよ!？」

「何か考えているんだろう」

驚く翔と分析する三沢

「ダーク・パーシアスの効果!墓地に存在する闇属性モンスターの数×100ポイント攻撃力をアップする!俺の墓地の闇属性モンスターは十一体!よって1100ポイント攻撃力をアップ!」

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900 ↓ 3000

「それでも届かないぜ？」

「慌てるなよ、まだ終わらないぜ？」

十代に笑いながら答える時谷

「魔法カード『魂の開放』発動!互いの墓地のカードを合計五枚、ゲームから除外する!」

「墓地から除外!？」

驚く十代

「俺は、十代の墓地から四体のE・HEROと『融合』を除外する！」

十代のディスクから五つの光が浮かび消えていく

「墓地のE・HEROがいなくなったことで、シャイニング・フレア・ウイングマンの攻撃力は元に戻る！」

E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン 攻撃力 3700 ↓ 2500

「そんな!?!」

「ダーク・パーシアスでシャイニング・フレア・ウイングマンを攻撃！」

ダーク・パーシアスの剣で貫かれて破壊されるシャイニング・フレア・ウイングマン

「くっ!?!」

十代 LP 1900 ↓ 1400

「ダーク・ホルス・ドラゴンでダイレクトアタック!! 『ダーク・メガフレーム』!?!」

「うわあああああ!?!?!」

ホルスの炎に飲み込まれる十代

十代 LP 1400 ↓ 0

「くっそ〜！負けた〜！！」

時谷は悔しがる十代の元へ歩いていきポーズをとりながら

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ？十代！」

「それ俺の台詞だろ〜！」

決め台詞を取られ不満がる十代と満足気な時谷

「でも、やっぱ時谷は強え〜な！」

「十代こそ、いい引き運だよ。あんなに融合されるなんて思わなかったし」

「時谷こそ、最後の連続ドロ〜には驚いたぜ！」

「たまたま上手くいっただけさ」

などなど感想を言い合う二人そんな二人に近づくギャラリー四人

「二人とも、お疲れ様っス！」

「なかなかいいデュエルだった」

二人をたたえる男二人

「サンキューな！翔、三沢！」

礼を言う十代

「さて、息抜きも済んだことだし、続きをしましょうか？」

「続きって？」

明日香の提案に首を傾げる十代

「試験勉強の続きだよ？十代君？」

実由の言葉に段々と顔が青くなっていく十代

()()(忘れてた)(な)(わね)(ね)(っスね)()()()

全員がシンクロした

その後、嫌がる十代を引きずり試験勉強を再開した

TURN 4 (後書き)

どうも！ 原作主人公に勝っちゃいました！

まあ、プレイングが怪しいところも多々あるのですが・・・

さて！今回は試験的にあることをして見たいと思います！召喚！！

「なにが『召喚！！』だ！」

ちょっとあわせてよ

「無茶言うな！！あつと・・・この作品の主人公、北上時谷だ。よろしく」

というわけでやってみたかったことの一つ！「あとがきでキャラと駄弁ってみよう」という企画！

これにはその小説のオリキャラを交えてその回の振り返りなどをしてみようかなと・・・

「話し進んでからするのも変じゃないか？」

まあ、試験的ですから・・・というわけで早速振り返ってみましょう！！

「突然だな・・・まあいいか。それで今回は十代とデュエルしたわけだが・・・」

いやゝ勝ったね

「そうだな・・・しかし、終盤の漆黒のトバリのドローストはチート臭いな・・・」

でも、作者が実際にやってもたまに出来ることだよ？

「そうなのか・・・そういえば俺のデッキはあんたのを基にしてるんだっけ？」

そうだよ〜でも、このデッキにはまだ足りないものがある！

「足りないもの？」

そう、君のデッキにはまだ、作者が入れたくても諸事情により入れられないカードが少なくとも二枚ある！

「諸事情って・・・どんなカードだ？」

原作キャラが持つてるカードだ・・・それもそのキャラしか持って無いようなね・・・

「どうすんの？」

ご都合主義という武器を使い手に入れようかと・・・

「おいおい・・・」

大丈夫！一枚はご都合主義で何とかなると思うから！君の能力で！

「まあ、苦勞するのはあんただから・・・別にいいけど・・・」

うん！がんばる！だから、君もがんばるんだよ？

「何を？」

いや、なんでもないよ

「いや、気になるだろ！？」

ではまた次回！！

「聞けよ！！」

TURN 5 (前書き)

今回、新キャラが出ます！

TURN 5

Turn 5 《月一試験開始・封じられた闇》

十代とのデュエルから二日、デュエルアカデミアの月一試験の当日となった。

「はやいな、時谷」

「ああ、おはよう三沢」

部屋に近い三沢と挨拶を交わす

「さてっと、それじゃ行くとしますか」

「ああ、行こう」

三沢とともに校舎に向かう

途中で実由や明日香とも合流する

「時谷、自信はあるの？」

「まあ、成る様になるさ」

明日香の問いにマイペースに答える時谷。そこに実由が

「時谷君！！絶対ブルーに上がってね！！」

胸の前で拳を握り懇願してきた

「あ、ああ。わかったよ」

すこし驚きながらも頷く時谷

教室で最後の確認をしていると翔や隼人もやってきた

「おはよう、翔、隼人」

「おはようっス。時谷君」

「おはようなんだな」

それぞれ挨拶を済ます

「十代は？」

「まだ寝てるっス」

「大丈夫なのか？」

時計を見ながらそういう時谷。しかし、十代が来ないまま筆記試験が始まってしまった

（詰め込みすぎたかな・・・？）

二日間の勉強会を反省する時谷

終了の少し前に十代が到着し、わずかな時間で追い上げをかけるかと思ったが、数分後には翔とともに眠っていた

実技試験前教室

「起きろ、十代、翔！」

「う・・・ん・・・？」

「うゝん？」

時谷に揺すられながら目を開ける十代と翔

「時谷？・・・あれ？試験は？」

「終わったよ」

のんきな十代に呆れたように教える時谷

「皆は？」

「購買に行ったよ、新しいカードパックを買いに行ったらしい」

後ろから三沢が説明する

「お前達は行かなかったのか？」

「ああ」

「いまさら、デッキを変えるつもりは無いさ」

十代の言葉に頷きながら答える時谷と三沢

十代と翔はその後購買に行ってみたが、一人の生徒が全てのカードを購入していき、売り切れだったそうだが、十代が来る途中で助けたトメさんの好意によりカードパックをひとつ貰ったらしい

実技試験場

次々とデュエルが開始されていき、順調に進んでいった

十代は実力がレッドでは釣り合わないとしてブルーの万丈目と戦うことになり、万丈目はクロノスからもらったカードで十代を追い詰めたが、十代のハネクリボーLV10の効果により互いのライフが同じになり、十代のラストドローで決着が付いた

そして、そのまま時谷の番が回ってきた

「セニョール時谷は、セニョール十代と同じくオベリスクブルーの生徒と戦ってもらうノ〜ネ!」

「万丈目ですか?」

クロノスの指示に対戦相手の予想をする時谷

「試験は一人一回なノ〜ネ! よって別の生徒とやるノ〜ネ」

「分かりました」

頷く時谷

すると一人の生徒がデュエル場が上がってきた。前髪が長く表情が見えづらい

「・・・よろしく」

「ああ、こちらこそ」

互いにディスクを構える

「それでゝわ、始めるノ〜ネ!」

「「デュエル!」!」

ブルー生徒 LP 4000

時谷 LP 4000

「・・・僕のターン・・・ドロ・・・」

ゆっくりとドロする

「ライフを・・・2000払って、魔法カード・・・『終焉のカウンtdown』を発動・・・」

「何!？」

周りが暗くなる

ブルー生徒 LP 4000 ↓ 2000

「『終焉のカウントダウン』発動後・・・20ターン経過で・・・
僕の勝ち・・・」

表情は見えないが笑っているように見えた

「更に・・・聖なるあかりを・・・召喚・・・」

小さな光の玉が現れた

聖なるあかり 攻撃力 0

「攻撃力0!？」

周りの生徒も驚いている

「聖なるあかりは・・・場にいる限り・・・互いに闇属性のモンスターを・・・召喚、特殊召喚することができず・・・さらに・・・
攻撃宣言もできない・・・」

「!？」

時谷の顔色が変わる

時谷のデッキは闇属性のモンスターしかない、つまり攻撃を完全封殺されたのだ。

「更に・・・カードを二枚セット・・・エンドフェイズにカウントダウンが始まる・・・」

相手の頭上に炎がともる

「ターンエンド・・・」

ブルー生徒 LP 2000

場 聖なるあかり 攻撃 0

伏せ二枚

手札二枚

カウント1

「俺のターン、ドロー!!」

手札を確認する時谷

（モンスターは召喚できないし、あの伏せカードは恐らく、聖なるあかりを守るための罠カードのはず・・・）

「魔法カード『地割れ』発動!! 相手の場の一番攻撃力の低いモンスターを破壊する!」

地面が割れて聖なるあかりを飲み込もうとする

「罠カード発動・・・『マジック・ジャマー』・・・手札を一枚捨てて・・・魔法カードの発動を無効にする・・・」

地面が元に戻る

「やっぱりな・・・ならば、『ライトニング・ボルテックス』を

発動！手札を一枚捨てて、相手フィールドのモンスターをすべて破壊する！！」

今度は雷が鳴り響く

「・・・カウンター罠『神の宣告』・・・ライフを半分支払い・・・カードの発動を無効にする・・・」

雷が止む

ブルー生徒 LP 2000 ↓ 1000

「これもだめか・・・モンスターをセット・・・カードを一枚伏せる、ターンエン・・・」

「エンドフェイズ・・・手札から『D・D・クロウ』を捨てて発動・・・君の墓地のネクロ・ガードナーを墓地から除外する・・・」

「なに！？」

ライトニング・ボルテックスのコストをしっかりと見られていた

「更に・・・カウントが進む・・・」

二つ目の炎がともる

「くっ！！ターンエンドだ！」

時谷 LP 4000

場 伏せモンスター一体

伏せ一枚

手札一枚

カウント2

「僕のターン・・・ドロ・・・閃光の追放者を召喚・・・」

白い光を纏った天使が現れた

閃光の追放者 攻撃力 1600

「このカードが場にいる限り・・・墓地に行くカードは・・・全て除外される・・・」

「墓地封じ・・・」

「君のデッキは・・・墓地のモンスターが重要・・・だから止める・・・」

時谷のプレイングを熟知したロック

「聖なるあかりを守備表示にして・・・」

聖なるあかり 守備力 0

「バトル・・・閃光の追放者で・・・守備モンスターを攻撃・・・」

光線が放たれる

「くっ！！ダーク・クルセイダーが・・・」

ダーク・クルセイダー 守備力 200

「破壊されたモンスターは除外される・・・」

「・・・・・・・・・・」

カードをポケットにしまう時谷

「このまま・・・エンドフェイズに入り・・・カウントが一つ進む。
・・・ターンエンド」

ブルー生徒 LP 1000

場 聖なるあかり 守備 0

閃光の追放者 攻撃 1600

伏せ無し

手札無し

カウント3

「俺のターン、ドロー!!」

（くそ！あのモンスターを何とかしないと・・・負ける・・・！）

時谷のモンスターは平均的に守備力が低い、相手はそれも分かっている様子のプレイング

（だが・・・聖なるあかりがいるかぎり守備表示にするしかない・・・！）

伏せカードはリビングデットの呼び声、モンスターが墓地に行かないため死に札状態

「モンスターを守備表示！エンドフェイズ、カウントが進む・・・
だろ？」

「・・・・・・・・・・」

無言で頷くブルー生徒

「ターンエンドだ!」

時谷 LP 4000

場 伏せモンスター一体

伏せ一枚

手札一枚

カウント4

「僕のターン・・・ドロ・・・モンスターをセット・・・バトル・・・閃光の追放者で守備モンスターを攻撃・・・」

伏せモンスターはジャイアント・オーク

ジャイアント・オーク 守備力 0

「・・・除外・・・」

「分かってるよ・・・」

カードをしまう

「エンドフェイズ・・・カウントを進ませて・・・ターンエンド・・・」

ブルー生徒 LP 1000

場 聖なるあかり 守備 0

閃光の追放者 攻撃 1600

伏せモンスター一体

伏せ無し

手札無し

カウント5

「俺のターン、ドロー！モンスターを守備表示！ターンエンド！」

時谷 LP4000

場 伏せモンスター一体

伏せ一枚

手札一枚

カウント6

「僕のターン・・・ドロー・・・カードをセットして・・・メタモルポットを反転召喚・・・」

「何！？」

メタモルポット 攻撃力 700

「互いのプレイヤーは・・・手札を全て捨てて・・・新たに五枚ドローする・・・君のその手札は・・・除外するよ・・・」

「くっ！！」

手札をポケットにしまい互いにデッキからカードを引く

手札はダーク・アームド・ドラゴン、墓地にモンスターがいて、聖なるあかりがいなければ召喚できていた

（！！このカードは！！）

引いた五枚を見て目を見開く時谷

「?・・・伏せていた魔法カード・・・『大嵐』発動・・・互いの

魔法・罨カードを全て破壊して・・・除外」

時谷の表情を不思議そうに見ながらも追い討ちをかけるが

(これで、五枚!!)

除外数を数える時谷

「・・・閃光の追放者で・・・守備モンスターに攻撃・・・」
「!!」

守備モンスターは終末の騎士

終末の騎士 守備力 1200

「・・・除外・・・ん？」

そういった後時谷の顔を見るブルー生徒。すると時谷はすこし笑っていた

「・・・なにが、おかしいの・・・？」
「いや・・・楽しいなってな」

時谷の言葉に首を傾げるブルー生徒

「・・・メタモルポットで・・・ダイレクトアタック・・・」

壺から黒い物体が飛び出し時谷をすり抜ける

「ぐっ!!」

時谷 LP 4000 ↓ 3300

「カードをセット・・・ターンエンド・・・」

ブルー生徒 LP 1000

場 聖なるあかり 守備 0

閃光の追放者 攻撃 1600

メタモルポット 攻撃 700

伏せ一枚

手札四枚

カウント7

「俺のターン!!!・・・お前、名前は？」

「・・・光坂^{こうざか}、進^{すすむ}・・・」

時谷の突然の質問にも普通に答える進

「進か・・・お前すごいな」

「・・・どうも・・・」

称賛しだす時谷を怪訝そうに見る進

「だけど、俺も負けられない。約束したからな」

「・・・約束？」

「ああ、『絶対ブルーに上がる』ってな。男なら約束は守らないとな！」

すごくいい笑顔でそう宣言する

デュエルを観戦していた実由が顔を赤くしていたが当然気付かない

「・・・この状況で・・・逆転できる・・・？」

「ああ、準備は整ったぜ・・・お前のおかげでな！！」

時谷の言葉に驚愕する進

「とりあえず、速攻魔法『サイクロン』発動！！セットカードを破壊する！！」

竜巻にカードが巻き込まれる

破壊されたのは『硫酸のたまった落とし穴』、伏せモンスターをそのまま破壊する作戦だった

「危ねえ、邪魔なカードが無くなったところで、逆転劇を見せてやるよ！魔法カード『カオス・エンド』発動！！」

「カオス・エンド？」

進も知らないカード

「こいつは自分のカードが七枚以上除外されているときに発動出来る。場のすべてのモンスターを破壊する！！」

「！？」

二人の間に光の柱が立ち、進のモンスターを飲み込んだ

「モンスターが・・・！」

「これで、モンスターを召喚できる！！」

時谷の反撃が始まる

ジ・エンド・オブ・スピリット

「終焉の精霊を召喚!!」

漆黒の精霊が姿を現した

「終焉の精霊の攻撃力は除外されている闇属性モンスター一体につき300ポイントアップする!! 除外されているモンスターは五体! よって攻撃力は1500!!」

終焉の精霊 攻撃力 1500

「俺の動きを止めて20ターン耐えるのが目的だからって、ライフを消費しすぎたな・・・」

「・・・・・・・・」

進の前髪で隠れていた瞳が少しだけ見えた。真っ直ぐに時谷を見つめていた

「また、やろうぜ・・・終焉の精霊でダイレクトアタック!!」

進の足元から黒い霧が発生し進を覆う

「・・・・・・・・!!!!」

進 LP 1000 ↓ 0

「そこまでなノ〜ネ! 勝者、セニョール時谷なノ〜ネ!!」

一見、時谷の負けと思われていた場内は時谷の逆転勝利に大いに沸いた

「やったな！時谷！！」

「すごかったっス！！」

「さすがなんだな」

順に十代、翔、隼人の三人が時谷をむかえる

「ああ、サンキュ」

すると、そこに実由と明日香がやってきた

「やったわね」

「おめでどう！！時谷君！！」

《おめでどうございます、時谷様》

明日香と実由、そしてケルビムの三人にも礼を言う時谷
そのまま実由の方を向き

「実由、約束は守ったからな！！」

「うん！！」

笑いあう二人、いつもの空間が展開されそうになるとそこに

「・・・北上君・・・」

「ん？おう、進」

先ほどのブルー生徒、光坂進が話しかけてきた

「・・・おめでどう・・・」

「ああ、ありがとう」

「また・・・デュエルしよう・・・今度は、負けないから」

そう言って手を差し出す進

「ああ、もちろんだ!! それと、これから時谷って呼んでくれ」

手をとる時谷

「うん・・・時谷」

時谷達に新たな仲間が加わった

《若、やはり・・・》

(ようやくの台詞がそれか!?)

TURN 5 (後書き)

どうも！

というわけで新オリキャラの進君の登場です！

彼はかなり口数が少ないキャラとして設定していますが・・・読みにくいですかね・・・？

戦闘ダメージは最後まで、後はほとんどコストという無理やりなデュエルでした

今回の見所は、聖なるあかりでしょうか・・・
闇デッキの使い手である作者もあのカードには手を焼きます・・・
後は、墓地に行かずに除外されるのも困りますねーダムドもクリエイターも墓地から除外がメインですから・・・

さて、進君はこれから先もレギュラーとして頑張ってもらいます！
当然彼にも、そして実由ちゃんにも「横取りデュエル」をしてもらう予定です！

ではまた次回！！

TURN 6 (前書き)

月一試験が終わった日の夜の出来事です

時谷の意外な交友関係と家族について、そして「力」ついてを少し・

・

今回はデュエルはありません

TURN 6

Turn 6 《新しい生活・時谷の力》

時谷がブルーに昇格が決定し、その日のうちに引越しが完了した

「ふう・・・こんなもんかな？」

「お疲れ様・・・」

「ああ、悪いな手伝わせて・・・」

「いいよ・・・同室なんだし、これぐらい」

時谷の引越しは同室となった進のおかげですぐに終わらせることが出来た。現在午後六時

「それじゃ・・・寮の事を簡単に説明するね？」

「ああ、頼む」

進からの説明は以下の通り・・・

- ・朝食は朝七時、夕食は夜七時
- ・消灯時間は夜十一時
- ・夜九時以降の外出は禁止

「次は・・・寮の施設を案内するから・・・」

「ああ、行こう」

そう言って二人は部屋を後にする

浴場、トイレ、食堂など所要の案内に始まり、非常階段などの緊急経路の説明など細かい案内をされた

「こんなに豪勢にする必要あるのか・・・？」

一通り見て回った感想がこれ

「そろそろ、夕食の時間だ・・・行こう」

「おう」

時間は午後六時五十分、食堂へ移動する時谷と進

「なんだよこれ・・・」

ブルー寮の食事はかなり豪勢な料理が並んでいた

「驚くよね・・・普通は・・・」

「イエロー寮の食事はもう少しマシだった」

少し苦笑いの進と時谷

「どんなのだったの？」

「まあなんというか・・・普通の食事だったな」

良くも無く、悪くも無く

寮監・華山先生の影響なのかそんなイメージがあるイエロー寮だった

「ミナサーン！注目なノ～ネ！！」

クロノスが前に立ち皆の注目が集まる

「それでゝは、新たに加わった生徒に挨拶をしてもらおうノ～ネ！セ

ニヨル時谷、前に来るノネ!

「はい・・・」

少し渋い顔をしながら前にでる時谷

「えっと、北上時谷です。皆さんよろしく願いします」

軽く頭を下げると、シンと静まり返る食堂

そのとき一人の生徒（というか進）が拍手を始めた。すると徐々に他の生徒も拍手を始めた

「それでーは、席に戻るノネ!」

席に戻る時谷

「ありがとうな? 進」

「どういたしまして・・・」

食事を終え、風呂に入り、部屋でのんびりしている時谷と進

「時谷は・・・どうして闇モンスターのデッキを・・・使うようになったの?」

進の質問に少し考え込む時谷

「・・・ま、進なら話してもいいかな・・・俺の力について」

「力・・・?」

「ああ、まあ実由や十代には話したんだけどな。進、お前カードに精霊が宿っているって信じるか?」

「・・・え？」

時谷の言葉に首を傾げる進

「俺は・・・いや、俺や実由、十代の三人はその精霊が見えるんだ」
「・・・」

じっと時谷を見つめる進

「・・・やっぱ信じられないか？」

「ううん・・・信じるよ・・・時谷は・・・どうでもいい嘘は言わないと思うから」

「そっか・・・」

進の言葉が少しうれしかった時谷

こういう話をする和不気味がられると思いたくないようにしているのだ

「それで、俺の精霊っていうのがこいつだ」

ゼラートのカードをだす

「・・・『堕天使ゼラート』・・・」

「そいつと出会ったのが五年程前でな、精霊が見えるようになったと同時にある力を手に入れてな」

「・・・それは・・・？」

進が静かに続きを促す

「『闇を浄化する力』だ・・・」
「闇を・・・浄化・・・？」

頷きながら説明をする時谷

カードには全て精霊が宿っている、しかし一部のデュエリストの『負の感情』を取り込み、闇に堕ちてしまう精霊や、逆にデュエリストを闇に誘う精霊もいる

時谷の能力はその闇を浄化することが出来るものである

「そして、俺のデッキには浄化したモンスター達もいる」

何枚かのカードを出す

そこには時谷の戦いを助けてきたモンスターもいた

「ネフティスに・・・クリエイター・・・終焉の精霊・・・これ・・・全部？」

「ああ、浄化した後に貰ったり、預かったりしている」

さすがに驚きを隠せない進

「でも・・・どうやって・・・探し当てたの？」

「ゼラートは闇の気配を感じ取れるらしくてな、それを頼りに探したんだ。その頃には丁度いいイベントもあったしな」

「・・・イベント・・・？」

「『決闘者王国』や『バトルシティ』だ。世界中からいろんなデュエリストが集まるからな、探しやすかった」

「時谷・・・参加・・・したの？」

「ああ、どっちも予選落ちしたけどな。まあ、目的が闇の浄化だったからあんま気にしてないし、遊戯さんや海馬さんとかにも会えたしな」

時谷の口から出てきた名前に驚く進

「デュエルキングの武藤遊戯に・・・海馬コーポレーション社長の海馬瀬人・・・？時谷・・・会ったの？その二人と」

「ああ、デュエルしたこともある。勝てなかったけど・・・」

「すごい・・・」

「遊戯さんとかも強かったけど、遊戯さんの友達の人かなり強かったな。強運の持ち主だった」

「強運・・・？」

「ああ、『時の魔術師』を約九割の確率で成功させる程だ」

追い詰められながらも『時の魔術師』の効果を成功させる十代もびつくりの強運で時谷も逆転された

「すごいよ、遊戯さんは。ペガサス会長とのデュエルも、マリクさんのデュエルもどちらも窮地に立ちながらもデッキを信じ続けて勝利したんだから」

「ふーん・・・。ん？時谷・・・あの・・・」

「どうした、進？」

時谷の話を聞いていた進はある疑問を抱いた

「ペガサス・J・クロフォードは・・・決闘者王国の・・・マリク・イシュタルは・・・バトルシティの・・・それぞれの武藤遊戯さんの・・・決勝の相手だよね・・・？」

一般に公開されている情報

「ああ、そうだぞ？」

「そのデュエルの状況・・・なんで時谷が知ってるの・・・？予選落ちしたんだったら・・・その場にいないんじゃないの・・・？」

決闘者王国は孤島で行われ、予選落ちしたデュエリストは島から去るルールがあり、バトルシティも決勝トーナメントは飛行船とこれまた孤島で行われた

つまり、どちらの決勝戦も当人達以外の人間が知っているはずが無いのであるが、時谷がとびきりの爆弾を投下した

「まあ、どっちも開催者の計らいつてやつで一緒にいさせてもらった」

「え・・・？」

「俺の実家・・・『北上コンツェルン』って言って、玩具メーカーやっててな・・・海馬コーポレーションとか、インダストリアル・イリュージョン社とかとは会社ぐるみでの付き合いがあつてな・・・そのおかげで・・・な」

「・・・・・・・・」

進もさすがに口がふさがらなかった

それから、時谷の口から様々なことが語られた、遊戯とペガサスの決闘

『アルカトラズ』へ向かう途中で海馬コーポレーションの重鎮『ビッグ5』や海馬瀬戸の養父・海馬剛三郎とその息子・乃亜との戦いバトルシティの後のドーマとの戦い

武藤遊戯とファラオ『アテム』の戦いの儀など、一般には知られていないことを話し、進もその話に聞き入っていた

「そういえば、進？」

「なに？」

「お前のあのデッキ・・・あれがお前の本来のデッキか？」

実技試験でのデュエルを思い出しながら問う時谷

「ううん・・・あれは試しに作ってみたデッキなんだ・・・」

「試し？」

「うん・・・こんなデッキは面白そうかな？・・・って思って作ったものなんだ・・・」

「俺は・・・試しに作ったデッキに苦しめられたのか・・・？」

今度は時谷が絶句した

「ごめん・・・試しのデッキで戦ってたなんて・・・相手に失礼だよね・・・」

「いや、すげーよ進！！」

「・・・え？」

落ち込む進には思いがけない返答だった

「出来てそんなに経ってなかったデッキだったんだろ？」

「う・・・うん・・・今日作った奴だったけど」

「そんなデッキを使いこなせたんだから、お前やっぱすげーよ！」

何時になく上機嫌の時谷

「そ・・・そう・・・？」

進も少し着いて行けていない

時谷もやはりデュエリスト、面白くて強い相手には大喜び

「で、お前の本来使ってるデッキってのは？」

「あ・・・うん・・・これ・・・なんだけど」

そう言って四つのデッキを取り出す進

「四つ？」

「うん・・・よく使うのはこの四つ・・・だから」

一つ一つ見ていく時谷

「ふーん・・・属性デッキか・・・あ、霊使いと憑依装着、霊術・・・か・・・進？」

時谷が顔を上げると進は顔を逸らした

「う・・・うん・・・その・・・こういうカードが好きで・・・結構集めてる・・・」

胸の前で指をもじもじしている進、若干顔が赤い。

「ふーん・・・属性ごとで戦術もバラバラなんだな」

気にせずにデッキを観察する時谷

「時谷・・・？」

「ん？」

「笑わない・・・の？」

「笑う？・・・なんで？」

進の質問に首を傾げる時谷

「だって・・・そんなカード集めてると・・・周りからよくからか

われたから・・・」

「何言ってるんだよ、誰にだって好きなカードくらいあるっての」

デッキのコンセプトにまったく関係ないが、絵柄を気に入ってデッキに投入される通称 『アイドルカード』

「しかも、進の場合デッキのキーカードにして組んでるんだから、胸張っていいと思うぞ？」

「うん・・・ありがとう・・・時谷・・・ちなみに・・・なんだけど・・・」

「ん？」

「時谷の・・・『アイドルカード』って何かな？」

「俺の？・・・うーん・・・やっぱ、こいつかな？」

出したのは『ダーク・ヴァルキュリア』

「というか、デッキの中で女の子の姿してるのこいつだけなんだけど」

「そうみたいだね・・・」

進も時谷のデッキを見ている、女の子の姿どころか人型すら僅かしか居ないようだ

「そうだ、進！今度デッキを交換してデュエルしてみないか？」

「デッキを・・・交換？」

「ああ、お前は俺の闇デッキを、俺はお前のこのデッキの中から一つ選んでデュエルするんだ。どうだ？」

時谷の提案に少し考え込む進

「面白そう・・・かな・・・うん、やってみよう・・・」
「よし！」

頷く進に満足気な時谷

「時谷ってさ・・・」

「ん？」

「鈴原さんと・・・仲・・・いいよね？」

「そ、そうか？」

「うん・・・そう見えた・・・」

一度しか見ていないが鋭い進・・・アレでなにも気付かないのは十代ぐらいだが・・・

「鈴原さんは・・・ブルー男子の中では・・・天上院さんと並んで人気があるからね・・・イエローだった時谷と仲良くしてるのを・・・あんまり良く思っていない人もいる・・・」

「やっぱり人気があるんだな・・・まあ、当然だよな・・・実由も、明日香も美人だもんな・・・」

微妙にノロケ

「時谷は鈴原さんのこと・・・どう思ってるの？」

「・・・好きだよ・・・完全に一目惚れだけど・・・な」

進の質問に正直に答える時谷

「ただ・・・それを言うタイミングが見つからなくてな・・・」

互いに微妙に踏み越えられない線
しかしそれは実由も同じ・・・互いに一目惚れなために余計に切り
出せない

「そっか・・・それなら・・・僕も・・・応援するよ」
「進・・・ありがとな・・・」

進の言葉に少し勇気付けられる時谷

「じゃ、もう寝るか？」
「うん・・・お休み・・・時谷」
「おう」

それぞれのベッドで眠りにつく

【進Side】

次の日の放課後・・・

「ああ言っただけ・・・僕だけじゃ・・・どうにもならないな・・・
やっぱり・・・女子に協力が必要・・・だよね・・・」

ぼそぼそと言いながら廊下を歩く進

「でも・・・誰に頼めば・・・」

腕を組み考え込む

「ねえ、ちょっといいかしら？」
「？」

不意に声をかけられ振り向くと

「あ・・・天上院さんと・・・浜口さんに・・・枕田さん・・・」

明日香がももえとジュンコを連れていた

「光坂君に相談があるんだけど・・・時間あるかしら？」

「えっと・・・うん・・・大丈夫だけど・・・？」

「なら、こっちに」

そう言って歩き出す明日香達。

進も着いていく

「相談というのは他でもないわ・・・時谷と実由のことだね・・・」

「時谷と鈴原さん・・・？」

連れてこられたのは購買の飲食スペース

「ええ、簡単に言うとな実由は時谷に一目惚れしちゃっててね・・・」

「へえ・・・鈴原さんも・・・」

「『も』？」

うっかり口を滑らせる進

「どう言う事!？」

「まさか時谷さんも!？」

「お・・・落ち着いて・・・」

ずいっと迫るジュンコたちを制する

「うん・・・時谷も一目惚れしたって・・・」

昨夜のことを簡単に説明する

「なるほどね・・・それなら、あまり時間は要らないかもね・・・」
「うん・・・大丈夫だと・・・思うよ・・・ただ・・・」

「きっかけが・・・」

時谷と実由がなかなか進展しないのはひとえにきっかけだろうと、
進と明日香は考えている・・・

「なにか、ないかしら・・・」

「そうだね・・・」

本人達のいないところで悩んでいるそれぞれの友達・・・

【時谷Side】

自分の友達がそんな相談をしていることなど露知らず、時谷は実由と一緒にレッド寮に遊びに来ていた。

「ディスクが自動でデッキをシャッフルする機能はいいと思うんだけどどうだ？」

「おお、それは面白そうだな・・・メモメモ」

「使わないときは小さいカプセルみたいになってると持ち運びやすいよね」

「確かに・・・」

「ねえねえ、時谷君。隼人君に描いてもらったけどこんな形のディスクはどうかかな？」

「どれだ？」

「これなんだな」

「・・・剣型に・・・銃型・・・デュエルディスクの意味無いだろう・・・しかし、絵美味いな隼人？」

「絵は昔から得意なんだな」

実家の会社で新しく開発するデュエルディスクの意見を集めている時谷。時谷の実家のことは全員に説明済み

「なあなあ時谷、実現できるのか？」

「まあ、まずは企画会議に掛けてそれから設計したりするから・・・すぐには無理だろうな、玩具一つ作るのにも長い時間が必要だからな」

「そうだよね、いいものを作るんだったらそれぐらい必要だよね」

「でも、僕達の出した意見が通ってそれが商品化したら、それはそれでうれしいよね！」

「翔の意見が一番通りにくいだろうけどな」

「ええ!？」

「十代のは案外早くできるかもな・・・システムだけならだけど」

「ほんとか!？」

「ああ、でも実装するには時間が掛かるかもな」

なんて会話を交わしている時谷たち

時谷はこの意見をまとめ兄の時継に送り時継はそれを会議にかけた・

・

後にデッキの自動シャッフル機能、銃型ディスクの開発などが本当に実現するが、それは遙か未来の話・・・

TURN 6 (後書き)

どうも！

何気に遊戯さんや海馬さんとのつながりがある主人公でした！

実は金持ちだったのを隠していた時谷君。ですが十代君や実由ちゃんにはTURN4のあたりで話しています

進君はデッキを地・水・炎・風の四属性のデッキを一つずつ持っています。三沢君とはおそらく違う内容です

試験のときのデッキはおそらく今後は出ません・・・紛らわしくてごめんなさい！

「霊使い」と「憑依装着」は可愛くていいですね。出た当初は必死になって揃えたのを覚えています・・・

進君のデッキはWikiで調べたりTF5で組んでみたりしたのですが、チューナーとシンクロ使わないで組むのって結構大変ですね・・・作者のデッキビルドのスキルはあまり高くありません
地は裏から表に変えて効果を発揮するモンスターを主軸にした「リバーロック」、水は最新カードですがシンクロのない儀式モンスターが主体の「リチュア」、炎は霊術との関連性を考えて「バーン系」、風も霊術に合わせて「バウンス系」とコンセプトは決まっています。・・・なかなか形になりませんね・・・

よろしければ「こんな風にしてみたら？」みたいなアドバイスがもらえると思います！
ではまた次回！！

TURN 7 (前書き)

今回はオリジナルの話になります
今回、実由の実家について明らかにします

TURN 7

Turn 7 《実由の正体・時谷、怒りのデュエル》

時谷がブルーに昇格し早二週間・・・

特に授業の内容が変わることも無くいつもどおりに過ごしている
実由との関係もいまだに進展しないまま。

「時谷君、帰ろう!」

「ああ、行こう」

その様子を見守っている進

「なんで・・・アレで・・・付き合っていないのかな・・・?」

進も首をかしげるくらい自然な二人だった

二人で校舎を出ると人だかりが出来ていた

「なんだ?」

「さあ?」

「お、時谷に実由! なんか変な奴が来てさ・・・」
「変な奴?」

十代が説明しようとする

「OH! そこにいたのかマイハニ!!」
「え!?!」

「ん？」

一人の男が実由に近づき手を握るそれを見た瞬間に時谷の顔が一瞬変わる

「いやぁ探したよ？僕に何も言わずにこんな辺鄙なところにいるんだから」

「なんであなたがここにいますか！？」

「僕は君のフィアンセなのだから当然じゃないか？マイハニ」
「私は認めていません！！」

手を振りほどきながら抗議する実由

「フィアンセ・・・？」

意味がよく分かっていない十代

「君はこの僕、マルク・神宮司と結婚する運命なのさ！」

「神宮司・・・？まさか、お前『神宮司グループ』の・・・」

名前に聞き覚えのある時谷

「そう、神宮司グループのトップさ！先日父が死んで会社を継いでね、君を迎えに来たんだよ？『鈴原財閥』の三女・鈴原実由さん？」

マルクにそう言われ、肩を震わせる実由

「『鈴原財閥』といえば、世界有数の財閥だぞ！？」

「いたのか、三沢」

いつの間にかいた三沢がそう説明する

「そういうことさ、さあマイハニ〜？僕と共に行こうか。この学校にいる理由は無いのだから」

再び手をとろうとするマルク

「・・・かない・・・」

「ん？何か言ったかい？」

「絶対行かない！私はあなたなんかと結婚しない！！」

涙を堪えながら叫ぶ実由

「まったく・・・強情な女だね！！」

「あう！！」

《姫様！！》

マルクは実由の頬を叩いた

「いくら拒んでも君に選択権は無いんだよ！まったく・・・」

「・・・おい・・・」

「なんだ・・・げふう！！？」

声をかけられ振り向くと同時に吹っ飛んでいくマルク

「さっきから聞いてりゃ勝手なことばかり・・・虫唾がはしる」

声の先には時谷がいた、足を上げていることから蹴り飛ばしたのだろう

時谷はそのまま続ける

「実由は嫌がってんだ・・・それを無理やりとは・・・神宮司グループも墜ちたもんだな・・・」

「な、なんだ君は！！ひっ！！？」

マルクは時谷を睨もうとするが逆に震え上がってしまった

時谷の目が銀色に輝いていたのだ

「実由は、連れて行かせない！」

時谷がマルクに宣言する

「時谷君・・・」

「く・・・ならば僕とデュエルだ！僕が勝ったら彼女を連れて行かせてもらうよ」

「いいだろう・・・相手になってやる」

びくつきながら勝負を申し込むマルクに睨みながらこたえる時谷

「時谷・・・怖えな・・・」

万丈目の時以上に怒りをあらわにしている時谷に十代もビビっている

《若があそこまで怒るのはあまり見たことが無い・・・》

「そうなのか？」

《ええ・・・》

ゼラートも少し驚いていた

「時谷君・・・私・・・」

うつむきながら時谷を呼ぶ実由

「私の家は・・・たしかにお金持ちかもしれない・・・でも・・・私は・・・普通に生活していたかった・・・友達とおしゃべりしたり・・・勉強したり・・・それなのに・・・」

「実由・・・」

マルクが実由のことを暴露したときの実由の反応をしっかり見逃さなかった

「・・・俺に任せろ・・・絶対に負けないから・・・な？」

「うん・・・」

肩に手を置き安心させる時谷

「それで・・・実由に頼みがあるんだ・・・」

「え・・・？」

決闘場に向かう途中であるところに電話する時谷

『もしもし？』

「もしもし、時谷です・・・兄さん」

『ああ、時谷か。どうしたんだい？また何かいい意見が出たのかな？』

「違うんだ・・・少し頼みたいことがあって・・・」

『・・・・・・・・なるほど・・・・・・・・わかった、そっちは何とかしておこう』

「ありがとう・・・兄さん」

『気にしなくていい、珍しく時谷がお願いしてくれるんだ、答えなきゃ瀬人に笑われる。時谷は何も心配せずにやるといい』

「うん、そうするよ・・・それじゃ」

『ああ、後でな』

電話を切る

「よし、行くぞ、ゼラート！」

《は!!!!》

決闘場にて

「さあはじめようか!!！」

「叩き潰す！」

「「デュエル!!！」」

時谷 LP 4000

マルク LP 4000

「俺のターン！ドロー！魔法カード『手札断殺』を発動！互いに手札を二枚捨て、二枚ドローする！」

「いきなり事故かい？」

手札を交換する

「魔法カード『強欲な壺』を発動し二枚ドロー！永続魔法『漆黒のトバリ』を発動！ダーク・グレファアを攻撃表示で召喚！」

ダーク・グレファアー 攻撃力 1700

「ダーク・グレファアーの効果発動！手札のダーク・パーシアスを捨てて、デッキからネクロ・ガードナーを墓地へ！カードを二枚伏せて、ターンエンド！」

時谷 LP 4000

場 ダーク・グレファアー 攻撃 1700

漆黒のトバリ

伏せ二枚

手札一枚

「僕のターン！フッフ、いきなり来たようだ」

「……………」

「フィールド魔法『ハーピイの狩場』を発動！僕の場合に『ハーピイ・レディ』もしくは『ハーピイ・レディ三姉妹』が召喚・特殊召喚されたときに相手の魔法・罠カードを一枚破壊できる！そして僕はハーピイ・クイーンを召喚！！」

女性の鳥人が現れる

ハーピイ・クイーン 攻撃力 1900

「ハーピイ・クイーンはフィールド上では『ハーピイ・レディ』として扱う。ハーピイの狩場の効果発動！君の伏せカードを一枚破壊するよ！」

「くっ！」

カードが吹き飛ばされる、破壊されたのは炸裂装甲

「ふふ、危ない危ない・・・さらにハーピィの狩場の効果で場の鳥獣族の攻撃力・守備力は200ポイントアップするよ」

ハーピィ・クイーン 攻撃力 1900 ↓ 2100

「ダーク・グレファアを攻撃だ!!」

切り裂かれ破壊されるグレファア

「.....」

時谷 LP 4000 ↓ 3600

「時谷が先制された!?!」

「そんな!?!」

十代や翔も驚いている

「時谷君・・・」

実由も不安気に見ている

「カードを一枚伏せて・・・ターンエンドだ」

マルク LP 4000

場 ハーピィ・クイーン 攻撃 2100

ハーピィの狩場

伏せ一枚

手札三枚

「俺のターン、ドロー！漆黒のトバリの効果、ドローしたカードが閻属性モンスターだった場合、互いに確認し墓地に捨てる、そして新たにデッキからドローできる。俺が引いたのは、ダーク・ホルス・ドラゴン！墓地に送り一枚ドロー！」

ドローし手札に加える

「どうやら魔法か罠だったようね・・・」

「または・・・反撃できるモンスター・・・ジャイアント・オークあたりを引いたか・・・」

時谷を見守る明日香と進

「リバースカード、オープン！『サンダー・ブレイク』！手札を一枚捨てて、カード一枚を破壊する！俺は今引いたこのカードをコストにし、破壊するのはハーピィの狩場だ！」

雷撃によって破壊され、場が元に戻る

「ハーピィ・クイーンの攻撃力は元に戻る！」

ハーピィ・クイーン 攻撃力 2100 ↓ 1900

「更に、魔道戦士ブレイカーを召喚！」

赤い鎧を纏った戦士と見間違われそうな魔導士が召喚された

魔道戦士ブレイカー 攻撃力 1600

「ブレイカーは召喚されたとき魔力カウンターを一つ乗せ、攻撃力を300ポイントアップする！」

ブレイカー 攻撃力 1600 ↓ 1900

「並んだって!？」

「ブレイカーの効果を発動!魔力カウンターを取り除き相手の魔法・罠カードを一枚破壊する!『mana・ブレイク』!！」

剣からの波動でカードを破壊するブレイカー。破壊されたのは門前払い

「『門前払い型』か・・・ターンエンド!」

時谷 LP 3600

場 魔道戦士ブレイカー 攻撃 1600

漆黒のトバリ

伏せ無し

手札無し

「おかしい・・・」

「何が・・・？」

進が時谷の様子を見ながらつぶやく

「サンダー・ブレイクで・・・ハーピー・クイーンを破壊すれば・・・攻撃は通ったはずなのに・・・何で狩場を・・・？」

「そういえばそうね・・・プレイミス？」

「時谷・・・」

「僕のターン、ドロー！僕はハーピー・クイーンを生贄に風帝ライザーを召喚！」

鳥の帝王が召喚された

風帝ライザー 攻撃力 2400

「ライザーが生贄召喚されたとき場のカードをデッキの一番上に戻す！僕はブレイカーを選択する！」

「・・・」

ブレイカーをトップへおく

「そしてダイレクトアタック！」

「墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動。墓地から除外して攻撃を一度無効にする」

カードを抜き取る

「そういえばそんなカード送ってたね。ま、いいけど・・・ターンエンドだよ」

マルク LP 4000

場 風帝ライザー 攻撃 2400

伏せ無し

手札三枚

「俺のターン、ドローしたブレイカーをトバリの効果で墓地に送り更にドロロー！魔法カード『命削りの宝札』を発動！5ターン後に手札を全て捨てる代わりに手札が五枚になるようにカードをドロロー！」
「ここで手札強化とは・・・」

「手札から装備魔法『D・D・R（ディファレント・デイメンション・リバイバル）』を発動！手札を一枚捨てて除外されている自分のモンスターを特殊召喚する！ネクロ・ガードナーを特殊召喚！」

空間が歪み、ネクロ・ガードナーが現れる

ネクロ・ガードナー 攻撃力 600

「そんな雑魚モンスターでなにが出来るんだい？」

「・・・これで、四種類だ・・・」

「え？」

時谷の呟きを聞き逃したマルク

「墓地に『ライトロード』と名のつくモンスターが四種類以上いるとき、手札から裁きジャッジメント・ドラゴンの龍を特殊召喚！」

時谷の場に光を纏う龍が召喚される

裁きの龍 攻撃力 3000

「なに!？」

マルクだけでなくほかの生徒たちも驚いていた

「時谷が裁きの龍!?!」

「どうやって!?! 闇モンスターしかないのに!?!」

十代や翔も身を乗り出す

「墓地を見るか?」

墓地をマルクたちに見せる

墓地にはウォルフ、ライラ、ジェイン、ケルビムの四体がいた

「いつの間に!?!」

マルクの質問に指折り数えながら教えてやる時谷

「最初の手札断殺でウォルフとジェイン、次のサンダー・ブレイクでライラ、そしてさっきのD・D・Rでケルビムをそれぞれ送った」

「場を・・・闇属性モンスターで固めて・・・墓地に・・・ライトロードたちがいることを・・・悟らせなかったんだ・・・」

「なんて、プレイング・・・」

進と明日香も呆れている

(時谷君・・・)

実由は先ほどの時谷との会話を思い出す

デュエル開始十分前

「ライトロード達を貸してくれ・・・」

「ライトロード達を？」

「ああ、お前の思いと一緒に戦いたいんだ・・・いいか？」

「・・・うん。信じてるから・・・時谷君のこと・・・」

そう言ってデッキからモンスターたちを抜き、時谷に手渡す

「ケルビム・・・お願いね？」

《承知しました、姫様・・・》

「ケルビム、よろしくな？」

《はい！》

「これは、実由のカードだ・・・実由が俺を信じて託してくれたカード達・・・それがお前を倒す！」

「くそ！効果で僕のライザーを破壊する気か！？」

あせりだすマルク

「何勘違いしてんだ？」

「は？」

「こいつの効果なんて使う必要はない！」

そう宣言した時谷

「魔法カード『死者蘇生』！墓地のライトロード・エンジェル・ケルビムを蘇生する！」

《はあ！！》

光と共に召喚されるケルビム

ライトロード・エンジェル・ケルビム 攻撃力 2300

「まだだ！ネクロ・ガードナーを生贄に堕天使ゼラートを召喚！」
《参る！！》

堕天使ゼラート 攻撃力 2800

「レベル8のモンスターを一体の生贄で！？」

突然の上級モンスターの召喚に戸惑うマルク

「ゼラートは墓地に闇属性モンスターが四種類以上いるとき、闇属性モンスター一体を二分の生贄にして召喚できる！」

時谷の墓地の闇属性モンスターはダーク・グレファア、ダーク・パーシアス、ダーク・ホルス・ドラゴン、そしてブレイカーの四種類

「あの時・・・ブレイカーを破壊させるつもりだったんだ・・・」

サンダー・ブレイク使用時の時谷のプレイング
ブレイカーを四にして墓地に闇属性も増やすプレイングをしていた時谷。かなり強引なプレイングである

「そんな・・・」

「ゼラートの効果を発動！手札から闇属性モンスター、ダーク・ネフティスを墓地に送り、相手の場のモンスターをすべて破壊する！

！『闇の光芒』！！」

《道を開く、食らうがいい！！》

ゼラートの雷で消滅するライザー

「僕のモンスターが！？」

「裁きの龍でダイレクトアタック！」

光の息を吐きだす裁きの龍

「うわああああ！！！」

マルク LP 4000 ↓ 1000

「終わりだ、ケルビムでダイレクトアタック！！」

《姫様を泣かした報いを受けなさい！！》

光の魔弾を浴びせるケルビム

「ああああああ！！！！」

そのままへたり込むマルク

マルク LP 1000 ↓ 0

「ありがとうな・・・ケルビム・・・」

《いえ・・・こちらこそ礼を言います・・・時谷様》

「やったぜ時谷！！」

「よかった・・・」

「本当にね・・・実由・・・あら？」

明日香が実由に声をかけたがそこに実由はいなかった

「時谷君!!」

「ん？おっと！」

抱きついてきた実由を受け止める

「ありがとう!!」

「ああ、ケルビムたちのおかげだ。それに約束したろ？絶対負けな
いって」

「うん！」

「・・・フフフフフ・・・!!」

二人の空間が形成されそうになるのをへんな笑い声が邪魔をする

「僕に勝ったからといって・・・彼女との婚約が消えるわけじゃ無
いんだよ！」

不適に笑いながら言うマルク

「ああ、それな・・・たぶんそろそろ・・・」

時谷が全て言い終わる前にマルクの携帯が鳴る

「・・・もしもし？」

『社長！大変です！鈴原財閥が鈴原実由と社長との婚約を白紙にし

て欲しいといってきました!!」

「なっ!?! どういうことだ!?!」

『それが・・・婚約の権利を買いと申し出があったらしく・・・それで・・・』

「なんだって!?! 誰だ、そのものの名前は!?!」

『名前は・・・『北上コンツェルン』の北上時継だそうです!!』
「北上だと!?!・・・は!?!」

なにかに気付き時谷を見るマルク

「君・・・名前は・・・?」

「そういえば、まだ名乗ってなかったな・・・北上時谷・・・北上時継の弟だ」

「あ・・・ああ・・・」

「これで、お前は実由となんの関係もなくなった・・・とっとと失せろ!?!」

「ひい!?!」

時谷の威圧に押され気絶するマルク。そのまま連れられていった

そのすぐ後に時継から映像回線で連絡が入った

「兄さん、ありがとう助かったよ」

『まあ、少々強引だと思ったが・・・ま、大事には至らないだろう・・・』

「えっと・・・どういことなんですか?」

隣で聞いていた実由はわけが分からなかった

『何、簡単だよ・・・君との婚約の権利を金で買い取らせてもらったのさ』

「確かに強引ね・・・」

明日香も少し呆れている

「つまり・・・鈴原さんとの・・・婚約の権利は・・・今は・・・時谷のお兄さんが持つてる・・・ってことですか・・・？」

進の質問に全員が実由を見る。実由も時継の言葉を待つ

『・・・いや』

「え？」

思っていた返答とは違うものが返ってきた

『その権利は実由さん・・・君にある』

「私に・・・？」

『そう・・・僕は君との婚約の権利を君自身に返すよ・・・君自身で有効に使うといい。君が受け取って欲しいと思う羨ましい奴に渡してやってくれ』

そういいながら横目で時谷を見る

「・・・・・・・・」

顔を紅潮させながら目を逸らす時谷

「はい・・・ありがとうございます・・・時谷君・・・？」

「あ・・・ああ・・・」

礼を言いながら時谷に振り返る実由。時谷もどもりながら答える

「北上時谷さん・・・私、鈴原実由との婚約の権利・・・受け取ってください・・・」

そういつて手を前に出す

「・・・・・・・・俺でいいのなら・・・是非に」

手を握る時谷

「よろしくな」

「うん!!」

最高の笑顔で答える実由

「おめでとう・・・時谷・・・鈴原さん・・・」

《おめでとうございます、若、姫》

《おめでとうございます！姫様！時谷様！》

「おめでとう！」

「なんかよくわかんねえけどおめでとうな！時谷！実由！！」

「おめでとうっス！！」

全校生徒のほとんどがいるのも忘れていた二人・・・そんな二人をスタンディングオベーションで祝福する皆

「ありがとう！」

「ありがとうな！」

二人も顔を紅くしながら答える
こうして二人は恋人関係を通り越していきなり婚約者となったのだ
った

「よかったね・・・天上院さん・・・？」

「そうね・・・でも・・・」

「？」

「私達があんなに頭を抱えていた問題が、こんな簡単に解決するなんてね・・・なんか、納得行かないわね・・・」

「・・・そうかも・・・」

きっかけを見つけてくつつけるつもりだったのに時谷達できっかけをつくり、更には段階をすつとぼしての婚約で呆れ気味のそれぞれの親友達だった・・・

TURN 7 (後書き)

どうも！

あまりにも無理やりなデュエルでした・・・
さて、今回もやってしましましょう！召喚！！

「だから、それ流行らないから」

「あはは・・・」

もう・・・二回目なんだからあわせてよ

「嫌だよ・・・」

「まあまあ、時谷君・・・あ、皆さん始めまして！鈴原実由です！」

今作品のヒロインですよ

そして今回！ついに時谷君に逆プロポーズしてくれましたね

「うう！！」

おっおっ照れちゃってま

「そ・・・そんな事より！今回の話を振り返ろう！！」

ふむ・・・そうだね・・・

今回は実由ちゃんの自称婚約者が出てきて、即退場願ったわけだけ
ど・・・

「見もふたも無いな・・・別に構わないけど・・・にしても、今回は俺と実由のデッキのカードを一緒にしたのか・・・これ、現実的に出来ることか？」

まあ、ライトロード軸なら出来なくも無いよ？闇のモンスターを僅かに入れてダムドを突然召喚とか出来るし

でも、闇モンスター軸でライトロード達を忍ばせるのはちょっと難しいかもね

入れてもライコウとライラぐらいじゃないかな？あの二枚は汎用性高いし・・・

「でもすごいこと考えたよね？場に闇属性しか出さずに、手札コストの全部をライトロードにして、突然裁きの龍だもんね？」

あれは書いて面白かったね！でもね・・・

「なんだよ？」

今回・・・ついにやってしまったことがあるんだよ！

「何を？」

アニメオリジナルのカードを使っしまいました・・・

「ああ、命削りの宝札な・・・確か瀬人さんのカードだっけ？」

そう・・・デュエルでの辻褄を合わせるために使っしまいました！場に裁きの龍、ケルビム、ゼラートと並べたかったです！

「壮观だよな・・・俺達の精霊と実由の切り札が勢ぞろいだもんな」
「それまでのプレイがちよっとね・・・ブレイカーがライザーでデツキに戻ってなかったらどうなってたか・・・」

二体目が出てきたら一体がブレイカーを破壊、もう一体はネクガで止める

そしてドローカードは命削りの宝札だから発動して結局この場になっ
ていたわけで・・・

「ライザー以外の上級モンスターだったら？」

ネクガで止めてブレイカーを守る

宝札で引いたカードの中にはD・D・Rがあるからネクガを特殊召喚してブレイカーとネクガを生贄にゼラートを召喚以下略・・・どう？

「・・・三体目が特殊召喚されたら？」

一つ目と同じ方法で・・・3600を一体のモンスターで削るのは難しいでしょ？

結果生き残って以下略・・・ふふん

「じゃ、じゃあ・・・」

さすがに四体目は無理だよ？

「先に答えるなよ・・・」

なにはともあれ、実由ちゃんと婚約を果たした時谷君！こっちもいかに
もなラブコメですね！

「書いてる本人が言うなよ・・・」

嬉しいくせに！

「ま、まあな・・・兄さんに感謝かな？」

「そういえば、お兄さんについては？」

それはまた今度で・・・書きすぎた・・・

「おいおい・・・大丈夫か？」

時継さんについてはおいおい語りましょう・・・

そういえばこっちの小説ではまだオリキャラ紹介載せてないんだっけ・・・

そこで書いておこうか・・・

とりあえず、今回はここまでです！

「感想、意見は引き続きお待ちしています！」

「二作品同時投稿なんて無茶やってる作者だが、応援してやってくれ」

お願いします！！ ではまた次回！！

T U R N 8 (前書き)

今回のデュエルはかなり強引かもしれませんが。
皆さんも好きだと思われるあの人が登場します！

TURN 8

Turn 8 《闇のデュエル、VSデーモンデッキ》

時谷が実由との婚約をしてから数日、二人の関係はアカデミア中に広まり、大きな話題となった

最初の頃は顔を赤くしていた二人だが言われすぎたのか普通に答えるようになった

「生徒が行方不明？」

「うん・・・結構噂になってる・・・多分・・・冗談だと思うんだけど・・・」

夕食後、部屋でのんびりしていた時谷は進からそんな話をしていた何でも古い特待生寮に遊びに行った生徒が何人か行方不明になっているらしい。それも何年も前から

「そんな話があると瀬人さんが黙ってないと思うんだけどな・・・」

行方不明者がでたとなってはアカデミアの評判はがた落ちだ、瀬人も秘密裏に搜索しているのだが時谷はそのことを知らない

「その・・・時谷の・・・というかゼラートの力で・・・なにか感じないの？」

「ふむ・・・」

（どうだ、ゼラート？何か感じるか？）

《いえ、特には何も・・・》

「ゼラートも感じないそうだ、闇の力は関係なさそうだな」
「そっか・・・」

時谷の答えに少し安心した様子の進
そんな時、時谷のPDAが鳴る

「着信？」

「実由からだ、珍しいな。こんな時間に・・・」

時間は夜の十一時を回ったところ
とりあえずに出てみる時谷

「もしもし？」

『時谷君！？どうしよう！！』

「どうしようって・・・何があった？」

『明日香が・・・明日香が・・・！！』

「実由、落ち着くんだ。落ち着いて説明してくれ。明日香がどうした？」

パニックになっている様子の実由を宥めながら話を聞く

『それが・・・』

実由によると、十時ごろに寮を出て行く明日香を見かけ追いかけると廃寮に入っていてしまったらしい。

明日香を連れ戻そうと実由も中に入ったのだが、明日香を見つけれずに途方にくれていたときに十代達と会い一緒に明日香を探そうとしたときに明日香の悲鳴が聞こえ、そこに向かうとタイタンと名乗るデュエリストが明日香を人質にとって十代にデュエルを挑んできたらしい

「わかった、俺も今から行く」

『うん!』

そう言って電話を切る

「進、それじゃ」

「うん・・・こっちは・・・うまくやっておくから」

「ああ、頼む!」

進に見送られゼラートのカードを持ち、寮を出て廃寮にむかう

廃寮に到着し実由のもとを目指す途中

《!! 若!》

(どうした? ゼラート)

《わずかにですが、闇の気配を感じます!》

(なに!?! 何処だ!?!)

《このまま真っ直ぐ・・・姫達にいるあたりです!》

(くそ! 急ぐぞ!?!)

「実由! 十代!?!」

「時谷君!?!」

「時谷!?!」

扉を開け、実由達のいる部屋に到着した時谷
十代がデュエルをしている男が時谷に気付く

「ん? 誰かね? 君は」

「あんたがタイタンか?」

マスクを付け、黒い帽子をかぶった男を睨みながら聞く

男の後ろには明日香が眠らされていた

「そのとおり、私はタイタン。千年アイテムを所持する、闇のデュエリストだ」

「千年アイテムだと!?!」

タイタンの胸元を見ると確かに千年アイテムの一つ。かつて武藤遊戯が所持していた千年パズルがあった。
だが、それを見た時谷は

「ふざけるな!?!」

「なに?」

「千年アイテムはもうこの世には存在しない!?!」

千年アイテムは武藤遊戯とファラオ・アテムとの戦いの儀の際に全て土に埋もれてしまったはずなのだ。

時谷もその場においてそのことをこの場の誰よりも分かっている

「く!?!」

「やっぱ偽者か! 千年アイテムのことを良く知らないみたいだったからな!?!」

「ルーレットも何か仕掛けがあるんじゃないの!?!」

十代と実由も今までのデュエルをみてそう思っていた

「ばれてしまったては仕方がない! ここは失礼させてもらう」

「逃がすか!?!」

時谷が駆け出そうとしたとき

《若!!!》

「!?!」

タイタンの周囲から黒い霧が立ち込め始めた

「な、なんだこれは!?!」

「うわ!!!」

「十代!!!」

霧はタイタンと十代を飲み込んでいった

「アニキ!!!」 「十代!!!」 「十代君!!!」

「これは・・・闇の力!!!」

時谷は霧を見てそういった

「これが!?!」

「実由!翔!隼人!明日香を頼む!十代達は俺が!!!」

「「うん!!!」」「わかったんだな!!!」

三人に指示を出し、霧の前に立つ

「ゼラート・・・行くぞ!!!」

《はっ!!!》

右手をかざし、目を閉じて十代に語りかける

(十代・・・!)

【十代Side】

「い、いやだ!! 助けてくれ!!」

「おお、すげえ・・・今度はどんな手品なんだ?」

タイタンを倒し消えていくのを見ていた十代

(十代・・・聞こえるか!!)

「時谷!!? 何処だ!」

(聞こえてるな? 誘導するから、言うとおりに進んでくれ・・・)

「わ、わかった!!」

《クリクリ!!》

「ハネクリボー? そっちか!!」

ハネクリボーについていくと光が見えた

(その光に飛び込め!!)

「よし、うおおおお!!」

勢いよく飛び込んだ

【時谷Side】

「十代! 大丈夫か!」

「ああ、サンキューな、時谷!!」

「アニキ!!」

「十代!!」

「時谷君!!」

実由たちも駆け寄ってくる

「あいつは？」

「さあ・・・デュエルに負けて、変な黒いのに吞まれていったぜ・・・」

「そうか・・・」

言いながら辺りを見渡す

（どうだ・・・ゼラート？）

《・・・いえ、もう感じません・・・》

ゼラートも闇の気配を探るが見つからなかった

「とにかく、ここをでよう」

明日香を時谷が抱え、廃寮の外に出る

「う・・・ん・・・？」

「あ、明日香！大丈夫！？」

寮を出て数分後、眠っていた明日香が目を覚ます

「実由・・・？・・・ここは・・・？」

「廃寮の外だ」

「時谷・・・？それに・・・」

傍にいる十代たちを見る

「私・・・あの男に・・・あ、そうだわ!! あいつは!?!」
「あ、急に起き上がっちゃだめだよ!!」

実由の静止を振り切り飛び起きる

「あいつなら、俺が倒したぜ？」

「そう・・・」

「それから・・・これ・・・」

「これ・・・!?!」

十代が写真たてを明日香に渡すと明日香の顔色が変わる

「“10JOIN”って天上院って意味だろ？」

「ええ、私の兄さんだわ・・・」

明日香は写真に写っている男性を見て頷く

「それじゃ、帰るか・・・実由、明日香を頼むな？」

「うん!」

それぞれの寮に帰ろうとしていた時だった

《む!?! 若!?!》

「え? うわ!?!」

時谷たちを黒い霧が取り囲む

「な、なんだ!?!」

「これって!?!」

「さっきの!?!」

「霧なんだな!!」

「な、なんなの？」

全員が飲み込まれる

「くそ!! 誰だ!!」

「クッククッククック!!」

時谷が呼びかけるを怪しげな笑い声がする
声のほうには黒いローブを着た男がいた

「お前がこの霧を・・・」

「その通りだ! 北上時谷!!」

「なんで時谷の名前を!？」

「私の名はモース! 闇のデュエリストだ!」

「闇のデュエリストだって!？」

「またっスか!？」

十代と翔も驚く

「また偽者!？」

「いや・・・今度は本物だな」

実由の疑問に答える時谷

「漂う気配がさっきのタイタンとは違う・・・」

「私の中の闇が囁いているのだ! 貴様を葬れとな!!」

そう言ってディスクを展開するモース

「待てよ！時谷にはデッキが・・・！」

時谷はゼラート以外のカードをすべて置いてきていた

「そんなことは関係ないのだよ！！無いのなら、そのまま始末するだけだ！！！」

「そんな！！！」

モースに反論しようとする翔を止める

「十代・・・ディスクとデッキを貸してくれるか？」

「時谷？」

「この中でデッキがあるのはお前だけだ・・・頼む！」

翔も、隼人も、実由も、明日香もデッキが無い
あるのは先ほどデュエルしていた十代のみだった

「わかった・・・頼むぜ！時谷！！！」

ディスクをはずし、時谷に渡す

「ああ、助かる」

（十代じゃないが、よろしく頼むぞ？）

デッキに語りかける時谷

「ふっ！はじめようか！！闇のデュエルを！！！」

「来い！！！」

「「デュエル！！！」」

時谷 LP 4000
モース LP 4000

「俺のターン！ドロー！！」

時谷は手札を確認する

（やはり、すぐには認めてくれないか・・・）

手札がいまいちの様だ

「俺はE・HERO ワイルドマンを守備表示で召喚！！」

野生児のようなヒーローが現れる

E・HERO ワイルドマン 守備力 1600

「カードを二枚セット！ターンエンドだ！」

時谷 LP 4000

場 E・HERO ワイルドマン 守備 1600

伏せ二枚

手札三枚

「私のターン！ドロー！！私は手札から、ジェネラルデーモンの効果を発動する！」

モースは手札の一枚を取り出す

「デーモン!?!」

「あいつもか!?!」

あいつとはタイタンのことである

「ジェネラルデーモンの効果! このカードを手札から捨てることでデッキから『万魔殿（パンディモニウム）―悪魔の巣窟―』を手札に加える!」

デッキからカードを取り出す

「そして発動!?!」

周囲が怪しげな雰囲気になる

「そして、シャドウナイトデーモンを召喚!?!」

赤い剣をもったデーモンが召喚される

シャドウナイトデーモン 攻撃力 2000

「レベル4で攻撃力2000!?!」

「行くぞ、ワイルドマンを攻撃!?!」

デーモンに切り刻まれるワイルドマン

「くっ!! リバースカードオープン! 『ヒーローシグナル』! 自分の場のモンスターが戦闘で破壊された時、デッキからレベル4以下のE・HEROを特殊召喚する! 俺はスパークマンを守備表示で召喚!」

E・HERO スパークマン 守備力 1400

「ふん！カードを一枚伏せ、ターンエンドだ！」

モース LP 4000

場 シャドウナイトデーモン 攻撃 2000

万魔殿―悪魔の巣窟―

伏せ一枚

手札三枚

「俺のターン！！」

ドロ―したカードを確認する

ドロ―したのはサイクロンブルーメラン、ワイルドマン専用の装備カード

「俺はクレイマンを守備表示！ターンエンド！」

E・HERO クレイマン 守備力 2000

時谷 LP 4000

場 E・HERO スパークマン 守備 1400

E・HERO クレイマン 守備 2000

伏せ一枚

手札三枚

「くっくっく！防戦一方か？私のターン！私はこのスタンバイフェイズにシャドウナイトデーモンのライフコストを支払わなければならないが、万魔殿の効果でそのデメリツトは消滅する！さらに私は、

ジェノサイドキングデーモンを召喚！」

王冠を被ったデーモンが召喚される

ジェノサイドキングデーモン 攻撃力 2000

「魔法カード『ディスクバード・アタック』を発動！！私の場の『デーモン』と名の付いたモンスターを生贄にする」

シャドウナイトデーモンが光となり、ジェノサイドキングデーモンの手の上に浮かぶ

「そしてこのターン、ジェノサイドキングデーモンは相手に直接攻撃ができる！！」

「なに！？」

「死ね！ジェノサイドキングデーモンでダイレクトアタック！！『ディスクバード・アタック』！！」

手の光が時谷に放たれる

「ぐわあああああ！！うつく！！」

時谷 LP 4000 ↓ 2000

あまりの衝撃に膝を突く時谷

「「時谷！！」「時谷君！！」」

（この痛み・・・確かに闇のデュエルだ・・・）

実際の衝撃がプレイヤーに襲い掛かる

「と・・・時谷君!! 体が・・・!?!」

「え? なっ!!」

実由の叫びに自身の体を見る時谷

すると、体の一部、膝と足首の間が消えていた

「ふふふ!! 闇のデュエルに負けたものは消滅する! 後一発で貴様の負けだ! 北上時谷!! ターンエンドだ!」

モース LP 4000

場 ジェノサイドキングデーモン 攻撃 2000

万魔殿―悪魔の巣窟―

伏せ一枚

手札二枚

「くっ! 俺のターン!! 『天使の施し』を発動! 三枚ドロし、手札を二枚捨てる!」

「ここに来て手札交換・・・悪あがきとは見苦しいな」

「諦めるわけにはいかないんだ! 俺はE・HERO エッジマンを召喚!」

黄金のHEROが現れる

E・HERO エッジマン 攻撃力 2600

「生贄無しで上級モンスターを!?!」

「墓地のネクロダークマンの効果さ、こいつが墓地にあるときE・HEROは一回だけ生贄無しで召喚できる・・・」

さっきの天使の施しで捨てたカードの一枚

「これでジェノサイドキングデーモンに攻撃できる！」

「行けー時谷！！」

「スパークマンを攻撃表示に変更！」

E・HERO スパークマン 攻撃力 1600

「エッジマンで、ジェノサイドキングデーモンに攻撃！『パワー・エッジシュート』！！」

エッジマンの体当たりにより破壊されるジェノサイドキングデーモン

「ぐう！！」

攻撃を受け、モースの体も少し消滅する

モース LP 4000 ↓ 3400

「よし！」

「甘い！手札のデスルークデーモンの効果発動！このカードを手札から捨てることで、ジェノサイドキングデーモンを蘇生する！」

闇の渦が発生し、中から再び現れるジェノサイドキングデーモン

「くそ！カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

時谷 LP 2000

場 E・HERO スパークマン 攻撃 1600

E・HERO	クレイマン	守備	2000
E・HERO	エッジマン	攻撃	2600

伏せ二枚

手札三枚

「不味いわね・・・」

「え？」

明日香が苦悶の表情をする

「もし、あのモースって男の最後の手札がデイスカバード・アタックで、ドローしたカードが『デーモン』と名の付く下級モンスターだったら・・・」

「召喚されて、デイスカバード・アタックが発動して・・・ジェノサイドキングデーモンの直接攻撃で・・・」

「時谷が負ける・・・」

明日香と実由が最悪のシナリオを考える

「大丈夫だ！時谷は負けない！」

「アニキ・・・」

「俺のHERO達が、時谷に力を貸してるんだぜ？負けるわけねえだろ？」

十代が全員に笑いかける

「十代君・・・そうだね！時谷君があんな奴に負けるわけ無い！」

「僕も信じるっス！」

「キバレー！時谷ー！！」

全員が時谷の勝利を信じて応援する

「私のターンだ！」

時谷の運命を決めるモースのドローカードは

「くつくつく！これで終わりだな！私は、インフェルノクインデーモンを召喚！」

インフェルノクインデーモン 攻撃力 900

「そして、魔法カード『デイスカバード・アタック』発動！インフェルノクインデーモンを生贄に！」

再び光がジェノサイドキングデーモンに集まる

「この一撃が通れば貴様の負けだ！」

「くっ！！」

「死ね！！ダイレクトアタック！『デイスカバード・アタック』！」

光が放たれる

「「時谷！！」」「「時谷君！！」」

「俺は・・・負けない！！リバースカードオープン！『ヒーローバリア』！俺の場にE・HEROが表側表示で存在するとき、相手モンスターの攻撃を一度だけ無効にする！！」

ヒーロー達から光が放たれ、時谷を包み込む

「俺へのダメージはゼロだ！」

「ちっ！悪運の強い・・・ターンエンド！」

モース LP 3400

場 ジェノサイドキングデーモン 攻撃 2000

万魔殿―悪魔の巣窟―

伏せ一枚

手札無し

「俺のターン、ドロ―！！魔法カード『融合』発動！場のスパークマンとクレイマンを融合する！来い！E・HERO サンダー・ジャイアント！」

紫色のバトルスーツを着たHEROが召喚される

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力 2400

「効果は使わずにバトルだ！エッジマンで、ジェノサイドキングデーモンを攻撃！『パワーエッジシュート』！」

突進を開始するエッジマン

「ぐわあ！！！」

エッジマンに殴られ、吹き飛ぶモース

「さらにサンダー・ジャイアントでダイレクトアタック！『ボルテック・サンダー』！」

巨大な電気の塊がモースに襲い掛かる

「ぐおおおおお!!」

衝撃に耐えるモース

体も、腕と頭を残して消えていく

モース LP 3400 ↓ 400

「刺しきれなかったか・・・ターンエンド!」

時谷 LP 2000

場 E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃 2400

E・HERO エッジマン 攻撃 2600

伏せ一枚

手札三枚

「ぐぬぬぬ!! 私のターン!! 魔法カード『強欲な壺』発動!! デッキからカードを二枚ドロウする!!」

「このタイミングで手札強化!」

「これは・・・くっくく!! 北上時谷! 先ほどのターンで私を倒せなかったこと、後悔するがいい!!」

「なに!」

引いた二枚を見て急に調子を取り戻すモース

(何を引いた・・・?)

「私の力の象徴を見せてやろう!! ゼラの戦士を召喚!!」

デーモンとは違うモンスターを召喚するモース

ゼラの戦士 攻撃力 1600

「ゼラの戦士だと?・・・まさか!!」

時谷はあることに気づき驚愕する

「そうだ!ゼラの戦士を生贄に、手札からデビルマゼラを特殊召喚する!!」

ゼラが闇に包まれ苦しみだし、やがて雄たけびと共に姿を変え、悪魔の翼と尻尾が出現した

デビルマゼラ 攻撃力 2800

「攻撃力2800!!」

「エッジマンでも勝てない!?!」

実由たちも動揺している

「デビルマゼラの効果発動!このカードが特殊召喚された時、相手の手札をランダムに三枚捨てる!貴様の手札は二枚、よってすべて捨ててもらおうか!!」

「くっ!!」

すべての手札を墓地に送る時谷

「バトルだ!!デビルマゼラでエッジマンに攻撃!!」

鋭い爪でエッジマンを切り裂くデビルマゼラ

「くう!!」

ダメージにより、再び膝を突く時谷
腰と肩の一部が消えた

時谷 LP 2000 ↓ 1800

「ターンエンドだ! さあ、こいつは倒せまい!!」

体が消えながらも勝利を確信しているモース

モース LP 400

場 デビルマゼラ 攻撃 2800

万魔殿―悪魔の巣窟―

伏せ一枚

手札無し

(このドローですべてが決まる……)

「俺のターン……ドロー!! 魔法カード『強欲な壺』を発動! デッキから、カードを二枚ドロー!!」

「ふん! いまさら手札強化など!」

ドローしたカードを確認する

「きたぜ!! 魔法カード『ミラクル・フュージョン』発動!! 場か墓地のE・HEROを除外融合させ

る! 俺は墓地のスパークマンとエッジマンを除外融合! 来い! E・

HERO プラズマヴァイスマン！」

スパークマンとエッジマンが渦に飲み込まれ、金色のアーマーを装着したヒーローが現れる

E・HERO プラズマヴァイスマン 攻撃力 2600

「攻撃力2600で何が出来る!？」

時谷の引き運に少し焦ったが、召喚されたモンスターをみて胸をなでおろすモース

「プラズマヴァイスマンの効果!手札を一枚捨てることで、相手の攻撃表示モンスター一体を破壊する!！」

拳に電撃を纏い、地面に放ちデビルマゼラを破壊する

「なんだと!？」

「これでお前を守るモンスターはいない!プラズマヴァイスマンでダイレクトアタック!！」

今度は電撃をもった拳で直接モースを殴りつけた

「ぐおおおおお!!!!」

顔を殴られて吹き飛ぶモース

モース LP 400 ↓ 0

「ぐ!?!ぐおおおおお!!!!」

だんだんと残っていた頭も消えそうになる

「させるか!!ゼラート!!」

《は!!!》

時谷が叫び右手をかざすとカードが時谷の前に浮く

「悪しき闇に捕らわれし精霊よ・・・お前の闇・・・浄化する!!」

カードから黒いオーラが立ち上がり、時谷の目が銀色に輝きだす

「はあああああ!!!!」

オーラが時谷の手に集まる

「ゼラート!!」

《承知!滅せよ!!!》

集まり、球体となった闇をゼラートが切り裂く
すると闇はサラサラと消えていった

「これで・・・終わりだ・・・」

カードは下に落ちる前に時谷が取ると、消えたと思われたモースが倒れていた

「時谷!!」

「時谷君!!」

実由たちが駆け寄る。時谷とモースの体も元に戻っている

「皆・・・大丈夫か？」

「ええ、なんとかね・・・ところで、彼は？」

明日香が傍に倒れているモースを見ながら聞いてくる

「気絶してるだけだ、闇の力に吞まれかけたんだ・・・直ぐには目を覚まさないだろうな・・・命には別状は無いはずだけどな」

時谷はカードをみつめている

精霊は持ち主の心に反応して、闇を纏うことがある

モースの中にある黒い感情がデビルマゼラに悪しき闇を生み出したのだ

そして、時谷にはそれらを浄化する力があり、様々な闇を持った人間と戦ってきた

「・・・まさかアカデミアでやるとは思わなかったな」

少し苦笑いしている

「時谷君・・・」

「実由・・・この眼・・・気持ち悪いだろ？」

「ううん・・・そんな事ないよ・・・だって・・・私達を助けてくれたんだもん・・・」

銀色になっている瞳を刺しながら聞くが実由は首を横に振り顔を赤らめながら褒める

「そうか・・・さ、帰ろうか？さすがにこれ以上はマズイしな」

「うん、そうだね」

その日はそのまま解散することにした

時谷の力については、後日改めて時谷の口から説明することになった

TURN 8 (後書き)

どうも！

というわけで、時谷君が闇のデュエルをしました。

デュエリストが自分のデッキを持ち歩かないって・・・いいのか！？
まあ、時谷君は実由ちゃんから十代君が穴g・・・もとい、タイタンとデュエルしていると聞いて、自分はその闇を浄化するのが目的だったので

今回、またオリキャラが出ました。

使用デッキはデーモンデッキにデビルマゼラを投入したデッキですね
デーモンはタイタンも使っていますが、内容はおそらく違うでしょう
今回も4000ライフだから出来るデュエルだと思います。

ディスカバード・アタック二発で勝利できるんですね・・・

対する時谷君は十代君からデッキを借りてデュエルしました。
さすが他人のデッキ、そう簡単に回リませんでしたね・・・
最初はこのデッキにゼラート入れようとも思ったんですが・・・絶対無理！！と思ったので没になりました

ダメージを受けると体の一部が消える、というのは遊戯王の無印で闇・バクラと闇・マリク戦で行われた方法です。
一番闇のデュエルっぽいので採用しました。

今回はここまででしょうか・・・ではまた次回！！

P・S・

モンスター効果のミスにより、一部内容を訂正しました (5/2

P V 2000件突破記念（前書き）

遅ればせながらこちらも突破しました！
皆様、ありがとうございます！！

PV 20000件突破記念

闇に選ばれし者 PV20000突破記念

どうも!!

気が付いたらこちらもPVを20000件を突破しました!!
というわけでこちらも座談会ロングバージョンでお送りします!

では早速・・・召喚!!

「諦めないんだな・・・その掛け声」

「しょうがないよ。これしか売らないんだもん・・・」

「文才が・・・乏しすぎ・・・」

うるさーい!! 気に入ってんだから良いじゃんか!! ともかく各自
自己紹介!

「はいはい・・・主人公の北上時谷だ」

「鈴原実由です!」

「光坂・・・進です・・・」

はい! というわけでこちらの記念座談会はオリキャラ三人を交えて
やりましょう!!

「こっちでもテーマは没ネタか?」

いや、こっちでは違うことをしようと思う

「なにをするの？」

それは・・・

「「それは？」」「」

もしもシリーズ！！

「もしも・・・シリーズ？」

そう！もし、時谷君が○○だったら！見たいな・・・

「なんか概視感が・・・」

「でも、少し面白そうかも・・・」

お！実由ちゃんは食いついたね！？

「まあ・・・聞くだけなら別に・・・」

「構わないよね・・・」

男二人も了承したことだし早速行ってみよう！！

もしも、時谷がとても口の悪いキャラだったら・・・

万丈目戦直後・・・

「ふん！雑魚が！身の程を知れ！！」

聖なるあかりが登場

「雑魚を俺の前にさらすな!!」

・・・どう？

「かなり、キャラが崩壊してる気がするな・・・」

「うん・・・」

「こんなの時谷君じゃない!! 戻して! 元に戻して!!」

落ち着いて! 実由ちゃん! 時谷君は変わっていないから!! 揺さぶらないで!!

「・・・ホント?」

うん! ホラ、あそこにいるじゃない!!

「時谷君・・・?」

「何か用か? 女」

ちょっ!?! 時谷君!?! なにやってんの!?!

「・・・どうということ?」

ち、違う! アレは時谷君の冗談で・・・

「・・・少し・・・頭・・・」

「待て実由、それはさすがに言っちゃいけない」

「時谷君！！よかった！！」

まったく・・・冗談きついよ？時谷君

「これで許してやってんだ感謝しろよ？実由は怒ると怖いんだからな？」

うん・・・気をつけるよ・・・それじゃ、次はこれ！

もしも、実由が女王様キャラだったら

時谷と出会ったとき

「さあ、この紙を受け取りなさい！この豚野郎！！」

「は、はい・・・」

「豚野郎が日本語を話すなんて許されると思っているの？豚野郎はブーブー言ってればいいのよ！」

十代達との勉強会にて

「こんな問題もわからないの？所詮は豚野郎ね！！」

「ブー・・・ブー・・・」

「十代ー！！」

「女王様って言うよりDSキャラじゃねえか・・・」

「なんか、今とのギャップが激しすぎるよね・・・」

そうかな？どうかな、実由ちゃん的には？

「・・・豚野郎がなれなれしく話しかけないで」

えゝ!!? こっちも!?

「なんか、感情籠ってるね・・・時谷にもこんな感じになるのかな？」

「・・・実由？」

「あ、時谷君! あなたはいいの。そのまま、私の傍にいてくれるだけでいいの!」

女王様からツンデレに!?

「でも・・・アレは下手したら・・・ヤンデレかも・・・」

やべえ、これ以上時谷君からかったら刺されるかも・・・というわけが続いてはこれ!!

もしも、進が熱血キャラだったら

時谷との実技試験のとき

「お前が北上時谷か!! いい勝負にしような!!」

「あ・・・ああ」

「なんだよ、テンション低いぜ? もっと熱くなれよ!!」

「お前が熱すぎんだよ・・・」

全然違うね・・・

「ああ、あんましゃべらない進が当たり前すぎて、これは完全に違う人間だな・・・というか二人目の十代じゃないか？」

うん。書いててそう思った・・・さて、君の嫁さんはもう戻ったかな？

「ああ、それなら・・・あそこで・・・」

「時谷君と同じ部屋なんで豚野郎のクセに生意気なのよ!!」

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

なんか、キャラが固まった感じだな・・・

何気に「豚野郎」って単語が気に入ったのかな？

進君もなんかすごい謝ってるし・・・

「どうすんだよ・・・？あれ・・・」

君が言ったら戻るかもよ？

「そうかな・・・実由？もういいぞ？」

「あ、時谷君・・・？あれ？私どうしたのかな？」

「大丈夫だ・・・少し、変な夢を見てただけだから・・・俺が傍にいるから、心配しなくてもいい・・・」

「うん・・・時谷君・・・」

知らないうちに二人の世界を作っている・・・恐ろしいカップルだね

「新婚じゃない・・・？」

あ、大丈夫？なんか、理不尽に怒られてたけど・・・

「大丈夫・・・違う自分が目覚めるところだったけど・・・」

大丈夫じゃない！？大変なことだよ！？

「冗談だよ・・・」

君が言うのと冗談に聞こえないね・・・

「それよりどうするの？・・・この空気じゃ続けられないよ？」

そうだね・・・これ以上ネタもないし・・・ここまでにしようか？

「ずいぶん短いみたいだけど・・・いいのかな・・・？」

いいんだよ、これから先どんどんアクセス件数増やして、また記念小説書くことになるから

それまでにネタを固めて、今回以上のものにしていけばいいんだから！

「綺麗に纏めたつもり？」

う、うるさい！さ、それじゃ時谷君があんな調子なので、最後は進君に締めてもらおうかな？

「僕？・・・えっと・・・この作品も皆様のおかげで・・・PV20000件を突破しました・・・これ

からも・・・『遊戯王デュエルモンスターズGX 闇に選ばれし者』を楽しんでください・・・こんな感じでいいの・・・？」

うん、上出来上出来！

作者はとても面倒くさがりで更新も不定期になりますが、それでも、これともう一つのほうも完結できるようがんばって行きたいと思います！

皆様の応援が、作者の活力になります！

「これからも、応援お願いしますね？」

「感想、意見なんかもまってるからな？」

うお！？いつの間に・・・

「それでは・・・また、本編で・・・」

次回の記念小説はPV50000件突破にやろうと思います！
それでは！！

「」「さよならー！！」「」

P V 20000件突破記念（後書き）

どうも！

いかかでしょうか？

かなりキャラが崩壊してる部分もありましたが、本編ではもとに戻っていますので・・・

ではまた50000件突破記念でお会いしましょう！！

TURN 9 (前書き)

今回は久しぶりの『横取りデュエル』です！
本編の八話と九話を一緒にしています

TURN 9

Turn 9 《制裁デュエル準備、VSカイザー・丸藤亮！》

「「「退学!?!」」」

廃寮でのデュエルの翌日、時谷、十代、翔はアカデミア倫理委員会に連れられ、そう言い渡された。

「本日未明、北上時谷以下三名は、封鎖され立ち入り禁止になっている特別寮に入り込み、内部を荒らした。調べはついている!」

時谷たちを囲むようにモニターがあり、そこには倫理委員会の女性委員や校長などの教師陣が映し出されている

「何でも言うこと聞くからチャンスくれよ!」

「ならば、別のペナルティの方法を提案スルゥノ!」

懇願する十代にクロノスが答える

「それは、制裁タッグデュエル!」

「制裁・・・」

「タッグデュエル?」

クロノスの提案に首を傾げる十代と時谷

「その通り! 遊城十代と丸藤翔、君達二人がタッグを組みデュエルスルゥノね! デュエルに勝利すれば無罪放メーンナノゥネ!」

「タッグデュエルか・・・面白そうだな」

「えゝマズイツスよアニキ」

説明を聞いてやる気の出た十代と不安気な翔

「あの・・・クロノス先生、俺は・・・？」

名前が挙がらなかったので挙手で質問する時谷

「セニョール時谷には制裁シングルデュエルをしてもらうネ！」

「普通にデュエルか・・・わかりました」

すこしホッとした様子で頷く

「校長、本人達も納得したようデースガ？」

「うむ・・・ならば仕方あるまい・・・」

クロノスの提案に渋々といった様子で頷く校長

「負けたら即退学！対戦相手はおって連絡スルノ！」

そのクロノスの言葉により解散となった

【実由Side】

三人の制裁デュエルのことは直ぐに広まり、実由、明日香の二人は校長室を訪れていた

「あの寮には、私達もいたんです！」

「なのに、なんで時谷君たちだけなんですか！？」

「ううむ・・・」

校長も少し困惑している

「君達の気持ちはわかった・・・だが、三人のデュエルは査問委員会で決まったことなんだ・・・」

少し考えそう説明する校長

二人もそれ以上何も言えなくなった

【時谷Side】

「時谷・・・大丈夫・・・？」

「ああ、問題なし！勝てばいいんだから」

寮の部屋に戻り、デッキの調整を始めた時谷と心配そうに見ている進

「ふむ・・・こんなところか・・・進、俺ちよつと十代のところに行くわ」

「あ・・・じゃあ僕も行くよ・・・」

そう言うと二人でレッド寮に向かう

「あれ？十代と翔でデュエルしてんのか？」

「ああ、十代が『翔のデッキの特性知らないから』って」

「ふーん・・・」

レッド寮に着くと、十代と翔が崖下でデュエルをしていて、隼人がそれを観戦していた

「俺、何にもしてやれないんだな・・・」

「そんな事無いわよ」

落ち込んでいる隼人に後ろから声かけられる

「明日香さん・・・」

「実由も・・・」

三人が振り向くと明日香と実由が近づいてきた

「制裁タッグデュエル決定で、落ち込んでるかと思ったら・・・」

「大丈夫そうだね・・・十代君・・・」

「でも・・・丸藤君は・・・」

どこか不安そうな顔をしている翔をみつめる進

「十代に関わった人間は皆、元気になる・・・だから翔君もきつと・・・」

「だいいけどな・・・」

下を見るとデュエルが始まった

十代は早速フェザーマンを召喚し、カードを伏せた

そして翔のターンになるが、ドローしたカードを見た後突然にやけだした

「おーい翔！！お前のターンだぞ！！」

上から叫ぶ時谷

「ああ！パトロイドを召喚！攻撃表示！！」

「パトロイドか・・・十代の場の伏せカードを確認できるな・・・」
「攻撃力も・・・フェザーマンを上回ってる・・・」

パトロイドには場の伏せカードを確認する効果があり、攻撃力も1200で、翔の選択は間違っていないのだが

「パトロイドで攻撃！『シグナル・アタック』！！」

「「はあ！？」」

効果を使わずに攻撃をしたので時谷も進も素っ頓狂な声を出してしまふ

「リバースカードオープン！『攻撃の無力化』！」

難なく攻撃を止める十代

「やられちゃったんだ・・・」

隼人も肩を落とす

「やっぱり翔君では十代のタッグパートナーは荷が重いのかも・・・」
「俺が代わってやればいいんだけどな・・・だが、あの調子じゃ・・・」
「きつと・・・シングルデュエルでも・・・駄目だね・・・」

再び視線を崖下に戻す観戦組

いじけだす翔にパトロイドの効果を指摘する十代だが、翔が突然大声を上げる
デュエルが再開され十代は新たにモンスターを召喚し、直接攻撃を決める

「戦意喪失してるな・・・翔の奴」

「うん・・・」

「キバレー!!!翔ー!!!」

少し呆れ気味に時谷が言うのと横の隼人が大声を出す

「そんなんもんで落ち込んでたら、一年留年の俺より格好悪いぞー!!!」

「隼人・・・翔! 普段大声出さない隼人がこんなに一生懸命に応援してくれてんだぞ! その期待にこたえて見せろ!」

「隼人君・・・時谷君・・・」

二人に渴を入れられ、気持ちが入れ替わった様子の翔

「前田君と時谷の応援で・・・丸藤君、元気になったようだね・・・」
「俺・・・自分が駄目だから、駄目になっちまう奴の気持ちが判るような気がして・・・」

進の言葉に少し苦笑いしながら答える隼人

「人の気持ちが判るってことは、隼人は思っているほど駄目な奴じゃないさ」

「そうだよ」

「そうね」

「そんな・・・」

時谷と実由、明日香に言われ顔を赤くする隼人

「僕のターン、ドロー！魔法カード『強欲な壺』発動！カードを二枚ドローする・・・！？」

ドローしたカードを見て、驚いている翔

「どうしたのかしら・・・？」

「よっぽど・・・すごいカードを引いたのかも・・・」

「ここで逆転か・・・？」

しかし、今度は震えだした

翔の様子が変わったのに十代も気付いたようだった

「おーい！大丈夫か！？」

十代が声をかけると我に返り、プレイを続ける

「魔法カード発動！『融合』！見ててよアニキ、今度は僕の融合モンスターでお返しだ！手札のジャイロイドとスチームロイドを融合！スチームジャイロイドを融合召喚！」

翔の場にプロペラの付いた機関車のモンスターが現れる

「バトルだ！『ハリケーン・スモッグ』！！」

噴出した蒸気をプロペラの風で飛ばすスチームジャイロイド
フェザーマンは風に吞まれ身動きが取れなくなりそのままスチーム
ジャイロイドに体当たりされ破壊された

「どうだアニキ！少しは参ったか！！」

「へっへっへっへっへ！！あっはっはっはっは！！」

突然不気味に笑い出す十代

「やっぱデュエルはこうでなくっちゃ！翔！ちょこっただけ面白くなってきたぜ！！」

「全然参ってないな・・・」

「むしろ・・・元気になった・・・」

「よっしゃ！これからお互いに全力をだそうぜ！！」
「う・・・うん」

翔が吞まれている

「俺のターン！ドロー！！魔法カード『融合』発動！スパークマン、そしてクレイマン、お前たちのパワーで新たなるパワーを呼び出させてもらうぜ！」

十代の呼びかけに頷き渦に飛び込む二体

「E・HERO サンダー・ジャイアントを召喚！」

雷と共に降臨するサンダー・ジャイアント

「この勝負・・・決まったな・・・」

「なんで？まだ翔、がんばってるのに・・・」

時谷の言葉に首を傾げる隼人

「サンダー・ジャイアントには、自分よりもとの攻撃力の低いモンスターを破壊する効果がある」

「スチームジャイロイドの攻撃力は・・・2200・・・対してサンダー・ジャイアントの攻撃力は・・・2400・・・つまり・・・」

時谷と進が説明していると

「いくぞ！『ヴェイパー・スパーク』！」

指を立て雷の雨を降らせるサンダー・ジャイアント
直撃し破壊されるスチームジャイロイド

「僕のフェイバリッドカードが!!」

「更に、バーストレディを召喚!! プレイヤーにダイレクトアタック! 『ボルテック・サンダー』!」

「うわああああ!!」

電撃を喰らい、ひざを突く翔

「更にダイレクトアタック! 『バースト・ファイア』!!」

「うわああああ!!」

火球に吹き飛ばされ、ライフがゼロになった

「ガッチャ! 翔、面白いデュエルだったぜ!」

何時もの決めポーズをとる十代

「やっぱり駄目だ・・・僕じゃタッグパートナーは・・・」

「そんなことないぞ、負けたけど途中までは紙一重だったじゃないか」

降りてきた時谷がそう言う

「なあ翔、お前カード引いたとき驚いてたな? 手札見せてみ?」
「あ!」

翔から手札を取り確認する十代達

「これは・・・『パワーボンド』に『リミッター解除』!？」

「なんで使わなかったの？」

「これなら・・・さっきのデュエル・・・たぶん勝てた・・・」

時谷、実由、進の三人も驚いている

「パワーボンドで融合したスチームジャイロイドの攻撃力は二倍の4400・・・そこにリミッター解除を発動してさらに倍で8800・・・フェザーマンを攻撃したらダメージは7800・・・」

「俺の負けじゃないか!!」

十代もさすがに焦る

「やっちゃだめなんだ!! そのカードは、お兄さんに封印されてるんだ!!」

そういうながら十代からカードを取り戻す

「やっぱり、僕じゃタッグパートナーは無理なんだよ!!」

泣きそうになりながら走り去る翔

「「翔!？」」

「翔君!？」 「丸藤君!？」

その後、隼人は翔を追いかけていき、明日香は崖下に降りてきた

「デュエルって楽しいものはずなのに・・・なんだかあいつは辛そうなんだよな・・・パワーボンドなんてキラカード持ってるのに、『お兄さんに封印されてるから使えない』なんてさ・・・」

「十代・・・」

「翔君には、本当のお兄さんがいるのよ・・・しかも、この学園にね・・・」

「そうなのか？」

「知らなかったの？三年のオベリスクブルーのトップ、丸藤亮・・・生徒達は彼のことを『デュエルアカデミアの帝王・カイザー』と呼んでるわ・・・」

「すごい通り名・・・」

少し呆れ気味の時谷

「というか、時谷君と進君は知ってるはずでしょ？同じオベリスクブルーなんだから・・・」

「いや、俺達一年生だし・・・」

「寮の部屋も・・・学年ごとに分けられてるし・・・」

実由の疑問に頭を掻きながら答える男二人

「一体、そのカイザーと翔の間に何があったんだ・・・？」

十代は海を見つめながら呟く

「ま、その兄貴とデュエルすればわかることだな！」

「えー！？じゅ、十代、あなた聞いてたの？彼は・・・」

「三年のオベリスクブルーのトップで『カイザー』ってあだ名があるんだろ？くく！面白くなってきたぜ！！」

目を輝かせながら気合を入れている十代

「俺も戦ってみたいな・・・その人と・・・」

「時谷君も!?!」

後ろでボソツと言う時谷に驚く実由

そんな事があった次の日、時谷がブルー寮を歩いているとき

「なんか、外が騒がしいな・・・?」

窓の外を眺めるとブルーの生徒とレッドの生徒が口論していた

「って、アレ十代か? なにしてんだ?」

急いで入り口に向かう

「くそ〜!」

「十代! 大丈夫か?」

外に出ると十代がずぶ濡れになっていた

「時谷! なんなんだよあいつら! カイザーとデュエルしに來ただけなのにさ!」

「この連中はオシリスレッドの生徒を見下してるらしいからな・・・立てるか?」

「ああ、悪い・・・」

時谷の手につかまり立ち上がる十代

「お前はそんなところで何やってんだ？隼人」

そばの木では隼人が見ていた

「十代がオベリスクブルーに乗り込むって・・・」

「無茶するなあ、十代。とりあえずレッド寮に行こう。ここにいるとまた水かけられるぞ？」

時谷の提案に三人はレッド寮に向かっていく

「ちくしょう・・・あいつら、こんなことで諦めるかよ！絶対にカイザーとデュエルしてやる！」

不機嫌なまま部屋に入ると翔のベッドが膨らんでいた

「はー翔、授業にも出ねえで、いつまでも閉じこもっていると、隼人みてえになっちまうぞ？」

「失礼なこと言うな！」

ため息を吐きながら言う十代の言葉に抗議する隼人
十代はそれを気にせず翔のシーツをめくる

「ありゃ？翔は・・・？」

「なんだこれ？」

「え？」

時谷が机の上にあるものに気付いた

『一筆啓上、翔は島を出ます。止めてくれるなアニキ！さよならだ』

けが人生だ!』

「何言ってんだあいつは・・・」

翔の置き手紙に呆れる時谷

「あいつ!逃げやがった!」

手紙を握りつぶしながら怒る十代

「でも、ここからどうやって?」

「探そう!」

「え?でも、もうすぐ晩御飯の・・・」

「いいから!」

隼人の手を引きながら部屋を飛び出す十代

「進たちにも頼むか・・・」

PDAを取り出し、進と実由に連絡を入れる

「翔!!何処だー!」

「翔くーん!!」

時谷は実由と一緒に埠頭を探している

《見当たりませんね・・・》

《何処にいるのやら・・・》

「まったく、手間の掛かる・・・ん?」

ぼやく時谷が何かを見つけた

「あれは、明日香？」

灯台の近くに明日香がブルーの制服を着た男子と一緒にいた

「本当だ・・・一緒にいるのは・・・誰かな？」

「彼氏かな・・・？」

「え！？嘘！？」

時谷の推測に驚く実由

「ん？あら、時谷に実由？」

「よう、明日香。それにそっちの人は・・・？」

「前に言ったでしょ？彼が丸藤亮。翔君のお兄さんよ」

「この人が・・・カイザー・・・」

「君達は？」

カイザーこと丸藤亮が腕を組みながら聞いてくる

「俺は北上時谷って言います。時谷って呼んでください」

「私は鈴原実由です」

「ああ、君達か・・・噂の二人は・・・」

段階飛ばしの婚約のことである

「あ、アニキ！！」

突然近くから声がする。回りを見渡す四人

「あれは!?!」

「翔!?!」

「あんなところに!?!」

「そういえば忘れてた!?!」

《若・・・》

「行こう!?!」

呆れるゼラートを尻目に翔の下へ向かう時谷たち

イカダで島を出ようとするのを寸でのところで十代が阻止した

「行かせてくれよアニキ。僕のことはいいから・・・別のパートナーを見つけて・・・アニキだけでも退学を免れておくれよ・・・」
「つべこべ言うんじゃないやねえ! 俺は決めたんだ! パートナーはお前だ!?!」

弱音を吐く翔を叱責する十代

隼人と合流していた進も心配そうに見つめる

「でも、今の僕じゃ・・・」

なおも情けないことを言う翔に十代もさすがにキレそうになるが

「不甲斐ないな、翔」

「「「え!?!」」」

突然上から声がし、その方向を見ると、亮と明日香がいた

「お兄さん!」

「天上院さんも・・・」

「あれが、カイザー・・・」

「逃げ出すのか・・・？」

「ぼ、僕は・・・」

亮の無言の圧力にひるむ翔

「・・・それもいいだろう・・・」

亮も冷たく引き離す

「それで良いのか！？翔！！」

遅れてやってきた時谷が叫ぶ

「言われっぱなしで、悔しくないのか？」

「・・・」

「俺も止めねえよ。だけどな、その前に見ていけ！俺と亮さんのデユエルを！」

「え！？」

時谷の言葉にその場の全員が驚く

「いいですよね？亮さん・・・？」

「・・・いいだろう。灯台のところでやろう」

時谷の申し出に頷き歩き出す亮

全員が灯台の下に付く。あたりはすっかり暗くなっている

「翔！よく見てろ！」

「行くぞ！」

「「デュエル！！」」

時谷 LP 4000

亮 LP 4000

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード「おろかな埋葬」を発動！デッキからモンスターを一体墓地に送る！俺は、ダーク・ホルス・ドラゴンを墓地へ！更にダーク・クルセイダーを召喚！」

骸骨の仮面をつけた戦士が召喚される

ダーク・クルセイダー 攻撃力 1600

「ダーク・クルセイダーの効果！手札の闇属性モンスターを一枚墓地に送るごとに攻撃力が400ポイントアップする！手札のネクロ・ガードナーを墓地に送り、ダーク・クルセイダーの攻撃力を400ポイントアップする！」

ダーク・クルセイダー 攻撃力 1600 ↓ 2000

「カードを一枚セット！ターンエンド！」

時谷 LP 4000

場 ダーク・クルセイダー 攻撃 2000

伏せ一枚

手札二枚

「俺のターン・・・ドロー！」

引いたカードを見る亮

「俺はサイバー・ドラゴンを攻撃表示で召喚！」

機械の竜が召喚される

サイバー・ドラゴン 攻撃力 2100

「レベル5のモンスターを生贄無し!?」

「サイバー・ドラゴンは相手の場にのみモンスターがいる場合、特殊召喚できる。更に、手札からサイバー・フェニックスを召喚！」

機械の鳥が現れる

サイバー・フェニックス 攻撃力 1200

「速攻魔法「サイクロン」を発動！君の場の伏せカードを破壊する！」

風が巻き起こり、時谷のカードを破壊する

「くそ！『攻撃の無力化』が・・・」

「そして、サイバー・ドラゴンでダーク・クルセイダーに攻撃！『エヴォリュション・バースト』！」

サイバー・ドラゴンの吐く炎により破壊されるダーク・クルセイダー

「くっ!!」

時谷 LP 4000 ↓ 3900

「さらにサイバー・フェニックスでダイレクトアタック！」

同様に炎を吐き、攻撃するサイバー・フェニックス

「ぐうっ！」

時谷 LP 3900 ↓ 2700

「そして、魔法カード『封印の黄金櫃』を発動！デッキのカードを一枚櫃に入れ、二回目のスタンバイフェイズに手札に加える」

亮の前に黄金の櫃が現れ、カードが収納される

「ターンエンド！」

亮 LP 4000

場 サイバー・ドラゴン 攻撃 2100

サイバー・フェニックス 攻撃 1200

手札二枚

「俺のターン、ドロー！ダーク・ヴァルキュリアを召喚！」

ダーク・ヴァルキュリア 攻撃力 1800

「サイバー・フェニックスを攻撃！」

黒い光線に破壊されるサイバー・フェニックス

「・・・・・・・・」

亮 LP 4000 ↓ 3400

「カードを一枚セット！ターンエンド！」

時谷 LP 2700

場 ダーク・ヴァルキュリア 攻撃 1800

伏せ一枚

手札一枚

「俺のターン、ドロロー！行くぞ！魔法カード『融合』を発動！場と手札、二枚のサイバー・ドラゴンを融合し、サイバー・ツイン・ドラゴンを融合召喚！」

場に二体目のサイバー・ドラゴンが現れ、一つになり、首が二つの機械の竜が召喚される

サイバー・ツイン・ドラゴン 攻撃力 2800

「攻撃力2800！！」

「それだけではない。サイバー・ツイン・ドラゴンは二回攻撃が出来る！」

「二回攻撃！？」

「そんな！それじゃ二回目の攻撃が・・・」

「時谷への・・・ダイレクトアタックに・・・」

十代、実由、進の三人も驚く

「行くぞ！攻撃だ！『エヴォリユーション・ツイン・バースト』！」

二つの首から一斉に攻撃が放たれ、あっけなく破壊されるヴァルキユリア

「ぐうっ！！！」

時谷 LP 2700 ↓ 1700

「二回目の攻撃が！！！」

「時谷！！！」

もう一方の攻撃が時谷に向かうが、時谷の前で消滅した

「なに！？！」

亮も驚き、時谷の場を見るとモンスターの幻影が時谷を守っていた

「・・・墓地のネクロ・ガードナーの効果。墓地から除外し、バトルを無効にする」

カードを見せポケットにいれる

「間一髪・・・」

「危ね〜!!」

実由と十代も胸をなでおろす

「やるな・・・カードを一枚セットし、ターンエンド!」

亮 LP 3400

場 サイバー・ツイン・ドラゴン 攻撃 2800

伏せ一枚

手札無し

「俺のターン!ドロー!!行くぜ!!墓地の闇属性モンスターが三体のとき、こいつを特殊召喚できる!ダーク・アームド・ドラゴン!!!」

時谷の切り札の一枚が召喚される

ダーク・アームド・ドラゴン 攻撃力 2800

「サイバー・ツイン・ドラゴンに並んだんだな!!」

「ううん!それだけじゃない!」

「そうさ!あいっにはすげー効果がある!」

時谷の切り札の一つに喜ぶ観客サイド

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果!墓地の闇属性モンスターを

一体除外することで、場のカードを一枚破壊できる！俺は、墓地の
ダーク・クルセイダーを除外して、サイバー・ツイン・ドラゴンを
破壊する！『ダーク・ジェノサイドカッター』！！」

ダーク・アームドのカッターがサイバー・ツインに当るかと思われ
たとき

「リバースカード、オープン！『亜空間物質転送装置』！」
「なに！？」

亮の伏せカードに驚く時谷

「自分の場のモンスターを一体、エンドフェイズまで除外する！サ
イバー・ツイン・ドラゴンを除外！」

カッターが当る寸前で亜空間へと消えるサイバー・ツイン・ドラゴン

「かわされた！？」
「そんな！？」

実由たちも亮の隙の無いプレイに驚いている

「だが、これでモンスターがいなくなった！ダーク・アームド・ド
ラゴンでダイレクトアタック！『ダーク・アームド・パニッシャー』
！！」

ダーク・アームドが炎を吐き亮を飲み込む

「くっ!!」

亮 LP 3400 ↓ 600

「エンドフェイズにサイバー・ツイン・ドラゴンが戻る!」

亜空間から帰還するサイバー・ツイン・ドラゴン

「ふふ!楽しいです、亮さん!このデュエル!」

「・・・ああ、俺もだ」

互いに笑っている

「俺は、これでターンエンド!」

時谷 LP 1700

場 ダーク・アームド・ドラゴン 攻撃 2800

伏せ一枚

手札一枚

「サイバー・ツイン・ドラゴンの攻撃力と並んでいるから、直接ダメージはないんだな!」

「でも、時谷君のライフは後1700・・・」

「安全圏とは・・・いえないね・・・」

実由と進は不安そうに見守る。時谷の墓地にはもうネクロ・ガードナーは無い。新たなモンスターが召喚されれば時谷も危険なのである

「俺のターン！ドロー！このスタンバイフェイズ、『封印の黄金櫃』の効果で除外したカードを手札に加える！」

黄金櫃の中からカードが開放され亮の手札に加わる

「魔法カード『強欲な壺』発動！カードを二枚ドローする！・・・時谷、いよいよ大詰めかな？」

「ええ、何が来るのか・・・ワクワクします！」

「そうだろうな・・・君は持てる力を全力で出している・・・そんな君に敬意を表する」

翔はそんな二人を見て何かに気付いた

二人が互いに認め合い、全力でぶつかり合う

だが自分はそのうちではなかったことに気付き、二人が伝えたかったことを理解した

「行くぞ！時谷！！」

「ええ！」

互いに構える

「俺は手札から魔法カード『融合解除』を発動！サイバー・ツイン・ドラゴンの融合を解除し、二体のサイバー・ドラゴンを特殊召喚！」

再び現れる二体の機械竜

「そして、手札から魔法カード『パワーボンド』を発動！！このカードは機械族モンスターを融合召喚することが出来る！」

「パワーボンド!!」

「やっぱり!!」

「パワーボンドで・・・もう一度・・・サイバー・ツイン・ドラゴンを・・・?」

「いいえ!違うわ!!」

進の予想に明日香が答える

「場の二体のサイバー・ドラゴンと手札のサイバー・ドラゴンの三体を融合する!」

「三体目!?!」

亮の場に三体目のサイバー・ドラゴンが現れ、光に包まれる

「サイバー・エンド・ドラゴンを、攻撃表示で召喚!!」

光の中から三つの首を生やした機械竜が現れる

サイバー・エンド・ドラゴン 攻撃力 4000

「パワーボンドで召喚されたモンスターの攻撃力は、倍になる」

咆哮と共にサイバー・エンドの攻撃力が上昇する

サイバー・エンド・ドラゴン 攻撃力 4000 ↓ 8000

「8000だって!?!」

規格外の攻撃力に驚く十代

「・・・・・・・・」

真っ直ぐにサイバー・エンドを見つめる時谷

（なあ、ゼラート・・・このモンスター・・・）

《ええ・・・主人のことを、心から信頼しています・・・》

時谷はゼラートとそんな事を思っていた

「キバレー時谷！！このターンを凌げば、パワーボンドのリスクでお前の勝ちだ！！」

パワーボンドのリスク・・・召喚したモンスターの元々の攻撃力分のダメージ

サイバー・エンド・ドラゴンの元々の攻撃力は4000、リスクには十分な数値である

（って言ってもね・・・この場と手札じゃな・・・）

伏せカードは闇の幻影、手札はゼラート。どうあっても凌げない。そのまま真っ直ぐに亮を見つめる時谷

「サイバー・エンド・ドラゴンで、ダーク・アームド・ドラゴンを攻撃！『エターナル・エヴォリュション・バースト』！！」

サイバー・エンドから青色の炎が放たれ、ダーク・アームドを飲み込み破壊し、そのまま時谷を飲み込む。

時谷はその間も目を離さなかった

「くっ!!」

ひざを突く時谷

時谷 LP 1700 ↓ 0

「「時谷!!」」「時谷君!!」

「時谷が・・・負けた・・・?」

「いいデュエルでした・・・亮さん・・・ありがとうございました」
「ああ・・・」

短く答え、翔に一瞥し立ち去る亮。明日香はそれについていった

「大丈夫!? 時谷君!!」

実由と翔が駆け寄る

「ああ、翔? すげえな、お前のお兄さん」

「時谷君もね?」

そう答える翔と笑いあう時谷

「時谷君! 僕、なんとなくわかったよ! お兄さんが言おうとしたこと」

「そっか・・・なら、大丈夫だな?」

「うん!」

十代、進、隼人も駆け寄ってくる

「惜しかったな時谷！」

「あともう少しだったのに・・・」

「亮さんとデッキの信頼が、俺のより上だった・・・それがけさ・・・さあて、帰るか？結構遅いしな・・・」

「翔も、当日までにパワーボンドの封印を解いておくんだぜ？」

「うん！」

「でも、寮の食堂は封印されちゃったんだな・・・」

決意を固める翔を余所にうな垂れる隼人

「まだ間に合うかも！！急ぐぞ！翔！隼人！！」

「あ、アニキ」

「まって欲しいんだな！！」

慌てて走っていくレッドの三人

「それじゃ、俺達も帰るか？」

「うん！」

「そうだね・・・」

時谷たちも帰路に付く

「今度は勝ちたいな・・・」

帰る途中、誰にも聞こえないように呟く時谷だった・・・

TURN 9 (後書き)

どうも！

今回は長かったです！

さあ、十代君からカイザー亮さんとのデュエルを横取りしました！
十代君と翔君がタッグで、時谷君がシングル・・・なんて無理矢理
な展開・・・

今回のデュエルも難産でした、『時谷君がいかにして負けるか？』
をテーマに何度も書き直しました。

時谷君は『カイザー』とは呼びません。ちなみに進君は時谷以外を
苗字で呼びます。

アニメの十代君とのデュエルを参考にデュエルをしましたが、要所
要所ですこしだけ変えています。

初手でサイバー・ドラゴンと一緒にサイバー・フェニックス呼んだ
り・・・

サイバー・エンドにつながためにサイバー・ツインを守ってみたい・
・・・

『タイムカプセル』では無く『封印の黄金櫃』だったり・・・だっ
て普通タイムカプセル守ってる場合じゃないでしょう！？

その黄金櫃の中のカードを教えていないという念の入れようです・
・ご都合主義です・・・

翔君と十代君のデュエルもアニメをよく見ると翔君の手札に『リミ
ッター解除』が確認できます。

時谷君と亮さんのデュエルでリスペクトの精神に気付いた翔君でした。

時谷君や実由ちゃん、進君がデュエルをしていない場合のデュエルは基本的に書きません。そのための『横取りデュエル』だと思ってください。

ではまた次回！！

オリキャラ設定（前書き）

突然ですが、ここでこの作品のオリジナルキャラたちの設定をご紹介します！

今回は、時谷君、実由ちゃん、進君の三人になります

オリキャラ設定

オリジナルキャラ設定

きたがみ
北上 時谷

十代と同じ年にデュエルアカデミアに高等部からの編入をしてきた少年。

髪は茶髪で肩まである髪を首の後ろで結んでいる。

瞳の色は蒼色、能力使用時は銀色になる

どんな相手でも全力でデュエルをする。

よく使うデッキは闇モンスター主体の「ダークデッキ」。

趣味は小学生時代からの料理で、腕前はなかなか

父親は有名な玩具メーカーの社長でその後を継いだ時継ときつぐという兄がいる。

会社を兄が継いだため時谷は自由な生活が出来ているが、いつかは兄とともに働きたいという夢を持っている。

十代と同様でカードの精霊を見ることが出来る。

時谷の精霊は「堕天使ゼラート」で、ゼラートからは「若」と呼ばれている。

ゼラートとであったことで『闇の浄化』の力を持ち、数多くの闇を浄化してきた。

闇の浄化の為に、決闘者王国デュエリストキングダムへ出場し、後のバトルシティにも参加したが、予選に落ちている。

会社の関係上、海馬コーポレーション、インダストリアル・イリュージョン社とも関係が深く、時谷が出場できたのもそのおかげで、予選落ちしているが決勝トーナメントの観戦を特別に許可され、その際に遊戯や城之内などのデュエリストと知り合い、遊戯とアテム

のデュエルにも立ち会っている。

実由に一目惚れをし、好意を抱いていることをゼラートによくからかわれる。

実由の婚約を兄の協力の下解消させることに成功し、彼女の逆プロポーズにより婚約者となる。

ダークデッキのカードは浄化したカードを使っているため、本来の時谷のカードといえるのはゼラートを含み数枚しかない

鈴原 実由
すずはら みゆ

時谷や十代と同じ新入生。天上院明日香とは中等部からの友人で、ジュンコやももえとも仲がいい。
実技試験で時谷に一目惚れした。

初対面にして、いきなりアドレスを渡したり、食事を一緒に摂ったりとかなりのアプローチをかける。（時谷も満更でもない態度を取っていた）

髪は黒で腰まであるロングヘアーのストレート

瞳の色は黒色

使用するデッキは「ライトロードデッキ」

彼女も精霊が見えており彼女の精霊は「ライトロード・エンジェル・ケルビム」で、「姫様」と呼ばれている。（ゼラートもそれに習い「姫」と呼んでいる。）

彼女の実家は、世界有数の財閥で彼女は三女にあたるが、家の事は周囲には隠している。（彼女は自然な学校生活を望んでいる）

許婚がいたが、時谷の兄・時継のおかげで婚約を解消。時谷に逆プロポーズし、彼の婚約者になる。

光坂 進
こうさかすすむ

中等部から編入し、オベリスクブルーに所属する一年生、月一試験

で時谷と戦った生徒。

時谷とのデュエルを経て友人になり、時谷のブルー昇格後は同室となる。

髪は青色で前髪が長く目元が隠れているが瞳の色は黒色

口数があり多くないが、自分の意思ははっきり伝えるほう

デッキは炎・水・風・地の各霊使いと属性ごとに構成されたデッキを使用する。

性格上、友達が少なく、時谷や十代達のことをとても大事にしている、馬鹿にされたり、けなされたりすると静かに怒る。

カードは昔から同じカードを使っているため、少しイラスト等がかすれている（裏面は不正と取られないように貼り替えている）

オリキャラ設定（後書き）

どうも！！

制裁デュエルもあるというのにこんなことをして・・・しかし、やっておきたかったんです！

許してください！！

時継さんやそのほかのオリジナルキャラに関してはまた後日・・・
といっても準レギュラーみたいな人しか載せませんが・・・
おかしな点があればご指摘下さい。

ではまた次回！！

TURN 10 (前書き)

今回は制裁デュエルです！
作者的にはいい感じになったのではないかと・・・

TURN 10

Turn10 《制裁デュエル、大天使^{ゼラート}VS 堕天使^{ゼラート}!》

カイザー・丸藤亮とのデュエルから数日、ついに時谷達の制裁デュエルの日になった・・・

十代と翔の二人は、迷宮兄弟のコンビネーションに苦戦しながらも、最後は翔がパワーボンドを使用し勝利をおさめ、退学取り消しが決まった。

そして、時谷の番になる

「それでゝは! 続いてのデュエルをはじめマゝスノ!! セニョール時谷! 前に出るゝノ!!」

「はい・・・」

呼ばれて決闘場に上がる

「対戦相手ゝはこの人ナノゝネ!」

クロノスが呼ぶと、一人の男性が歩いてくる

「始めまして、水瀬^{みなせ} 御門^{みかど}と言います。よろしく」

「水瀬・・・御門・・・?」

「この人ゝも、伝説のデュエリストゝとデュエルしたことゝが、あ
るのでゝス!!」

クロノスがそう紹介する

「伝説のデュエリストってやっぱり遊戯さんですか？」
「いや・・・私が戦ったのは城之内克也君だよ・・・」
「城之内さん!？」

時谷もよく知っている人物の名前が出る

「ああ、彼の運の強さには驚かされたけどね・・・」
「確かに・・・」

おそらく、彼も時の魔術師の効果を成功させられたのだろう

「それでゝは、始めるノゝネ!!」

クロノスの合図に構える二人

「「デュエル!!」」

時谷	LP	4000
御門	LP	4000

「先攻は、セニョール時谷ナノゝネ!!」

「それじゃ、俺のターン、ドロー! 終末の騎士を攻撃表示で召喚!」

終末の騎士	攻撃力	1400
-------	-----	------

「終末の騎士の効果! 召喚されたとき、デッキから闇属性モンスターを一体墓地に送る! 俺はネクロ・ガードナーを墓地へ! カードを二枚セットして、ターンエンド!!」

時谷	LP	4000
----	----	------

場 終末の騎士 攻撃 1400

伏せ二枚

手札三枚

「私のターン、ドロロー！私は、創造の代行者 ヴィーナスを召喚！」

翼の生えた天使が召喚される

創造の代行者 ヴィーナス 攻撃力 1600

「ヴィーナスの効果を発動！ライフを500支払い、ホーリーシャイン・ボール神聖なる球体を特殊召喚する！」

聖なる輝きを放つ球体が召喚される

神聖なる球体 守備力 500

御門 LP 4000 ↓ 3500

「そしてバトル！ヴィーナスで終末の騎士を攻撃！」

ヴィーナスの周りにある三つの玉から光が一斉照射され、終末の騎士を飲み込み破壊する

「ぐー！」

時谷 LP 4000 ↓ 3800

「カードを一枚セットし、ターンエンド！」

御門 LP 3500

場 創造の代行者 ヴィーナス 攻撃 1600

神聖なる球体 守備 500

伏せ一枚

手札四枚

「俺のターン！ドロー！！（相手は天使デッキ・・・なら！）俺は
ダーク・ヴァルキュリアを召喚！」

黒い天使が召喚される

ダーク・ヴァルキュリア 攻撃力 1800

「ほう・・・」

「バトル！ダーク・ヴァルキュリアでヴィーナスを攻撃！」

黒い光でヴィーナスを破壊するヴァルキュリア

「くっ・・・！」

御門 LP 3500 ↓ 3300

「ターンエンド！」

時谷 LP 3800

場 ダーク・ヴァルキュリア 攻撃 1800

伏せ二枚

手札三枚

「私のターン、ドロー！ならば私は、神聖なる球体を生贄に、
ルナイト エンジェ 天空

騎士パーシアスを召喚！」

白い翼を纏った人馬が召喚される

天空騎士パーシアス 攻撃力 1900

「バトル！パーシアスでダーク・ヴァルキュリアを攻撃！」

パーシアスが剣でヴァルキュリアを攻撃しようとするが

「墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！墓地から除外して、攻撃を一度無効にする！」

幻影が攻撃を弾く

「なかなかやるね・・・ターンエンド！」

御門 LP 3300

場 天空騎士パーシアス 攻撃 1900

伏せ一枚

手札四枚

「俺のターン、ドロー！ダーク・ヴァルキュリアを生贄に、ダーク・パーシアスを召喚！」

時谷の闇の天使が舞い降りる

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900

「闇属性の天使か・・・」

「『目には目を』ってね！ダーク・パーシアスの効果！墓地の闇属性モンスターの数×100ポイント攻撃力をアップさせる！俺の墓地の闇属性モンスターは二体！よって200ポイント攻撃力をアップさせる！」

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900 ↓ 2100

「バトル！ダーク・パーシアスで天空騎士パーシアスを攻撃！！」

黒い剣で相手のパーシアスを貫く

「くう！！」

御門 LP 3300 ↓ 3100

「更に、ダーク・パーシアスの効果発動！戦闘で相手のモンスターを破壊したとき、墓地の闇属性モンスターを除外することで一枚ドロイーで出来る！！終末の騎士を除外して、一枚ドロイー！そして、墓地の闇属性モンスターが減ったことで、ダーク・パーシアスの攻撃力も下がる」

ダーク・パーシアス 攻撃力 2100 ↓ 2000

「カードを一枚セット、ターンエンド！」

時谷 LP 3800

場 ダーク・パーシアス 攻撃力 2000

伏せ三枚

手札三枚

「私のターン、ドロー！手札から天空の使者ゼラディアスの効果を発動！このカードを手札から墓地に送ることで、デッキからフィールド魔法『天空の聖域』を手札に加える」

カードを墓地に送り、デッキからカードを引き抜く御門

「そして、フィールド魔法『天空の聖域』を発動！」

辺りが神々しい光に包まれ、御門の後ろに巨大な神殿が現れる

「天空の聖域がある限り、天使族モンスターが戦闘によって発生する天使族モンスターのコントローラーが受ける戦闘ダメージはゼロになる」

「だが、それはこっちも同じはずです」

ダーク・パーシアスも闇属性とはいえ天使族、時谷へのダメージも発生しない

「もちろん、判っているとも。この場合、天空の聖域の効果自体は関係ないのさ、このカードが存在することに意味がある！私は奇跡の代行者 ジュピターを召喚！」

筋骨隆々とした色黒の天使が召喚される

奇跡の代行者 ジュピター 攻撃力 1800

「ジュピターの効果発動！1ターンに1度、自分の墓地の『代行者』と名の付くモンスター一体を除外し、場の光属性・天使族モンスターの攻撃力を800ポイントアップさせる！私は墓地の創造の代行者 ヴィーナスを除外！ジュピターの攻撃力を800ポイントアップ

プさせる！」

奇跡の代行者 ジュピター 攻撃力 1800 ↓ 2600

「レベル4で2600!？」

「まだ終わらないよ?更にジュピターは天空の聖域があるとき、手札の天使族モンスターを捨てることで、除外されている自分の光属性・天使族モンスターを特殊召喚できる!手札の裁きの代行者 サターンを捨て、除外されているヴィーナスを特殊召喚!!」

再び召喚されるヴィーナス

創造の代行者 ヴィーナス 攻撃力 1600

「二体目・・・」

「さあ、バトルだ!ジュピターでダーク・パーシアスを攻撃!!」

手のひらに光を集め、そのままパーシアスに押し付け破壊するジュピター

「天空の聖域の効果により、俺への戦闘ダメージはゼロ・・・」

「だが、ダイレクトアタックは受けることになるよ?ヴィーナスでダイレクトアタック!」

ヴィーナスが一斉照射を行う

「手札からクリボーの効果発動!手札から捨てることで戦闘ダメージをゼロにする!」

複数のクリボーが時谷の前に現れ、爆発し攻撃を防ぐ

「防いだか・・・エンドフェイズにジュピターの攻撃力が元に戻る。
ターンエンドだ」

奇跡の代行者 ジュピター 攻撃力 2600 ↓ 1800

御門 LP 3100

場 奇跡の代行者 ジュピター 攻撃 1800

創造の代行者 ヴィーナス 攻撃 1600

天空の聖域 伏せ一枚
手札二枚

「俺のターン、ドロー！墓地の闇属性モンスターが三体のとき、
ーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚！」

黒色の龍が召喚されるが

「残念だけど、させないよ。カウンター罠^{トラップ}『神の警告』！ライフを
2000払い、相手モンスターの特殊召喚を無効にする！」

雷が落ち、破壊されるダーク・アームド

御門 LP 3100 ↓ 1100

「何!？」

「ただだよ、カウンター罠の発動に成功したことにより、場のモン
スターを全て生贄にすることで、裁きを下す者一ボルテニスを特殊
召喚する！」

ジュピターとヴィーナスを光が包み、その中から新たな天使が現れる

裁きを下す者ーボルテニス 攻撃力 2800

「ダーク・アームドを止めて、更なる強力モンスターを召喚したか・
・」

「さすが・・・伝説のデュエリストと・・・戦っただけのことはある・・・」

三沢と進が御門の強さに驚いている

「でも、時谷だって伝説のデュエリストと戦ったことがあるんだ！
こんなんじゃない負けないうぜ！！」

「そうだよね！！」

「キバレーー！時谷ー！！」

十代、実由、隼人が時谷を応援する

「ボルテニスの効果！この方法で特殊召喚に成功したとき、生贄にした天使族モンスターの数だけ、相手の場のカードを破壊する！君の場の伏せカードの内二枚を破壊する！！」

二枚のカードが破壊される。破壊されたのは異次元からの帰還、リ
ビングデットの呼び声

「くそ！！ターンエンド！」

時谷 LP 3800

場 モンスター無し

伏せ一枚

手札三枚

「私のターン、ドロー！バトル！ボルテニスで、ダイレクトアタック！！」

雷を時谷に向かって放つボルテニス。雷が時谷を飲み込み、煙が立ち込める

「ん？・・・な！？」

煙が晴れ、時谷の姿が現れると、時谷の場に一体の振り子のようなモンスターがいた

「・・・バトルフェーダーの効果、相手の直接攻撃宣言時、このカードを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる・・・」

バトルフェーダー 守備力 0

「そう来なくてはね・・・ターンエンド！」

御門 LP 1100

場 裁きを下す者ーボルテニス 攻撃 2800

天空の聖域 伏せ無し

手札二枚

「俺のターン、ドロー！！」

ドローしたカードを見る時谷

(これは!?!?!?!面白いことになってきたな……)

小さく笑う時谷

(なにを引いたんだ?)

御門も時谷の様子に気付き首を傾げる

「……俺は、これでターンエンドです……」
「なに？」

突然のエンド宣言に御門も驚く

(ただのハツタリだったのか……? ……まあいい……)

時谷 LP 3500

場 バトルフェーダー 守備 0

伏せ一枚

手札三枚

「私のターン、ドロ―! バトル! ボルテニスでバトルフェーダーを攻撃!」

ボルテニスがバトルフェーダーに雷を飛ばす

「カウンター罠発動! 『攻撃の無力化』! 相手の攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了させる!」

雷が渦に吸い込まれる

「1度凌いだ程度で・・・」

「まだですよ!!」

御門の言葉を遮り続ける時谷

「カウンター罠の発動に成功したことにより、俺の場の闇属性モンスター一体を生贄に、ダーク・ボルテニスを特殊召喚!!」

バトルフェーダーに黒色の雷が落ち、その中から黒く染まったボルテニスが現れる

「またしても闇の天使・・・!!」

「言ったでしょ?『目には目を』・・・て!!ダーク・ボルテニスの効果!この方法で特殊召喚されたとき、場のカード一枚を破壊する!俺が指定するのは、裁きを下す者ーボルテニス!!」

黒い雷に撃たれ、消滅する御門のボルテニス

「どうです?これが俺の闇属性モンスターのコンボです!」

「ふっ・・・なかなか楽しませてくれるね・・・面白い少年だ・・・」

御門も時谷の強さに少し嬉しそうに答える

「ならば、次なるモンスターを召喚しよう・・・ゼラの戦士を召喚す!!」

御門の場に以前モースが使っていたゼラの戦士が召喚される

ゼラの戦士 攻撃力 1600

「このパターン前にもあったな・・・」

時谷もこの後に出てくるモンスターに気付いている

「フィールドに天空の聖域があるとき、このモンスターを生贄にして、手札から大天使ゼラートを特殊召喚する！！」

ゼラが光に包まれ、大きな翼を持つ天使になる

その姿は、時谷の精霊、堕天使ゼラートを白くしたようなものである

大天使ゼラート 攻撃力 2800

「ゼラート・・・！？」

「時谷君のと同じ！？」

十代たちも驚いている

「大天使ゼラートの効果！天空の聖域があるとき、手札の光属性モンスター、力の代行者 マーズを捨て、相手の場のモンスターを全て破壊する！『聖なる光芒』！！」

ゼラートから白い光が放たれ、ダーク・ボルテニスを破壊する

「バトルフェイズは終了している、ターンエンドだ・・・さあ、このモンスターを倒せるかな？」

何気にモースと似たようなことを言っている御門

御門 LP 1100

場 大天使ゼラート 攻撃 2800

天空の聖域

手札無し

「俺のターン!!!ドロー!!!・・・御門さん・・・」

ドローしたカードを見た後御門に話しかける時谷

「なんだい?」

「このデュエル、すごいと思いませんか?・・・光と闇の天使が、次々と出てきて・・・」

「ああ、偶然にしては・・・出来すぎているね・・・」

互いに少し笑っている

「俺は・・・天空の聖域が出たときから・・・そのモンスター・・・大天使ゼラートの可能性は考えてました・・・」

「そうだろうね・・・」

「だから・・・こいつを引いたとき、もっと面白いって思いました」

ドローしたカードをさしながら言う

「行きます!!!魔法カード『死者蘇生』!墓地のダーク・ボルテニスを特殊召喚!」

光と共に舞い戻るボルテニス

ダーク・ボルテニス 攻撃力 2800

「同じ攻撃力・・・」

「いいえ、これからです！ダーク・ボルテニスを生贄に、墮天使ゼラートを召喚！！」

《はあ！！》

ボルテニスを黒い光が包み、その中から赤い翼の墮天使、時谷の相棒が召喚される

墮天使ゼラート 攻撃力 2800

「墮天使・・・ゼラート・・・」

大天使、墮天使両方のゼラートが向かい合う

「墮天使ゼラートは俺の墓地の闇属性モンスターが4種類以上のとき、闇属性モンスター一体を二体分の生贄にできる・・・これが、俺の最後の闇の天使です・・・ゼラートの効果発動！手札の闇属性モンスター、闇の仮面を捨て、相手の場のモンスターをすべて破壊する！！『闇の光芒』！！」

《うおおおおおお！！》

黒い光に包まれ、破壊される大天使ゼラート

「くっ！！私のゼラートが・・・！！」

「これで、終わりです！ゼラートで、ダイレクトアタック！！『闇の波動』！！」

《はあ！！》

「ぐああああ！！」

黒い衝撃波に吹き飛ばされる御門

御門 LP 1100 ↓ 0

「しょ、しょんナ〜!？またして〜モ、負けてしまうなん〜テ、信じられない〜ノ!!」

「やはり、彼もいいデュエリストになるだろうね？クロノス君？」

ショックを受けているクロノスの後ろで嬉しそうにしている校長

「北上時谷君、遊城十代君、丸藤翔君。君達の退学処分も取り消そう」

「「「ありがとうございます!」」」

校長に頭を下げる時谷達

「しかし、立ち入り禁止区域に入ったことは別問題、罰として君達には反省レポートを書いてもらうよ?」

「「え〜!!」」

校長の言葉に落ち込む十代と翔

「ま、しょうがないだろ?それは・・・退学に比べりゃマシだろ?」

時谷が二人を諭す

「がんばって終わらせよう、アニキ!」

「う〜!!」

いまだに渋っている十代を連れて行く翔

「時谷君!!」

「時谷・・・よかった・・・」

「おう、ありがとな、二人とも・・・?・・・アレ?」

駆け寄ってくる実由と進に礼を言いながら辺りを見渡す

「どうしたの?」

「御門さんは?」

「それなら・・・さっき出て行ったよ・・・?」

「本当か!?」

「う・・・うん・・・」

驚きながら頷く進、時谷はそのまま外に向かって走り出した

御門はアカデミアの出口にいた

「ふむ、負けてしまったか・・・しかし・・・」

「御門さん!!」

「ん?」

後ろから声がかかり振り返ると時谷が立っていた

「君は・・・北上君だったかな?」

「はい・・・もう行くんですか?」

「ああ、仕事があるんだ・・・早めに帰らなくてはね・・・」

「そうですか・・・」

少し残念そうな時谷

「まあ、君とのデュエル・・・面白かったよ・・・負けたのにこんなに清々しいのは、あの城之内克也君と戦ったとき以来かもしれない・・・いつか、また戦いものだね・・・」

そう言いながら、手を差し出す御門。時谷もその手を握る

「君はいいデュエリストになるだろう・・・がんばりたまえ？」

「はい！ありがとうございます！！」

御門に頭を下げる時谷

御門もそれを見、少し笑いながら立ち去っていく

時谷は御門が見えなくなるまで、そこから動かなかった

TURN 10 (後書き)

どうも!!

長らくお待たせしまして、申し訳ありません!!

今回の御門さんのデッキは天空の聖域を軸に代行者で組んでみました。

『時谷君のモンスターと対をなすモンスターのデッキ』をテーマに組んだものです。

代行者デッキは面白いですね・・・代行者のマスターも出そうか考えたんですが、入れるとそれがメインのデッキになりそうだったので、代行者軸で組んでみました。

最後のところで、死者蘇生を使ってダーク・ヴァルキュリアを出し、デュアル召喚で効果破壊・・・でもいいんですが、そこは演出ということで・・・

御門さんはおそらく今回だけの登場になります・・・名前は何回か出るかもしれませんが・・・

次回はまた『横取りデュエル』を発動します!しかも、時谷君ではないキャラがやります!お楽しみに!!

ではまた次回!!

TURN 11 (前書き)

遅れてしまい申し訳ありません!!

今回は時谷君以外のキャラが「横取りデュエル」をします!!

TURN 11

Turn 11 《万丈目VS進、恨みの炎と逆巻く水》

「おい！ドリンクとマッサージ！」

教室で、ふんぞり返りながら命令をだす万丈目

「おい・・・あいつ何のつもりだ・・・？」

「さあ・・・？」

そんな万丈目を尻目にひそひそと話しているほかのオベリスクブル
ーの生徒達

「おい！なにやってる！ジュースとマッサージだ！！」

「あの・・・万丈目君・・・」

「何だ！？」

小さく呼ばれ怒りながら振り向く万丈目

そこには、言い難そうにしている進がいた

「そこ・・・僕の席なんだけど・・・？」

「何！？何を言っている！！この席には俺の名前が・・・ない！？」

万丈目が机を指差しながら言うが、そこには「光坂」と書かれていた

「君の席は・・・あそこなんだけど・・・」

そう言って席を指差す進

そこは教室の端のほうだった

「あんな隅っこだと！？クロノス教諭！！これはどういうことですか！？どうして僕があんな席に！！」

入ってきたクロノスに抗議する万丈目

「それ／＼はセニョールがオシリスレッドの生徒に負けたからデウス！」

嫌な笑みを浮かべながら答えるクロノス。何故か左目に痣ができている

「それだけではないノ／＼ネ！セニョールにはそのセニョール進と追試デュエルをしてもらうノ／＼ネ！負け／＼ば、ラーイエローに降格なノ／＼ネ！・・・さ、席に着くノ／＼ネ」

もう用は無いといわんばかりに授業を始めるクロノス

「くっそおおおお！！！」

「ま、万丈目君・・・？」

悔しがりながら教室を飛び出す万丈目。進以外の生徒がその様子に大笑いしていた

「・・・・・・・・」

それを見た進は苦い顔をした

「で・・・万丈目とデュエルすることになったのか？」

「うん・・・僕は負けてもペナルティは・・・無いんだけどね・・・」

「それって・・・ひどくないかな・・・万丈目君だけが損をしてる・・・」

寮に帰る途中、進から万丈目とデュエルすることを聞いた時谷と実由現在、時谷と進の部屋でデッキの調整をしている

「よし、こんなもんか？」

「うん・・・ありがとう・・・二人とも・・・助かったよ」

「気にしないで？楽しかったし・・・」

「そうだぞ？友達だしな」

「うん・・・」

時谷達の言葉に嬉しくなる進

「あ、もう帰らなきゃ」

「送ってくよ・・・」

「じゃあ、僕も入り口まで・・・」

立ち上がる実由に付いていく時谷と進。デッキを机の上に置いていたまま・・・

そして、時谷達が出て行くのを影で一つの影が見ており、時谷達の部屋に入って行った

「あれ・・・？デッキは・・・？」

時谷が実由を女子寮に送っていくのを見送った後、先に部屋に戻った進は出て行く前にはあったはずのデッキが無いのに気付き慌てて

探し出した

「ない・・・！ない・・・！！」

しかし、何処を探しても見つからない

戻ってきた時谷も一緒に探したが見つからなかった。

そして夜が明けた。

「ん？あれは・・・十代？」

「どうしたんだろう・・・？あんなに慌てて・・・」

「行ってみよう？」

朝早く、慌てて港に向かっていく十代と翔と隼人、そしてトメさんを見かけ付いて行く（少し寝不足の）時谷達

「こ、これは・・・！？」

「カード！？」

栈橋にたどり着くと、海にカードが投げ捨てられていた

「霊使いに・・・憑依装着！？」

「それじゃ・・・このカード達って・・・！？」

「・・・」

カードたちを見てその持ち主に気付いた全員が進を見る。

進は無表情のまま立っており、静かに海に飛び込んだ

「おい！！進！？」

「進君！？」

一心不乱にカードを集めている進

「大切なカード・・・だから・・・!!」

「進・・・よし!十代!!」

「おう!!」

上着を脱ぎ十代と共に海に飛び込む時谷

「時谷君!？」

「アニキ!？」

「二人とも・・・」

「手伝うよ・・・」

「ああ、カードがかわいそうだもんな!!」

「・・・ありがとう」

二人に礼を言い、カードを集めるのを再開する進
全てのカードを集め、部屋で乾かし、デュエル場に向かう

デュエル場にて

大幅に遅刻して到着した時谷達

「遅いノゝネ、セニョール進・・・ってどうしたノゝネ!？」

ずぶ濡れの進、時谷、十代を見て驚くクロノス

「・・・僕のカードが・・・海に捨てられてたんです・・・」

進が簡単に説明する

「誰かが、捨てたんだと思います・・・」

そう言いながら万丈目を睨む時谷

「なんだ？俺がやったってのか？言いがかりとはな・・・」

「本当に言いがかりかしら？」

万丈目の言葉遮るようにした声に振り向く

「明日香・・・」

「亮さん・・・」

そこには、明日香とカイザー亮が立っていた

「私、見てしまったの・・・万丈目君がカードを海に捨てるのを・・・」

「なに！？」

時谷達が驚く、万丈目は苦い顔をしていた

「やっぱり気になって、事情を聞きに来たけど・・・」

「汚いぞ万丈目！！」

「黙れ！自分のカードを捨てたんだ。それとも、そのカードに名前でも書いてあったのか？」

十代にあくまで強気に答える万丈目

「俺を泥棒呼ばわりした責任は取ってもらうぞ？クロノス教諭、どうでしょう？このデュエルで負けたほうが退学というのは？」

「むちゃくちゃだ！進はデッキが・・・」

「・・・いいよ・・・受けるよ・・・そのデュエル・・・」

十代を制しながら答える進

「僕だけ・・・何のペナルティも無くて・・・不公平だと思ったし・・・これで・・・五分五分・・・」

「だけど、進君！デッキが・・・」

「大丈夫・・・デッキなら・・・あるから・・・」

そう言いながらかばんから四つのデッキケースを取り出す

「あのデッキは・・・このデュエル用に組んだデッキだった・・・それがなくなったから・・・いつものデッキで・・・相手をする・・・！」

静かに、そしてはつきりと宣言する進

「さあ・・・どのデッキで・・・戦おうか・・・？・・・地・・・水・・・炎・・・風・・・四つの中から・・・選んであげる・・・」

「四つだと！？そんなこけおどしなど、この俺の恨みの炎で焼き尽くしてくれる！！」

デッキを取り出しほえる万丈目

「・・・・・・・・決まった・・・・・・・・このデッキで・・・相手をする・・・・・・・・」

ケースを一つ選びセットし、デュエル場に上がり構える進

「こけおどしかどうか・・・すぐに分かるよ・・・万丈目君・・・」

「ちっ！！来い、光坂！！」

「「デュエル！！」」

万丈目 LP 4000
進 LP 4000

「俺のターン！！俺は地獄戦士^{ヘルソルジャー}を攻撃表示で召喚！！」

黒い鎧を纏い剣と盾を持ったモンスターが召喚される

地獄戦士 攻撃力 1200

「カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

万丈目 LP 4000

場 地獄戦士

伏せ一枚

手札四枚

「僕のターン・・・ドロ・・・！」

「進のデッキは・・・！？」

「風・・・水・・・？」

十代たちも進がどのデッキを使うのかを見ている

「僕は・・・グリズリーマザーを召喚・・・！」

青色の熊が召喚される

グリーズリーマザー 攻撃力 1400

「水か!!」

「それにリクルーター……」

「バトル……グリーズリーマザーで……地獄戦士を……攻撃!
!」

大きな爪で相手を破壊するグリーズリーマザー

「くう!!」

万丈目 LP 4000 ↓ 3800

「だが、この瞬間地獄戦士の効果発動!自分が受けたダメージを相
手にも与える!!」

「……………」

進 LP 4000 ↓ 3800

「カードを二枚セット……ターンエンド……」

進 LP 3800

場 グリーズリーマザー 攻撃 1400

伏せ二枚

手札三枚

「俺のターン！！ドロー！！俺は買カード『リビングデッドの呼び声』発動！墓地のモンスターを特殊召喚する！俺が呼び出すのは・
・地獄戦士！！」

再び現れる地獄戦士

地獄戦士 攻撃力 1200

「更に手札から速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動！！自分の場に攻撃力1500以下のモンスターが特殊召喚されたとき、互いの場のモンスターと同じ名前のモンスターをデッキ・手札・墓地から全て特殊召喚する！！現れろ！地獄戦士！！」

万丈目の場に更に二体の地獄戦士が現れる

地獄戦士B 攻撃力 1200

地獄戦士C 攻撃力 1200

「・・・なら・・・僕もグリズリーマザーを特殊召喚・・・」

進の場にもグリズリーマザーが召喚される

グリズリーマザーB 攻撃力 1400

グリズリーマザーC 攻撃力 1400

「いくら召喚しても・・・攻撃力は地獄戦士のほうが下なのに・・・」

「なにか、考えがあるんだろう・・・」

明日香の横で見ている亮がそう言う

カイザーの言葉を聞いていた万丈目は

「当たり前だカイザー！オベリスクブルーであなたのあとを継ぐのはこの俺だ！！俺は装備魔法『ヘル・アライアンス』を発動！！装備したモンスターと同じ名前のモンスターの一体につき攻撃力を800ポイントアップ！！装備した地獄戦士の攻撃力は・・・3600！」

咆哮と共に巨大化する地獄戦士A

地獄戦士A 攻撃力 1200 ↓ 3600

「行け！！地獄戦士！！！」

万丈目の命令と共に一体のグリズリーマザーを切り落とす地獄戦士A

「くっ・・・！！！」

衝撃に耐える進

進 LP 3800 ↓ 1600

「進！！！」

「まずい！！これで進君のライフは1600！逆転しちゃった！！！」

十代や翔も焦る

「・・・グリズリーマザーのモンスター効果・・・戦闘で破壊されたとき・・・デッキから・・・攻撃力1500以下の・・・水属性モンスターを・・・攻撃表示で特殊召喚する・・・僕は・・・リチュア・アビスを特殊召喚・・・!!」

鯨の頭をした魚人のモンスターが召喚される

リチュア・アビス 攻撃力 800

「『リチュア』だと!?!」

モンスターを見た亮が驚いている

「どんなカードなの?」

「ああ、あのカード達はな・・・」

知らない翔達に解説を始める時谷

「そんな雑魚モンスターに何ができる!!」

「・・・リチュア・アビスのモンスター効果・・・召喚、反転召喚、特殊召喚されたとき・・・デッキからこのモンスター以外の・・・

『リチュア』と名の付くモンスター一体を・・・手札に加える・・・僕はシャドウ・リチュアを選択して・・・手札に加える」

カードを万丈目に見せ、手札に加える進

「それがどうした!! 二体目の地獄戦士で雑魚に攻撃だ!! 行け!

「！」

リチュア・アビスに切りかかる地獄戦士

「永続罨・・・発動・・・！『忘却の海底神殿』・・・このカードは・・・場にある限り『海』として扱う・・・そして・・・1ターンに1度・・・自分の場の魚族、海竜族、水族モンスターを・・・一体ゲームから除外する・・・！リチュア・アビスを除外・・・！」

足元にできた水溜りに飛び込み、攻撃をかわすリチュア・アビス

「ち！！ターンエンド！！」

万丈目 LP 3600

場 地獄戦士 攻撃 3600

地獄戦士 攻撃 1200

地獄戦士 攻撃 1200

リビングデッドの呼び声 伏せ無

手札三枚

「僕のターン・・・ドロー！！手札から・・・水霊使いエリアを・・・召喚・・・！！」

水に包まれた魔道師の少女が現れる

水霊使いエリア 攻撃力 500

「ふざけてるのか！！さっきから雑魚ばかり召喚しやがって！！」

進の召喚するモンスターを罵る万丈目

「……少し……静かにしてくれるかな……？……集中できない……」

万丈目に向かって静かに言う進

「進の奴……どうしたんだ……？」

「あいつ……怒ってんな……」

「そうみたいだね……」

進の様子に首を傾げる十代とその意味に気付いた時谷と実由

時谷の言うとおり、進は怒っていた

自分のカード達を捨て、そして、大切なカード達を馬鹿にした万丈目に対して……

「エリアの……効果発動……！！場の水属性モンスター一体とエリアを生贄にして……デッキから……憑依装着一エリアを……特殊召喚……！！！」

グリズリーマザーが光となりエリアを包み、エリアの姿が少女から少しだけ成長した姿に変わる

憑依装着一エリア 攻撃力 1850

「何！？」

「これが……君の馬鹿にした……雑魚モンスターの……力だ……」

・・!! バトル!! グリズリーマザーで・・・地獄戦士を攻撃!!」

グリズリーマザーの爪で破壊される地獄戦士B

「くっ!! 馬鹿が! 俺が受けたダメージは貴様も受けるんだぞ!!」

万丈目 LP 3600 ↓ 3400

進 LP 1600 ↓ 1400

「更に・・・エリアでもう一体の地獄戦士に・・・攻撃!!」

杖から大量の水を出し、その濁流に飲み込まれる地獄戦士C

「くう!! ダメージ全てお前に跳ね返るんだぞ!!」

万丈目 LP 3400 ↓ 2850

進 LP 1400 ↓ 850

「何度やっても自分のライフが削られてくだけだよ・・・」

「いや・・・これでいい!!」

「え?」

「ヘル・アライアンスは他のモンスターがいなきや、攻撃力が上がらない。今の地獄戦士の攻撃力は一体分しか上がっていない」

地獄戦士Aが少し小さくなっていく

地獄戦士A 攻撃力 3600 ↓ 2000

「エンドフェイズ・・・忘却の海底神殿の効果で除外されていた・・・リチュア・アビスを再び特殊召喚・・・更に・・・リチュア・アビスが・・・特殊召喚されたことにより・・・デッキからもう一枚の・・・シャドウ・リチュアを手札に加え・・・ターンエンド・・・」

進 LP 850

場 グリズリーマザー 攻撃 1400

憑依装着―エリア 攻撃 1850

リチュア・アビス 攻撃 800

忘却の海底神殿 伏せ一枚

手札五枚

「光坂！そんな小細工は俺には通用しない！俺は地獄戦士と手札全てを生贄に炎獄魔人ヘル・バーナーを召喚する！！」

地獄戦士が炎に包まれ、その中から六本足の赤いモンスターが現れる

炎獄魔人ヘル・バーナー 攻撃力 2800

「はっはっはっは！！どうする光坂！？このヘル・バーナーは相手の場のモンスター一体につき200ポイント攻撃力をアップする！！貴様の場のモンスターは三体！よって、ヘル・バーナーの攻撃力は600ポイントアップ！！」

炎獄魔人ヘル・バーナー 攻撃力 2800 ↓ 3400

「3400じゃ、どのモンスターを使っても、進のライフは0！！」
「進・・・！！」

十代と時谷が固唾を吞んで見守っている

「行け！恨みの炎に焼かれ、この学園から消え去れ！光坂！！」

ヘル・バーナーの炎がグリズリーマザーに向かっていく

リチュア・アビスは回避されると思っていたためこっちに攻撃してきたのだ

グリズリーマザーが破壊され、残った炎が進に向かって飛んでいく

「………罨発動……『トルネードウォール竜巻海流壁』……場に『海』があるとき……戦闘ダメージを……0にする……」

進の前に竜巻が発生し、炎を防ぐ

「何！？」

「………忘れた……？『忘却の海底神殿』は………場にあるとき……『海』として扱う………そう言ったよね……？」

「くっ！！！」

「更に……グリズリーマザーの効果発動……デッキから……スター・ボーイを特殊召喚……」

ヒトデに触手の生えたようなモンスターが召喚される

スター・ボーイ 攻撃力 550

「スター・ボーイが場にいるとき………全ての水属性モンスターの攻撃力を……500ポイントアップさせ………全ての炎属性モンスター
の攻撃力を……400ポイントダウンさせる……」

「なんだと！？」

スター・ボーイ 攻撃力 550 ↓ 1050
憑依装着一エリア 攻撃力 1850 ↓ 2350
リチュア・アビス 攻撃力 800 ↓ 1300
炎獄魔人ヘル・バーナー 攻撃力 3400 ↓ 3000

「くそ！！ターンエンド！！」

手札も無いためエンドするしかない

万丈目 LP 2850

場 炎獄魔人ヘル・バーナー 攻撃力 3000

伏せ無

手札無し

「僕のターン……ドロー！！手札から……シャドウ・リチュアの効果を……発動！！手札から捨てることで……『リチュア』と名の付く……儀式魔法をデッキから……手札に加える……！！僕が選ぶのは……『リチュアの儀水鏡』……！」

カードを見せる進

「そして、儀式魔法……『リチュアの儀水鏡』を……発動……！！手札と場から……儀式召喚するモンスターと……同じレベルになるように生贄にする……このとき……手札にあるもう一枚の……シャドウ・リチュアの効果……水属性・儀式モンスターの生贄を……このカード一枚で代用できる……！」

「何!?!」

「『リチュア』は儀式召喚に特化したデッキ。ありとあらゆる手段でデッキ、墓地からパーツをサーチし、儀式を成功させる……！」

時谷の解説

「僕は……これにより……召喚に必要なレベルが揃った……よって……手札から……イビリチュア・ソウルオーガを……儀式召喚……！！！」

黒いうろこの巨大な魚人が召喚される

イビリチュア・ソウルオーガ 攻撃力 2800

「スター・ボーイの効果により……攻撃力が……500ポイントアップ……」

イビリチュア・ソウルオーガ 攻撃力 2800 ↓ 3300

「だが！貴様の場にモンスターが増えたことにより、ヘル・バーナーの攻撃力もアップする……！」

炎獄魔人ヘル・バーナー 攻撃力 3000 ↓ 3400

「どうだ！？いくら召喚しようが、俺のモンスターは倒せない……！」
「……関係ないよ……そんなの……」

余裕の構えの万丈目に対し、更に余裕の構えの進

「ソウルオーガのモンスター効果・・・手札から・・・『リチュア』と名の付くモンスターを・・・手札から捨てて・・・相手の場の表側表示のカードを一枚・・・持ち主のデッキに戻す・・・!」
「なんだと!?!」

モンスターの効果を知り驚く万丈目

「手札から・・・リチュア・マーカーを捨てて・・・ヘル・バーナーを・・・デッキに戻す・・・!」

歪みながら消滅するヘル・バーナー

「そんな!?!」

「バトル・・・! ソウルオーガで・・・ダイレクトアタック・・・!?!」

腕を高らかに振り上げ、殴りかかるソウルオーガ

「うわあああああ!?!?!」

そのまま飛ばされる万丈目

万丈目 LP 2850 ↓ 0

「これで・・・終わり・・・君は・・・デュエリストとして・・・最低だよ・・・」

「くっ!! 貴様が偶然、水属性デッキを選んだから・・・」

「違うよ・・・」

万丈目の負け惜しみを遮る進

「偶然じゃない・・・君が行ったんだ・・・『炎属性のモンスターを使う』・・・って・・・」

「確かに・・・『恨みの炎』がどうか言ってたな・・・」

デュエル前の万丈目の言葉を思い出す時谷

「そして・・・海に捨てられてたカードは・・・間違いなく・・・僕のカード達・・・」

「何故分かる・・・!!」

「僕は・・・昔から同じカードを使ってる・・・だから少しだけ・・・カードのイラストが剥けているんだ・・・こんな風に・・・」

海に捨てられていたカードの内、一枚を見せる進

そのカードのイラスト部分が少しだけかすれている

「さすがに・・・裏面の汚れは・・・不正と思われるから・・・貼り代えているけど・・・こんなにかすれてるカード・・・そうはいから・・・」

カードを見ながら微笑み、そのまま万丈目を見る

「カードを大事にできない・・・ましてや盗むデュエリストなんかに・・・僕は負けない・・・!」

立ち去る進の言葉にうな垂れる万丈目

「進!」

「進君!!」

「皆・・・」

降りてきた進に駆け寄ってくる時谷達

「すごいな！進！！今度俺ともやろうぜ！！」

「うん・・・でも・・・それは・・・また今度・・・」

少しふらついている進を、支える時谷

「おい、大丈夫か・・・？」

「うん・・・少し・・・疲れちゃった・・・いっぱいしゃべったから・・・」

「あんなあ・・・」

疲れた理由に呆れ気味の時谷

「そんじゃま、帰るとするか・・・カード達、乾かさないとな？」

「うん・・・」

そのまま、時谷に担がれたまま寮に戻る進

時谷・進の部屋にて

「しかし、進があんなに怒るなんてびっくりだったな・・・」

「うん・・・カード達が捨てられてたのもそうだったんだけど・・・」

「けど・・・？」

「時谷や・・・鈴原さんと・・・一緒に創ったデッキだったから・・・でもあるんだ・・・少ない友達と一緒に創ったデッキ・・・だから・・・」

「そうか・・・ま、乾いたら改めてデッキにして、デュエルしてみようぜ！」

「うん・・・！」

進の交友関係が少ないことは知っている時谷だが、そこには触れず、いつもどおりに接している。

進も、そんな時谷の気遣いを分かっているが言わないようにしている

こうして、その日はふけていった・・・

TURN 11 (後書き)

どうも!!

というわけで、進君による「横取りデュエル」をお送りしました。
万丈目君の戦術はアニメ本編とまったく同じです

進君の水デッキは最新カードでもある『リチュア』を使ったデッキです。

『リチュア』は効果が面白いのでいいですね。
本来ならセンジュ及びマンジュ、ソニックバードを使ってパーツを集めますが、水オンリーで組んだのでそれらのカードを入れずに使っています。

霊使いと憑依装着はこのデッキのフェイバリットです!

『忘却の海底神殿』と『竜巻海流壁』のコンボはしっかり実現可能です(Wiki調べ)

進君の友達に対する思いはかなり厚いものです

進君のカード達のイラストがかすれているというのは遊戯さんの頃のデュエルモンスターズに出てきたアニメオリジナルのキャラ、ラフェールさんと同じ感じです。リアルだとスリーブに入れたりするんですが、この世界だとそんなものありませんからね・・・というか、濡れたカードがふやけないのはなんでなのでしょうか・・・? アニメで三沢君が見せたカードもすっかり乾いてました・・・材質が違うのかな・・・?

ここで、お知らせです

今回の話が何気に最後のプロットになってしまいまして・・・次の投稿にはかなりの時間が掛かると思います。

もう一方の小説のほうももうすぐプロット切れを起こすと思われるので・・・執筆のほうに専念するため、しばらくは投稿は行いません。

読者の方にはご迷惑をおかけしますが、今後ともよろしく願います。

ではまた次回！！

T U R N 1 2 (前書き)

お久しぶりです！

今回は一気に話を飛ばしてオリジナルです！

TURN 12

Turn12 《冬休み、鈴原家三姉妹》

万丈目と進のデュエルの次の日、万丈目が姿を消した
十代や明日香が探していたが、大徳寺によってデュエルアカデミア
を去ったことを聞いた

それを聞いた進も自分のせいだと落ち込んだが、時谷は

「あいつは自分で出した条件に従っただけ」

といって、進も複雑ながら頷いた

それから数日、アカデミアは冬休みに入り、帰省するもの、アカデ
ミアで過ごすもの、様々なものがある。

時谷、実由などは前者で、進、十代、翔、隼人などは後者となり、
時谷は実由と共に童実野町に帰っていった
昼過ぎに船に乗り、夕方ごろに童実野町に到着した

童実野埠頭にて

「ふー！着いたー！！」

「うん！！」

船を降り、荷物を置いて大きく伸びをする時谷

「実由はこのまま帰るのか？」

「うん・・・お父さん達と、ちゃんと話もしたいし・・・」

実由は力強く頷く

婚約のことについて家族としっかりと話し合い、自分の答えをはっきりと伝えるのだと話していた

「そっか・・・まあ、何かあれば連絡しろよ？これ、家の住所と電話番号」

時谷が紙を渡す

「うん!!」

実由も笑顔で受け取る

「お・・・来たみたいだな・・・」

そう言う一台の黒塗りの豪華な車がやってくる

「実由様・・・お帰りなさいませ・・・」

「ただいま・・・仙波^{せんば}さん・・・ご苦労様です・・・」

車から一人の初老の男性が降り、実由の前で恭しく頭を下げ、実由もそれに答える

「そちらの方は・・・？」

「前に言ったよね？・・・北上時谷君よ」

「初めまして・・・北上時谷です」

紹介され、頭を下げる時谷

「これはこれは・・・お嬢様のご実家で執事をしております・・・仙波と申します」

「お父さん達は・・・家に・・・？」

「はい・・・実由様がお帰りになるのをお待ちに・・・」

「そう・・・それじゃあ、行きましょう？」

「承知しました・・・では・・・」

そう言って、車の扉を開く仙波

「それじゃ、時谷君・・・また・・・」

「ああ・・・」

短く挨拶を交わし、車に乗り込む実由。仙波も一礼し、車に乗り込む時谷は車が見えなくなるまでその場に立って見送った

「・・・さて、俺達も行くか・・・ゼラート」

《ええ・・・参りましょうか・・・》

小さく呟き、家路につく時谷とゼラート

北上家の玄関にて

埠頭から数分、童実野町の高級住宅地にある一軒の屋敷が時谷の実家である

「ただいまー！」

「おお、帰ったか。時谷」

「ただいま・・・兄さん」

玄関をくぐると、兄の時継が出迎えた

「随分早いな・・・もう少し掛かるかと思ったが・・・」
「そう・・・？」

靴を脱ぎながら答える時谷

「実由さんも戻ったんだろう？」
「うん、埠頭で迎えが来て、そこで別れた・・・家の住所とか教えてあげど・・・いいよね？」
「当たり前だ・・・彼女はもう私の義妹いもうとなんだ、遠慮する必要はない」

笑いながら答える時継

「すぐに食事にしよう・・・着替えてくるといい」
「そうする・・・あ、兄さん！」
「ん？」
「食材、適当に残しといて・・・使うから・・・」
「ああ、了解だ」

時谷の言葉に頷く時継

この家には時谷と時継の二人で住んでおり家事も当然二人で行っているため、かなりの腕前である

「はぁ・・・相変わらずホコリがまったく無いな・・・」
《本当に・・・》

自室の部屋にある机を見ながら呟く時谷

時継は趣味が掃除で暇を見つけてはしているため、家のいたるところ

ろがピカピカなのである

時谷もそこそこ出来るのだが、掃除は時継に歩がある。その逆に料理は時谷の方が上なのだが・・・

「まあ、ありがたいから良いけど・・・着替えて台所行くか・・・」

手早く着替え、台所で料理を始める時谷

二人で遅い夕食を終え、後片付けも済み寛いでいるとき、時継が思い出したように話し出す

「そういえば、今度の土曜日に瀬人がまた大会を開くそうだ・・・」

「そうなの？」

「ああ、それでお前にも出場依頼が来てる」

そう言って、一枚のカードを出す

カードには海馬コーポレーションのロゴが入っていた

「出場者全員に配られる証明書だ」

「出てもいいの？」

「むしろ、あいつは強制するだろうな・・・」

時谷の問いに苦笑いする時継

海馬は時谷の実力を高くかっているため、こういうイベントにはほぼ強制的に参加させている

無論、こういう大会にも闇に染められたカードやデュエリストが出てくるため、時谷もほぼ確実に参加している

「一応、詳しい話するから金曜までに来いとさ」

「わかった・・・明日にでも・・・ん？」

返事を返そうとしたところに時谷の携帯に電話が入る

「実由からだ」

「席をはずそうか？」

「いや、別にいいよ・・・もしもし？」

席を立とうとした時継を止めながら電話に出る

『あ、時谷君？えっと・・・明日って時間あるかな？』

『どうかしたのか？』

『その・・・時谷君のことを話したら、お姉ちゃん達が連れてきなさいつて・・・それで・・・』

「なるほど・・・別に構わないよ」

『本当！？』

「ああ、何処で待ってればいい？」

『うん、住所は分かってるから、明日仙波さんと迎えに行くよ』

「分かった・・・待ってる」

『それと・・・デッキとデュエルディスクを用意していてね？』

「？　なんでだ？」

突然のことに首を傾げる時谷

『お願い！』

「ああ、わかった・・・」

何か必死にお願いしてくる実由に不思議に思いながら了承する時谷

『うん！それじゃ・・・お休みなさい・・・』

「ああ・・・お休み・・・」

そのまま電話を切る

「明日は実由の家に行くよ・・・瀬人さんのところへはまた今度で」

「まあ、それはお前の自由だからな」

「それじゃ、俺はもう寝るよ・・・お休み」

「ああ・・・」

部屋に戻る時谷、時継も見送る

次の日

「き・・・緊張する・・・」

「落ち着け時谷。深呼吸だ」

実由を待っている間、時谷は珍しく緊張していた

「考えてみたら、向こうのご家族にご挨拶になるんだから・・・私も行ったほうがいいのか・・・？」

「うう・・・」

本気で考え込む時継とさらに唸る時谷

《若・・・いらしたようです・・・》

「え？」

ゼラートがため息混じりに教えると、昨日みた黒塗りの車が向かってきた

「ほう・・・さすが鈴原財閥・・・いい車を持っている・・・」
「いや、ウチにもあるでしょ・・・高級車・・・」

車をみてそう言う兄に冷静に突っ込む弟

時谷の家にも当然あるのだが、仕事以外ではあまり乗らないためほとんど眠っている。偶に時継がピカピカに掃除しているがそれはともかく、家の前に車が止まり、実由が降りてくる

「時谷君！時継さん！！」

「実由！！」

「やあ、実由さん」

駆け寄る実由に答える二人

「ごめんね？急に・・・」

「気にすんな」

「そうだよ？・・・それと、実由さん？」

「はい？」

突然真剣な顔になる時継

「私のことは『お義兄さん』でかまわないよ？」

「え！？・・・えっと・・・」

「兄さん、実由が困るからそうゆうのやめてって・・・」

「何を言ってる時谷！大事なことだぞ？二人が結婚すれば、合法的に彼女の義兄になるんだからな！」

「いや、そうだけどさ・・・」

妙な力説の兄に思わずため息を吐く弟

「け、結婚・・・!!」

結婚という言葉に実由も顔を赤くしてしまう

「実由様・・・そろそろ・・・」

「ひゃい!? あ・・・そ、そうだね・・・時谷君?」

「あ、ああ・・・行こうか・・・」

仙波に声をかけられ、声が上ずりながらも目的を思い出す時谷と実由

「それじゃあ、兄さん・・・行ってきます!」

「ああ・・・しっかりな?」

兄に見送られながら車に乗り込む時谷

移動中、実由と何気ない会話をしていた時谷だが、家に近付くにつれて、だんだん口数が減ってきていた・・・

鈴原邸・玄関

「すごいな・・・」

「そうかな・・・?」

豪邸と呼ぶにふさわしい屋敷を見上げ、そう呟く時谷

「さ、行こう?」

「あ、ああ・・・」

実由に促され、家に足を踏み入れる

廊下には絨毯が敷き詰められ、照明は明るく、時谷の家とは別の意

味で全てが光っているようだった

「こっちだよ」

「ああ・・・」

実由に案内され、リビングに通される

リビングは広く、天井にはシャンデリアが当たり前のようにぶら下がっている

《こんにちは、時谷様、ゼラート》

「ああ、ケルビム」

リビングでケルビムが出迎える

「なんでここにいるんだ？」

《姫様がデッキの調整をなさると・・・》

「今からか？なんで？」

《それは・・・》

「すぐに分かるよ・・・」

ケルビムを止めるように一言で締めくくる実由

そのときリビングの扉が開き、二人の女性が入ってくる

「へえ・・・君が・・・？」

「えっと・・・」

「時谷君・・・この人達が私のお姉ちゃん達・・・」

実由が紹介しようとする、片方の女性が止める
自分で行うつもりようだ

「長女の鈴原 すずはら 実里 みさと よ・・・よろしく」

長身の女性が自己紹介をする
髪は実由よりも短く背中の真ん中くらいのところまで、色は赤みを帯びた紫色

「次女の実幸 みゆき・・・ふうん・・・君がねえ・・・」

最後の女性、身長は実由と同じくらいで、髪は蒼い短髪でワンポイントにヘアピンが付いている
そして、品定めをするかのように時谷を上から下まで見ていく

「な、なんでしよう・・・」

「ふむ・・・確かに、あの『勘違い』よりはいい男かもね・・・」

頷きながらそう言う実幸

『勘違い』とは、元・婚約者のマルクのことである

「君・・・実由のことどう思ってたんの？」

「・・・は？」

実幸が突然質問してきて、思わず聞き返してしまう時谷

「本気なの？それとも・・・」

「実幸お姉ちゃん！止めて!!」

実由が慌てて止めに入るが、実幸は構わずに見つめる

「実由・・・私は真剣に聞いているの・・・黙ってなさい・・・どうなの？」

「本気です・・・もちろん」

時谷も負けじと見つめ返しながら答える

「そう・・・なら、私達とデュエルしない？」

「デュエル？・・・『達』？」

突然の展開と言葉に首を傾げる

「ええ、私と実里姉さんの二人とデュエルして・・・タッグデュエルよ！」

時谷を指差しながら宣言する実幸

「タッグ・・・デュエル・・・」

「そっちは実由と組むと良いわ・・・」

「実里お姉ちゃん・・・」

「あなた達の絆の強さ・・・確かめてあげる・・・それとも・・・断る？」

実幸と実里が時谷を見つめながら聞いてくる

「分かりました・・・受けます！」

「分かったわ・・・それなら十分後、開始するわ」

そう言うのと退室していく実里と実幸

「ごめんね・・・突然・・・」

「いや・・・アレが普通の対応じゃないか？・・・実由のこと本気

で心配してるんだよ」

謝る実由にそう答える時谷

「それより、タッグなんて久しぶりだな、俺」

「そうなの？」

「ああ、偶に兄さんとかとするんだけどな・・・アカデミアでもやらなかったし」

「そうなんだ・・・」

「実由は？」

「私は・・・明日香とかジュンコたちとよくやってるかな」

「そうか・・・」

女子同士で集まってそれはどうなのかと思うが言わないでおく時谷

「実由、せっかくだから少し面白いことしようか？」

「何？」

「それはな・・・」

「うん！面白そう！！」

「だろ？じゃあ、早速・・・」

「うん！！」

時谷の提案にのりデッキを調整し始める実由

「それと、こいつも入れるか・・・」

一枚のカードを見つめながら呟き、そのカードをデッキに入れる時谷
まもなく、デュエルが開始される

TURN 12 (後書き)

どうも!!

とりあえず出来上がったので投稿しました!

実由ちゃんの家族はみんな『実』の字を使っています

時谷の家は実由ちゃんの家ほど大きくありません。お兄さんがそういうのを嫌っていますので・・・

お兄さんのノリは吹雪さんに近いかも?

次回はお姉さん達とのタッグデュエルです!

活動報告でも書きましたが、デッキについてのアンケートをしています

『こんなデッキ』、『このカードを使ったデッキ』などの意見がございましたら、活動報告のコメント、感想欄に書いてください!

ではまた次回!!

TURN 13 (前書き)

お待たせしました!!

時谷・実由VS実里・実幸によるタッグデュエルです!

TURN 13

Turn 13 《タッグデュエル！光と闇を結ぶ絆》

互いにデッキの調整を済ませ、専用のデュエル場に通される

そんなものまである鈴原邸にもう驚かずに受け入れることにした時
谷だった

「準備はいい？」

「「はい！」」

四人が向かい合う

「それでは・・・僭越ながら審判は私めが・・・」

仙波が中央に立つ

（ルール）

- ・ フィールド、墓地、LPは共有し、LPは8000
- ・ プレイヤーはドローフェイズ前に交代する。相手ターン中は交代できない
- ・ パートナーの手札の確認、相談は禁止（場に出ている伏せカードの確認は可）
- ・ パートナーのカードでも、自分のカードとして使用できる
- ・ 相手ターンはその直前のプレイヤーがカードを使用する
- ・ 後攻は1ターン目から攻撃可

「それでは・・・」

「「「デュエル!!」「」」」

実由・時谷	LP	8000
実里・実幸	LP	8000

「それじゃあ、私のターン! ドロー! 私は魔法カード『ソーラーエクスチェンジ』を発動! 手札のウォルフを捨てて二枚ドロー! その後、デッキの上から二枚を墓地に・・・この瞬間、デッキから墓地に行ったもう一体のウォルフの効果が発動! 特殊召喚!!」

ライトロード・ビーストウォルフ	攻撃力	2100
-----------------	-----	------

「早速出てきたか・・・」

実由のデッキの内容は一応把握している実幸

「さらに、ライトロード・ウォリアーガロスを召喚!」

槍を持った戦士が召喚される

ライトロード・ウォリアー・ガロス	攻撃力	1850
------------------	-----	------

「カードを二枚セット、ターンエンド!!」

実由・時谷	LP	8000	
場	ライトロード・ビーストウォルフ	攻撃	2100
	ライトロード・ウォリアーガロス	攻撃	1850
	伏せ二枚		

手札四枚

「私のターン、ドロー！私は^{マスクドラゴン}仮面竜を召喚！」

仮面を被った赤い竜が現れる

仮面竜 攻撃力 1400

「リクルーター・・・ドラゴンデッキか・・・？」

モンスターから実里のデッキを分析する時谷

「そして魔法カード『スタンピング・クラッシュ』！！自分の場にドラゴン族が存在するとき、相手の魔法・罠ゾーンのカードを一枚破壊し、相手に500ポイントのダメージを与える！私が指定するのは右のカード！」

仮面竜がカードを踏み潰す。破壊されたのは『閃光のイリュージョン』

破壊の余波が実由を襲う

「ぎゃあ！！！」

実由・時谷 LP 8000 ↓ 7500

「更に永続魔法カード『未来融合―フューチャー・フュージョン―』^{ファイブ・ゴッド・ドラゴン}発動！選択するのはF・G・D！デッキから融合素材のドラゴン族を五体デッキから墓地へ！」

「やっぱりファイブ・ゴッド！！！」

「まだよ、魔法カード『火竜の火炎弾』発動！このカードの二つ目

の効果を使用！場に表側表示で存在する守備力800以下のモンスターを破壊する。対象はウォルフ！！」

仮面竜が炎を吐き、ウォルフを焼き尽くす

「ウォルフが・・・！！」

「魔法カード『死者蘇生』！墓地のタイラント・ドラゴンを蘇生！このとき、自分の場のドラゴン族モンスターを一体生贄にする！」

仮面竜が炎に吞まれ、中から巨竜が現れる

タイラント・ドラゴン 攻撃力 2900

「タイラント・ドラゴン・・・実里お姉ちゃんの主力の一つ・・・！！」

「未来融合で送ったのか！」

実由と時谷がそれぞれ呟く

「バトル！タイラント・ドラゴンでガロスを攻撃！！！」

タイラント・ドラゴンの炎がガロスを飲み込み、余波が実由と後ろの時谷にも襲い掛かる

「きゃあ！！」

「うわ！！」

実由・時谷 LP 7500 ↓ 6450

「ターンエンド！」

実里・実幸 LP 8000

場 タイラント・ドラゴン 攻撃 2900

未来融合 ―フューチャー・フュージョン― カウント0
手札一枚

「よし・・・俺のターン！ドロー！！」

ドローしたカードを見て頷く

「手札のダーク・ホルス・ドラゴンを捨てて、ダーク・グレファア
を特殊召喚！！」

ダーク・グレファア 攻撃力 1700

「更に効果発動！手札のダーク・シムルグを捨てて、デッキからネ
クロ・ガードナーを墓地に送る！そして、魔法カード『死者蘇生』
！俺達の墓地からダーク・ホルス・ドラゴンを特殊召喚！！」

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000

「攻撃力3000！？」

「実里姉さんのタイラントより上！？」

実里と実幸がダーク・ホルスを見て驚く

「更に、ダーク・グレファアを生贄にダーク・パーシアスを召喚！」

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900

「ダーク・パーシアスは墓地の闇属性モンスターの数×100ポイント攻撃力が上がる！俺達の墓地の闇属性モンスターは三体！よって300ポイントアップ！」

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900 ↓ 2200

「バトルだ！ダーク・ホルスでタイラント・ドラゴンに攻撃！『ダーク・メガフレーム』！」

ダーク・ホルスの黒炎に吞まれ、破壊されるタイラント・ドラゴン

「ううう！！」

実里・実幸 LP 8000 ↓ 7900

「更に、ダーク・パーシアスでダイレクトアタック！！」

パーシアスの剣が実里を切りつける

「くう！！」

実里・実幸 LP 7900 ↓ 5700

「メインフェイズ2に移行する。墓地の闇属性モンスターが三体以上いるとき、そのうちの二体、ダーク・グレファールとダーク・シムルグを除外し、手札からダーク・ネフティスを墓地へ送る！ターンエンド！！」

ダーク・パーシアス 攻撃力 2200 ↓ 2100

実由・時谷 LP 6950

場 ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃 3000

ダーク・パーシアス 攻撃 2100

伏せ一枚

手札無し

「私のターン！ドロー！！手札からフィールド魔法『湿地草原』発動！！」

あたりに湿地が広がる

「『湿地草原』の効果！全ての水族・水属性・レベル2以下のモンスターは攻撃力を1200ポイントアップさせる！更に永続魔法『ウォーター・ハザード』発動！自分の場にモンスターがいないとき、手札からレベル4以下の水属性モンスターを特殊召喚できる！手札から貫ガエルを特殊召喚！」

額に一本の角の生えた紫色のカエルがあらわれる

貫ガエル 攻撃力 400

「ガエルデッキ！？」

時谷も実幸のデッキに驚いていた

「そうよ！さらに手札の水属性モンスター、黄泉ガエルを捨てて鬼ガエルを特殊召喚！」

今度は赤い模様の入ったカエルが召喚される

鬼ガエル 攻撃力 1000

「鬼ガエルの効果！召喚・反転召喚・特殊召喚されたとき、デッキ、若しくは場から水族・水属性・レベル2以下モンスター一体を墓地に置く！引きガエルをデッキから墓地へ！」

一気にデッキを圧縮する実幸

「湿地草原の効果で貫ガエルと鬼ガエルの攻撃力が1200ポイントアップ！」

貫ガエル	攻撃力	400	↓	1600
鬼ガエル	攻撃力	1000	↓	2200

「そして、墓地に存在する水属性モンスター、黄泉ガエルと引きガエル、そして実里姉さんの炎属性モンスター、タイラント・ドラゴン^{フロストアンドフレイム・ツインドラゴン}を墓地から除外して、氷炎の双竜を特殊召喚！！」

実幸と実里のモンスターがそれぞれ合さり一つの光となる。光の中から氷と炎を吐き出す双頭の竜が召喚される

氷炎の双竜 攻撃力 2300

「すげ……」

「これが……お姉ちゃん達の最大の切り札……氷炎の双竜……」

二人のモンスターを使って召喚されたモンスターに圧倒されそうになる時谷と実由

「氷炎の双竜の効果！手札を一枚捨てることで場のモンスター一体を破壊する！最後の手札を捨てて、ダーク・ホルス・ドラゴンを破壊！！」

吐き出される二色の息。最初に氷の息がホルスを凍らせ、炎の息が跡形も無く溶かした

「ダーク・ホルス！！・・・だが、墓地の闇属性モンスターが増えたことにより、ダーク・パーシアスの攻撃力もアップ！！」

ダーク・パーシアス 攻撃力 2100 ↓ 2200

「構わない！！氷炎の双竜でダーク・パーシアスに攻撃！！」

二色の息が同時にぶつかり、爆発を起こしパーシアスを飲み込む

「墓地のネクロ・ガードナーの効果発動！！墓地から除外し、バトルを一度だけ無効にする！！」

幻影が盾となり、パーシアスを守る

ダーク・パーシアス 攻撃力 2200 ↓ 2100

「まだ終わってないわよ！！鬼ガエルで攻撃！！」

鬼ガエルの舌がパーシアスを襲い、破壊する

「ぐう！！」

実由・時谷 LP 6950 ↓ 6850

「貫ガエルでダイレクトアタック!!」

「ぐあ!!」

実由・時谷 LP 6850 ↓ 5450

「貫ガエルの効果!相手にダメージを与えたとき、場に『貫ガエル』以外の『ガエル』が存在するとき、魔法・罠ゾーンのカードを破壊する!!」

最後の伏せカードも破壊される

「ターンエンドよ!!」

実里・実幸 LP 5700

場 貫ガエル 攻撃 1600

鬼ガエル 攻撃 2200

氷炎の双竜 攻撃 2300

湿地草原

未来融合 カウント1

手札無し

「頼むぞ、実由」

「うん!!」

声を掛け合いながら交代する二人

「私のターン!ドロー!!」

実由がカードを引いたとき

「墓地のダーク・ネフティスの効果発動！！」

「え！？」

後ろの時谷が宣言、実由も驚いて後ろを見る

「ダーク・ネフティスは自身の効果で墓地に送った次の俺達のスタンバイフェイズ、墓地から特殊召喚される」

時谷の言葉と共に舞い上がる漆黒の不死鳥

ダーク・ネフティス 攻撃力 2400

「更に、ダーク・ネフティスは特殊召喚されたとき、場の魔法・罫ゾーンのカードを一枚破壊する！！実由？」

説明した後、実由を見つめる時谷

「時谷君・・・うん！！」

実由も頷き返し、ネフティスを見つめる

「私が選ぶのは・・・湿地草原！！」

実由の宣言により、羽根から放たれた炎により場が元に戻る

貫ガエル	攻撃力	1600	↓	400
鬼ガエル	攻撃力	2200	↓	1000

「そして、ライトロード・マジシャンライラを召喚!!」

杖を持ったライトロードの魔術師が召喚される

ライトロード・マジシャンライラ 攻撃力 1700

「バトル!! ダーク・ネフティスで氷炎の双竜を攻撃!!」

漆黒の炎をまとして体当たりするネフティス

「きゃあ!!」

実里・実幸 LP 5700 ↓ 5600

「更に、ライラで貫ガエルに攻撃!!」

杖から光弾を発射するライラ

「くう!!」

実里・実幸 LP 5600 ↓ 4300

「そして、メインフェイズ2に移行して、ライラのモンスター効果発動! 攻撃表示から守備表示に変更することで、相手の魔法・罠カードを一枚破壊する!! 破壊するのは未来融合!」

ライトロード・マジシャンライラ 守備力 200

「カードを二枚セット、エンドフェイズにデッキからカードを三枚墓地へ送ってターンエンド!!」

実由・時谷 LP 5450

場 ダーク・ネフティス 攻撃 2400

ライトロード・マジシャンライラ 守備 200

伏せ二枚

手札二枚

「私のターン、ドロー!!! 装備魔法『D・D・R』発動! 手札を一枚捨てて、除外されている私のタイラント・ドラゴン等特殊召喚!」

異次元から再び現れるタイラント・ドラゴン

タイラント・ドラゴン 攻撃力 2900

「また出た!?!」

「さすが・・・息の合ったプレイだ・・・」

実由と時谷も驚く

「バトル、タイラント・ドラゴンでダーク・ネフティスに攻撃!!」

タイラント・ドラゴンのブレスを浴びそうになる、ネフティス

「速攻魔法『デイメンション・マジック』発動! 場の魔法使い族モンスターが存在するとき、自分の場のモンスター一体を生贄に、手札から魔法使い族を特殊召喚する!!! 生贄にするのはダーク・ネフティス!!!」

ネフティスから黒い煙が立ち込める

「特殊召喚するのは、ライトロード・サモナールミナス!」

煙の中から、両手に光を溜めた光の魔道師が召喚される

ライトロード・サモナールミナス 守備力 1000

「更に、相手のモンスター一体を破壊できる!! タイラント・ドラゴンは罨の対象にはならないけど、魔法なら効果を受ける!!」

魔術師の棺に閉じ込められ、爆破されるタイラント・ドラゴン

「タイラント・ドラゴン・・・」

自身のキーカードを破壊され、驚く実里

最後の手札を使用したことにより、実里の手札は尽きた

「・・・ターンエンド・・・」

実里・実幸 LP 4300

場 無し

手札無し

「俺のターン!! 魔法カード『強欲な壺』を発動し二枚ドロ―! そして、ルミナスの効果発動!! 手札を一枚捨てて、墓地の『ライトロード』と名の付くレベル4以下のモンスターを蘇生する! 対象は、ウォルフ!!」

ルミナスの手が光り、その中からウォルフが現れる

ライトロード・ビーストウォルフ 攻撃力 2100

「更に、ルミナスとライラの二体を生贄に捧げ、ライトアンドダークネス・ドラゴン光と闇の竜を召喚
！！」

二体を光が包み、その中から真ん中から綺麗に白と黒に分かれた竜
が召喚される

光と闇の竜 攻撃力 2800

「光と闇の竜・・・」

「綺麗・・・」

思わず見惚れてしまう二人

「お姉ちゃん・・・これが、私達をつなぐ絆の証・・・」

「光と闇は表裏一体・・・決して離れることなく、常に寄り添う・・・
このモンスターはその象徴だと思っています」

実由と時谷がそう言う

「・・・残念だけど・・・今回は、私達の負けね・・・実幸？」

「ええ・・・そうみたいね・・・姉さん・・・」

「実里お姉ちゃん・・・実幸お姉ちゃん・・・」

顔を見合わせ笑ってしまう実里と実幸に実由は不安げな顔になる

「なにしてんのよ？まだ、あんたのターンよ？」

「はい・・・行きます！ウォルフでダイレクトアタック！！」

手に持った斧を横薙ぎに振るうウォルフ

「くっ!!」

実里・実幸 LP 4300 ↓ 2200

「光と闇の竜で、ダイレクトアタック!! 『ダークバプティズム』
!!」

口から黒色のブレスを吐きだす光と闇の竜
ブレスが、実里と後ろの実幸を飲み込んでいく

実里・実幸 LP 2200 ↓ 0

「そこまで!! 勝者、実由お嬢様・時谷様ペア!!」

仙波が右手を挙げながら宣言する

これにより、タッグデュエルが終了した・・・

TURN 13 (後書き)

どうも!!

いかがでしたでしょうか?

お姉ちゃんズは氷炎の双竜で、時谷君と実由ちゃんは光と闇の竜・
・二色の竜対決でした!!

光と闇の竜はどこかで使おうと考えていました・・・こんなときで
しか出せませんでした・・・

実里さんはドラゴンデッキ、実幸さんはガエルデッキです。

氷炎はタッグの時のみ使用します

タイラント・ドラゴンは墓地以外の特殊召喚に生贄はいりませんし、
罠にしか耐性がありません・・・それでも、モンスターが存在する
ときの二回攻撃はなかなか強力ですが・・・

実由ちゃん以外の三人が一気に手札を消費するプレイに・・・やり
すぎたかな・・・?

この小説のタッグデュエルは『タッグフォース』のルールで行いま
す!

アニメ版は細かいので、簡略していますので、ご了承ください

次回は、ついに「あのお方」が登場します!!

ではまた次回!!

追伸・・・

PVが50000件を突破しておりますが・・・記念の小説が思い

つかずに、投稿できておりません・・・出来上がり次第、投稿いたしますので、もうしばらくお待ち下さい

P V 50000件突破記念（前書き）

とつくに突破していますが

出来上がったので投稿します！

PV 50000件突破記念

闇に選ばれし者 PV50000突破記念

どうも!!

気が付いたらPVが50000件どころか60000件を突破しました!!

というわけでこちらも座談会ロングバージョンでお送りします!

では早速・・・召喚!!

「やっとか・・・」

「遅すぎ・・・」

ごめんって!! そんな目で見ないで!!

「だって、原因はゲームのしすぎだろ? そのくせ、ネタが思い浮かばないからって停滞させて・・・」

「反省してくださいね?」

はい! すいません!! ともかく、50000件突破の記念小説を始めましょう!!

っとその前に各自、自己紹介を

「ああ、忘れてた。主人公の時谷だ」

「ヒロインの実由です」

「サブ主人公の・・・進です・・・」

「え!? 進ってサブ主人公なの!?」

こらこら、勝手なこと言わない! まあ、あながち間違っていないかも

だけど・・・

「1度・・・言ってみたかった・・・」

何気に油断できない子だね・・・まあ、ともあれスタートです!!

「今回のテーマは？」

うん、区切りも付いてるし、こっちでも振りかえってみようと思う

「区切り？」

そう、冬休みは一応オリジナルの部分に入るからね・・・

「なるほど・・・」

だから、そこまでの話である十一話までを振り返りながら、そのと
きに戦った人のデッキの解説もして行こうかなと

「いいんじゃないか？」

「そうだね」

それじゃあ、早速第一話！

クロノス先生との入学試験デュエル

「本編での十代とのデュエルの後になるんだよね？」

うん、クロノス先生はやられ役に丁度よかったし・・・オリキャラ
考えるのも面倒だったし・・・

「本音本音・・・」

一応、クロノス先生のプレイは十代君の時と被らないようにプレイさせたけど
どうにもね・・・

「『コストダウン』は微妙だよな・・・」

トロイホース使っても良かったんだけど・・・ありきたりかと思ひ
まして・・・

「時谷は・・・2ターンで早速・・・ゼラートを召喚したね」

精霊であるゼラートには早速活躍して欲しかったしね
没ネタの一つなんだけど、当初は少し違う動きをすることであった
んだよね・・・

「どういう風に？」

あるカードの効果を使って、ゼラートを召喚する予定だったんだよ

「あるカード・・・？」

うん、でもね・・・それ使おうと、色々後に問題が出るから止めてあ
あいう結果になったと

「オリカじゃないのか？」

違うよ？OCGにも出てて、本編でも登場しているカードだよ・・・

名前はまだいえないけど・・・

「案外、読者の人はある程度分かってるんじゃないの？」

それでも、隠すだけ隠そうかと・・・

「まあ、良いけどな・・・俺のデッキにもそのうち入るんだろ？」

それはもちろん。作者のデッキに近づけるのも目的だし
さて、それじゃ第二話、十代君から万丈目君とのデュエルを横取り
して、1ターンキルを決めたときだね

「かなり圧巻だったな・・・」

「うん！すごかったよよかった！」

「あ、ありがとうな・・・実由・・・」

そこ、ナチュラルにいちやつくんじゃない！

「むう・・・」

こっち睨んでもだめだよ？実由ちゃん・・・これが終わったら存分に
にやつちやつて良いから

「でも・・・ダーク・アームドは強力だね・・・」

「ああ、召喚の制限は厳しいが、それに合った能力も持ってるしな
制限化も領けるね・・・作者的には残念だけど

「次は第三話で、私と時谷君とのデュエルだね・・・私のデッキは
なんでライトロードなの？」

それは、闇デッキを使うと時谷君には光デッキを使うキャラをヒロインにしたいと思ったから

「ライトロード以外に選択肢は？」

その当時に使えるであろうデッキはあとは「天使パーミッション」か「電池メン」位しか思いつかなくてね・・・
時谷君のデッキとの相性も、こっちのほうがいいかと思ったしね

このデュエルの決まり手は「邪帝ガイウス」・・・帝モンスターの
中では結構使われるモンスターの一つだね・・・

「生贄召喚に成功すれば、場の好きなカードを一枚除外・・・この
カードだけならこいつが選択されるが・・・」

「その、デメリットも自分の能力で補えるモンスターなんだよね・・・」
「」

闇を除外すれば相手に1000ダメージだからね・・・バーンデッキ
キにも入れるんだよね・・・

「次は第四話・・・遊城君と時谷のデュエル・・・」

「その前に、実由の精霊のケルビムとも出会ってるな」

ここでも没ネタを言うと、最初は二人の精霊は一体じゃなかったんだよね

「そうなの？」

うん、時谷にはゼラートのほかにダーク・ホルスを、実由ちゃんは

ライコウをそれぞれ精霊化してもいいかと思ったんだけど・・・

「ライコウはともかく、ホルスはでかいだろ・・・」

精霊状態のときは肩に乗れるサイズで、見た目LV4にしようかと思ってた・・・

「何で・・・没・・・？」

実はね・・・GXの後に続編も考えてるんだよ・・・

「続編？」

「まだ・・・一年生編も終わってないのに・・・？」

いや、その続編に向けて進ませる予定だしさ

「内容は言えるの？」

うん、まあ、ありきたりだけど未来に飛ばされようかなと

「未来？・・・まさか」

そう！5D'sの世界だ！！

時谷君や実由ちゃんにシンクロ召喚をさせたいんだ！！

「僕は・・・？」

あ、進君は続編には出ない予定

「・・・」

「おい！しっかりしろ進！！」

「作者さん！！酷いんじゃない！？」

いやあ、進君には違う世界に行って貰う予定だったし・・・

「違う・・・世界？」

そう、「遊戯王」の世界とは違う世界にね

「何で・・・時谷じゃなくて・・・僕なの？」

もちろん、その世界に時谷君たちもいってもらうよ？
でも、先に進君を行かせて、その世界の人達に出会う・・・その後
にやってきた時谷君たちの紹介役をしてもらう予定

「参考までにどんな世界なんだ？」

そうだね・・・いろんな世界を管理してる組織のある世界・・・と
か？

「それ完全に「リリなの」だろ！！おまえ、そっちの小説も書いて
るだろう！？まだ書く気か！？」

大丈夫！そのときはオリジナルの要素をふんだんに入れる予定だか
ら！！

ホルスの精霊化もここにつなげるために考えてたんだから

「どういう意味？」

ほら、あの世界には竜をつれているキャラがいるでしょ？その竜の

レベルアップに貢献してもらおうと思って考えた
まあ、実現は難しいだろうけど・・・っていうか無理だろうね

「ああ、まずは本編を終わらせてからだな・・・」

それでも、先を見据えて書いていったほうが方針は定まると思うんだ

「言ってることはなんとなく分かるけどね・・・」

話を戻すよ？

この後、十代君と時谷君のデュエルをしたわけだけど・・・

「十代の引き運はとんでもないな・・・初手から融合召喚してくるし・・・」

実際、本編でも結構な確率で行ってるね

「時谷も・・・最後のターン・・・ドロローの加速したね・・・」

あとがきで書いたけど、トバリのブーストは作者も偶に発揮させて
ます！・・・まあ、発動しないことのほうが多いけど・・・

パーシアスは墓地の闇属性モンスターの数だけパワーを上げるから
ね・・・丁度シャイニング・フレア・ウイングマンを超えるように
墓地に送ったんだよ

「その上、魂の開放で相手のモンスターの攻撃力も下げて・・・や
りたい放題だな」

勝ちたかったんだもの！！

ちなみに、最初「漆黒のトバリ」でのブースト発動のときの台詞は

「ドロー！モンスターカード！！ドロー！モンスターカード！！」

って言わせようかと思ってた・・・

「バーサーカーソウル凶戦士の魂！？」

「確かに効果は似てるけど・・・」

没ネタの一つとして考案されました・・・

「没でよかった・・・」

と、主人公が安心したところで第五話！

進君との試験デュエルだね

「やっと・・・登場した・・・」

「初登場で、時谷君を苦しめるデッキを使ったんだよね？」

時谷君が苦戦するデッキはどんなものかと考えると、やっぱり「聖なるあかり」が一番だと思います。それに加えて、墓地にカードを置けないようにするのも厳しい・・・

これは、全部作者の実際にされてたことを纏めた感じになるかな・・・

「でも、これって試しに作ったデッキなんだよな・・・」

まあね、進君のデッキはあくまで「霊使い」のデッキだからね

まあ、没ネタで、進君のデッキは光と闇を混合して切り札を「カオ

ス・ソーサラー」にしようとも思っていましたか・・・

「没ネタになった理由は？」

闇は時谷君、光は実由ちゃん。そして、他の属性に進君という構図を求めた結果、アレはお試しデッキで落ち着いたと・・・

それじゃ、このときの進君のデッキを解説しようか・・・

内容としては、聖なるあかりと除外系のカードで、時谷の動きを封じ、「終焉のカウントダウン」を成功させるためのデッキ・・・これがテーマでした

「動きは少し鈍かったけどな」

まあ、ガン回ししたら、負けちゃうしね・・・どこかでほころびがあるのが、この小説のデュエルだよ。除外を逆手にとって「カオス・エンド」を使用して、決まり手には「終焉の精霊」・・・墓地を除外して戦うのが時谷君のデッキだから、ある程度除外していつて、その後にこのモンスターが現れると

「長期戦を視野に入れたんだね？」

まあ、実際にはそんなに長丁場にはなりません・・・

「次の第六話は、デュエルしなかったね」

あの回は、説明の回にするつもりだったからね・・・

「俺が、遊戯さんたちと面識があったり、実由のこと好きだったり・

・・」

それらの設定を公開しようと思ったからデュエルしないで終わったんだよね・・・

次の第七話は、オリジナルの話だね

「実由の元・婚約者の・・・誰だっけ・・・？」

「さあ・・・」

まあ、無理に思い出さなくても良いよ・・・作者も書いてて面倒だから

「このデュエルでは、時谷君と私のデッキをあわせたデッキになってるんだよね？」

そう、感想でもそこそこ言われてたけど、闇主体にライトロードはあまり無いんだよね・・・でも、作者的にはこのデュエルははじめから考えてました！

「時谷が・・・裁きの龍を召喚したとき・・・みんな驚いてた・・・」

「まあ、ひたすら隠してプレイしてたしな・・・」

手札のコストやらをほとんどライロにやってもらって、場には自分のモンスターを出してごまかす・・・実際にはかなり難しい展開だったけど・・・やってよかった

相手のデッキは「ハーピィの狩場」と「門前払い」を使ったバウンズデッキになっています

「早速破壊したから、全然活躍しなかったがな・・・」

まあ、やられ役は得てしてそう言うものですから・・・そして、最後には時谷のお兄さんの時継さんも出てきました！

「兄さんには感謝しかないな・・・」

「うん！！」

二人の背中を押したのは結果的にこの人だしね・・・

「それじゃ・・・第八話・・・時谷とモースの闇のデュエル・・・この場に僕居なかったけど・・・」

時谷君が、十代君のデッキで戦うという微妙な展開をした回だね

「時谷君、何でデッキを持ってなかったの？」

「まあ、闇の浄化はゼラートが居れば出来るし、実由の電話ではもう十代が戦ってたからな・・・デュエルする必要はないんだよ」

そう、闇に取り付かれた元凶が分かればいいからね。ゼラートはカードに宿る精霊だから持ち歩かないといけないけど・・・この先も、何回か浄化は行ってもらう予定だからね？

「わかってる・・・俺にしかできないことだからな」

このデュエルは、時谷君のデッキではなく十代君のデッキだったから、いつもとは違うデュエルになったのではないかと思えます

「モースのデッキは「デーモンデッキ」か・・・」

「その前にいたタイタンも同じデッキだったけど・・・」

まあ、モースの持っているのが「デビルマゼラ」なので、そいつを出そうとすると必然的に「万魔殿―パンデモニウム―」が入るので、それを生かすところなるんですよ・・・

さて、第九話・・・カイザーこと亮さんとのデュエルだね

「時谷君が負けるところは初めてだね？」

「うん・・・」

「負けること自体は初めてじゃないぞ？ 遊戯さんやら瀬人さんやらには負け越してるしな・・・」

本編でも、十代が最後まで勝てなかった相手だしね・・・あの人は作者的には好きなデュエリストだね

まあ、原作キャラとのデュエルなので、デッキの解説はいいでしょう
次の十話、制裁デュエルでオリキャラの御門さんとのデュエル

「城之内さんと戦ったことがあるって・・・微妙な設定だな・・・」

まあ、設定はどうでも良かったんですよ・・・やりたかったのはずばり！「ゼラート対決」！！だから

「「デビルマゼラ」の次は・・・「大天使ゼラート」・・・」

「「ゼラ」って他にいたっけ？」

「まんま「ゼラ」って儀式モンスターがいるぞ？」

いつか出そうと思います・・・それよりも、御門さんのデッキの解説に入りましょう！

「『大天使ゼラート』を使うために『天空の聖域デッキ』なのか・
・」

そして「天空の聖域」を生かすために、最新ストラクチャーに入っている「代行者」を使ってみました

それに加え、時谷の持っている闇天使と正反対のモンスターも入れてみました！

「パーシアス、ボルテニス・・・ヴァルキュリアも居るのか？」

もちろんです！まあ、ボルテニスは非常に出にくいモンスターでもあります・・・その生贄にあえて、ダーク・アームドを選んでみました

そして、最後には「ゼラート」が場に向かい合う構図・・・これをやりたかった！！

最後に十一話・・・万丈目君と進君のデュエル・・・

「進のカードを万丈目の奴が海に捨てたんだよね・・・」

「酷いことするよね・・・」

本編を同じ展開なんだよね・・・本来、万丈目君とデュエルするのはイエローの三沢君で、海に捨てられたのも三沢君のカードなんだよ

何気に、進君は三沢君と似てる部分があるかもね・・・

「デッキを複数持っていたり、それが属性で組まれてたり・・・」

この小説では空気が早速進んでいるね・・・この先、彼の出番あるかな・・・？

「そんな事言ってやるなよ・・・」

それはさておき、万丈目君はアニメ本編とまったく同じプレイをしてもらいました

そして、進君には最新カードでもある「リチュア」を使ったデッキを使いました

「水属性で構成されてるデッキだね」

もちろん、「エリア」や「霊術」も入ってます。あと、使われていませんが「帝」も導入されてます

「欲張りすぎじゃないか？」

そうだね・・・まあ「帝」はそんなにでないと思うから、大丈夫でしょう・・・

「何があっても・・・」「霊使い」と「霊術」は抜かないから・・・」「宣言したね・・・」

「それだけ大事なカードなんだろう？」

まあ、カードのイラストが掠れるくらい使い込むほどだからね・・・

「このとき作ったデッキは今後出す予定あるの？」

もちろん。

このデッキの構成は「霊使い」の共通点である「魔法使い族」のデッキで考えてるから・・・いつかですよ

「さて、今回は此処までか？」

「そうだね・・・」

せっかくだから現在の実由ちゃんのお姉さん達のデッキの解説もし
ときたいけど・・・今回は見送るかな・・・
小説もオリジナルの話に入るしね

「それって・・・大会・・・？」

そう、GX本編では冬休みは「サイコ・ショッカー」の話くらいし
かないからね・・・せっかくだから、オリジナルを投入すること
にした

「どんなデュエリストをだすんだ？」

それは本編でのお楽しみ！

時谷君はその人達とデュエルするかもしれないんだから、なおさら
教えられないよ

「僕は・・・出れないのかな・・・？」

そうだね・・・進君はアカデミアに残ってるから・・・

「そのサイコ・ショッカーの話でも書けば良いんじゃないのか？」

「そうだよ！」

まあ、考えておくよ・・・

さて、それじゃあ今回は此処までです！！

長々待たせた上に、こんなに長い座談会になってしましまして本当

に申し訳ございません!!

「今後も、作者が一層の努力を続けてまいりますので」

「見放さずに、応援してください!」

「感想・・・待ってます」

それでは!!

P V 50000件突破記念（後書き）

どうも！！

と言うわけで、記念小説をお送りしました

次回からはオリジナルの「KCグランプリ編」をお送りします！

ではまた次回！！

ちなみに、アカデミアに残っている進君たちの様子を知りたい方は
言ってください。

執筆して、投稿いたします

TURN 14 (前書き)

久しぶりの投稿です！

今回は”あのお方”が登場します！！

TURN 14

《姉達の真意、デュエル大会に向けて》

デュエルの後、再びリビングに戻った時谷達

「さて、それじゃあそろそろ答えてあげようかしら・・・なんでこんなことをしたのか」

最初に口を開いたのは実里

「時谷君・・・私達はね？実由のことを本当に大事にしているの・・・それこそ、過保護って言われても良いくらいにね？」

「はい・・・」

「実由の幸せのためなら、何でもするつもりでもいるわ・・・本人が嫌がる婚約も止めて見せるわ・・・」

「え・・・？」

時谷が思わず声を出す

「フフ・・・結婚を反対していたのは、実由だけじゃないのよ？あなたのお兄さんが持ちかけてきたから、それに協力させてもらったの」

「そうなんですか・・・」

裏事情に驚いている時谷

「実由が帰ってきて、君の事をすごく嬉しそうに話すから・・・どんな子なのかって呼んだの」

「それで・・・もしも、いい加減な人なら全力で阻止しようって実幸と決めてたの」

真剣に時谷をみる実里と実幸。時谷も見つめ返す

「でも、取り越し苦労だったわね・・・合格よ」

「あ・・・」

「実由のこと、幸せにしないと・・・許さないからね!!」

「実里お姉ちゃん・・・実幸お姉ちゃん・・・」

「もちろんです・・・絶対に・・・幸せにします!!」

泣きそうになる実由の手を握り、誓いを立てる時谷

その後、実由の両親が帰宅し、改めて挨拶して夕食をご馳走になり、家に戻った時谷

次の日

時谷は、一昨日に時継に言われたとおり、海馬コーポレーションを訪れていた

「どうも、時谷ですが・・・」

「あ、時谷君!! 社長に御用かしら?」

「はい、いらっしゃいますか?」

「ええ、あなたが来たら通すように言われてるから大丈夫よ?」

「ありがとうございます」

そう言って、社長室に向かう時谷

何度も呼び出されているため、すっかり顔パスになっている

社長室の前に立ち、ノックする

「入れ」

短く答えられ、部屋に入る

「よお！時谷！！」

「モクバ、久しぶり！瀬人さんも・・・」

「うむ・・・」

顎で椅子を指し、座るように促す瀬人

「アカデミアはどうだ？」

「ああ、結構楽しいよ・・・おかげさまで」

「当然だ」

モクバの質問に答えると、瀬人が即答する

「無駄話はいい、そんなことよりも今度の土曜日だが・・・」

「ええ、わかってます」

「お前には特別枠を用意してある」

「は？」

内容の説明もないまま、そう言われ首を傾げる時谷

「お前は海馬コーポレーションの代表として、大会の優勝者とデュエルをしてもらう」

「何で俺ですか？遊戯さんや城之内さんとかがいるでしょう？」

「遊戯は何処にいるのかわからん・・・凡骨に頼るくらいなら、貴様のほうがましだ」

城之内の名前が出た途端に顰め面になる瀬人
よっぽどいやらしい

「でも俺、でるなら予選から出たいんですけど・・・」

「黙れ。もう決定事項だ」

「えっ・・・」

本人の知らぬところで勝手に話を進めるのが海馬瀬人という男である

「せめて、そういうのは本人の意見を聞きましょうよ」

「そんな時間はない」

時谷の言葉もあっさり切り捨てる

「諦めなよ時谷・・・兄様は1度決めたら諦めないの知ってるだろ？」

「いや、そうだけどさ・・・」

「その代わりにさ、時谷にはプレゼントがあるんだぜ!!」

「プレゼント？」

「ああ、磯野!!」

「は!!」

モクバに呼ばれ、アタッシユケースを持ってくる黒服A・磯野

「こちらです」

「これは・・・デュエルディスク？」

開けると、中には黒色のデュエルディスクが入っていた

「新しいシステムを組み込んだディスクだ」

「システム？」

「『自動シャッフルシステム』だ」

「それって・・・前に十代達に出してもらった案じゃないか・・・」

「それを俺がプログラムを組み、ディスクに搭載した試作品だ」

「実験台じゃないですか・・・」

プレゼントを利用した実験に呆れてしまう時谷

「文句があるなら返してもらおうが？」

「いえいえ、ありがたく頂戴させていただきます」

頭を下げながら礼を言い、ディスクを装着してみる時谷

「おお・・・ぴったりだ・・・」

「そりゃそうさ！なんたって時継がお前用に設計して作ったディスクだからな！」

「兄さんが・・・ってこれじゃあ瀬人さんからって言うよりも、兄さんからのプレゼントじゃないか？」

「あはは・・・」

時谷の言葉に苦笑いのモクバ

「それじゃ早速・・・デッキをセットして・・・おお！！」

デッキをセットするとカードが自動的にシャッフルされていく

「すげえ！！なんか感動する！！」

時谷も目を輝かせていた

「貴様には、そのディスクを持って今度の大会に出場してもらおう・
・いいな？」

「わかりました・・・こんなものまで貰っておいて、文句も言えま
せんしね」

ディスクが気に入ったので、瀬人の条件を呑んで出場を決心した時谷

「これって、アカデミアに持って行っても大丈夫ですかね？」

「当然だ。鮫島にも話を通している」

「『新型のテスト』って言うってあるから問題ないぜ!!」

その後も、大会の詳しい時刻、出場者数などの説明を受けた
新型ディスクのPRも兼ねているので、世界各国の大手企業のお偉
い方がくるらしい

「ま、そこは関係ないか・・・」

「そうだ、貴様はただ黙ってそのディスクでデュエルすればいい・
・だが、負けることは許さん・・・」

変なところでプレッシャーをかけてくる男である

「当然です、負ける気なんてありませんよ・・・」

小さく笑って答える時谷

「ふうん・・・話は終わりだ。もう用は無い・・・帰っていいぞ」

「あっさりですね・・・ま、いいけど」

突っ込みを入れながら部屋を出て行く時谷

「それじゃあ、失礼しますね」

「おう！」

「ああ・・・」

「さて、まだ昼か・・・」

時計を確認すると昼の十二時を過ぎたあたりだった

「どうするかな・・・？」

《若、せっかくなのですから、姫を誘っては？》

「実由を？」

《ええ、デートです》

「そう・・・だな。とりあえず誘ってみるか・・・」

ゼラートの提案を聞き、携帯を取り出して実由に電話をかけようとする

「おっと、電話だ・・・もしもし？」

相手を確認せずに電話に出る

『あ、時谷君？用事ってもう終わった？』

電話の相手は実由だった

「ああ、今終わってどうしようか考えていたところだ」
『今何処？』

「今は・・・海馬コーポレーションの前にある『CAFELA
GEN』って言う喫茶店の近くだな」

『そうなんだ・・・それなら、さ？』

「ん？」

『今から・・・会えないかな？私、結構近くにいますから・・・』

電話越しに顔を赤くしているのが分かるほど上ずった声で聞いている実由

「奇遇だな。俺も実由を誘おうかと考えてたところだ」

『そ、そうなんだ・・・それで・・・』

「ああ、いいよ。何処で待ち合わせる？」

『えっと・・・そのお店にしよう？もうすぐ着くから』

「わかった、待ってるな？」

『うん！！』

そう言って電話を終わらせる時谷

《さすが姫。ちょうどいい時間に電話とは・・・》

「ああ、しかも考えてることも同じだしな・・・」

《見事なシンクロ具合ですな》

「そうだな・・・それじゃ、行くか」

ゼラートとそんな会話をしながら喫茶店に向かう時谷

「いらっしやいませ！！お一人様ですか？」

「待ち合わせです、外のテラス席で」

「かしこまりました。こちらへどうぞ！」

店員に案内され、席につく時谷

「何にいたしましたでしょうか？」

「『レッドアイズ・アッサムティー』で」

この喫茶店『CAFÉ LA GREEN』は世界中の茶葉やコーヒー豆を扱う名店であり、様々な紅茶やコーヒーが存在する。ちなみに、一番人気なのはコーヒーでは「ブルーアイズ・マウンテン（価格3,000円）」で紅茶では時谷の注文した「レッドアイズ・アッサムティー（価格2,400円）」である。

「かしこまりました」

一礼して、店に戻っていく店員を見ながらのんびりする時谷。しばらくして、注文した紅茶がやってきた。

「お待ちいたしました、『レッドアイズ・アッサムティー』でございます」

「どうも」

紅茶を飲もうとしたところに

「時谷君!!」

「ん？ ああ、実由！」

実由が到着し、時谷の向かいに座る。

「ごめんね？ 突然・・・」

「構わないよ。それより、座りな？」

「うん！」

「ご注文は？」

席につく実由へ、ほぼ同時に注文をとりに来る商魂逞しい店員である

「あ、ミルクティーで」

「かしこまりました」

実由に一礼し、再び店内に戻っていく店員

「時谷君は何飲んでるの？」

「ああ、『レッドアイズ・アッサムティー』っていう紅茶だよ」

「時谷君って紅茶派なんだ？」

「そうだな・・・ちなみに、兄さんはコーヒー派だ」

こんなところでも少し好みの違う兄弟だった

「私も、コーヒーよりは紅茶かな？」

「そっか・・・それは何よりだ」

同じ好みで少し嬉しい時谷だった

紅茶を飲みながら何気ない雑談をし、店を出た二人

「それで、どうする？この時間じゃあんまり見て回れないけど・・・」

「いいよ、このままのんびり町を歩くだけでも・・・時谷君と一緒になら」

顔を赤くしながら言う実由

時谷も若干顔を赤くする

「そ、そっか・・・なら、ぶらぶらするか？」
「うん！」

時谷の提案に笑顔で答え、手を握り歩き出す

《姫様・・・本当に楽しそうで何よりです・・・》

《私としても、あんなに楽しそうな若は久しぶりだな・・・》

《私達は邪魔にならないようにしましょうか？》

《そうだな・・・》

二人の精霊達はカードに戻り、見守ることに決めた

TURN 14 (後書き)

どうも!!

原作キャラの海馬さんとモクバ君、さらには磯野さんも登場しました!!

時谷君はデュエルモンスターのアニメオリジナル「KCグランプリ」の遊戯さんと同様に優勝者とのデュエルをしてもらうことになりました!

誰が相手になるのかは、まだ秘密です

次回は実由ちゃんとのデートをお送りします

そして、またしても原作キャラを登場させます! 誰かはお楽しみに!!

最近、大きな地震もあって混乱が続いております・・・

そんな暗い気分を少しでも和らげることが出来たらなと思い、明るい雰囲気の話を投稿してみました

作者の住んでいる地域は地震の影響は無いに等しいのですが、「明日はわが身」の気持ち忘れずにいたいと思います・・・

ではまた次回!!

TURN 15 (前書き)

さあ、時谷君と実由ちゃんのデートです

そして、原作キャラも一人登場します！

TURN 15

《時谷と実由の初デート、そして・・・》

童実野町のショッピングモールを並んで歩く時谷と実由

二人で何を買うでもなく、ウィンドウショッピングを続けている

「これなんか、実由に似合うんじゃないか？」

「そ、そうかな？」

アクセサリーショップのショーケースにある青いブローチを見て、
そんな事を言っている時谷

選んだ商品は実由も気に入っていたものだが、値札を見て濃縮して
しまっている

「一つ買うか？」

「え！？でも・・・」

「大丈夫だ。せっかくのデートなんだから、プレゼントの一つもし
たいしな！」

「え！？と、時谷君！？」

そう言うとき実由の手を引きながら店内に入っていく

「すみません」

「はい？」

「そのショーケースにある青い宝石の付いたブローチを下さい」
「かしこまりました。少々お待ち下さい」

そう言って、ショーケースのブローチを持ってくる店員

「こちらでよろしいでしょうか？」

「はい」

「では、38,000円になります」

「それじゃあ、カードで・・・」

財布からカードを取り出し、会計を済ませる

「どうぞ」

「ありがとうございます」

「またのご来店をお待ちしております」

店員に見送られながら店を出る時谷と実由

「実由、はい」

「あ、ありがとう・・・」

少し硬い表情で受け取る実由

「でも・・・本当にいいの？」

「当たり前だろ？着けてみてくれるか？」

「う、うん・・・」

箱から取り出し、胸元にブローチをつける

「どう・・・かな？」

不安気に時谷を見つめる

「よく似合ってるよ・・・実由・・・」

「あ・・・ありがとう・・・」

ナチュラルに褒める時谷に顔を赤くしてお礼を言う実由

「それじゃあ、次の店を見てくか？」

「うん!!」

再び歩き出す

その後、他にも色々な店を見て回り、最後に時谷が

「ちょっと、行きたいところがあるんだけど・・・いいか？」

「うん」

時谷が案内したところ・・・そこは

「『亀』？」

「ああ、知り合いのやってるゲームショップだ・・・」

説明しながら店内に入っていく

「双六さーん!!」

「んん？ おお！ 時谷君じゃないか！ 久しぶりじゃのー!!」

「はい！ 双六さんもお元気そうで・・・」

「ほっほっほ!! まだまだ元気でやっとなるよ!・・・ところで後ろのお嬢ちゃんは？」

時谷と楽しそうに話す老人、『武藤双六』・・・かの決闘王^{デュエルキング}、武藤
遊戯の祖父である

「えっと・・・鈴原実由と言います」

「俺の婚約者」

「なんじゃと!？」

時谷の言葉に驚く双六。実由も顔を赤くしてしまう

双六に簡単に経緯を説明する

「ほくなるほどの・・・最近の若いモンは進んどるの!!」

大笑いの双六

「それで、丁度いい機会だから紹介しようっていうのと・・・後、良かったらこれ・・・」

「なんじゃ?」

時谷は一枚のカードを渡す

「今度の土曜日に瀬人さんが大会を開いて、俺もそれに出るんですよ・・・それで『ついでに観客を何人か呼べ』って言われまして・・・」

参加者に観客を集めさせる瀬人だった

ちなみに、実由や実里たちの分はすでに渡してある

「おう! 说白了この間、海馬君が遊戯を尋ねて来たな・・・居ないと分かるとすぐに帰ったが・・・」

思い出しながら語る双六

「なんならまた出ます? 『マスク・ザ・ロック』で・・・」

「いやいや！遠慮しとくよ！！」

少し意地悪く言う時谷に苦笑いする

「わかった！是非とも行かせてもらおうわい！」

「お願いします・・・それじゃ、俺達はこれで・・・」

「ああ！またおいで！！」

双六に見送られて店を出る時谷

実由も会釈をして着いて行く

「まずいな・・・」

空を見上げて呟く時谷

「雨になりそうだな・・・」

「うん・・・」

実由も空を見る

空はどんよりと暗くなってきた

「少し急ぐか」

「そうだね」

そのまま早歩きで歩き出す二人だが
数分後、ぽつぽつと滴が落ちてくる

「やべ！！実由！！」

「え？きゃっ！！」

実由の手を取り、走り出す時谷

「時谷君!？」

「とりあえず、俺の家が近い!そこまで行こう!!」

そう言って、実由の手を握りながら走り続ける時谷
そして、本格的に雨が降り出してきた

「きゃあ!!」

「くそ!!」

雨の中を全力疾走する時谷と実由
しばらくして、時谷の家にとどり着いたが、二人ともずぶ濡れにな
ってしまった

「うへえ・・・」

「酷い目にあったね・・・」

玄関先で服を絞る時谷と実由

「時谷!!大丈夫か!？」

「ああ、兄さん・・・」

「お邪魔します・・・」

リビングから時継が走ってくる

「実由さんかい!?!とにかく、急いで風呂を沸かすから入って来
なさい・・・実由さんも・・・」
「え!?!いえ・・・私は・・・」

時継の提案に慌てだす実由

「いいから！そんな状態で家に帰せないよ？」

「は・・・はい・・・」

「それなら、先に実由が入ってくれ・・・俺は後でいいから」

「そんな！？それじゃあ、時谷君が・・・」

「大丈夫だ。何か温かいもの用意しとくから・・・な？」

「うん・・・ありがとうございます・・・」

時谷の説得に頷き、洗面所に向かう実由

【実由SIDE】

「それじゃ、着替えはここに用意しておくから・・・タオルはそこ
のを使っておくれ？脱いだ服はそのまま洗濯機に入れてくれて構わ
ない」

「はい・・・ありがとうございます」

「気にしないで？君は、私の家族でもあるんだから・・・それじゃ
あね？」

「はい」

につこりと笑い、洗面所を出て行く時継

実由は、濡れた服と下着を脱ぎ、洗濯機に入れ、浴室に入っていっ
た・・・

【時谷SIDE】

リビングで頭を拭きながら、ホットミルクを用意する時谷

「これでいいな・・・」

そう言って頷くと時継が入ってくる

「時谷、悪いんだが私はこれから出かけなきゃいけないんだ」

「え！？随分急だね？」

「ああ、多分今日は帰らない。だから、家のことを頼めるかい？」

「うん、分かったよ」

時継の頼みに二つ返事で答える時谷

「それと、実由さんだが・・・今日は家に泊まってもらいなさい。服も乾かないだろうしね・・・」

「そうだね・・・」

「ご家族には私から伝えておくから」

「いや、それは俺がやとく。一応、彼氏だし・・・」

「フツ・・・そうだね」

顔を赤くしながら言う時谷に小さく笑って頷く時継

「それじゃ、頼んだよ？」

「うん。いつてらっしゃい」

出かける時継を見送る時谷

「さて・・・電話電話つと」

すぐに鈴原家に電話をかける時谷

『もしもし？ 鈴原ですが・・・』

「あ、北上です」

『あら、時谷君？ 私よ、実里』

「あ、実里さん？ 実は・・・」

電話に出たのは実里だった。簡単に事情を説明する

『・・・わかったわ、父さん達には私から伝えておくわ』

「ありがとうございます。実里さん」

『構わないわ・・・でも・・・』

「はい？」

『実由に変なことしたら・・・許さないわよ？』

「はい！ もちろんです！！」

電話越しでとんでもない威圧感を感じた時谷は、思わず背筋も伸びてしまった

『ええ・・・それじゃ、実由のこと・・・お願いね？』

「はい！ 失礼します！！」

そう言って電話を切り、そのままへたり込んでしまう時谷

「はあ・・・なんか怖かった・・・」

「あれ？ 時谷君？」

「あ、実由・・・っ！！？」

実由の声に顔を上げ、すぐに目を逸らした時谷

風呂上りで上気した肌・・・時継の用意した実由には大きめのYシヤツから伸びる足・・・外したボタンから僅かに見える胸の谷間・・・

アカデミアでも明日香と並ぶ程のスタイルを持っている実由のとてもない破壊力に一気に顔が赤くなる

「どうしたの？」

そのまま時谷に近寄ってくる実由

「な、なんでもない！！ホットミルク、用意してあるから！！それじゃー！！」

「あ、時谷君・・・？」

慌ててホットミルクを指差し、洗面所へと走っていく時谷
実由も首を傾げていた

「はぁ・・・はぁ・・・あ・・・危なかった・・・」

脱衣所で再びへたり込む時谷

「と、とりあえず風呂に入ろう・・・」

服を脱ぎ、浴場へと入っていく

【実由SIDE】

「ふう・・・温かい・・・」

ホットミルクを飲みながらゆっくりしている実由
そんな時、実由の携帯が鳴る

「もしもし？」

『実由？私よ、実里』

「実里お姉ちゃん？・・・どうしたの？」

電話の相手は実里だった

『さっき時谷君から電話があったわ。実由、今日は時谷君の家に泊まるんでしょ？』

「え！？なにそれ！！？」

身に覚えの無い情報に声を荒げる実由

『あら、聞いてない？それはおかしいわね・・・』

電話の声が少し暗くなる

『でも、今日は仙波さんもお父さん達と一緒に帰ってしまっ、帰ってくるのも明日になりそうなの・・・だから、今日はそちらに泊まりなさい？』

「で・・・でも・・・」

『大丈夫よ・・・何かされたら、言いなさい？・・・お姉ちゃん達が助けてあげるから・・・』

途惑う実由を宥めながら、若干怖い実里

「う、うん・・・そうするね？」

『ええ、それじゃあ、おやすみなさい』

「うん。おやすみ」

そう言って電話を切る実由

「時谷君のお家に・・・お泊り・・・はう!!」

みるみる内に顔が赤くなっていく
それとほぼ同時に時谷が戻ってくる

「ふう・・・実由、温まったか？」

「う、うん!! ありがとう、時谷君」

驚きながらも時谷に礼を言う実由

「あゝ・・・それでだな、実由？」

「な、なに？」

「実由の服・・・今日中には乾かないと思うんだ・・・だから・・・
その・・・」

顔を赤くしながら前置きを言う時谷

実由も何を言われるのか大体分かっているので、顔を赤くしていく

「今日・・・泊まってけ？」

「う・・・うん・・・」

顔を赤くしながら提案する時谷に、同じく顔を赤くしながら頷く実由

「それじゃあ、部屋に案内するから着いてきてくれ？」

「うん」

緊張したまま部屋を出て行く時谷と実由

時谷の家は二階建てで、二階がそれぞれの寝室になっていて、部屋も来客用が用意されている

「ここ？」

「ああ、ベッドは今用意するから・・・」

そう言ってクローゼットを開ける時谷

中には折りたたみ式の簡易ベッドが入っていた

「こんな粗末な物で申し訳ないけど」

「そんな事ないよ！泊めてもらえるだけで十分だよ」

「そっか・・・あと、俺の部屋はこの隣だから・・・何かあれば呼んでくれな？」

「うん。ありがとう・・・時谷君」

「それじゃな・・・」

そう言って時谷は部屋を出て行く

時谷を見送った後、ベッドに座り、外を見つめる実由

「雨・・・明日には止むかな・・・？」

外の雨は、勢いを増していた・・・

【時谷SIDE】

「あゝ・・・緊張した・・・」

部屋のベッドに倒れこむ時谷

「もう寝るか・・・」

そのまま目を瞑ろうとしたとき、空が光り、ほんの数秒後に雷の音が響いた

「うわ!!・・・結構近かったな・・・」

さすがの時谷も驚いてしまう

《時谷様・・・》

「ん?・・・おう、ケルビム・・・どうした?」

ケルビムが神妙な面持ちで時谷の部屋にやってきていた

《その・・・実は・・・》

いい難そうに何かを時谷に説明するケルビム

【実由SIDE】

「ひっ!!」

雷の音が響くたびに涙目になり体を強張らせる実由

「うう・・・!!」

震えながら眠ろうとしているが、音が響くたびに目が覚めてしまっていた

そのとき、実由の部屋にノックの音がする

「実由・・・？」

「と、時谷君！？」

「今、大丈夫か？」

「えっと・・・ちょ、ちょっと待って！！」

慌てて服装を直して涙を拭き、呼吸を整えドアを開ける実由

「ど、どうしたの？」

「ああ、そのな・・・」

時谷が何かを言おうとしていると、また、雷の音が響く

「きゃあ！！！」

「実由！！！」

悲鳴をあげ、時谷にしがみつく実由

時谷もそれを受け止める

「ケルビムから聞いた・・・雷、苦手なんだろう？」

「あ・・・」

時谷の言葉にハツとなり、時谷の後ろを見ると、ケルビムが申し訳なさそうに立っていた

《申し訳ありません・・・姫様・・・》

ケルビムに何かを言おうとするが、雷の音で邪魔をされる

「きゃあ！！！」

さらに時谷にしがみつく

「俺でよかったら、落ち着くまで傍に居るから」
「うん・・・」

時谷に手を引かれ、ベッドに入る実由

「時谷君は？」

「俺は、毛布持ってきて床で寝るよ・・・」

「それじゃあ、時谷君が風引いちゃうよ!!」

「大丈夫だよ？それくらい・・・」

季節は冬、時谷は寝巻きに着ただけ・・・そんな格好で床に寝てはどうなるかは一目瞭然である

「・・・一緒に・・・嫌・・・？」

「え・・・」

少し考えた後、消え入りそうな声でそう切り出す実由

「このベッド、二人ぐらいなら入れそうだし・・・」

「いや・・・流石に、まずいだろ・・・それは・・・」

「どうして？」

顔を赤くしながらも時谷に質問する実由

「俺も、その・・・一応・・・男なんだし・・・」

「うん・・・分かってる・・・」

顔を赤くしながら、しかし、真っ直ぐに時谷を見つめる実由

「傍に・・・いて・・・？」

「・・・わかった・・・」

時谷が折れ、実由と同じベッドで寝ることとなった・・・

電気の消えた部屋に雨音だけが静かに響く

そんな中、とある家の一室で、男女が二人同じベッドに入っている
・・・背中合わせで・・・

（ね・・・眠れん・・・）

壁のほうを向いて、決して後ろを見ないようにしている時谷
今、時谷の後ろには、振り返るだけで触れられる距離に実由が居る
時折香る、実由の匂い・・・それだけで、心臓が破裂しそうになっ
ていた

（しっかりしろ！北上時谷！！）

目をぎゅっと閉じて雑念を振りほどいて眠ろうと必死になっている
眠ろうと数えた羊は、もう柵に入りきらずに溢れていた・・・

「・・・時谷君？」

「！？」

突然後ろから聞こえる実由の声

「もう・・・寝た・・・？」

「いや、起きてるよ」

平静を装い返事を返す

「今日は、ごめんね?・・・色々と迷惑かけて・・・」

小さく、消え入りそうな声で謝る実由

「気にするなよ。俺は迷惑だなんて思っていないよ」

「うん・・・優しいね・・・時谷君は・・・」

そう言うのと、実由は時谷の背中に触れる

「実由?」

「ちょっとだけ・・・こうさせて?」

そっと額を背中につける

「まだ、怖いかな?」

「まだちょっと怖いけど・・・大丈夫。時谷君が居てくれるから・・・
・こうして傍にいてくれるだけで、とっても安心する・・・」

「そっか」

ぴったりと体を密着させる実由

「・・・なあ、実由・・・」

「なに?」

「これからはさ、一人で抱え込まないでくれないか?」

「え・・・?」

「不安な時はさ、俺を頼って欲しい・・・」

言いながら、振り返る

「実由の不安を、一緒に取り除いてやりたい・・・」

「時谷君・・・」

「俺はさ・・・実由の・・・『彼氏』なんだしさ・・・」

顔を赤くしながらそう言う時谷

「・・・うん！」

実由も赤くなりながら頷く

そして、時谷は少しずつ顔を近づけ

「ん・・・」

「んう・・・」

そつと短いキスを交わした・・・

「さ、もう寝よう？」

「うん・・・時谷君？」

「なんだ？」

「手・・・握っていい？」

「ああ、ほら」

そう言って手を差し出す時谷

実由はその手を両手で包み込む

「おやすみなさい・・・時谷君・・・」

「ああ、おやすみ・・・実由・・・」

同時に目を閉じる二人

そして、朝までしっかりと手を握っていた・・・

TURN 15 (後書き)

どうも!!

というわけで原作キャラは遊戯さんのおじいちゃん『武藤双六』さんでした!

そして、時継さんはご都合主義的なタイミングで外出していただきました

初デートにしてお泊り・・・時谷君、羨ましいぞ!!

ここで、実由ちゃんの容姿について

実由ちゃんは明日香さんと並んで抜群のスタイルを誇ります
特に脚が綺麗で、他の生徒は「理想のサイズは胸は明日香さんで脚は実由さん」と思うほどです

実由ちゃんの弱点の提示とそれを知った時谷君の行動は、なかなかギャルゲーっぽいのではないだろうか・・・

さて、それでは次回からいよいよ「KCグランプリ」を開始します!
こんなの書いてないで早くやれよと思う方もいらっしゃると思います!

まったくです!反省してます!でも、後悔はしません!!

ではまた次回!!

TURN 16 (前書き)

お待たせしました!!

いよいよ、『KCグランプリ』の開始です!!

新キャラも出ます!!

TURN 16

《KCグランプリ開始！集う決闘者達》

実由と一晚を過ごし、翌日の姉達による厳しい追求を回避しつつ、二日が過ぎ、ついに大会の日が訪れる

童実野町にある巨大テーマパーク『海馬ランド』の一角に設置された巨大なスタジアムにそれぞれ、アジア、アフリカ、オーストラリア、北アメリカ、南アメリカの地方予選を勝ち抜き、選ばれた強豪五人と日本代表の一人、計六人が集結していた

「決闘者の諸君！よくぞ予選を勝ち抜いた！！今この場に居る君達は、栄光をその手に掴もうとしている！！今日という日に、最高の決闘者の称号を手にするチャンスは諸君等に平等に用意されている！！」

“ おおおおー！！！！ ”

スタジアムのにいるMCの言葉に会場全体が湧き上がる

【実由SIDE】

「すごい歓声ね・・・」

「まあ、あの『海馬コーポレーション』の行うイベントだしね」

「この大会も毎年やっとなるしのう」

実里、実幸、双六の三人がそれぞれ感想を言う
そんな中、実由はそわそわしていた

「実由さん？どうしたんだい？」

「い、いえ！なんでもありません！！」

時継が声をかけると、そう応えて再びそわそわしだす

（時谷君・・・何処かな？）

実は、時谷は優勝者と決闘することを秘密にしている
それを知らない実由は、出場者の中に居るはずの時谷の姿を探して
いた

【時谷SIDE】

そして、その時谷はというと・・・

「うわぁ・・・すごい人・・・」

MCが盛り上げている舞台の袖から会場を見ていた

「これくらいいつもの事だ」

「って言うか、時谷もいつも見慣れてるだろ？」

「まあ・・・」

これから舞台に向かう瀬人と付き添いで一緒にいるモクバが呆れて
いた

「社長、そろそろです」

「うむ・・・」

磯野に声をかけられ、舞台に向かう瀬人

「それでは、ここで今回の大会を主催した『海馬コーポレーション』社長、海馬瀬人に登場していただきます！！」

MCの紹介と同時に登場する瀬人

そして、舞台にあがりマイクを受け取る

「決闘者の諸君、此度の本選進出、見事だった・・・。己の全てを出し、勝利を掴み取るがいい！！」

“おおおおおー！！！！”

瀬人の一言に会場は再び沸いた

「社長、ありがとうございました！さらに、今回の大会の優勝者には、特典を用意しています！」

MCが告げる、出場者にも知らされていない事に、会場にはざわめきがおこる

「それは、この『KCグランプリ』の常連にして連覇中のチャンピオンであり、見事去年、殿堂入りを果たした北上時谷君との決闘です！！」

MCの後ろの巨大スクリーンに時谷の映像が映し出される

“ おおおおおー！！！！！！ ”

会場がざわめきから歓声に変わる

MCの言ったとおり、時谷はこの大会の常連であり、毎年優勝を掻っ攫っていくので殿堂入りという形になっている
ちなみに、このことは時谷も知らない

「殿堂入りって・・・」

「まあ、毎年時谷に優勝させるのも癪だって、兄様が・・・」
「そんな理由かよ・・・」

袖で聞いていた時谷も、モクバの説明で呆れてしまっている

「では、その北上時谷君に登場していただきましょう！！！！どうぞ！！」

「え！？聞いてないぞ！！！？」

「ま、諦めな？」

「はぁ・・・」

ため息を吐きながら舞台へと向かう時谷

登場と同時に、瀬人に負けないくらいの歓声が起こる

舞台に着くと、MCからマイクを手渡される

「えー・・・皆さんこんにちは、北上時谷です。なぜか、自分の知らないところで殿堂入りって事になってしまっていて、若干戸惑ってますが、光栄に思います」

苦笑いしながらいうと、会場にも僅かに笑いが起こる

「どんな決闘者が優勝するのか、俺としても楽しみです。ですから皆さん、全力で戦って、最高の決闘をしてください！以上です！！」

頭を下げ、マイクを返して袖に引っ込んでいく時谷

会場からは、たくさんの拍手で見送られた

途中、観客席に居る実由達を見つけて、手を振って戻っていった

【実由SIDE】

「そんな事になっていたとは・・・」

時継も苦笑いしていた

「驚きね・・・」

「っっていうか彼、よく私達に気付いたわね・・・」

実里、実幸の二人も呆れながら感想を言う

実由は、笑顔で手を振ってきた時谷に若干恥ずかしさを感じながらも、気付いてもらえたことに喜んでいた

「さあ、それでは早速本選の開始だ！」

MCの言葉に、巨大な装置が運ばれてくる
中には、数個のボールが入っている

「本選の第一回戦のカードは、この装置で決定されるぞ！開始前に諸君に配った札と同じ番号がこの中のボールに書かれている。その中からランダムに二つのボールが選ばれ、その瞬間に対戦カードが決定される。つまり、直前まで相手が誰か分からない訳だ！！」

MCが親切丁寧に説明する

「それでは・・・マシン・・・スタート！！」

そして、最初のカードを決めるための抽選が行われる・・・

【時谷SIDE】

「あれって『バトルシティ』の時と同じなんだな・・・」

「ああ、システムのにも丁度いいしな」

別室のモニターで見守っている時谷達

「磯野、不審な輩がいないかしっかり見張っておけ」

「はー！！」

モニターを一通り見た後、磯野に指示を出し出口に向かう瀬人

「瀬人さん？どこに？」

「いまから、各企業のものとかう・・・貴様の決闘までには戻る」

瀬人はそれだけ言うと部屋を出て行った

「さあ！！まず第一試合に選ばれたのは・・・北アメリカ代表『マイク』選手！！」

「イエーイ！！」

紹介されて手を挙げて声を張るアメリカ代表

「そして、その相手は・・・アジア代表、中国予選を勝ち抜いた『劉』選手！！」

「・・・・・・」

紹介されても無口に手を挙げているだけの中国代表

「正反対だな・・・あの二人・・・」

時谷による二人の第一印象はそんな感じだった・・・

呼ばれた二人以外の選手は控え室へと移動した

そして、互いにリンクに上がり向かい合う二人の代表

「さあ！！それでは早速・・・レエエエツ・・・デュエル！！！！」

「デュエル！！」

『KCグランプリ』第一試合が開始された・・・

【??? SIDE】

各選手の控え室にて

「うゝ・・・緊張するよゝ・・・」

部屋の片隅で、ぶるぶると小動物のように震えている少年
彼はこのグランプリの出場者で、日本代表の『御堂 翼』みどう つばな

「さあ！！マイク選手は、早速エースモンスターの召喚だー！！」

部屋に設置されているモニターから、現在のデュエルが映し出されている

「うわあゝ・・・やっぱり皆すごいんだなゝ・・・それに比べて・・・」

デュエルを見ながら段々と落ち込んでいく翼

「あ、あんな大勢の人が見てる中でデュエルするなんて・・・うゝゝ！！」

再び震えだす翼

彼は人見知りが激しく、家族や友人以外の人間とは目を合わせるのが苦手なのだ

「も、もう一度トイレに・・・」

そう言って、もう何度目かのトイレに行く翼

「トイレ、トイレ!!」

もう出るものも出ないはずなのに急いでトイレに向かう翼

「ふう・・・すっきりした」

そして、トイレから翼の方へ歩いて来る青年の声
互いに曲がり角に差し掛かったとき

「うわ!!」「おっと!!」

狙ったようにぶつかった

「あ!ご、ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

しりもちを付いたが、そんな事を気にも留めずに慌てて頭を下げる翼

「い、いや。こっちこそ悪い」

翼の様子に若干戸惑いながらも宥める青年

「立てるか？」

そう言って手を差し伸べる青年

「は・・・はい。・・・あっ!!」

手を握って立ち上がり青年の顔を確認し、目を見開く翼

「き、北上時谷さん!？」

「え？ああ、そうだけど・・・君は？」

「ああ！！ば、僕、御堂翼って言います！！」

時谷に聞かれ、どもりながら自己紹介する翼

「御堂翼・・・確か、日本代表の？」

「は・・・はい！そうです！！」

あらかじめ渡されている参加者の名前を思い出しながら言う時谷に
頷く翼

「そっか・・・頑張れよ？応援してるからな？」

「は、はい！！あ、ありがとうございます！！」

肩を軽く叩いて去っていく時谷をボーっと見つめる翼

「か、かっこいいな～！！」

見えなくなった後の第一声がこれ

「やっぱ、僕なんかと違って、すごい人だな～・・・」

そう小さく呟くと

「さあ！！第一試合の勝者は、アジア代表の劉選手だあ！」

丁度、第一試合が終わったところだった

翼もそれを廊下で聞く

「それでは、間髪いれずに第二試合の組み合わせの抽選だ！！・・・

マシン、スタート!!」

MCの合図に作動を開始する抽選マシン

「・・・第二試合、先ず一人目の決闘者は・・・アフリカ代表『モルホイ』選手!!そして、もう一人は・・・日本代表『御堂』選手!!」

「え?」

スピーカーから聞こえた声に数秒思考が停止する翼

「・・・・・・・・えええええ!!?」

そして、彼の絶叫が誰も居ない廊下に木霊した

TURN 16 (後書き)

どうも！！

何とか更新できました

遂に『KCグランプリ』が開始されました

そして、新キャラである翼君も登場です！

こんな登場したら、優勝者もわかってしまいますが・・・それはそれで

次回は、翼君がデュエルします

翼君のデッキがどんなものなのか？お楽しみに！！

ではまた次回！！

TURN 17 (前書き)

今回は翼君のデュエルですが・・・

どうしてこうなった・・・？

TURN 17

《翼の一回戦、新たな刺客》

「さあ！！早くも第二試合だ！劉選手に続く決闘者は果たしてどちらなのか！？・・・それでは、選手の入場だあ！！」

MCの後ろから白煙が噴き出し、収まったと同時に二人の決闘者が入場する

「まずは、アフリカ予選を勝ち抜いたモルホイ選手！！」

「うおおおおお！！」

色黒で、背の高い男が思い切り叫ぶと、会場からも大きく歓声が沸く

「そして、われらが日本代表、御堂翼選手だあ！！」

「ひゃい！？」

紹介されると、変な声で答えてしまった翼
会場からもわずかに笑いがおこる

「それでは、両者のデッキをシャッフル！！」

互いのデッキを渡し、それぞれシャッフルして返し、ディスクにセ
ット

そして、互いに離れて構える

この一連の動作中、翼はずっと緊張していた・・・

「それでは・・・レエエエツツ・・・！」

「デュエル!!」

「でゅ、デュエル！」

【時谷SIDE】

「お!さっきの」

モニタで、さっきトイレで出会った少年をどこか嬉しそうに見ている時谷

「なんだ?時谷、あいつ知ってんのか？」

「ああ、さっきな・・・」

隣のモクバに聞かれ、はぐらかしながら答える時谷

「さて・・・」

不意に、立ち上がり部屋を出て行こうとする時谷

「どこ行くんだ？」

「会場。もう少し近くで見たいしな？」

「そっか・・・顔隠していけよ？」

「そのほうが目立って・・・」

苦笑いしながら部屋を出て行く時谷

それを見た後、モクバは直ぐにモニタに視線を戻した・・・

【翼SIDE】

「オレのターン、ドロー!! オレは、ギガント・セファロタスを召喚!!」

モルホイの場に、不気味な食虫植物が召喚される

ギガント・セファロタス 攻撃力 1850

「更に、永続魔法『世界樹』を発動だ!!」

モルホイの後ろに巨大な樹が現れる

(永続魔法・・・どんな効果なんだろう・・・?)

世界樹を見上げながら考える翼

デュエル中は緊張がいくらか和らいでいるようである

「カードを一枚セット。ターンエンド!!」

モルホイ LP 4000

場 ギガント・セファロタス 攻撃 1850

世界樹 伏せ一枚

手札三枚

「僕のターン。ドロー!」

手札を一通り確認する翼

(相手のモンスターの攻撃力は1850・・・なら、このモンスター

ーで!」

「僕は、手札から永続魔法『六武衆の結束』を発動して、切り込み隊長を召喚!」

顔に傷を負った二刀剣士が召喚される

切り込み隊長 攻撃力 1200

「更に、切り込み隊長の効果! 召喚されたとき、手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚できる! 手札から六武衆の御霊代みたましろを特殊召喚!」

日本風の鎧を纏った霊体が召喚される

六武衆の御霊代 守備力 500

「場に『六武衆』が召喚・特殊召喚されたとき、場の『六武衆の結束』に武士道カウンターをひとつ乗せる!」

六武衆の結束 カウンター1

「そして、場に『六武衆』と名の付くモンスターが居るとき、手札の六武衆の師範を特殊召喚!!」

眼帯をつけた白髪の老人が召喚される

六武衆の師範 攻撃力 2100

「そして、カウンターを更に一つ乗せる」

六武衆の結束 カウンター2

「一気に三体ダト!？」

「まだです! 『六武衆』と名の付くモンスターが二体以上存在するとき、大將軍 紫炎を特殊召喚!！」

赤い鎧を纏った武士が召喚される

大將軍 紫炎 攻撃力 2500

「よ、四体・・・!!」

翼のいきなりの大量展開に驚くモルホイ

「更に『六武衆の結束』の効果発動! このカードを墓地に送ることで、乗っている武士道カウンターの数だけドローできる! 乗っているカウンターは二個。よって二枚ドロー!」

モンスターを展開し、更に二枚のドローを成功させる翼

「手札から、魔法カード『天使の施し』を発動! 三枚ドローして、手札を二枚墓地に捨てる」

手札を確認し、二枚を墓地に送った

「そして、墓地の『六武衆』を二体除外して、紫炎の老中 エニシを特殊召喚!！」

刀を腰に差し、丁髷頭の武士が現れる

モルホイ LP 4000 ↓ 0

「き・・・決まったー！！なんと翼選手、1ターンキルだー！
！さすがは代表選手！見事な戦術で、二回戦進出だあ！！！」

一瞬呆けていたMCの言葉に再び湧き上がる会場

「ふう・・・か、勝てた・・・」

緊張が解け、へたり込む翼

こうして、翼の二回戦進出が決定した・・・

【実由SIDE】

「すごい・・・」

「1ターンキル・・・」

翼のデュエルを見ていた実由達もかなり驚いていた

「いやはや、さすがは厳しい予選を勝ち抜いてきたものだ・・・」
「見た目と違って、やることがえげつないわね・・・」

感心している時継と呆れてしまっている実幸

「将来有望じゃのー！！」

双六は嬉しそうに笑っていた

《!! 姫様!!》

(どうしたの? ケルビム)

《なにやら不穏な気配がします・・・》

(え!?)

ケルビム言葉にあたりを見渡す実由

「どうしたんだい? 実由さん?」

「あ! いえ・・・」

時継に答えながらケルビムに話を聞いてみる実由

(本当なの?)

《おそらく・・・ゼラートならば、もう少し詳しく分かると思うのですが・・・》

ケルビムの答えに少し考え込む実由

(・・・なら、行ってみよう!)

《ひ、姫様!?!》

実由の言葉に驚いてしまうケルビム

(時谷君とゼラートのところに・・・だよ?)

《あ・・・そうですね・・・》

気配の元に向かうのかと思っていたので少し安心するケルビム

(そうと決まれば!)

「あ、あの・・・お姉ちゃん!」

「ん? なに?」

「その・・・私・・・」

少しもじもししながら言いよどむ

「ああ・・・分かったわ。行ってらっしゃい」

「う、うん! ごめんね?」

実由の行動で何かに気付いて頷く実里

「構わないわ。でも、急がないと次の試合に間に合わないわよ?」

「そ、そうだね! じゃあ、行ってくるね?」

「ええ」

実里に見送られて走り去る実由

「おや? 実由さんは?」

「乙女の事情よ」

「ふむ・・・そうか・・・」

実里の言葉に何も聞かずに頷く時継

「とりあえず、時谷君に連絡を・・・」

そう言って、携帯を取り出し、時谷に電話をかける実由

『もしもし?』

「あ、時谷君!? 私!」

『実由? どうした・・・そんなに慌てて』

「えっと・・・」

時谷にケルビムの感じた気配について話そうとしたときだった

《姫様!》

「え? きゃあ!」

実由を黒い霧が包み込んだ・・・

【時谷SIDE】

「実由?・・・実由!」

ケルビムの叫び声の後、電話から実由の声がなくなり、必死に呼びかける時谷

《若!! 闇の気配です!!》

「なんだって!? それじゃあ、さっきの電話は・・・くそ!! ゼラート!!」

《はっ!!》

携帯を閉じ、走り出す時谷

「何で気付かなかった!」

《気配を殺していたようです・・・アカデミアのときと同じように・

・・》

「くっ!!」

ゼラートの言葉に顔をしかめる時谷

隠れている闇までは察知できないのがゼラートの唯一の欠点である
ゼラートよりも先にケルビムが気付いたのは、出始めた闇の気配の
傍にいたためである

《このまま真っ直ぐです!!》

「ああ!!」

(実由・・・!!)

最愛の人を案じながら向かう時谷

【実由SIDE】

《姫様!!・・・姫様!!》

「う・・・うん・・・ケル・・・ビム・・・?」

ケルビムの呼びかけで、暗い空間の中意識を取り戻す実由

「ここは？」

《あの霧の中だと・・・》

「それって、あの・・・モースって人が使ってた奴？」

《はい・・・あの時と、同じ気配を感じます》

起き上がりながら、周囲を見る実由

目の前にあるのは黒い空間、見えるのは数メートル先だけだった

そんなとき、怪しげな足音が聞こえてくる・・・

「フッフッフッフ・・・!!」

「!!」

笑い声に振り向く実由

そこには、モースと同じように黒いローブを身に纏い、フードを深々と被っている人物が居た

「誰!？」

「私の名はマリア・・・闇の決闘者・・・」

「闇の・・・決闘者!？」

「ええ・・・北上時谷を消すために、まずはあなたを消しに来たの・・・」

「私を・・・」

「そう。あなたを闇に葬れば、北上時谷も同じように闇に墜ちる・・・こんなに簡単なことはないわ」

小さく笑いながら、語るマリア

「さあ・・・私とデュエルなさい!!」

それだけ言うと、ディスクを展開する

「くっ!!」

実由も慌ててディスクを起動する

「デュエル!!」

マリアと実由の闇のデュエルが始まる・・・

TURN 17 (後書き)

どうも

二人目の闇の決闘者が現れました・・・

しかし、翼君の一回戦・・・やっちゃったよ・・・1ターンキル

考えたのに・・・相手のデッキのコンセプトも考えたのに・・・なんでだ!?

そして・・・字数稼ぎとしか思えない急展開・・・

ともあれ、次回は実由ちゃんの初闇のデュエルをお送りします

ではまた次回!!

TURN 18 (前書き)

今回は、実由ちゃんの闇のデュエルです!!

TURN 18

《VS マリア・ライトロード封殺!?!?》

暗い霧に包まれ、互いに向き合う実由とマリア

「「デュエル!!」」

マリア LP 4000

実由 LP 4000

「ワタシのターン! ドロー!!」

先攻はマリア

「ワタシは・・・二枚のカードをセット。そして、モンスターを裏守備表示でセット。ターンエンド!!」

マリア LP 4000

場 伏せモンスター一体

伏せ二枚

手札三枚

「（伏せが二枚・・・カウンター系?）私のターン、ドロー!!」

「この瞬間、永続罠発動! 『マクロコスモス』! 互いのカードは墓地に行かずに除外される!!」

「そんな!?!」

マリアのカードに驚く実由

ライトロードは墓地にカードがあつてこそ真価を発揮する
その墓地にカードが行くのを封じられれば、切り札である裁きの龍
が召喚されることは無い

「それなら・・・ライトロード・マジシャン ライラを召喚!!」

ライトロード・マジシャン ライラ 攻撃力 1700

「そして、ライラの効果を発動!! ライラを攻撃表示から守備表示
に変更して『マクロコスモス』を破壊する!!」

ライラの杖から光の弾が発射され、カードに向かっていくが

「残念だけど、更に永続罨発動! 『閃光を吸い込むマジック・ミラ
ー』! 場の光属性モンスターの効果を無効にする!!」

「え!?!」

ライラの杖から放たれた光を、鏡が取り込む

「でも、これでライラは守備表示にはならない・・・良かったわね
?」

「くっ!! バトル! ライラで守備モンスターに攻撃!!」

再び光の弾を作り出し、モンスターに向かって放つライラ

「伏せモンスターは異次元の偵察機・・・『マクロコスモス』の効
果で除外するわ」

「カードを二枚セット・・・」

「エンドフェイズ、除外されている異次元の偵察機を攻撃表示で特

殊召喚するわ」

丸く、頭に大砲を持った機械が次元の渦から現れる

異次元の偵察機 攻撃力 800

「ターンエンド！」

『閃光を吸い込むマジック・ミラー』の効果で、ライトロードの墓地肥やしが発動しない

実由 LP 4000

場 ライトロード・マジシャン ライラ 攻撃 1700

伏せ二枚

手札三枚

「ワタシのターン、ドロー！！ワタシは、異次元の偵察機を生贄に、氷帝メビウスを召喚！！」

吹雪の中から、白い鎧とマントを羽織った氷の帝王が召喚される

氷帝メビウス 攻撃力 2400

「帝・・・」

「メビウスの効果よ。生贄召喚に成功したとき、相手の場の魔法・罠ゾーンのカードを二枚まで破壊する！！あなたのその伏せカードを破壊させてもらうわ！！」

「きゃあ！！！」

メビウスの足元から氷の柱が現れ、カードを破壊する

伏せカードは『閃光のイリュージョン』と『ライト・リサイレンス』

「バトルよ！メビウスで、ライラを攻撃！！」

メビウスの手から吹雪が放たれ、ライラを氷付けにし破壊する

「きゃあ！！」

衝撃が実由を襲う

実由 LP 4000 ↓ 3300

「フフ！！どう？闇のデュエルのお味は・・・いいものでしょう？」

不気味に笑うマリア

（これが・・・闇のデュエル・・・）

実由の体が震える

恐怖が体を支配していく

「エンドフェイズ、異次元の偵察機が特殊召喚される。ターンエンド」

マリア LP 4000

場 氷帝メビウス 攻撃 2400

異次元の偵察機 攻撃 800

マクロコスモス

閃光を吸い込むマジック・ミラー

手札三枚

マリアがエンド宣言しても、実由は動こうとしなかった

「どうしたの？無理しなくてもいいのよ？・・・闇に身をゆだねて、楽になりなさい？どうせ、北上時谷もすぐ後を追ってくるだろうから」

「時谷君・・・」

【時谷SIDE】

「ここか・・・」

実由を探す時谷は、海馬ランドにある一つの施設に到着した

「どうだ？」

《間違いありません・・・闇はこの先に・・・おそらく姫も》

ゼラートの言葉に頷く時谷

「よし・・・行くぞ!!」

《はっ!!》

走りだし、中に入っていく時谷

（実由・・・）

【実由SIDE】

《姫様!! しっかりしてください!!》

(ケルビム・・・)

膝を付き、諦めかけていた実由を必死に呼び戻すケルビム

《諦めてはいけません!! 時谷様なら、決して諦めませんよ!!》

時谷の名前に僅かに反応する実由

(そうだ・・・時谷君なら・・・絶対に諦めない!!)

その瞬間、実由の目に光が戻る

「私のターン・・・ドロー!!」

恐怖を振り払い、引いたカードを確認する

「私は、モンスターをセット! 更にカードを一枚セットして・・・
ターンエンド!!」

実由 LP 3300

場 伏せモンスター一枚

伏せ一枚

手札二枚

「威勢だけは立派ね・・・ワタシのターン、ドロー!! ワタシは、
異次元の偵察機を守備表示に変更」

異次元の偵察機 守備力 1200

「そして、異次元の生還者を召喚!!」

ボロボロのローブを纏った戦士が召喚される

異次元の生還者 攻撃力 1800

「バトルよ。異次元の生還者で、伏せモンスターを攻撃!!」

拳を握り、突撃する生還者だが

「守備モンスターは、ライトロード・ドルイド オルクス!! 守備力は1800!!」

ライトロード・ドルイド オルクス 守備力 1800

「ふん! ならばメビウスでオルクスを攻撃!!」

氷付けにされ、破壊されるオルクス

「ターンエンドよ」

マリア LP 4000

場 氷帝メビウス 攻撃 2400

異次元の偵察機 守備 1200

異次元の生還者 攻撃 1800

マクロコスモス

閃光を吸い込むマジック・ミラー

手札三枚

「私のターン・・・ドロ!! (このモンスターなら!!) 私は、

ライトロード・パラディン ジェインを召喚!!」

ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃力 1800

「更に、装備魔法『ライトロード・レイピア』をジェインに装備!!」

ジェインの持つ剣が、両刃の剣から光を帯びた細剣^{レイピア}に変わる

「『ライトロード・レイピア』の効果! 『ライトロード』と名の付いたモンスターのみ装備できる。そして、装備モンスターの攻撃力を700ポイントアップする!! ジェインの攻撃力を700ポイントアップ!!」

ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃力 1800 ↓ 2500

「メビウスを超えた・・・」

「バトル!! ジェインでメビウスを攻撃!!」

メビウスに突きを放つジェイン
メビウスは腕をクロスして防御するが、耐え切れずに破壊された

「くっ!!」

マリア LP 4000 ↓ 3600

「な・・・何故!? 攻撃力の差は100のはず・・・」

「ジェインの効果・・・モンスターとの戦闘時、ダメージステップの間だけ攻撃力を300ポイントアップする・・・」

「そんな・・・『閃光を吸い込むマジック・ミラー』があるのに・・・」

「その罠が止められるのは・・・『チェーンに乗る』効果だけ。この効果は・・・『チェーンに乗らない』効果よ」

カードの効果の間を縫った作戦である

「カードを更に一枚セットして、ターンエンド」

実由 LP 3300

場 ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃 2500

ライトロード・レイピア（ジェイン）

伏せ二枚

手札無し

「たった一度、攻撃を成功させても！！ワタシのターン！！ワタシは速攻魔法『サイクロン』を発動！！『ライトロード・レイピア』を破壊！！」

突風により破壊されるレイピア

ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃力 2500 ↓ 1800

「そして異次元の偵察機を生贄に、地帝グランマークを召喚！！」

黄色の鎧を着たモンスターが現れる

地帝グランマーク 攻撃力 2400

「二体目の帝・・・」

「グランマーズの効果！生贄召喚されたとき、場の伏せカードを一枚破壊する！！対象はワタシから見て右の伏せカードよ！！」

今度は、地面から土の柱がカードを破壊するが

「それなら、リバーズカードオープン！罠カード『荒野の大竜巻』！！」

「なっ！？」

「魔法・罠ゾーンに表側表示で存在するカードを一枚破壊する！！対象は・・・『マクロコスモス』！！」

巨大な竜巻により、破壊される『マクロコスモス』

「これで、カードを墓地における」

「それがなんなの！？グランマーズで、ジェインを攻撃！！」

グランマーズは地割れを起こし、ジェインに迫るが

「罠発動！！ライトロード・バリア！！『ライトロード』が攻撃対象にされたとき、デッキから、カードを二枚墓地に送ることで、その攻撃を無効にする！！」

デッキのカードを二枚送ると、ジェインの周りを結界が守る

「くっ！！エンドフェイズ、異次元の偵察機を特殊召喚して・・・ターンエンド！」

マリア LP 3600

場 地帝グランマーズ 攻撃 2400

異次元の生還者 攻撃 1800

異次元の偵察機 攻撃 800

閃光を吸い込むマジック・ミラー

手札三枚

「私のターン！ドロー！！私は魔法カード『光の援軍』を発動！！デッキの上から三枚を墓地に送り『ライトロード』と名の付くモンスターを一枚手札に加える！！私は、ライトロード・ウォリアーガロスを選択！！」

デッキから三枚送られる

「そして、『光の援軍』の効果で墓地に送られた『ライトロード・レイピア』の効果発動！！デッキから墓地に送られたとき、場の『ライトロード』に装備できる！！再び、ジェインに装備！！」

ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃力 1800 ↓ 2500

「更に、ライトロード・ウォリアー ガロスを召喚！！」

ライトロード・ウォリアー ガロス 攻撃力 1850

「バトル！！ジェインでグランマーグに攻撃！！更に、ジェインの効果で攻撃力を300ポイントアップする！！」

ライトロード・パラディン ジェイン 攻撃力 2500 ↓ 2800

「くう！！」

マリア LP 3600 ↓ 3200

「更に、ガロスで異次元の偵察機を攻撃!!」

ガロスの戦斧に真つ二つにされる偵察機

「ぐう!!」

マリア LP 3200 ↓ 2150

「ターンエンド!!」

実由 LP 3300

場 ライトロード・パライン ジェイン 攻撃 2500

ライトロード・ウォリアー ガロス 攻撃 1850

ライトロード・レイピア (ジェイン)

ライトロード・バリア

手札無し

「ワタシのターン! ドロー!!! フフ!!」

ドローしたカードを見て、小さく笑うマリア

「残念だけど、ここまで・・・よくやったほうだと褒めてあげる」
(・・・何を引いたの?)

マリアの様子に警戒を強める実由

「ワタシは、装備魔法『D・D・R』を発動! 手札を一枚捨てて、

除外されている氷帝メビウスを特殊召喚!!」

次元が歪み、中から這い出るように現れるメビウス

氷帝メビウス 攻撃力 2400

「そして、手札を一枚伏せ・・・そして、異次元の生還者とメビウスの二体を生贄に・・・破壊竜ガンドラを召喚!!」

黒い体に、真紅の模様の入った不気味な竜が現れる

破壊竜ガンドラ 攻撃力 0

「攻撃力0・・・（でも・・・彼女のあの余裕・・・）」

「実由!!」

「え・・・?」

突然の声に驚き、声のほうに振り向く実由

「と・・・時谷君!？」

そこには、一番会いたかった人物が立っていた

「実由!大丈夫か!!」

「う・・・うん!!」

思わず泣きそうになったが、なんとかこらえてマリアに向きなおす

「フフ・・・!一足遅かったわね・・・北上時谷!!あなたの大事な彼女は、もうすぐ消えるわ!!この、ガンドラの手によって!!」

「破壊竜・・・ガンドラ!!」

時谷は、ガンドラを睨む

「あなたは知っているのでしょうか？このモンスターの効果を・・・」
「効果・・・？」

マリアの言葉に首を傾げる実由

「・・・ガンドラは、ライフを半分支払い、場のガンドラ以外のカードを全てゲームから除外する・・・。そして、除外したカード一枚につき300ポイント攻撃力が上がる」

時谷の説明に再び怪しく笑うマリア

「さあ、破壊竜ガンドラよ！全てを異次元に葬りなさい！！『デストロイ・ギガ・レイズ』！！」

マリア LP 3600 ↓ 1800

全身から光線を放ち、全てを飲み込んでいく

「きゃあ!!」

「くっ!! 実由!!」

爆風に眼を閉じる実由と時谷

「フフフフ!!」

爆煙の中から、マリアの怪しげな笑いが聞こえてくる

「これで、あなたを守る壁はないわ・・・」
「っ!!」

破壊竜ガンドラ 攻撃力 0 ↓ 2100

「喰らいなさい、ガンドラ! 『デストロイ・ギガ・レイズ』!!」

今度は、口から炎吐き出し、実由を飲み込む

「実由!!」

「フッフ・・・アーハッハッハッハ!!」

高らかに笑うマリアだが・・・

「・・・墓地のモンスター効果・・・」

「ハッ!!?」

炎の中から、実由の声が響く
見ると実由の体を何かの影が守っていた

「あれは・・・まさか!!」

「ネクロ・・・ガードナー・・・」

マリアと傍で見ていた時谷も驚いていた

「墓地のこのモンスターを除外して、攻撃を一度だけ無効にする・・・」

ディスクからカードを取り出し、ポケットにしまう実由

「何故！？あなたのデッキにそんなカードが！！」

「時谷君がくれたの・・・」

「なんですって！？」

実由の言葉に時谷を睨みつけるマリア

（二日前）

実由が時谷の家にお泊りした翌日の朝方

お互いのデッキの調整をしていたときだった

「なあ、実由？」

「なに？」

「こいつ・・・デッキに入れておかないか？」

そう言って、一枚のカードを差し出す時谷

「ネクロ・ガードナー？」

「ああ、俺の意見としては、やっぱ防御面が弱い感じがするな・・・
ケルビムを召喚するためにも、場のモンスターを守ることも大事だ
と思うしな・・・」

「うーん・・・」

カードを見つめながら考える実由

「駄目か？」

「・・・ちょっと考えてみる」

「実由・・・お前・・・」

「せっかく時谷君がくれたんだもの・・・入れなきゃ・・・」

顔を赤らめながら笑う実由

「これで、ガンドラの攻撃は回避できた・・・」

「それに、ガンドラにはもう一つ効果がある！」

時谷がにやりと笑いながら言う

「ガンドラは、召喚されたターンのエンドフェイズに破壊される！
」

「くっ！！」

苦しみながら崩壊していくガンドラ

「ターンエンドよ・・・」

マリア LP 1800

場 無し

手札無し

「でも、あなたも場はがら空き！なにもしない！！」

「そんな事無い！！私は、私のデッキを信じてる！！私のターン！
ドロー！！」

力強くカードをドローする実由

「魔法カード『強欲な壺』！！デッキからカードを二枚ドローする

「!!」

「ここで・・・手札強化!?!」

実由のドロローにマリアも驚く

「これで・・・手札から魔法カード『おろかな埋葬』を発動! デッキからモンスターを一体墓地に送る!! そして、ウオルフの効果! デッキから墓地に送られたとき、特殊召喚できる!!」

ライトロード・ビースト ウオルフ 攻撃力 2100

「そして、ウオルフを生贄に・・・ライトロード・エンジェル ケルビムを召喚!!」

《はぁ!!!!》

実由の場に、最も信頼する相棒が召喚される

ライトロード・エンジェル ケルビム 2300

「行くよ!! ケルビム!!」

《はい! 姫様!!》

二人でマリアを見つめる

「ケルビムでプレイヤーにダイレクトアタック!!」

《はぁぁぁぁ!!!!》

ケルビムの杖から光の砲撃が放たれ、マリアを包み込む

「ぎゃぁぁぁぁぁ!!」

マリア LP 1800 ↓ 0

膝を付くマリア

そして、体を闇が飲み込もうとする

「ひっ!!」

闇はガンドラの姿を模してマリアに迫る

「時谷君!!」

「ああ!ゼラート!!」

《御意!!》

実由の声に、ゼラートと共に駆け出す時谷

「浄化する!!」

声と共に瞳が銀色に光る

「はあああああ!!」

手をかざし、闇の球体を引きずり出す

「ゼラート!!」

《はあ!!》

時谷の合図に球体を切り裂くゼラート
闇が治まり、カードだけが落ちる

「ふう・・・」

カードを拾い上げ、振り向く時谷
後ろでは、マリアが気を失っていた

「時谷君!!」

「実由!!」

駆け寄る実由を抱きしめる時谷

「よかった・・・本当に・・・」

「うん・・・来てくれるって・・・信じてた・・・」

押さえていた涙が一気に溢れる実由

「ごめんな・・・俺たちが・・・もっと早くに気付いたら・・・」

《申し訳ない・・・姫・・・ケルビム・・・》

解放し、頭を下げる時谷とゼラート

「ううん・・・私も油断したのがいけなかったし・・・」

《私も、しっかりと判断できていれば・・・》

ケルビムも申し訳なさそうにしている

「俺たちも、もっと力をつけなきゃな・・・もう、こんなことが無いように・・・」

《はい・・・》

そう言って、ゼラートと新たに誓いを立てる時谷だった・・・

「あっ！！ いっけね！ もうすぐ準決勝だ！！」

「私も！ 早くお姉ちゃん達のところに戻らなきゃ！！」

大会をすっかり忘れていた二人は、慌てて駆け出すのだった・・・

TURN 18 (後書き)

どうも!!

なんとか書きあげました・・・

急展開はするものじゃないですね・・・

さて、今回のマリアのデッキは【次元帝】を意識して、そこに破壊竜ガンドラを入れてみました・・・無茶だね！

『閃光を吸い込むマジック・ミラー』を選択したのは、実由ちゃんが『ライトロード』を使うからですね・・・『スキルドレイン』だとガンドラが使えないので・・・

ジェインの攻撃力アップの効果はチェーンブロックを作らない永続効果なので、『マジック・ミラー』では防がれません(Wiki調べ)

そして、困ったときのドローカードはもはや王道でしょう！

ライトロードにとうとう闇モンスターが入り始めましたが、今のところネクロだけの予定です

もしかしたら、今後抜けるかもしれませんが・・・

ではまた次回!!

感想待ってまゝす!!

TURN 19 (前書き)

何とか書きあげました・・・

今回も結構無理やりかもです・・・

TURN 19

《楽しい大会の裏で・・・》

・ マリアとのデュエルの後、実由は客席、時谷は控え室へと戻った・

【実由SIDE】

「もう、どこまで行ってたのよ？」

「心配したわよ？」

実幸、実里の二人が声をかけてくる

「ご、ごめんね？・・・その、迷子の子がいたから、お母さんを一緒に探してたの・・・」

適当な言い訳をする実由

「それは大変だったね・・・見つかったの？」

「あ、はい・・・」

信じてしまった時継に頷きかえす

「それはよかった・・・今、第三試合が終わったところだよ」

「あ・・・どこが、勝ち残ってるんですか？」

時継に経過を聞いてみる

「第三試合は、オーストラリア代表の勝ち・・・勝ち残ったのは中国、オーストラリア、そして日本の三人だよ」

勝者と、状況を簡潔に教える時継

「この中の一人は、そのまま決勝に進出じゃ！」

さらに双六も補足する

実由も舞台に眼を向ける

【時谷SIDE】

「ふう・・・どうなってる？」

「なんだ？お前別のところで見てたんじゃないのか？」

部屋に戻り、モクバに状況を聞くと、呆れたように答えるモクバ

「まあ・・・ちよつとな・・・迷子の世話を・・・」

「なんだそれ・・・」

時谷もまた、実由と同じ言い訳をしていた（打ち合わせてはいない）

「第三試合はオーストラリア代表の勝利。この後に、準決勝の組み合わせの発表だ」

「勝ち残ったのは三人だろ？どうするんだ？」

メンバー表を見てモクバに聞く

「ああ、選ばれなかった一人はそのまま決勝戦進出だ」
「なるほど・・・『運も実力のうち』・・・ってことな・・・」
「そう言うこと!!」

モクバも頷く

【会場SIDE】

『さあ！それでは、準決勝の対戦カードを発表だー!!』

MCが客席に向かって高らかに宣言すると、巨大なルーレットが登場した
ルーレットには中心から三等分して色分けされており、そこに各選手の名前が書かれている

『この抽選で選ばれた決闘者は、このまま決勝進出が決まるぞ！それでは・・・ルーレット・・・スタート!!』

MCの合図と共に回りだすルーレット

勢いよく周り、数十週したところに、回転が弱まってくる
そして、ゆっくりと回転を止めた・・・

『決勝戦へのシード権を獲得したのは・・・日本代表！御堂選手だあ!!』

モニタに翼の顔がアップで表示される

【時谷SIDE】

「つまり、準決勝は・・・」

「中国代表と、オーストラリア代表に決定だな・・・」

資料を見ながら時谷と会話するモクバ

（なるほど・・・翼君は、運もいいな・・・」

個人的に応援している時谷もうれしそうにしていた

【翼SIDE】

「ぼ・・・僕が・・・決勝戦に・・・？」

発表から数分間、そんな事ばかり言い続けている翼

「ど・・・どうしよう！？一回戦は何とか勝てたけど・・・決勝なんて勝てないよ！！！」

控え室をぐるぐる回りながら慌てている翼

「で・・・でも・・・時谷さんも・・・応援してくれてるし・・・」

トイレで会った時谷の言葉を何度も脳内再生している翼

「でも・・・僕なんかじゃ・・・はあ・・・」

再び落ち込み、ため息を吐く翼

そして、そんな翼を影から見ているものがあつた・・・

《・・・・・・・・》

【時谷SIDE】

「ん？なんだ・・・この影・・・」

時谷は、モニタの一つを凝視する

そのカメラは、備品なんかを補完している倉庫の監視カメラである

「誰か・・・いるな・・・」

「なんだって？」

時谷に言われ、モクバもモニタを見る

「本当だ・・・誰だ？・・・暗くて見難いな・・・」

荒い映像のため、個人の識別が難しい

「俺が見てくるか？」

「え？でも・・・」

時谷の提案に、少し考え込むモクバ

「ちょっと見てくるだけだ。一応、瀬人さんにも報告しといてくれ」
「・・・わかった・・・頼むぜ？」
「ああ」

モクバの言葉に頷き、部屋を出て行く時谷

【??? SIDE】

「くそっ！何もねえのかよ！！」

悪態をつきながら傍にある箱を蹴る男

この男は、窃盗目的でこの『海馬ランド』にあるであろう金目のものを盗みに入っただが、迷ってしまい、倉庫を彷徨っていたのだ

「あるのは備品ばかりじゃねえか・・・ん？」

ブツブツといいながら歩いていると、足音が近付いてくる

「誰か来る！？」

慌てて物陰に隠れる

「ん？・・・誰もいないのか・・・気のせいだったのかな・・・。
おかしいな・・・確かに確認したんだけどな・・・」

息を潜めて、立ち去るのを待つ

「・・・ここに隠れてるんだろ?・・・出てきたら?」
「っ!?!」

突然、声が今いる場所まで届き、驚いてしまう

(な・・・なんで!?)

「ま、直ぐに警備員が来るだろうけどな・・・捕まるっていう運命は、変わらないと思うけどな・・・」

声が段々と近付く

(くっ!! だったら!!)

声のもとへと勢いよく飛び出す男

「うらああああ!!」

「おっと!」

特攻してきた男を回避する

「なっ!?! ガキ!?!」

男は、声の主であろう人物を見て再び驚く

「ガキだけど・・・何か悪い?」

答えたのは、この大会の優勝者とデュエル予定の男、北上時谷であった・・・

【時谷SIDE】

話は、少しだでさかのぼる・・・
部屋を出、倉庫に足を踏み入れた時谷

「さて、何処にいるのかね・・・？」

《若、それならば私が・・・》

ゼラートがそう提案する

「確かに、ゼラートなら普通の人間には見えないしな・・・頼む」
《はっ！》

そう言ってゼラートも先に進む

とはいっても、時谷から（厳密には宿っているカード）からはそんなに離れられないため、時谷も少し離れて付いていく

そして、一つの部屋に入ると

《若！そこに隠れています！》

ゼラートが物陰を指差しながら、教えてくる

（サンキュ！）

「ん？・・・誰もいないのか・・・気のせいだったのかな・・・」

ゼラートに礼を言いながら、芝居を始める時谷

「おかしいな・・・確かに確認したんだけどな・・・」

あえて、声を挙げて言う

《若。どうやら、やり過ぎそうとしています》
(そうかい・・・なら)

ゼラートからの報告に、次の行動に移る時谷

「・・・・・・・・そこに隠れてるんだろ？・・・出てきたら？」

しっかりと、男のいる地点に向けてそう言った

「ま、直ぐに警備員が来るだろうけどな・・・捕まるっていう運命は、変わらないと思うけどな・・・」

言いながら近付いていく

《若!!!》

ゼラートが叫ぶと共に、男が飛び出してくる

「うらああああ!!」

「おっと!!」

時谷も簡単にそれを回避する

「なっ!!? ガキ!?!」

男は、時谷を見て驚いていた

「ガキだけど・・・何か悪い？」

時谷は、そんな男を見下ろしながらそう答えた

「いい大人が、窃盗なんて・・・恥ずかしくないわけ？」

「うるせえ！！邪魔すんじゃないねえ！！」

時谷の言葉に、怒りを露にし、殴りかかってくる

「よつと！！！」

「ぐえ！！！」

時谷はひらりと回避し、男の腹に蹴りを入れる

あまりの痛さに、男は膝を付く

「あいにくと、こういう輩に対処するための術は、昔から習ってんだよ・・・」

生まれの関係上、護身術を習い、基礎の体力づくりをしている時谷
そんじょそこらの不良や、こういった窃盗犯には遅れはとらない

「ま、諦めてくれ？」

「くっ・・・！」

近付いてくる時谷を睨みつける

「っ！！！」

「おっと・・・」

立ち上がり、再び体当たりをしてきた男だが、威力も無く、時谷に

もたれかかるような体勢になったが・・・

「え・・・？」

突然、自分に起こった異変に気付いた時谷

「！！？」

慌てて男を引き剥がす

男の手には、血の付いたナイフが握られていた

「ぐっ！！」

急に腹部に痛みが走り、自分の腹を見る

すると、真っ赤な血が流れ出ていた

「へっ！！油断しすぎたなあ！！このガキが！！」

「ぐあっ！！」

痛みのせいで反応が遅れ、男に殴られる時谷

「一丁前にヒーロー気取ってんじゃねえ！」

「がっ！」

男は、倒れた時谷の傷口に蹴りを入れ続ける

時谷の傷口から血が流れ続ける

しばらく蹴り続けられていると、複数の足音が近付いてくる

「そこまでだ！！」

「おとなしくしろ!!」

時谷からの連絡で駆けつけた警備員達が、男を拘束する

「大丈夫か!？」

「は・・・はい・・・うう・・・」

傷口を押さえながら、答える時谷

「直ぐに手当てをしないと・・・おい!」

「はっ!!」

もう一人の警備員に担がれ、医務室に運ばれた時谷であった・・・

TURN 19 (後書き)

どうも

と、言うわけでまたしても超展開です

素人判断で行動したらダメですよ！っていう教訓の回でした・・・

・・・嘘です。すいません・・・

はたして、時谷君は大丈夫なのか！？

まさか・・・このまま最終回なのか！？

では、また次回！！

TURN 20 (前書き)

約一ヶ月ぶりの投稿です・・・

お待たせしてすみませんです・・・

TURN 20

《時谷の負傷、時継の条件》

海馬ランド・医務室にて・・・

一瞬の油断で負傷した時谷は、治療を受けた後、ベッドで眠っていた

「時谷は大丈夫なのか!？」

「はい。止血も済んでおりますし、呼吸も安定しております・・・
あとは、安静にしていれば大丈夫かと・・・」

医務室でなるべく抑えた声で磯野に時谷の状態を聞きだすモクバ

「オレのせいだ・・・オレの・・・」

自分の安易な考えで友人を負傷させたことに、モクバも落ち込んでいた

「モクバ」

「あ、兄様!!」

話を聞き、会談を中断した瀬人が入ってくる
そして、磯野からモクバと同様に説明を受ける

「ふうん・・・その愚か者は？」

「すでに拘束し、警察へ・・・」

「うむ・・・」

おもむろに携帯を取り出し、どこかに電話をかける瀬人

「・・・時継か・・・俺だ・・・」

【時継SIDE】

「そうか・・・時谷が・・・」
『うむ・・・』

電話で時谷の状況を聞いた時継は小さくそう言う
内容から、1度実由達から離れて電話をしている

『こちらのミスだ・・・』
「だが、今回は時谷が自分で言い出したことなんだろう？」
『それでも、負傷させた原因がこちらにある』
「・・・」

瀬人から、今までに無いほどに暗い声で話される

「・・・わかった。この件はそちらのミスとして受け止めよう・・・」

『ああ』
「だから、それ相応の見返りを要求させてもらう」
『何でも言うがいい・・・確実に守る・・・』

瀬人のその言葉を聞き、頷きながら要求を述べる時継

【時谷SIDE】

「う．．．うん．．．？」

「あ！時谷！！大丈夫か！？」

「モ．．．クバ．．．？．．．あれ？」

目を覚まし、あたりを見渡す時谷

「あ、そっか．．．俺．．．」

段々と記憶が整理されていく

「強盗は？」

「警察につれてった．．．その．．．」

「ん？」

答えた後、俯き時谷を呼ぶモクバ

「すまねえ！！オレの．．．オレのせいで！！」

「モクバ．．．」

涙目になりながら謝るモクバ

「気にすんな？俺が言い出して、勝手に負ったケガだ．．．そっちに非は何も無いさ」

「でも！！」

なおも食い下がるモクバ

「それより、大会は？どうなった？」

「え・・・ああ、今決勝戦だよ・・・中国代表と日本代表の・・・もう終盤だけだな」

モニタをつけると、翼と劉が試合をしていた

『さあ！互いのライフはあとわずか！！両者、場と手札はなし！翼選手のこのドローで、決着が付くのかー！？』

『僕のターン・・・ドロー！！』

翼がカードを引き、確認する

「・・・・・・・・」

その様子を静かに見守る時谷

『僕は、六武衆―イロウを召喚！！』

『なーんと！翼選手、この場面でモンスターを引いたー！！』

『バトル！イロウでダイレクトアタック！！』

『ぐああああ！！』

切り付けられ、吹き飛ばされる劉

『決まったー！！勝者は日本代表、御堂翼選手！！よって、今年の『KCグランプリ』の優勝は、翼選手に決定だー！！！！』

MCが高らかに宣言すると、会場も歓声に包まれた

「決まったか・・・」

「さすがだな・・・彼は・・・」

モニタでその様子を見ていたモクバと時谷がそう言う

「さて・・・」

「ん・・・？おい！？時谷！！」

おもむろにベッドから立ち上がる時谷

「何してんだよ！？」

「何って・・・準備だよ・・・この後、翼君とデュエルするんだしな？」

当然とばかりにそう言うと、モクバは

「そんなケガで出れるわけ無いだろう！？」

「大丈夫だ・・・出来るさ」

「無理だよ！！」

絶対に行かせないとばかりに両手を広げる

「モクバ・・・俺は、瀬人さんからデュエルディスクの宣伝を依頼されてる・・・約束を破りたくない・・・それに、俺とのデュエルが中止になると。海馬コーポレーションのイメージも悪くなるだろう？」

「それはそうかもしれないけど・・・だからって！！」

「俺は・・・約束は何が何でも守る・・・絶対にな」

真正面から向かい合う時谷とモクバ
そこに

「ふうん・・・それくらい元気なら、問題あるまい」
「兄様!？」

いつからいたのか、瀬人が言う

「出来るんだな？」
「当然です」

それだけ言い合うと、瀬人はだまって頷き

「・・・無理そうならば、直ぐに中止する・・・いいな？」
「わかりました・・・ありがとうございます!!」

瀬人に頭を下げて部屋を出て行く時谷

【瀬人SIDE】

「兄様・・・いいの？」
「ああ・・・奴との契約だ・・・」
「契約？」

モクバが首を傾げる

瀬人は、時継との電話を思い出していた

『要求は一つ。』時谷が言ったこと一つを、無条件で了承すること』
・・・だ』
「なに？」

時継がだした条件はそれだった

『そちらが、時谷のケガに負い目を感じているなら、ケガをした本人の要求を呑むことが、こちらの提示する条件だ・・・どうだい？』
「・・・いいだろう・・・」

そのため、瀬人は時谷の「試合に出る」という要求を黙って承諾した

「そんなことが・・・」

「モクバ、時谷の様子をよく見て置けよ？」

「うん!!」

指示を出した後、瀬人は再び部屋を出て行った

【時継SIDE】

「ふう・・・」

「どうかしたんですか？時継さん」

戻ってきて一息ついた時継に実由が声をかける

「ちょっとね・・・仕事の話さ・・・」

「そうなんですか・・・」

「次は、いよいよ時谷の登場だね？」

「はい!」

時継の言葉に、笑顔で頷く実由

「あ、そうだ。実由さん？」

「はい？」

「僕のことは『お義兄さん』と呼んでね？」

「あ……はあ……」

実由におどけてそう言う時継は、複雑な表情で舞台を見ていた

（時谷……）

【時谷SIDE】

《若……大丈夫なのですか？》

「もちろんだ……いける……」

手早く着替えを済ませ、スタンバイする時谷にゼラートが声をかける

「後は、実由とかにばれないようにやるだけだ……それに……」

《それに？》

「彼……翼君とは、楽しいデュエルが出来そうだしな！」

そう言うと、会場に向かって歩き出す時谷

【会場SIDE】

『さあ！！長らくお待たせいたしました！！いよいよ、最後のデュ

エル！優勝者の御堂翼選手と、殿堂入りを果たした決闘者、北上時谷選手とのデュエルです！！まずは、挑戦者、御堂選手の入場だ！！」

スモークが勢いよく噴き出し、中から翼が出てくる

「ううう・・・」

いまだにおどおどしながら出てきた翼

『対して、この『KCグランプリ』の常連！北上選手！！』

反対側のゲートからもスモークが噴き出し、今度は時谷が出てくる
すると、会場は溢れんばかりの歓声を上げ、時谷も手をあげて答える

お互いに、デュエルリンクにのぼり向かい合う

「優勝おめでとう。翼君？」

「ひゃ、ひゃい！あ、ありがとうございますゆー！！」

緊張で噛みまくりの翼

「俺も、全力で相手をさせてもらおう！」

ディスクを起動すると、デッキが勢いよくシャッフルされる

「す・・・すごい！！」

驚いている翼と会場

『おーっと！これは、海馬コーポレーションの最新型のデュエルディスクだー！！』

「なお、このディスクは優勝者の君にも贈呈される予定だよ？」

「あ、ありがとうございます・・・」

礼を言うところなのか分からないが、とりあえず言う翼

「でも・・・せっかくだし・・・」

そう言うと、ディスクを操作しシャッフルを止めて翼に近づく

「お互いに、シャッフルしようか？」

ディスクから、デッキを抜き出して翼に渡す

「あ・・・は、はい！」

翼もデッキを抜いて時谷に手渡す

そして、互いに手でシャッフルを行ってディスクにセットした

距離をとり、互いに向かい合う

『それでは・・・ラストデュエルだー！！レッツ・・・』

「「デュエル！！」」

本日、最後のデュエルが開始される・・・

TURN 20 (後書き)

どうも！

お久しぶりの更新です！！

時継さんは、時谷の行動が手に取るようにわかります

現在、時継さんは実由ちゃんに「お義兄さん」と呼ばれるために必死です

今回は、時谷君と翼君のデュエルをお送りします！！

ではまた次回！！

P.S.

更新が遅くて本当にすみません
本編に戻れば、更新速度もおそらく元に戻りますので・・・

TURN 21 (前書き)

なんとか間に合いました・・・

TURN 21

《時谷VS翼 漢の意地》

デュエルディスクを構え、お互いに向き合う時谷と翼

「「デュエル!!!」」

翼 LP 4000

時谷 LP 4000

「先攻は、挑戦者である翼君からだ」

「は、はい!!! それじゃ・・・ドロー!!!」

緊張しながらドロウする翼

「えっと・・・それじゃ・・・永続魔法『六武の門』を発動します
!!!」

翼の後ろに文様の描かれた門が現れる

「このカードは「六武衆」と名の付くモンスターが召喚・特殊召喚されたとき、武士道カウンターを二つ乗せます!そして手札から六武衆一イロウを召喚!!!」

日本刀を鞘に入れたまま肩に担ぐ細身の侍が召喚される

六武衆一イロウ 攻撃力 1700

「イロウの召喚時、『六武の門』に武士道カウンターを乗せます！
」

文様の中に、光が二つ点灯する

六武の門 カウンター 2

「更に、カードを二枚セットして・・・ターンエンドです！」

翼 LP 4000

場 六武衆ーイロウ 攻撃 1700

六武の門 カウンター2

伏せ二枚

手札三枚

「俺のターン！・・・ドロー！！」

少し、顔を歪めながらドローする時谷

「・・・俺は、永続魔法『漆黒のトバリ』を発動！そして、手札からダーク・クルセイダーを召喚！！」

ダーク・クルセイダー 攻撃力 1600

「さらに、ダーク・クルセイダーの効果。手札から闇属性モンスターを一枚捨てることに、攻撃力を400ポイントアップさせる！手札のダーク・ボルテニスを捨てる。これでダーク・クルセイダーの攻撃力は2000だ！」

ダーク・クルセイダー 攻撃力 1600 ↓ 2000

「イロウを上回った・・・」

「バトル！ダーク・クルセイダーでイロウを攻撃！！」

手に持った大剣で切りかかるクルセイダー

イロウは刀で防ぐも、破壊される

翼 LP 4000 ↓ 3700

「くっ！？・・・この瞬間、罠カード発動！！」

「なに！？」

「罠カード『紫炎の計略』！場の「六武衆」が戦闘で破壊されたとき、手札から「六武衆」を二体まで特殊召喚します！僕は、手札のヤリザとニサシを特殊召喚！！」

煙管を担いだ侍と、大きな刀を持った侍が現れる

六武衆ーヤリザ 攻撃力 1000

六武衆ーニサシ 攻撃力 1400

「そして、場に「六武衆」が特殊召喚されたため、『六武の門』に武士道カウンターを乗せます！！」

六武の門 カウンター4

「カードを三枚セット、ターンエンドだ」

時谷 LP 4000

場 ダーク・クルセイダー 攻撃 2000

漆黒のトバリ

伏せ三枚

手札無し

「僕のターン、ドロー！場に二種類以上の「六武衆」が存在するとき、手札から大將軍 紫炎を特殊召喚！！」

大將軍 紫炎 攻撃力 2500

「紫炎・・・六武衆を統べる者か・・・」

「さらに、『六武の門』の第二の効果！武士道カウンターを四つ取り除き、デッキから「六武衆」と名のつくモンスターを手札に加えます！僕は、六武衆の師範を手札に・・・そして特殊召喚！！」

眼帯を付け、刀を携えた老人が召喚される

六武衆の師範 攻撃力 2100

「場に一気に四体揃えたか・・・さすがだな・・・」

そう言いながら、時谷はまっすぐに師範を見つめている

「師範の召喚により、武士道カウンターをもう一度乗せます」

六武の門 カウンター2

「バトルです！紫炎でダーク・クルセイダーに攻撃！！」

手に持った刀でクルセイダーを一刀両断する紫炎

「ぐっ・・・！」

時谷 LP 4000 ↓ 3500

「そして、師範でダイレクトアタック！！」

刀を鞘から抜き、まっすぐに時谷に突っ込んでくる師範

「・・・リバースカード・・・オープン！！『リビングデッドの呼び声』！！墓地のモンスターを特殊召喚する！！」

「墓地にはダーク・クルセイダーしか・・・あっ！！」

時谷の墓地のカードを思い出した翼

時谷も小さく笑う

「気づいたか・・・俺は、ダーク・クルセイダーの効果で送ったダーク・ボルテニスを特殊召喚！！」

ダーク・ボルテニス 攻撃力 2800

「師範の攻撃力は2100！ボルテニスには届かない！！」

「くっ・・・バトルは中断します・・・」

ピタリと止まり、翼の下へと戻る師範

「僕は、ニサシとヤリザを守備表示に変更して、ターンエンドです」

六武衆―ヤリザ 守備力 500

六武衆―ニサシ 守備力 700

翼	LP	3700
場	大將軍 紫炎	攻撃 2500
	六武衆の師範	攻撃 2100
	六武衆―ヤリザ	守備 500
	六武衆―ニサシ	守備 700
	六武の門	カウンター2
	伏せ一枚	
	手札二枚	

「俺のターン!!!ドロー!!!・・・『漆黒のトバリ』の効果発動!ドローフェイズにドローしたカードが閥属性モンスターの場合、相手に見せてそのカードを墓地に送る!ドローしたのは、ネクロ・ガードナー!墓地に送ってもう一枚ドロー!!!」

引いたカードを手札に加える

(魔法か・・・罨・・・?)

翼も時谷を見つめる

「バトル!ボルテニスで、紫炎を攻撃!!!」

ボルテニスの手の杖から漆黒の雷が放たれ、紫炎を襲う

「この時、紫炎の効果発動!!!破壊されるとき、場の「六武衆」を一体生贄にして、破壊を免れる!!!僕は、ニサシを生贄に!!!」

紫炎の前に立ち、代わりに雷を受けて破壊されるニサシ

「だが、ダメージ計算は適用される」

余波が翼を襲う

「くっ!!」

翼 LP 3700 ↓ 3400

「モンスターを一体セットして、ターンエンド」

時谷 LP 3500

場 ダーク・ボルテニス 攻撃 2800

伏せモンスター一体

リビングデッドの呼び声（ダーク・ボルテニス）

漆黒のトバリ

伏せ二枚

手札無し

「僕のターン、ドロー!・・・よし!」

引いたカードを見て、頷く翼

「僕は、六武衆一カモンを召喚!!」

煙筒を担いだ武士が召喚される

六武衆一カモン 攻撃力 1500

六武の門 カウンター4

「カモンの効果！カモン以外の「六武衆」がいるとき、相手の場の表側表示の魔法・罠カードを一枚破壊します！対象は『リビングデッドの呼び声』！！」

肩に担いだ煙筒から火球を発射し、カードを破壊するカモン

「『リビングデッドの呼び声』が破壊されたことにより、ダーク・ボルテニスも破壊です！」

苦しみながら、消えていったボルテニス

「ヤリザを攻撃表示に変更して、バトル！ヤリザで守備モンスターに攻撃！ヤリザは他に「六武衆」がいるとき、貫通効果を得ます！」

カードに槍を突き立てるヤリザだが

「墓地のネクロ・ガードナーの効果！墓地から除外して、攻撃を一度無効にする！」

幻影が槍を弾く

「それなら、師範でもう一度攻撃！」

師範の刀がカードを一刀両断する
破壊されたのは闇の仮面

「闇の仮面のリバース効果！墓地の罠カードを一枚手札に戻す！俺は『リビングデッドの呼び声』を選択！」

墓地からカードを抜き取り、手札に加える時谷

「まだです！最後に紫炎でダイレクトアタック！！」

刀を振り上げ、時谷に切りかかる紫炎

「リバースカード、オープン！『閻次元の解放』！除外されている閻属性モンスターを一体特殊召喚する！俺は、ネクロ・ガードナーを守備表示で特殊召喚！！」

空間が歪み、その中から現れるネクロ・ガードナー

ネクロ・ガードナー 守備力 1300

「（ここで破壊すると、また防がれる・・・けど！）バトルは続行です！」

振り上げた刀を一気に振り下ろし、ネクロ・ガードナーを真っ二つにする紫炎

「カードを一枚セットして、ターンエンドです！」

翼 LP 3400

場 大將軍 紫炎 攻撃 2500

六武衆の師範 攻撃 2100

六武衆一ヤリザ 攻撃 1000

六武衆一カモン 攻撃 1500

六武の門 カウンター4

伏せ二枚

手札二枚

「俺のターン、ドロロー!!」「漆黒のトバリ」の効果!引いたカードはダーク・ヴァルキュリア!墓地に送ってもう一度ドロロー!次は堕天使ゼラート!墓地に送って更にドロロー!・・・ここまでだな」

引いたカードを手札に加えながら言う時谷

「それじゃ・・・行くぜ!カードをセットして、魔法カード「命削りの宝札」!5ターン後に手札全てを捨てる代わりに、手札を五枚まで手札に加える!」

「手札強化!?!」

「俺の手札は0!よって、五枚ドロロー!」

引いた五枚を確認する時谷

「俺の墓地に闇属性モンスターが五体以上存在し、俺の場にモンスターがいない時、手札からダーク・クリエーターを特殊召喚!」

ダーク・クリエーター 攻撃力 2300

「そして、ダーク・クリエーターの効果!墓地のダーク・ヴァルキュリアを除外して、墓地から堕天使ゼラートを特殊召喚!」
《参る!!!》

堕天使ゼラート 攻撃力 2800

「攻撃力・・・2800・・・」

ゼラートを見上げる翼

「ゼラートのモンスター効果!手札から闇属性モンスターを一枚墓

地に捨て、相手のモンスターを全て破壊する！『闇の光芒』！！』
《行くぞ・・・はぁ！！》

ゼラートの剣から雷が発生し、翼のモンスター達を襲う

「全体破壊なら、『六武衆』の身代わり効果は使えない！」
「うわぁ！！」

翼のモンスターが全て破壊された

「もう・・・負け・・・かな・・・」

俯きながらそう呟く翼だが

「・・・本当にそうか？」
「え・・・？」

時谷が呟きを聞き取り、そう聞いてくる

「本当に、もう何もないのか？・・・その伏せカードは、ただのハ
ツタリか？」
「あ・・・」

時谷は翼の二枚の伏せカードを指差しながら聞く

「特に、その右の伏せカード・・・それは、このデュエルで一番最
初に君は伏せた・・・最初から、何かの作戦があったんじゃないの
か？」

「でも・・・」

再び俯く翼

「自分の考えたデッキだろ？・・・だったら、最後まで全力で戦ってみな？・・・モンスター達を、カード達を信じてな・・・少なくとも、カード達は君を信じてるぞ？」

「カード達が？」

「ああ・・・」

時谷の言葉に、しばらく眼を瞑る翼そして、真っ直ぐに時谷を見据える

「六武衆の師範の効果！相手のカードの効果によって破壊されたとき、墓地に存在する「六武衆」を一体手札に戻します！僕は、イロウを手札に！」

墓地からカードを手札に戻す翼

「行くぞ？」

「・・・はい！」

はつきりと時谷に答える翼

「バトル！ダーク・クリエーターでダイレクトアタック！！」

クリエーターの黒い雷が翼を襲う

「永続罠、発動！『六武衆推参！』！！墓地の「六武衆」を一体特殊召喚します！僕は、六武衆の師範を特殊召喚！」

六武衆の師範 守備力 800

「『六武衆』の特殊召喚により、『六武の門』にカウンターが乗ります！」

六武の門 カウンター6

「バトルは続行だ！」

そのまま、雷を受け破壊される師範

「そして、ゼラートでダイレクトアタック！！『闇の波動』！！」
《はぁ！！》

手のひらから衝撃波を翼に向かって放つゼラート

「くう！！」

もろに受け、少し後ずさる

翼 LP 3400 ↓ 600

「最後に、俺はモンスターをセット・・・そして、エンドフェイズ。効果を使用したゼラートは墓地に送られる・・・」

《この効果で場を去るのは久しぶりですな・・・》

ゆっくりと体が透けていき、消滅するゼラート

「ターンエンドだ」

時谷 LP 3500

場 ダーク・クリエイター 攻撃 2300

伏せモンスター一体

漆黒のトバリ

伏せ二枚

手札二枚

「僕のターン！ドロー！！」「六武の門」の効果発動！！武士道カウンターを6個取り除いて、墓地から「紫炎」と名の付く効果モンスターを特殊召喚します！！」

門が開き、中からゆっくりと歩いてくる紫炎

大將軍 紫炎 攻撃力 2500

「そして、墓地の「六武衆」を二体除外して、紫炎の老中 エニシを特殊召喚します！」

黒い髭を生やし、腰に刀を二本差した武士が召喚される

紫炎の老中 エニシ 攻撃力 2200

「更に、六武衆一ザンジを召喚！」

光を放つ薙刀を持った武士が召喚される

六武衆一ザンジ 攻撃力 1800

六武の門 カウンター2

（墓地にはネクロ・ガードナーがいるし、あの伏せには間違いなく

『リビングデッドの呼び声』がある・・・でも・・・このカードなら

そう言って見つめるのは、最初のターンで一番最初に伏せたカード

「エニシの効果！相手の表側のモンスターを一体破壊します！」

クリエイターに一気に近付き、脇差で切り裂き破壊するエニシ

「ダーク・クリエイター・・・」

「バトル！ザンジで守備表示モンスターを攻撃！」

薙刀を振るい、切り裂くザンジ

「守備モンスターは、執念深き老魔術師！リバーズ効果で紫炎を破壊する！」

魔術師の杖から黒い波動が放たれ、紫炎に向かう

「それなら、ザンジを生贄にして紫炎の破壊を回避！」

紫炎の前に立って身代わりになるザンジ

「これで！紫炎でダイレクトアタック！」

刀を時谷に向かって振り下ろす紫炎

「墓地のネクロ・ガードナーの効果発動だ。墓地から除外して攻撃を無効にする」

幻影により、再び弾かれる紫炎

「攻撃はこれで終わりだな・・・」

「まだです！」

防ぎきったと思った時谷だが、翼が遮る

「まだ・・・終わってません！リバースカード、オープン！！罠カード「究極・背水の陣」！！ライフを100残して発動！墓地に存在する「六武衆」を可能な限り特殊召喚します！」

翼 LP 600 ↓ 100

「蘇生するのは・・・師範とカモン！！」

場に二つの陣が形成され、中から師範とカモンが現れる

六武衆の師範 攻撃力 2100

六武衆ーカモン 攻撃力 1500

六武の門 カウンター4

「ほう・・・」

翼の戦法に感心する時谷

「まだ、この二体は攻撃できます！師範でダイレクトアタック！！」

刀を抜き、真っ直ぐに時谷に突っ込んでくる師範

「リバースカード、オープン！『リビングデッドの呼び声』！墓地のモンスターを特殊召喚する！」

「ゼラートか・・・ボルテニスか・・・」

今、時谷の墓地にいる最も攻撃力の高いモンスターである二体・・・のはずだったが

「蘇れ・・・ダーク・ホルス・ドラゴン！！」

現れたのは、漆黒の龍だった・・・

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000

「え！？いつの間に・・・あ！！」

可能性のある一瞬を思い出した翼

「そう・・・ゼラートの効果のときに送ったモンスターだ！」

「くっ・・・バトルは中断！」

刀を納め、戻っていく師範

「でも、カモンの効果を使います！『リビングデッドの呼び声』をもう一度破壊します！！」

カモンの火球により破壊されるリビングデッド・・・同時にホルスも消滅した

「ターンエンドです」

翼 LP 100
場 大將軍 紫炎 攻撃 2500
紫炎の老中 エニシ 攻撃 2200
六武衆の師範 攻撃 2100
六武衆一カモン 攻撃 1500
六武の門 カウンター4
手札二枚

「俺のターン、ドロー!!!魔法カード『死者蘇生』発動!!!墓地からモンスターを特殊召喚する!蘇れ・・・ゼラート!!!」
《はぁ!!!》

光に包まれ、舞い降りるゼラート

堕天使ゼラート 攻撃力 2800

「これで・・・最後だな・・・」

「はい・・・」

互いに向き合う

「楽しいデュエルだった・・・またやろう」

「はい・・・ありがとうございました」

笑顔でお礼を言う翼

「バトル!堕天使ゼラートで六武衆の師範を攻撃!!!『闇の波動』!!!」
《さらばだ!!!》

手から黒い衝撃波を放つゼラート

師範は刀を構え耐えるが、直ぐに破壊された
そして、余波が翼に向かう

「くう・・・!!」

翼 LP 100 ↓ 0

『決まったーーーー!! 勝者、北上時谷ーーーー!!』

・ MCの声と、会場の歓声に包まれ、ラストデュエルは幕を閉じた・・・

TURN 21 (後書き)

どうも!!

なんとか書き上がりました・・・お待たせして申し訳ありません・・・

しかし、久しぶりにデュエル描写書きましたが・・・

長い!! いろんなカード使おうとしてたら変に長くなってしまった・・・
短いデュエルの中でたくさんカードを使わせるのって大変です・・・
しかもたまに効果が間違えてそうで怖い・・・

もう少しで、この「KCグランプリ編」も終わりですね・・・あと二、三話ぐらいでしょうか・・・

本編に戻れば、なんとか執筆速度も持ち直すと思われますので・・・
ってこれ前回も書いたっけ？

ではまた次回!!

TURN 22 (前書き)

大会もようやく終了・・・そして、
またしても超展開？

TURN 22

《大会終了、再会》

時谷と翼のデュエルが終了し、少しの時間を置いて表彰式が行われた

「第一位！日本代表、御堂翼選手！！翼選手には賞金とトロフィー、そして、海馬コーポレーションの最新デュエルディスクが贈呈されます！！！」

「あ……ありがとうございます……」

テレビで見るような大きな小切手、優勝トロフィー、そして、デュエルディスクを受け取る翼だが、持ちきれずふらつく

【時谷SIDE】

「……時谷、大丈夫か？」

「あ？……ああ、大丈夫だ……痛みもないしな？」

控え室で表彰式の様子を見ている時谷に声をかけるモクバだが、時谷はおどけて答える

「あ、そうだ……瀬人さん？」

「……なんだ？」

そして、何かを思いつき後ろで見ている瀬人に声をかける

「一つ提案が・・・」

「・・・言ってみろ」

「えっと・・・」

瀬人に自分の考えたことを伝えたと

「ふうん・・・いいだろう。そのくらいなら問題ない」

「本当ですか!？」

思いの外簡単に通ったことに驚く時谷

「うむ・・・その代わり・・・」

「え・・・?」

【翼SIDE】

「え!？」

「ん?」

MCが変な声を出し、翼が振り向く

「えー・・・ここで、エキシビジョンマッチに登場していただいた
北上選手より、翼選手に一言ございます!」

「ええ!？」

MCの突然の言葉に、驚く翼

そして、時間を置かずに時谷が再び登場し、翼に近づく

「改めて、優勝おめでとう。翼君」

「は、はい！ありがとうございます！！」

時谷の労いの一言に、大きく頭を下げる翼

「君とのデュエル、とても楽しかった・・・これから頑張る」

「はい！」

「それと・・・君にこれを・・・」

「え？」

そう言って、翼に一枚のカードを渡す

渡されたカードを見ると、そこには、翼の見たことのない島のイラストが描かれていた

「これは・・・？」

「俺の在学してる、デュエルアカデミアへの招待状だ」

「ええ！？ デュ、デュエルアカデミアの！？」

驚いて、カードを落としそうになる翼

「見学に来てみないか？」

「え・・・でも・・・そんな・・・」

あまりの事に放心状態の翼

時谷が瀬人に提案したのがこれ

『翼をアカデミアに招待したい』

そして、瀬人の出した条件は

『その旨を本人に時谷が伝えること、そして、最終判断は本人にさせること』

である

時谷としては、彼に十代や進を紹介し、友好を深めてもらいたいという狙いともう一つあるのだが・・・それについてはおいおい・・・

「ぜ・・・ぜひ！！ 行かせてください！！」

顔を赤くしながら時谷に頭を下げる翼

「ああ。もちろん・・・待ってるからな？」

「はい！！」

時谷が手を差し出すと、翼もそれをしっかりと握る

こうして『KCグランプリ』の全対戦が終了した・・・

【時谷SIDE】

「ふう・・・」

《若・・・お疲れ様でした・・・》

「ああ。サンキュ・・・」

実由達と合流するために外に向かう途中、ゼラートが声をかける

《傷の方は・・・本当に・・・？》

「当たり前だろ？・・・これぐらい、なんともないって」

ゼラートもさすがに心配になって確認するが、時谷はあくまでそう答える

しかし、時谷の手は無意識に傷口に伸びていた

「時谷君！！」

「実由！」

外で待っていた実由が駆け寄って来る

「お疲れ様！！」

「ああ。ありがとう・・・」

「時谷・・・」

「あ・・・兄さん」

実由の言葉に礼を言うと、時継が神妙な顔で近づく

「お疲れ・・・」

「うん・・・ありがとう・・・」

「今日は疲れただろう・・・もう帰ろうか？」

そう言って、双六、鈴原三姉妹を見回す

「そうですね・・・もういい時間ですし」

「実由もいいわね？」

「あ・・・うん。そうだね」

実里、実幸、実由の三人が頷く

「それじゃ、仙波さん呼びましょうか・・・」

携帯を取り出し、仙波に電話をかける実里

「実由さん達は、そのまま帰るとして、双六さんは送っていきますが？」

「いやいや！　ワシはのんびり帰るよ」

「しかし・・・」

食い下がる時継だが、双六は笑いながら立ち去っていった

「それじゃ、時谷君・・・また・・・」

「ああ。気を付けてな？」

「うん！」

数分後、迎えに来た仙波の車の前でそんな会話をする時谷と実由

時継達はやれやれと見守っている

そのやりとりの後、実由も車に乗り込み、走り去っていった

「それじゃ、私達も帰ろうか・・・時谷？」

「あ、うん。帰ろう」

そう言って、時継の車に乗り込む時谷

車の中で、流れていく景色を見ている時谷だが、すぐにある違和感に気づいた

「あれ？・・・兄さん？」

「どうした？」

すぐに時継に声をかけるが、なにもないように答える時継

「道、間違っていない？」

時谷の感じた違和感は、車の走っているルートがいつもと違うことである

何度も大会に出ている時谷は、道の景色を何となく覚えているのだ

「いや・・・合っているよ・・・」

しかし、時継はそう答える

「・・・病院への道は、こっちであっている・・・」

「・・・え・・・？」

時継の一言に、時谷の顔が変わる

「瀬人から聞いている・・・刺されたんだろう？」

「あ・・・」

真剣な顔で時谷に聞く時継

「でも、もう大丈夫だよ・・・デュエルも普通に出来ていたし・・・」

「なら・・・なぜ何度も腹を押さえているんだ？」

「!？」

時継の言葉に目を見開く時谷

時継は、時谷の一挙手一投足をしっかり見ていた
そのため、時谷が何度も刺されたところを気にしているのを確認していた

「それは・・・」

「痛みは・・・まだ、あるんじゃないのか？」
「・・・・・・・・」

とうとう黙ってしまいう時谷

「まあ、実由さん達にはおそらくバレていないだろう・・・心配は
掛けたくないだろう？」

「うん・・・」

「なら、しっかり治療してこい・・・いいな？」

「わかったよ・・・」

しっかりと頷く時谷

その後、病院にて、しっかりと治療を受けた時谷

多少の痛みは感じるが、日常生活には支障をきたすことはないとの
診断を受け、ひとまずは安心することができたのだった・・・

それから新年を迎え、実由や時継達と初詣に行ったり、実由とほの
ぼのデートしたりして過ごした時谷

そして、もうすぐ新学期が始まるため、アカデミアに戻る準備を進

めていた・・・

「もう、冬休みも終わりか・・・あっという間だったな」

カレンダーを見ながら、そうつぶやく時谷

「さて、こんなもんかな・・・」

荷物の入ったカバンをポンッと叩いてファスナーを閉める

「まだ、少し時間があるな・・・双六さんところでも行こうかな・・・」

そう言って、デッキを持って出かける

ゲームショップ..亀にて

「双六さん!・・・あれ?」

店の入口をくぐって声をかけるが、返事がこない

「出かけてるのかな・・・無用心な・・・」

店内を見渡すが、誰もいない

《む!! 若!!》

「どうした?」

《二階に何者かいます!!》

「何!?!」

ゼラートの言葉に二階に続く階段を見る時谷

（空き巣か？・・・それとも強盗・・・？）

そう考え、様子を見に行くか考える時谷

以前のこともあり、行動が幾分慎重になっている

「・・・爺ちゃん？ あれ？ 出かけたのか・・・」

「え・・・？」

不意に、二階から声とともに一人の男性が降りてくる

「あ・・・君は・・・」

「ゆ・・・」

時谷はその人物を見て驚く

「遊戯さん!？」

そこには、かの遊戯王^{デュエルキング}・武藤遊戯がいた・・・

TURN 22 (後書き)

どうも

前半がグダグダかもしれないで困る・・・

とりあえず、翼君の再登場フラグを形成しつつ、新学期を迎えるつもりでしたが・・・

まさかの遊戯さん登場！

本編第一話に出て、最終回まで出てこなかった遊戯さんが普通に登場しました！！

・ オリジナルになりすぎて、もう訳がわからなくなってきてますね・・・

こんな、どうしようもない作者ですが、見放さないでいただけると助かります・・・

ではまた次回！

T U R N 2 3 (前書き)

今月二回目の投稿です！

TURN 23

《デュエルキング遊戯王、時谷の迷い》

「久しぶりだな？ 時谷君」

「はい！ 遊戯さんもお元気そうで！」

遊戯の部屋で、再会を喜ぶ時谷

「この間の大会のことも聞いた。海馬君も面白いことをするよね？」

「まったくですよ・・・まあ、おかげで新しいディスクももらえま
したけど・・・」

そう言って、持っていたディスクを遊戯に見せる

「これが・・・」

「ところで、遊戯さんはいつ帰ってたんですか？」

「ああ・・・昨日には戻ってたんだ。爺ちゃんが喜びすぎて、連絡
は出来なかったけど・・・」

「そうだったんですか・・・」

ちょうどその頃、実由とデートしていた時谷

「そういえば・・・爺ちゃんから聞いたけど・・・」

「はい？」

お茶を飲みながら遊戯の言葉を聞く時谷

「結婚するんだって？」

「ブーーーー!!」

その一言でお茶を吹き出す時谷
デュエルキングの顔にお茶をぶちまけるのは、こいつぐらいである

「げほっ! げほっ!!」

「大丈夫か?」

顔を吹きながら聞いてくる遊戯

「でも、その反応だと本当みたいだな?」

「……はい……」

少し照れながら答える時谷

「すごいよね……高校一年生で、もう結婚相手がいるんだから……羨ましいよ?」

少し、意地悪く聞いてくる遊戯

「そ、そういう遊戯さんこそ! 杏子さんとは、どうなんですか!」

「あ……あ……」

赤くなりながらの時谷の反撃
遊戯も顔をそらす

「その……まだ……」

「何やってんですか……」

お返しとばかりに呆れてみせる時谷

「そ、そんなことより！ 学校はどうだ？ 楽しいか？」

少々・・・というかなり強引な話題の転換である

しかし、時谷としてもあまり掘り下げるつもりもないので乗っかる

「楽しいですよ？ いろんな奴がいて・・・友達も増えましたしね」
「そうか・・・よかったよ・・・」

嬉しそうに答える時谷を見て、遊戯も笑う

「ところで・・・『アレ』って・・・まだやってるの？」
「・・・ええ・・・もちろんですよ・・・」

表情を変え、聞いてくる遊戯

遊戯の言う『アレ』とはもちろん、時谷の力『闇の浄化』である

「アカデミアでは一度・・・それに、この間の大会でも一回・・・最近では頻度は下がってますけど・・・その分、相手の力が上がってきてる気がします」

「力を蓄えているってことかな・・・」

時谷の言葉に、そう考える遊戯

「最近、闇の力を察知するのが難しくって・・・そのせいで、大事な人を危険にしまって・・・」

「そうか・・・」

「正直・・・自分の力の意味が・・・わかりません・・・」

「力の意味・・・か・・・」

暗い顔で言う時谷

遊戯も心配そうに見つめる

「・・・時谷君」

「はい？」

「ちょっと付き合ってくれ・・・」

そう言って、店を出ていく遊戯

時谷もあとを追う

そして、訪れたのは童実野埠頭・・・

「あの・・・遊戯さん？・・・ここで何を？」

「・・・俺と・・・デュエルしようか・・・」

「・・・え？」

遊戯の提案に聞き返す時谷

「ほら、デッキを出して・・・」

「ゆ、遊戯さん？」

そう言って、自分のデッキケースからデッキを取り出す遊戯

「早く！」

「あ・・・はい・・・」

言われたとおり、デッキを取り出す時谷

そして、互いにシャッフル

「先攻は俺がもらうよ・・・」

「は、はい・・・」

互いに向きあう

「「デュエル！」」

遊戯	LP	4000
時谷	LP	4000

「俺のターン！俺は、クイーンズ・ナイトを攻撃表示で召喚！」

左手に剣をもった女性騎士が召喚される

クイーンズ・ナイト 攻撃力 1500

「さらにカードを三枚セット。ターンエンド！」

遊戯	LP	4000
場	クイーンズ・ナイト	攻撃 1500
伏せ	三枚	
手札	二枚	

「俺の、ターン・・・」

戸惑いながらカードを引く時谷

「・・・俺は、ダーク・グレファアを召喚・・・」

ダーク・グレファアー 攻撃力 1700

「さらに、ダーク・グレファアーの効果。手札のダーク・パーシアスを捨てて、デッキからネクロ・ガードナーを墓地に……そして、バトル……グレファアーでクイーンズ・ナイトに攻撃」

ダーク・グレファアーがクイーンズ・ナイトに向かっていく

「甘いよ。リバーズカード『魔法の筒』！マジック・シリンドー モンスターの攻撃を無効にして、相手モンスターの攻撃力分のダメージを与える！」
「あ……ぐう！！」

片方の筒に飲み込まれ、もう片方の筒から飛び出し、時谷に攻撃するグレファアー

時谷 LP 4000 ↓ 2300

「カードを二枚セットして……ターンエンド」

時谷 LP 2300

場 ダーク・グレファアー 攻撃 1700

伏せ二枚

手札二枚

「俺のターン！ 俺はさらにキングス・ナイトを召喚！」

髭を生やした騎士が現れる

キングス・ナイト 攻撃力 1600

「このコンボは・・・」

遊戯の場を見て次に来ることを考える時谷

「場にクイーンズ・ナイトがいる時にキングス・ナイトを召喚したとき、デッキからジャックス・ナイトを特殊召喚する！」

キングス、クイーンズの二人が剣をかざすと、若い騎士が召喚される

ジャックス・ナイト 攻撃力 1900

遊戯の場に絵札の三銃士が揃った

「そして、魔法カード『融合』を発動！」

「なっ!？」

手札のカードを見せる遊戯

「場のクイーンズ・ナイト、キングス・ナイト、そしてジャックス・ナイトの三体を融合させ、アルカナ ナイトジョーカーを融合召喚！」

三銃士を渦が包み、中から黒い鎧をまとった騎士が召喚される

アルカナ ナイトジョーカー 攻撃力 3800

「さらに、魔法カード『強欲な壺』を発動し、二枚ドロ・・・そして、バトル! アルカナ ナイトジョーカーでダーク・グレファールを攻撃！」

「罨カード・・・『炸裂装甲』」

リアクティブアーマー

「なら、ナイトジョーカーの効果！ 罠カードの対象になったとき、手札の罠カードを捨ててその効果を無効にする！！」

遊戯がカードを墓地に置く

置いたのは「シフトチェンジ」

「よって、攻撃は続行！」

「うっ！？」

巨大な剣に切りつけられ、破壊されるグレファア

時谷 LP 2300 ↓ 1200

「これで、ターンエンドだ・・・時谷君・・・？」

「・・・・・・・・」

エンド宣言したあと、時谷に話しかける遊戯

「君らしくないよ・・・デュエルを全力で出来ていない・・・」

「そんなことは・・・」

「なら、どうして・・・墓地のネクロ・ガードナーを使わなかった？」

「あ・・・」

時谷のプレイを指摘する遊戯

先程の攻撃も、罠カードではなくネクロ・ガードナーを使えば、攻撃を止めることができた

「君は、力を恐れている・・・」

「恐れている・・・？」

「そう・・・でも、力はただの“手段”だ」

「手段・・・」

「問題なのは“目的”なんだ」

「目的？」

「その力で何をするのか」・・・“何がしたいのか”・・・それを間違わなければいいんだ・・・君はその力で、何がしたい？」

「俺の・・・したいこと・・・」

遊戯の言葉に、目を閉じて考える

（俺は・・・この力で・・・）

ゆっくりと目を開き、遊戯を見つめる

「・・・見つけた？」

「はい・・・行きます！」

小さく笑って聞いてくる遊戯に、はっきりと道を見据え、答える時谷

遊戯 LP 4000

場 アルカナ ナイトジョーカー 攻撃 3800

伏せ二枚

手札一枚

「俺のターン！ドロー！！」

勢い良くカードを引き確認する

「俺の墓地に闇属性モンスターが三体のとき、こいつを特殊召喚出

来る！　ダーク・アームド・ドラゴン！！」

時谷の場に漆黒の竜が召喚される

ダーク・アームド・ドラゴン　攻撃力　2800

「なるほど・・・だから、ネクロ・ガードナーを・・・」

「っと言っても・・・こいつは今引いたんですけどね！」

デッキが時谷に答えた瞬間でもある

「ダーク・アームド・ドラゴンの効果！　墓地の闇属性モンスターを除外して、場のカードを一枚破壊する！　墓地のダーク・グレフアーを除外して、右の伏せカードを破壊！　『ダーク・ジェノサイド・カッター』！」

ダーク・アームド・ドラゴンから黒色の球体が吐き出されカードを破壊する

破壊したのは『聖なるバリアーミラーフォース』

「よし！　さらに、ダーク・パーシアスを除外して、左の伏せカードを破壊！」

「・・・・・・」

もう一枚は『六芒星の呪縛』

「そして、ネクロ・ガードナーを除外して、ナイトジョーカーを破壊！！」

ナイトジョーカーの破壊に成功する

「これなら・・・バトル！　ダーク・アームド・ドラゴンでダイレクトアタック！！　『ダーク・アームド・パニッシャー』！！」

ダーク・アームド・ドラゴンが黒い炎を吐き出し、遊戯を襲うが

「手札から、モンスター効果・・・」

「え！？」

遊戯が手札のカードを見せる、見せたのは・・・

「く・・・クリボー・・・」

「そう・・・手札から捨てて、戦闘ダメージを0にする」

遊戯の前でクリボーが自爆し、攻撃から守る

「くそ！　ターンエンドです」

時谷　LP　1200

場　ダーク・アームド・ドラゴン　攻撃　2800

伏せ一枚

手札二枚

「俺のターン・・・ドロー！　手札から魔法カード『天よりの宝札』を発動！！」

「！？」

遊戯が引いたのは、世界最強のドローカード・・・（アニメ版）

「互いに、手札が六枚になるようにドローする！　俺の手札は0！

よって六枚ドロー!!」

「俺は、四枚・・・」

互いにドローする

「さらに、効果で手札に加えたワタポンの効果! このカードを特殊召喚!!」

触覚の生えた綿状のモンスターが召喚される

ワタポン 守備力 300

「そして、ワタポンを生贄に・・・デーモンの召喚を攻撃表示で召喚!!」

雷をまとった悪魔が召喚される

デーモンの召喚 攻撃力 2500

「デーモン・・・遊戯さんのエースの一体・・・だが、ダーク・アームド・ドラゴンには攻撃力は及ばない・・・」

「甘いよ・・・手札から魔法カード『魔霧雨』! 場の「デーモンの召喚」を選択し、このモンスターの攻撃力以下の守備力をもつ相手モンスターをすべて破壊する!!」

周囲に霧雨が振り出し、ダーク・アームド・ドラゴンを包む
そして、デーモンの体から電撃が放たれ、破壊する

「ダーク・アームド・ドラゴンの守備力は1000! よって破壊!!」

「くっ！」

「手札を一枚捨てて、THE トリッキーを特殊召喚！！」

顔に？マークの浮かんだ仮面を付けた魔術師が召喚される

THE トリッキー 攻撃力 2000

「君の墓地にもうネクロ・ガードナーはいない・・・この攻撃が通れば、俺の勝ちだ・・・」

「くっ！」

「トリッキーで、ダイレクトアタック！！」

両手の平から音波状の攻撃をするトリッキー

「リバースカード・・・オープン！！ 『闇次元の開放』！！ 除外されている自分の闇属性モンスターを特殊召喚！！ 対象は・・・ネクロ・ガードナー！！」

次元の歪みから現れるネクロ・ガードナー

ネクロ・ガードナー 守備力 1300

「なら、バトルは中断だ！」

手を下ろすトリッキー

「なんとか・・・耐えたか・・・」

「最後の手札を一枚セットして・・・ターンエンド！」

遊戯 LP 4000

場 デーモンの召喚 攻撃 2500

THE トリッキー 攻撃 2000

伏せ一枚

手札無し

「俺のターン・・・ドロー!!! 俺は、ネクロ・ガードナーを生け贄に・・・邪帝ガイウスを召喚!!!」

漆黒のマントを羽織った悪魔の帝王が召喚される

邪帝ガイウス 攻撃力 2400

「ガイウスの効果! 生け贄召喚に成功したとき、場のカードを一枚除外する! このとき、除外したのが闇属性モンスターだった場合、相手に1000ポイントのダメージを与える!!! 俺が指定するのは・・・デーモンの召喚!!!」

ガイウスが黒い球体を作り出し、デーモンを包む歪みながら異次元に飛ばされるデーモン

「デーモンは闇属性! よって、遊戯さんに1000ポイントのダメージ!!!」

余波が遊戯を襲う

「ぐっ!!!」

遊戯 LP 4000 ↓ 3000

「そして、ガイウスでトリッキーを攻撃!!!」

先ほどとは違う球体を作り出すガイウス
球体から光線が発射され、トリッキーを貫通し遊戯にも向かう

「ぐわっ!!」

遊戯 LP 3000 ↓ 2600

「そして、カードを三枚セットして・・・ターンエンドです」

時谷 LP 1200

場 邪帝ガイウス 攻撃 2400

伏せ三枚

手札三枚

「俺のターン！ ドロー!! 来たな・・・」

ドローしたカードを見てそう宣言する遊戯

「魔法カード『死者蘇生』！ 墓地のモンスターを特殊召喚!!」

「この状況で・・・何を・・・？」

遊戯と自分の墓地を思い出している時谷

遊戯の墓地には、絵札の三銃士、ワタポン、ナイトジョーカー、トリッキー・・・そのうち、ナイトジョーカーは蘇生ができない
そして、時谷の墓地にはダーク・アームド・ドラゴン、ネクロ・ガ
ードナーがいる

「甦れ・・・ブラック・マジシャン!!」

《はあ!!!》

蘇生されたのは、遊戯の最強のパートナーだった……

ブラック・マジシャン 攻撃力 2500

「え!?! いつものまに……あ!?!」

驚き、そして思い出す時谷

ブラック・マジシャンが墓地に行くタイミング……それは……

「トリッキーの……コスト……」

「そのとおりだ……行くよ! ブラック・マジシャンでガイウスに攻撃!!」 『黒・魔・導』!!」

《はああ!!!》

手に持った杖から魔弾を放つブラック・マジシャンだが

「リバースカード、オープン!! 『次元幽閉』!! 攻撃モンスターをゲームから除外する!!」

ブラック・マジシャンの前の次元が歪むが……

「そうはさせない!! 俺もリバースカードを発動させる! 速攻

魔法『光と闇の洗礼』!!」

「な……」

「場のブラック・マジシャンを生け贄に……デッキから混沌の黒魔術師を特殊召喚!!」

ブラック・マジシャンが光に包まれ、晴れると同時に新たな魔術師

が現れる

混沌の黒魔術師 攻撃力 2800

「混沌の黒魔術師・・・ブラック・マジシャンを超える魔導師・・・」

「まだ、俺のバトルフェイズだ！ 混沌の黒魔術師で、ガイウスに攻撃！ 『滅びの呪文 デスアルテマ』！！」

黒魔術師の杖から黒い球体がガイウスに向かっていく

「墓地のネクロ・ガードナーの効果！ 墓地から除外して攻撃を一度だけ無効にする！！」

ガイウスに幻影が重なり攻撃を防ぐ

「そう・・・それでいいんだ・・・ターンエンド！」

遊戯 LP 2600

場 混沌の黒魔術師 攻撃 2800

伏せ無し

手札無し

「このモンスターを倒せば・・・なんとか・・・ドロー！！」

引いたカードを確認すると

「来た！ 手札から装備魔法『D・D・R』を発動！！ 手札のダーク・シムルグを捨てて、除外されている自分のモンスターを特殊召喚する！ 対象は、ネクロ・ガードナー！！」

再び次元の歪みから帰還するネクロ・ガードナー

ネクロ・ガードナー 攻撃力 600

「そして、ガイウスとネクロ・ガードナーを生け贄に……ダーク・ホルス・ドラゴンを召喚!!」

もう一体の漆黒の竜が召喚される

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000

「ダーク・ホルス……攻撃力だけなら、海馬君の青眼の白龍と同等……」

遊戯がホルスを見上げながら呟く

「行きます……ダーク・ホルス・ドラゴンで、混沌の黒魔術師を攻撃!! 『ダーク・メガ・フレイム』!!」

漆黒の炎が黒魔術師を飲み込み、破壊していく

「ぐわ!!」

遊戯 LP 2600 ↓ 2400

「これで、ターンエンドです」

時谷 LP 1200

場 ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃 3000

伏せ無し
手札一枚

「俺のターン！・・・時谷君、さすがだね・・・」
「今回こそ、勝たせてもらいます！ 遊戯さん！」

互いに笑い合う

「ふ・・・その意気だ・・・だが、俺もそう簡単には負けない！！
俺はライフを2000ポイント支払い、手札から魔法カード『次元融合』発動！！」

「『次元融合』！？ このタイミングで・・・」

遊戯 LP 2400 ↓ 400

「互いに除外されているモンスターを可能な限り特殊召喚する！
甦れ！ デーモン！ 混沌の黒魔術師！！」

遊戯の場にも二体のモンスターが現れる

デーモンの召喚	攻撃力	2500
混沌の黒魔術師	攻撃力	2800

「なら俺も、除外されているダーク・パーシアスとダーク・グレフ
アーを特殊召喚・・・」

時谷の場にも二体のモンスターが現れる

ダーク・パーシアス	守備力	1400
ダーク・グレフアー	守備力	1600

「混沌の黒魔術師の効果！ このカードが召喚、特殊召喚された時、墓地の魔法カードを一枚手札に戻す！ 俺が選ぶのは『天よりの宝札』！！」

「なっ！？」

「そして発動！！ 互いに手札を六枚になるようにドロ―！ 俺は、また六枚ドロ―！」

「俺は、五枚・・・」

互いにカードを引く

「これで・・・揃ったよ・・・君を倒す、コンボが！」
「！！」

遊戯がそう宣言する

「手札から魔法カード『食欲な壺』を発動！ 墓地のモンスターを五枚選択してデッキに戻しシャッフル！」

墓地から五体のモンスターをデッキに戻した遊戯

戻したのは

ワタポン

T H E トリツキー

クイーンズ・ナイト

クリボー

ブラック・マジシャンの五体

「そして、その後二枚ドロ―！！ さらに、魔法カード『召喚師のスキル』！ デッキからレベル5以上の通常モンスターを手札に加

える！ 俺が選ぶのはブラック・マジシャン！」

デッキからカードを抜き取り時谷に見せる

「またブラック・マジシャンを手札に・・・」

「そして、魔法カード『古のルール』！ 手札のレベル7以上の通常モンスターを特殊召喚する！ 現れよ！ ブラック・マジシャン！！」

再び場に召喚されるブラック・マジシャン

ブラック・マジシャン 攻撃力 2500

《・・・先ほどは挨拶が遅れたな・・・》

「そういえば・・・そうですね・・・お久しぶりです・・・マハードさん」

互に見つめ合い、挨拶をする時谷とブラック・マジシャン（マハーード）

「そして、デーモンを生け贄に・・・ブラック・マジシャン・ガールを召喚！！」

《やあ！！》

デーモンを光が包み、中から全世界のデュエリスト達のアイドル
ブラック・マジシャン・ガールが召喚される

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力 2000

《あれ？ 時谷君！ 久しぶり〜！》

「はい・・・お久しぶりです・・・マナさん」

時谷を発見し、軽くウィンクしながら挨拶してくるブラック・マジシャン・ガール（マナ）

《挨拶はその辺にしておきなさい》

《あ・・・はい！ お師匠様！！》

マハードに言われて、返事を返すマナ

「これで、俺の場に三人の黒魔術師が揃った！」

（確かに、一見絶望的な状況だ・・・だけど、俺の場と遊戯さんの場のモンスターの数は同じ・・・そして、三体ともダーク・ホルスの攻撃力は上回らないし、俺の墓地にはまたネクロ・ガードナーがある・・・ほぼ確実に二体は残せる！）

状況を落ち着いて分析している時谷

「甘いよ！ 時谷君！！ 俺は魔法カード『千本ナイフ』サウザンドを発動！

場に『ブラック・マジシャン』がいるとき、相手のモンスター一体を破壊する！ 対象はダーク・ホルス！！」

《行け！！》

ブラック・マジシャンの周囲に千本のナイフが出現し、ダーク・ホルスを串刺しにして破壊する

「ダーク・ホルス！！」

「バトルフェイズだ！ 混沌の黒魔術師で、ダーク・パーシアスを攻撃！！ 『滅びの呪文 デスアルテマ』！！」

「もう一度ネクロ・ガードナーの効果！！ 除外して攻撃を無効に

する!!!」

再び幻影に防がれる混沌の黒魔術師

「それなら、ブラック・マジシャン・ガールでダーク・パーシアスを攻撃! 『黒・魔・導・爆・裂・波』!!!」
《行つくよ!!!》

杖から無数の魔弾を打ち込み、ダーク・パーシアスを飲み込んでいく

「ぐう!!!」

「さらに、ブラック・マジシャンでダーク・グレファアに攻撃!!!」

『黒・魔・導』!!!」

《はっ!!!》

手を突き出し、魔弾を打ち出し、ダーク・グレファアを破壊する

「でも、これでもう攻撃は終わった・・・」

「そうだね・・・俺は、残った手札全てを伏せて・・・ターンエンド」

遊戯 LP 200

場 ブラック・マジシャン 攻撃 2500

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃 2000

混沌の黒魔術師 攻撃 2800

伏せ三枚

手札無し

「俺のターン・・・ドロー! やつと来たか・・・待ちくたびれたよ・・・」

引いたカードに語りかける時谷

（あのカードを引いたのか・・・）

「俺はの墓地に闇属性モンスターが五体以上いて、場にモンスターが居ないとき、ダーク・クリエイターを特殊召喚する！！」

雷をまといながら現れる闇の創世神

ダーク・クリエイター 攻撃力 2300

「クリエイターの効果！ 墓地の闇属性モンスターを選択し、墓地からそのモンスター以外の闇属性モンスターを除外して特殊召喚する！ ダーク・グレフアーを除外して・・・ダーク・ホルス・ドラゴンを特殊召喚！！」

再び舞い上がる漆黒の竜

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000

「さらに、手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！ 手札の執念深き老魔術師を捨てて、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する！ 俺が呼び出すのは・・・クリボー！！」

時谷の場に、小さい悪魔が召喚される

クリボー 攻撃力 300

「クリボー？」

「そして、クリボーを生け贄に・・・堕天使ゼラートを召喚！！」

《参る!!》

時谷の場に、時谷の最も信頼するパートナーが召喚される

堕天使ゼラート 攻撃力 2800

「来たか・・・ゼラート・・・」

《久しいな・・・》

《懐かし～!》

マハードとマナも少し嬉しそうにしている

「行きます! ゼラートの効果! 手札の闇属性モンスターを捨てて、相手の場のモンスターをすべて破壊する!! 『闇の光芒』」

《久しぶりの再会だが・・・早々に退場願おうか!!》

ゼラートの剣から、黒い衝撃波が放たれ、遊戯の魔術師達を襲う

《ぐわあ!!》

《きゃあ!!》

飲み込まれ、そのまま破壊されていく魔術師達

「これで、場が空いた・・・バトル! ゼラートで、ダイレクトアタック! 『闇の波動』!!」

《はあああ!!》

手をかざし、衝撃波を撃とうとするゼラートだが・・・

「速攻魔法発動!! 『クリボーを呼ぶ笛』!!」

「《なっ!?!》」

「デッキから、クリボーを手札に加え、そして、効果発動!!! ダメージを0にする!」

クリボーが遊戯の前に浮き、攻撃を受ける

「くっ! だけど、まだモンスターの攻撃は残ってる! ダーク・クリエイターでダイレクトアタック!」

黒い雷を遊戯に向けて放つクリエイター

「罨発動! 『リビングデッドの呼び声』!! 甦れ! ブラック・マジシャン!」

《はっ!!!》

黒い霧の中から飛び出してくるブラック・マジシャン

ブラック・マジシャン 攻撃力 2500

「バトルは中断・・・なら、ダーク・ホルス・ドラゴンで攻撃! 『ダーク・メガ・フレイム』!!」

ホルスの黒炎がブラック・マジシャンに迫るが

「最後の伏せカードを使う! 速攻魔法『収縮』!! モンスター一体の攻撃力を半分にする!」

魔法の効果により、体が縮むホルスそれにより炎も小さくなっていく

ダーク・ホルス・ドラゴン 攻撃力 3000 ↓ 1500

「そして、ブラック・マジシャンの反撃！ 『黒・魔・導』！！」
《はぁ！！》

衝撃波で炎を押し返し、そのままホルスを破壊する

「ぐわっ！！」

時谷 LP 1200 ↓ 200

「バトルフェイズは終了・・・エンドフェイズ・・・効果を使用したゼラートは破壊される・・・」

《無念・・・》

膝を付きながら消滅するゼラート

「俺は・・・これで、ターンエンドです・・・」

時谷 LP 200

場 ダーク・クリエーター 攻撃 2300

伏せ無し

手札二枚

「俺のターン・・・ドロー！・・・時谷君・・・答えは見つかったかい？」

カードを引いたあと、時谷に話しかける遊戯

「・・・はい・・・俺の力で出来ること・・・俺がやりたいこと・・・

・何となく、分かった気がします」

時谷もしっかりと答える

「そうか・・・それなら、このデュエルにも意味があったんだね」

「はい・・・ありがとうございました」

笑顔で答える時谷

「いくよ・・・ブラック・マジシャンで、ダーク・クリエイターに攻撃！ 『黒・魔・導』！！」

《はああああ！！》

杖からの衝撃波により、クリエイターは破壊され、その余波が時谷を襲う

「ぐう！！」

時谷 LP 200 ↓ 0

デュエル終了と共に、時谷は膝をつき、崩れ落ちた

TURN 23 (後書き)

どうも！

という訳で、GXの二次小説ではおそらく最速、本物の遊戯さんとのデュエルでした！！

遊戯さんには、前作主人公としてのチート能力を遺憾無く発揮してもらいました・・・

懐かしいですね・・・「魔霧雨」・・・

「こんなカード入ってねえよ！」ってツツコミはナシでお願いしますね！

そんなことは、作者もよくわかっていますので

「天よりの宝札」がアニメ効果でOCG化したら、間違いなく禁止行きだよな・・・

とりあえず、このあと少し会話を入れて、冬休みは終わりにしたいと思います

ようやく本編に戻る・・・

TURN 24 (前書き)

ようやく更新できた・・・

今回で冬休み編は終了です

TURN 24

《時谷の誓い》

遊戯とのデュエルの後の帰り道

「ありがとうございました・・・遊戯さん」

「急にどうしたんだ？ お礼を言われるようなことはしていないよ？」

礼を言う時谷に首を傾げてしまう遊戯

「いえ・・・遊戯さんのおかげで、自分のしたいこと・・・するべきことがわかったんです・・・だから・・・ありがとうございます！」

そう言って、もう一度頭を下げる時谷

「それなら・・・一つ頼まれてくれるかな？」

「はい？」

少し考えたあと、時谷にある提案をする遊戯

その後、遊戯と別れ、家に戻った時谷・・・

「おかえり時谷」

「あれ？ 兄さん、早いね？」

家に戻ると、時継がすでに戻ってきていた

「この時期は、大きな仕事も少ない・・・ま、もうすぐ忙しくなるだろうが・・・」

「そうなんだ・・・」

「ところで、どこに行っていたんだ？　こんな時間まで・・・」

時計を見ながら時谷に聞いてくる時継

「ああ・・・双六さんのところだよ・・・遊戯さんにも会った・・・」

「そうか・・・遊戯君、戻っていたんだったな・・・」

「兄さんは知ってたんだ？」

「ああ。戻ってきた頃に瀬人にも連絡はあったらしくてな・・・それで聞いた」

リビングに向いながらそんな話をする兄弟

「悪いが、食事は私が用意した」

「あ・・・ごめん、兄さん」

用意された食事を見て謝る時谷

「気にするな。久しぶりでなかなか楽しかったよ」

笑って答える時継

例外なく家事が好きな時継であった

「そういえば・・・戻るのは明日だったな？」

「うん。準備は終わってるから」

食事が終わり、思い出したように話し出す時継

「そうか・・・また、家が広くなってしまっうな・・・」

「そればかりはしょうがないよ・・・」

少し寂しそうにする時継に、そう答える時谷

「何時にでるんだ？」

「昼過ぎには船に乗る予定だから・・・十時ぐらいには家を出るよ」

「実由さんもか？」

「うん。明日迎えに来てくれるってさ」

この間のデートの時に決めていた時谷と実由

「それじゃ、今日は早めに休むんだ。後片付けなんかは私がやって
おこう」

「うん。ありがとう・・・兄さん。お休み」

「ああ・・・」

挨拶を済ませて、部屋に戻る時谷

時谷の部屋・・・

「さて・・・と・・・」

部屋に戻ると、デッキケースを取り出す時谷

「こいつと・・・こいつ・・・あとは・・・こいつか・・・」

数枚のカードを抜き取り、机に並べる

並べられたのは・・・

ダーク・ネフティス

ダーク・クリエイター

ダーク・ボルテニス

ダーク・シムルグ

ダーク・ヴァルキュリア

ダーク・パーシアス

ダーク・グレフアー

終焉の精霊

の八枚

「あとは・・・こいつらか・・・」

カバンの中からも数枚取り出し、同じように並べる

アリュール・クイーン
魅惑の女王 LV7

ダーク・ジェネラル・フリード

ダーク・ネクロフィア

光と闇の竜

カオス・エンペラー・ドラゴン

混沌帝龍―終焉の使者―

デビルマゼラ

破壊竜ガンドラ

の七枚

「それじゃ、始めるか・・・ゼラート？」
《はっ・・・》

時谷に答えるゼラート

そして、時谷の目が銀色に輝き出す

「はああああ・・・」

手をカードにかざして、集中する時谷

すると、机に置かれた十五枚のカードたちが光り出す

数秒間光ったあと、何事もなかったかのように収まっていく

「ふう・・・」

《お疲れ様です。若・・・》

「ああ・・・夕食後でよかった・・・それほど疲れないな・・・」

作業が終わって一息つく時谷ゼラート

「これで、しばらくは大丈夫だな・・・さて、もう寝るかな・・・」
《では、私も戻ります》

「ああ。お休み、ゼラート・・・」

ゼラートに声をかけ、ベッドに入りそのまま眠りについた時谷だった・・・

次の日・・・

「それじゃ、行ってきます、兄さん」

「ああ。体に気を付けてな？」

家の前で挨拶を済ませる時谷と時継

そこに、実由を乗せた車がやってくる

「時谷君！ 時継さん！ おはようございます！」

「おはようございます」

「実由！ 仙波さん！ おはよう」

「おはよう。実由さん・・・あと、私のことは“お義兄さん”と・・・」

なかなかにしつこい兄である

「あはは・・・えっと・・・お義兄さん、おはようございます！」
「うんうん・・・やはりいいな・・・」

ようやく呼ばれ、ご満悦の時継だった

その後、少し話し込んで港に向かった時谷と実由

童実野埠頭にて・・・

「それじゃ、仙波さん。送ってくれてありがとう」

「ありがとうございます。仙波さん」

二人で仙波に礼を言う

「とんでもございません・・・これが、私めの勤めでございますので・・・では、実由様・・・お体にお気を付けて・・・時谷様、実由様をお願い致します・・・」

そう言って、時谷に頭を下げる仙波

「はい。もちろんです・・・実幸さん達にもよろしくお伝えください」

「かしこまりました・・・では・・・」

もう一度一礼して、車を発進させる仙波
その様子を実由と見守る時谷

「実由・・・行こうか？」

「うん・・・」

実由に声をかけて、二人で船に乗り込む

「みんな元気かな？」

「大丈夫だろ・・・特に十代は・・・」

「あはは！ うん、そうだね！！」

外を眺めながら、再会する友人達のことを話す二人

「実由・・・」

「なに？」

「これからもよろしくな？」

「うん!!」

時谷の言葉に満面の笑みで答える実由

数時間後、船がアカデミアに到着した

「ふゝゝゝ着いたなゝ!」

「そうだねゝゝゝ」

船を降りて大きく伸びをする時谷と実由

「おゝい!!」

「お? この声はゝゝゝ」

「十代君だね」

声のする方を向くと、手を振っている十代と翔、隼人、明日香、三沢、進が近づいてきていた

「時谷! 実由!!」

「久しぶりっス!」

「元気そうなんだなゝ」

「おかえりゝゝゝ時谷」

「休みは満喫したか?」

「ああ、しっかりとな?」

それぞれに答える時谷

「実由、なんか雰囲気変わったわね?」

「え? そうかなゝゝゝ?」

「ええ、すっきりした顔になってるわよ？」

女子同士で話している実由と明日香

「多分、パパやママと話せたからかも・・・」

「そう・・・それならよかったわ・・・」

実由の言葉にどこか安心した様子の明日香

「それより時谷！ テレビ見たぜ？」

「テレビ？・・・ああ、この間の大会か・・・」

思い出しながら言う時谷

「すげーよな！ お前も相手の奴もさ！！」

「まあ、彼はなかなか強かったな・・・」

翼とのデュエルを思い出す

「よし！ 早速デュエルしようぜ、時谷！！」

「おいおい・・・いきなりか？」

「ダメなのか？」

「せめて、荷物は置きに行かせてくれ？」

そう言って荷物を見せる時谷

「あ、そっか・・・それじゃ、準備してレッド寮で待ってるな？」

「ああ・・・わかったよ・・・」

それだけ言って、十代達と一旦分かれる時谷と実由

ブルー寮・時谷と進の部屋にて

「しかし、みんなと会えて少し安心したな・・・」

「そう・・・？」

荷物の整理をしながらそう話す時谷

「ああ。こっちでの暮らしにも慣れてきてたからな・・・実家にいても、なんか物足りない感じがしてさ・・・」

「ふーん・・・あのさ？」

「ん？」

「時谷も・・・雰囲気変わったね？」

「そうか？」

進の言葉に首を傾げる時谷

「うん・・・鈴原さんみたいに・・・すっきりした顔してる・・・」

「まあな・・・心にあったモヤモヤみたいなものが、なくなったからかもな・・・」

「そうなんだ・・・」

穏やかな顔でそう話す時谷に、進も笑顔を返す

「さてっと・・・それじゃ、十代達のところに行くかな・・・」

「うん・・・」

そう言って、部屋を出ていく時谷と進

「サイコ・シヨッカーの精霊か・・・」

「うん・・・遊戯君のおかげでなんとかあったけど・・・」

レッド寮に向かう途中、大晦日辺りに起こった事件について進から聞いた時谷

「精霊にも色々いるんだな・・・」

《しかし・・・今回はかなり特殊なものかと・・・》

時谷の言葉に、ゼラートが答える

「闇の・・・影響？」

「そうだとしたら、また現れると思うけどな・・・」

進の質問にそう答える時谷

「まあ、そのことは後で考えよう・・・今はなんとも言えないからな」

「うん・・・」

「とりあえず、今は十代とのデュエルだな・・・」

「ふふっ・・・そうだね」

レッド寮に到着する時谷と進

そこには、準備を済ませた十代と観戦するつもり翔、隼人、三沢、明日香、実由がいた

「へへっ！　今回は勝たせてもらうぜ！！」

「そう簡単に負けたりしない・・・」

互いに向き合い、ディスクを起動する二人

時谷のディスクがシャッフルを始める

「おー!! やっぱカッコいいな!!」

「そうだな・・・今度、瀬人さんか兄さんに言ってみるか？
十代の分」

「本当か!？」

時谷の提案に目を輝かせる十代

「考えたのは十代だしな・・・それくらいならいいと思う」

「やったぜ!!」

大喜びの十代だった

そして、ディスクのシャッフルが終わる

「さて・・・それじゃ・・・」

「おう!」

「「デュエル!!」」

こうして、時谷のアカデミア生活が再開した・・・

TURN 24 (後書き)

どうも

• どうにか書けた・・・おそらく闇選の今月分はこれで限界ですね・

久しぶりに原作キャラ達と進君を書いた気がします・・・

サイコ・ショッカーの部分は、少し話をしただけにしました・・・

ともあれ、冬休みも終わって、次回からはアニメ本編に戻ります！

たくさんあるな・・・レイちゃんの話とか、ノース校とのデュエルとか、セブンスターズとか・・・

さて・・・どのデュエルを横取りしようか・・・

考えてみたら、三年って長いな・・・実由ちゃんは、いつ苗字を「北上」に変えられるのかな・・・

ではまた次回！！

T U R N 2 5 (前書き)

今月一発目の投稿です！

今月はどうにか二回いけるかもしれません

TURN 25

《託された魂》

冬休みが終わり、アカデミアでの生活を再開した時谷達

「時谷！ たまにはドローパン食わねえか？」

「そうだな・・・たまにはいいか・・・」

「時谷君の場合、パンの中身完璧に当てちゃうもんね？」

購買へ向かう十代、時谷、実由の三人

ドローパンとは、アカデミアの購買で売られているパンのことである

中身は開けてみないとわからないので、ドロー運を計ることが出来る中でも「黄金のタマゴパン」が最高レア度を誇り、十代はそれになんども引いていた

505

ある日、時谷達を誘ってやらせた十代

そのとき、時谷は恐るべきことをやってのけた

「・・・実由、進、なにかジャンルのリクエストは？」

カートを前に、後ろの二人に聞いてくる時谷

「え？・・・あ・・・じゃあ、惣菜パンで・・・」

「私は・・・菓子パンかな・・・？」

首を傾げながら答える進と実由

「わかった・・・」

徐に手を伸ばし、三つのパンを取り出す時谷

「トメさん、ドローパン三つね？」

「はいよう！」

お金をカウンターに置いて二人の元へ

「こっちが進で、こっちが実由な？」

そう言って、二人にパンを渡す時谷

まさかと思いながら包むを開く二人・・・そこには

「あ・・・焼きそばパン・・・」

「私はシヨコラパンだ・・・」

「マジかよ!？」

開けてびっくり、なんと時谷は二人のリクエストに答えて見せたのだった・・・

「どうやったんだよ!？」

「どうと言われてもな・・・こう、頭の中に食べ物ofルーレットみたいなのが浮かんできて、これと思ったところでパンを取ると、思ったとおりに引けたな・・・」

TFプレイヤーにはお馴染みのルーレット

たまに、カードも浮かんでいる

ちなみに、時谷が引いたのは・・・

「あ、カードが中に・・・」

何かと思ってカードが浮かんだ瞬間に引いたカード入りパンだった・

購買に差し掛かると、入口に人だかりが出来ていた

「なんだなんだ？」

「進。どうしたんだ？」

時谷は、後ろのほうにいた進に声をかける

「あ・・・時谷・・・あれだよ・・・」

「「「ん？」」」

進の指さす方を見ると、ラーイエローの生徒と翔がデュエルをしていた

「誰だ？」

「確か・・・神楽坂・・・だったか？」

思い出しながら相手の名前を言う時谷

「翔！ どうしたんだ？」

「あ、アニキ・・・どうしたもうこうしたもないっスよ！ あれあれ！！」

そう言って、壁のポスターを指さす翔

「なにになに？ 『初代アカデミアにて、元デュエルキング武藤遊戯のデッキ特別展示』・・・ってことは！ 遊戯さんの使ってたデッキが、この学校に来るのか！？」

「これはもう見るしかないでしょ！」

ポスターを見て大喜びの十代

「凄いね、時谷君？」

「あ？・・・ああ・・・そう、だな・・・」

「時谷・・・？」

実由の言葉に曖昧に答える時谷

「いやさ・・・兄さんから、このことは聞いててさ・・・知ってたんだよ・・・実は」

「あゝ・・・なるほどね・・・」

「それは・・・しょうがないよね」

（それと、遊戯さん本人からも・・・）

それはさすがに言えなかった時谷

「まあ、遊戯さんのデッキは、かなりのレアカードも含まれているからな。見る価値は十分だろうな・・・カードは本物じゃないだろうけど」

「そうだよね・・・盗まれたら大変だもん」

「それに・・・遊戯さん本人も・・・デュエルできないし・・・」

時谷の言葉に頷く実由と進

「で・・・なんでデュエルしてんだ？」

「ああ・・・購買部で整理券を配布してて・・・最後の一枚をデュエルでって・・・」

「なるほど・・・」

「あ・・・時谷と鈴原さんの分・・・もらっておいたけど・・・」

進が整理券を取り出す

個人で三枚もらう辺り、やり手の進だった・・・

「時谷君。せっかくだから一緒に行こう？　どんな戦い方するとか、時谷君のときはどうだったとか・・・教えて欲しいし・・・」

「そうだな・・・それに、せっかく進がもらってくれたんだし・・・行くか・・・ありがとな？　進」

「うん・・・」

実由の言葉に頷きながら整理券を受け取る時谷

「あ・・・ちなみに、丸藤君がもらおうとしてるのは遊城君の分だから・・・」

「ふん・・・」

そう言って、翔と神楽坂のデュエルを見る時谷達

「俺のターン、ドロー！　俺は魔法カード『大嵐』を発動！　場の魔法・罠カードを破壊するノ〜ネ！！」

「は？」

「今のって……」

神楽坂の口調に首を傾げる時谷と実由

「神楽坂君のデッキだけど……見た感じ……クロノス教諭のコピーデッキ……みたいなんだ」

「コピーデッキ？」

進からの解説

『大嵐』の効果で、神楽坂の伏せカードが破壊され、二体のモンスターが召喚された

「『黄金の邪神像』か……」

「二体のトークンを生け贄に……古代の機械巨人アンティーク・ギア・ゴーレムを召喚！！」

クロノスとまったく同じポーズでモンスターを召喚する時谷

「行け！ 古代の機械巨人！」

腕を振りかぶり、翔のモンスターに殴りかかる機械巨人

「ジェット・ロイドのモンスター効果！ 攻撃対象になったとき、手札から罠カードを発動できる！！」
「魔法の筒マジック・シリンダー！！」

翔のモンスター……ジェット・ロイドの前に二つの筒が現れる

「僕が受けた攻撃は……そのままお返しだ！！」

「何!？」

腕の影が筒に入り、もう一つの筒からまっすぐ神楽坂に向かって行く

「ぐわあああ!!」

その攻撃により、神楽坂のライフはゼロになった・・・

「すごいな翔・・・古代の機械巨人の効果をしっかりと読んだ戦術だな・・・」

「あれ、十代君がクロノス教諭との入試デュエルで一度見たけど、翔君はそれを覚えてたみたいだね」

時谷が会場に入る前の出来事

「はいはい! 解散解散!!」

トメさんが手を叩きながら促すと、入口にいた生徒達が戻っていく

「なんだよ神楽坂の奴・・・」

「ラーイエローのくせに格下に負けてやがる・・・」

出ていきながら、言いたい放題の他のラーイエローの生徒達

「どんまい、こんな日もあるって・・・」

「うるさい!」

声をかける時谷に怒鳴り返す神楽坂

「オベリスクブルーに昇格出来たお前に、何がわかる!!」

そう叫び、走りさる

その夜・・・

「ふむ・・・」

自室で、デッキを広げている時谷

「時谷・・・？」

「ああ、進・・・」

「デッキの・・・調整？」

風呂から戻ってきた進が近づいてくる

「ああ・・・たまに調整しないと・・・いつも同じだと、対策練られるし・・・」

対策への対策

「そうだね・・・あ、時谷・・・PDA鳴ってるよ？」

「ん？・・・十代からか・・・」

PDAをとり、回線を開く

『よ！ 時谷!!』

「どうした？」

『今から、展示会場いかないか？』

「展示会場？」

『ああ。明日の九時に展示会の開始ってことは・・・今夜のウチにもうデッキは来るかもだろ？ 翔や隼人も行くからさ！ お前と進もどうだ？』

十代の誘いに、顔を見合わせる時谷と進

「どうする？」

「行って・・・みたいかも・・・」

進の回答に時谷も頷き

「分かった。後で合流な？」

『おう！！』

そう言って、回線を閉じる十代

「さて・・・それじゃ行くか・・・」

「うん・・・」

部屋を出ていく時谷と進

アカデミア校舎・廊下

「十代達・・・もう行ったみたいだな・・・」

「そうだね・・・」

十代達を探しながら廊下を歩いている時谷と進

「あれ？ 時谷君に進君？」

「実由？ それに明日香も・・・」

声のした方を向くと、実由と明日香が歩いてきた

「考えることは、みんな同じってことね・・・」

「ということは・・・天上院さん達・・・も？」

進が聞こうとした時だった・・・

「マンマミィヤ〜！！」

「「「ん？」」」

展示会場の方から叫び声が聞こえてきた

「あの声は・・・」

「クロノス教諭だな」

「それにこの方向は・・・展示室！？」

「急ぎましょう！！」

展示会場に走る四人

「十代！」

「時谷！！」

会場の入口で、立ち尽くしている十代、翔、隼人と合流する二人

「あれは・・・ケースが割られてる・・・」
「まさか・・・」

実由と進は、ケースのそばに立っていたクロノスを見る

「ワタシじゃないノゝネ！」

必死に弁解するクロノス

「そんなことわかってますよ・・・それに、教諭ならケース割る必要ないでしょ？」

「そうね・・・鍵持ってるはずだし・・・」

時谷と明日香に言われて、胸をなでおろすクロノス

「とにかく、まだ時間は経ってないんだろう・・・急いで探そう！」

「「うん！」」「「ええ！」」

「俺達もいこうぜ！」

「うん！」「わかったんだな！」

そう言って、走り出す七人

【進SIDE】

港の栈橋にやってきた進と明日香

「こっちは・・・居ないみたいだね・・・」

「そうね・・・あら？」

周囲を見渡す明日香が、何かを見つける

「あれは・・・」

進も確認し、走り寄る

「君・・・君がデッキを・・・？」

ゆっくりと振り返る人影

「光坂進に天上院明日香か・・・ちょうどいい・・・今からこのデッキを試したかったところだ・・・」

「君は・・・神楽坂君・・・」

人影は神楽坂だった

「デッキは持っているな！？」

「うん・・・天上院さん・・・離れてて・・・」

「え、ええ・・・」

明日香を下がらせ、ディスクを構える進

【時谷SIDE】

「いないな・・・」

「うん・・・」

イエロー寮の周辺を探している時谷と実由

「時谷！」

「十代・・・そっちもか・・・」

十代達と合流し、情報を交換する

そして、遠くから爆発音が聞こえた

「あっちは・・・進達が行った方向・・・まさか！」

急いで岩場に向かう時谷達

「ぐっ・・・」

「進！！」

「進君！！」

「時谷・・・鈴原さん・・・」

膝を付いている進に駆け寄る時谷と実由

「神楽坂！ お前が・・・」

「速くデッキを返して！ 今ならクロノス先生も大事にはしないはずだから！」

「いやだと言ったら？」

時谷と実由にそう答える神楽坂

「これこそ俺が求めていた最強のデッキだ・・・武藤遊戯のデュエ

ルを徹底的に研究している俺なら！ 彼のデュエルを100%再現できる！！」

「ふざけるな！！」

「なに？」

神楽坂に怒鳴りつける時谷

「遊戯さんのデッキは・・・他の人間が使いこなせるものじゃない！」

「ふん・・・お前では無理だろうな？・・・北上時谷・・・」

余裕の表情で時谷を挑発する神楽坂

「時谷君・・・」

「遊戯さんの誇りを・・・魂を・・・汚させはしない・・・デュエルだ！！」

「ふん・・・いいだろう・・・かかってこい！」

互いにディスクを構える

「「デュエル！！」」

時谷 LP 4000

神楽坂 LP 4000

「俺のターン・・・ドロー！！」

引いた手札を確認する時谷

「俺はダーク・グレファ―を召喚！」

ダーク・グレファアー 攻撃力 1700

「ダーク・グレファアーの効果！ 手札のダーク・パーシアスを捨てて、デッキからネクロ・ガードナーを墓地に送る！ そしてカードを二枚伏せて、ターンエンド！！」

時谷 LP 4000

場 ダーク・グレファアー 攻撃 1700

伏せ二枚

手札二枚

「俺のターン・・・魔法カード『融合』！！ 手札のバフォメットと幻獣王ガゼルを手札融合！！ 現れろ、有翼幻獣キマイラ！！」

神楽坂の場に、黄色い体に双頭の幻獣が召喚される

有翼幻獣キマイラ 攻撃力 2100

「いきなり攻撃力2100かよ！？」

「さすが・・・決闘王のデッキ・・・」

「進・・・お前戦ったんだろ？ 何かアドバイスは・・・？」

隼人が進に聞くが

「それが・・・」

「僕・・・キマイラやその融合素材しか・・・見てないんだ・・・」

明日香が言う前に、少し俯きながら答える進

「でも、時谷君なら何度か戦ったって言うし・・・アドバイスいらないんじゃないかな？」

ふと、そう思った実由

すると、他のみんなもなるほどと頷いた・・・

「行け！ 『キマイラ・インパクトダッシュ』！！」

グレファアに突進するキマイラ

「罠カード発動！ 『次元幽閉』！！ 攻撃モンスターをゲームから除外する！！」

「何！？」

キマイラが次元のゆらぎに飲み込まれ消滅する

「キマイラの効果は破壊にのみ反応する・・・除外、バウンスでは発動しない！」

「くっ！ 一度防いだぐらいで・・・！！」

時谷を睨み付ける神楽坂

「一度じゃない」

「なんだと！？」

時谷の言葉に驚く

「俺は、遊戯さんとは何度もデュエルしている・・・今のも何度も

行なってきた・・・」

遊戯本人も、これには手を焼いていた

「ならば、俺は手札から魔法カード『死者転生』を発動！ 手札一枚を墓地に送って、墓地のモンスターカード・・・幻獣王ガゼルを手札に戻し、攻撃表示で召喚する！！」

黒い毛に覆われた幻獣が召喚される

幻獣王ガゼル 攻撃力 1500

「そして、カードを一枚セットして・・・ターンエンド！！」

神楽坂 LP 4000

場 幻獣王ガゼル 攻撃 1500

伏せ一枚

手札無し

「俺のターン・・・神楽坂・・・お前の魂胆はわかってる・・・」

「何！？」

手札を確認しながらそう宣言する時谷

「お前が『死者転生』で送ったのはブラック・マジシャンで・・・その伏せカードは『黒魔族復活の棺』・・・違うか？」

「なっ！？」

時谷の指摘に驚く神楽坂

自分の捨てたカード、そして伏せたカードをズバリ言い当てられた

のだ

「『黒魔族復活の棺』を発動するには、自分のモンスターと相手の召喚されたモンスターが必要になる・・・だからガゼルをわざわざ攻撃表示で出したんだろ？」

「くっ・・・」

「それも・・・俺が何度もやられた戦術だ・・・遊戯さんとデュエルしたことのある人なら、誰でもたどり着く・・・」

「ぐぐっ・・・！」

神楽坂の表情が歪んでいく

「お前は、ただデータで見たコンボしか行なっていない・・・そんなもので、強くなった気になるんじゃないよ！！魔法カード『死者蘇生』！！お前の墓地のブラック・マジシャンを特殊召喚！！」

神楽坂の墓地から飛び出してくるブラック・マジシャン

ブラック・マジシャン 攻撃力 2500

「馬鹿な・・・俺の・・・ブラック・マジシャンが・・・」

「これはコピーカードだが・・・お前の物でもない！！ダーク・グレファアーを生け贄に・・・来い！ブラック・マジシャン・ガール！！」

《はっ！！》

時谷の場に、ブラック・マジシャン（マハード）の弟子、マナが召喚される

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力 2000

《いきなりだね．．．》

（すみません．．．マナさん．．．）

苦笑いしているマナに謝る時谷

「わあ！！ ブラック・マジシャン・ガールだ！！」

「すごい！！」

翔と十代が喜んでいる

「馬鹿な．．．なぜ．．．ブラック・マジシャン・ガールが．．．
お前のデッキに．．．」

「お前に教える義理はない．．．さらに、魔法カード『賢者の宝石』
を発動！ 場にブラック・マジシャン・ガールがいるとき、デッキ
からブラック・マジシャンを特殊召喚する！！ いでよ！ ブラッ
ク・マジシャン！！」

《はあ！！！》

マナの横に降り立つマハード

ブラック・マジシャン 攻撃力 2500

《まさか．．．コピーとは言え、マスターのデッキを奪うとは．．．

》

（ええ．．．ですから、力をお借りします．．．マハードさん）

《承知した！！！》

マハードが鋭く神楽坂を睨む

「ブラック・マジシャンまで・・・」

神楽坂は完全に戦意を失いかけていた

「バトルだ！ 遊戯さんのブラック・マジシャンで、ガゼルに攻撃！
『黒・魔・導』！！」

《はぁ！！》

杖からの波動であっけなく破壊されるガゼル

「ぐわぁ！！」

神楽坂 LP 4000 ↓ 3000

「そして、リバースカード、オープン！！ 『ブラック・スパイラル・フォース』！！ 場に『ブラック・マジシャン』がいるとき、場のモンスター一体の攻撃力を倍にする！！ 対象は、ブラック・マジシャン・ガール！！」

《行くぞ！ マナ！！》

《はい！ お師匠様！！》

マハードから出た魔力が、マナを包み込む

ブラック・マジシャン・ガール 攻撃力 2000 ↓ 4000

「そんな・・・攻撃力・・・4000・・・」

「“自分の”デッキで出直してこい！！」
ブラック・マジシャン・ガールでダイレクトアタック！！
『黒・魔・導・螺・旋・爆・裂・波』！！」

《でえええい！！》

マナの杖から極大の砲撃が放たれる

それは、どこぞの魔王様を思わせる砲撃だった・・・

「ぐっ・・・ぐわああああ！！！」

あまりの衝撃に吹き飛ばされる神楽坂

神楽坂 LP 3000 ↓ 0

《あゝスッキリした！！》

（ははは・・・ありがとうございました、マナさん、マハードさん）

《気にすることはない・・・我らの方こそ、例を言おう・・・時谷

殿・・・》

それだけ言うと、消えていった魔導師師弟

そして、ゆっくりと神楽坂に歩み寄る時谷

「神楽坂・・・」

「くっ・・・俺は・・・キングのデッキを使っても・・・勝てないのか！！！」

膝をつきながらそう叫ぶ神楽坂

「当たり前だろ・・・そのデッキは、遊戯さんが一から考えて作ったデッキで・・・カードとの絆も深い・・・他の人間が入る余地は無いんだ」

「絆・・・」

ゆっくり時谷を見上げる

「他人のデッキで勝ったって・・・そんなの、お前の実力じゃない・・・お前は記憶力がいいんだろ？ だったらそこを活かした“お前の”デッキも作れるはずだ・・・」

「俺の”・・・デッキ・・・」

小さく呟き、立ち上がる神楽坂
少しだけ表情が晴れていた

「すまない・・・なかなか勝てないのを理由に・・・とんでもないことを・・・」

「まあ、よく反省するんだな・・・オシリスレッド行きになるかもしれないけど、それで済むなら儲けもんだ・・・」

「ああ・・・これ・・・」

そう言って、時谷にデッキを返す神楽坂だが

「お前が返すんだよ！」

「ぐわっ!!」

時谷に蹴られてしまう

「ちょうど、そこに校長もいることだしな！」

「「「「え!?!」」」」」

時谷の言葉に、驚き振り返る十代達

「はは・・・バレてしまったか・・・」

「最初から気づいてましたよ・・・」

苦笑いしながら岩陰から出てくる鮫島校長

「神楽坂君・・・君の行為は決して許されるものではない」

「はい・・・」

「よって、君はオシリスレッドへの降格を言い渡します・・・そこで、もう一度勉強し直さない・・・いいね？」

「はい・・・申し訳ありませんでした！！」

校長に頭を下げる神楽坂

次の日、展示会には予定通り遊戯のデッキが展示された

その時に、時谷は実由に遊戯の使ってきた簡単なコンボの例、そして、それに対する自分なりの対処法を教えていた・・・

余談だが、クロノスは管理責任を問われて減俸処分となっていた・・・

TURN 25 (後書き)

どうも！

という訳で、VS遊戯デッキ二回目でした！

二話前に遊戯さんと戦っているので、やろうか考えましたが、マハードさんとマナさん二人の登場のためにやることになりました

最初のドローパンのところもどうしようか悩みましたが、購買に行く理由がなかなか無かったので、時谷君のスペックを上げてみました

次回には、時谷君がなぜあの二枚を持っていたのかの理由を本編に沿いながら説明をしたいと思います！

ではまた次回！！

三沢？・・・誰でしたっけ・・・それ・・・？

TURN 26 (前書き)

さて、今回は少し短いです

途中から、“あの子”も出てきますよ

あ、あとがきでお知らせもありますので

TURN 26

《新たな仲間》

遊戯のデッキ（コピー）盗難未遂事件の翌日

昼休みに集合した十代、翔、隼人、明日香、実由、進、そして時谷
そこで、なぜ時谷が遊戯のカードを持っているのかを聞くことにな
った・・・

「まあ、簡単に言うと、遊戯さんから頼まれたんだ」
「なにを？」

「この二人をアカデミアに連れて行って欲しいって・・・」

そう言って、二枚のカードを見せる時谷

デュエルのあと、遊戯が時谷にした頼み事がこれだった

「まあ、デュエルで使う気はなかったんだけど、昨日はコピーとは
いえ、盗まれたのが許せなくて・・・制裁の意味も込めて、デッ
キに入れたんだよ・・・」

「ふん・・・」

十代がカードを眺めていると、横にハネクリボーも出てくる

《初めまして・・・実由様の精霊のケルビムと申します》
《こちらこそ・・・マハードと呼んでくれ》

《マナです！ よろしくお願いします！！》

互いに自己紹介している精霊達

「一応、進級する前には返すことになってるからな・・・」

「デュエルでも使うの？」

「うーん・・・あんまり使うと騒ぎになりかねないからな・・・そんなに使わないかもな・・・」

考えながら答える時谷

一応、神楽坂にもあまり言いふらさないように頼んでいる

「まあ、これが一応の理由だな・・・」

その一言で、説明を終わらせ、昼食を再開する時谷達

その日の放課後・・・

「さて・・・帰るか？ 実由、進」

「うん！」

「あ・・・ごめん、時谷・・・僕、ちょっと・・・図書館に行くから・・・先に帰ってて？」

二人を誘う時谷

実由は頷き、進は謝ってきた

「そっか・・・わかった。それじゃ、また後でな？」

「またね？ 進君」

「うん・・・」

進と別れて二人で校舎を出る

「時谷君。このあとの予定は？」

「そうだな・・・ん？」

質問に答えようとして、何か違和感を感じた時谷

「どうしたの？ 時谷君・・・あれ？」

実由も同様に何かを感じた

「何か・・・女の子のすすり泣く声が・・・」

「うん・・・」

二人して季節外れなことを言っている

「こっち・・・だね」

「行ってみるか・・・」

茂みを指差し、そこに入っていく二人

森の中を進むこと数分、開けた場所に到着した

「この辺・・・だと思うけど・・・」

「ああ・・・ん？ あれは・・・」

周囲を見渡す時谷が何かを見つけた

「あそこだ！」

そこへ駆け出す時谷

実由も付いていく

「あ・・・」

「これは・・・」

たどり着いた先で見つけたものは

《うう・・・グスッ！！・・・暗いよ・・・怖いよ・・・》

《しっかりしなさいよ！ あんたが泣いたら・・・あたしまで・・・
うう・・・》

二人の少女が泣いていた

「この子達は・・・」

「ピケルに・・・クラン・・・？」

《《えっ！？》》

精霊二人も、時谷達に気づく

《きやああああ！！》

《《出たああああ！！》》

その瞬間、叫びだし逃げ出そうとするピケルとクランだが、ピケルの方は腰が抜けてしまい、うまく走れない様子だった

「だ、大丈夫か？」

「立てる？」

その様子に、手を差しのべる時谷と実由だが

《ピケルに触らないで！！》

克蘭が立ちふさがる

《この子はあたしが守るんだから！！》

《ク・・・克蘭ちゃん・・・》

涙目になりながらピケルを守ろうとする克蘭に、そんな克蘭を顔を赤くしながら見つめるピケル

「あゝ・・・別に君たちに何かしようってことはないから・・・」
「うん・・・よかったら、話を聞かせて？ どうしてこんなところに？」

宥めながら話を聞こうとする時谷と実由

《あんた達には関係ないでしょ！！ 近寄らないでよ！！》

そう言って、克蘭は手に持った鞭を振り回す

「危ないって！」

「落ち着いて！ ね？」

実際にはダメージは全くないのだが、それも忘れてなだめる二人

《うるさい！ うるさい！ うるさーい！！》

聞く耳も持たずに鞭を止めないクラン

《あれ？・・・クランちゃん・・・この人達、私達のこと見えてるみたいけど・・・》

《あ・・・そういえば・・・》

クランの様子に、いち早く落ち着いたピケルの言葉に、ピタリと止まるクラン

《悪い人には私達見えないし・・・それにこの人達、優しそうな目をしてるよ？》

《むむむ・・・》

ピケルに言われて、時谷と実由をじっと見つめるクラン

《た、確かに・・・あんなロクデナシよりはマシかもね！！》

少し顔を赤くしながらそういうクラン

「とりあえず、信じてもらえたのかな？」

「そうみたいだな・・・それじゃ、話を聞かせてもらえるかな？」

互いに苦笑いしながら二人から話を聞くことに

《あたしたちは、前にあるマスターのところにいたんだけど、そのマスター、あたし達のこと“クズ”呼ばわりして、この森に捨てて

いったの・・・》

「ヒドイ・・・」

「この学校の生徒か？」

《はい・・・お兄さんみたいな服着てましたし・・・》

「オベリスクブルーの奴か・・・そんな奴いそうだな・・・」

ピケルの言葉に、少し怒りながらそういう時谷

「とりあえず、こんなところにいちやダメだよ・・・私達と一緒に
行こう？」

「そうだな・・・放っておけないしな・・・」

《克蘭ちゃん・・・》

《わかってるわよ・・・》

ピケルに頷き返す克蘭

「とりあえず、探すのは明日だな・・・」

そう言って、二枚のカードを拾い上げる

「それじゃ、実由・・・頼むな？」

「うん！」

男子寮に連れていくわけにもいかないので、実由が預かることに・

「あ、ついでにマナさんも・・・」

《えっ!?!?》

ブラック・マジシャン・ガールのカードを渡そうとすると、不満そ

うな顔でマナが飛び出してくる

《どうして!?!》

「いや・・・考えてみたら、マナさんも男子寮にいたらまずいかもと・・・」

《なにそれ!?! 昨日までは普通にいたじゃない!?!》

「いや、そうなんですけどね・・・」

時谷に猛抗議するマナ

《マナ・・・ワガママを言うんじゃない・・・》

見かねたマハードも出てくる

《でもお師匠様! あまりにひどいと想いません!?!》

《う、うむ・・・》

マナの気迫に少し押され気味のマハード

《それに、男の子の着替えぐらい、マスターで見慣れてます!?!》

「それもどうかと・・・」

《ともかく! 私は時谷君と一緒にいます! それに、マスターが託したのは時谷君でしょ!?!》

「まあ・・・」

猛反対のマナに小さく頷く時谷

「時谷君・・・マナさんの言うとおりにしたほうがいいと思うよ?」

「いや・・・でもさ・・・」

「大丈夫だよ! マナさんが一緒に部屋でも・・・私は気にしない

から・・・ね？ マナさん・・・？」

そう言って、静かにマナを見つめる実由
顔は笑っているが、視線は冷たかった・・・

（時谷君に変な事したら・・・わかってますね・・・？）
《う、うん！ もちろん！！》

実由の視線に冷や汗を掻きながら頷くマナ

結局、時谷はマナ達を連れて寮に戻った・・・

オベリスクブルー男子寮・時谷と進の部屋・・・

「ただいま」

「あ・・・おかえり・・・遅かったね？」

「ああ・・・ちよつとな・・・」

進に簡単な経緯を話す時谷

「ひどいことするね・・・その生徒・・・」

「ああ・・・」

「女の子のイラストのカードを捨てるなんて・・・許せない・・・」
「そっちな・・・まあ、いいけどさ・・・」

珍しく進が怒っているので驚いたが、理由を聞いて苦笑い

「とりあえず、明日、そいつら探そうかと思う」

「手伝うよ・・・時谷・・・」

いつになく真剣な顔の進だった・・・

次の日・・・

「とりあえず、特徴なんかあるか？」

《んゝと・・・よく覚えてないんです・・・》

《二年前だし・・・》

「「二年前!？」」

ピケルとクランの告白に同時に驚く時谷と実由

「そういうのは最初に言おうな？」

《ごめんなさい・・・》

《だって・・・聞かれなかったんだもん・・・》

謝るピケルと顔を逸らしているクラン

「はあゝ・・・まあ、二年前ってことは、今は三年生のはずだな・・・」

「そうだね・・・名前は覚えてる？」

《えっと・・・“鷹文”^{たかふみ}って名前だったと・・・》

必死に思い出して名前を言うピケル

「鷹文・・・か・・・とりあえず、教員室で聞いてみるか・・・」

「そうだね」

そう言って、教員室へ向かう時谷と実由と・・・

「僕・・・置いてきぼりだね・・・」

後ろで苦笑いの進

教員室にて・・・

「すみません、クロノス先生」

「なんなノゝネ？」

とりあえず近くにいたクロノスに声をかける時谷達

「ひとつ聞きたいんですが・・・三年のオベリスクブルーに“鷹文”って名前の生徒っていますか？」

“鷹文”？・・・ちよっと待つノゝネ・・・」

そう言って、生徒名簿を開き、確認していくクロノス

「フム・・・そんな名前の生徒はいないノゝネ・・・」

顔を上げながら答えるクロノス

「え!？」

「そんな・・・」

返答に驚く時谷と実由

「あの・・・それじゃ、ラーイエローやオシリスレッドには・・・」

「いないノゝネ・・・」

進も聞いてみるが、同様の返答だった

教員室を出て相談を始める時谷達

「どういふことかな？」

「うゝん・・・ピケル、クラン？ 名前は合ってるんだな？」

《はい・・・》

《間違いないわ！！》

時谷の質問にもしつかりと頷く二人

「うゝむ・・・」

「お？ 時谷達じゃねえか？」

「あ・・・遊城君・・・」

唸っていると、十代、翔、隼人の三人と、もう一人レッドの制服を着た生徒がいた

「ん？ 誰だ？」

「ああ。今日、編入してきた早乙女レイだ！」

「よ、よろしく・・・」

十代に紹介され、小さく頭を下げるレイ

「ああ。北上時谷だ・・・よろしく」

「鈴原実由だよ」

「光坂・・・進・・・よろしくね・・・」

お互いに自己紹介を済ませる

「で、一緒の部屋になったことだし、朝礼の前に一通り校舎の中を案内してるんだ」

「なるほどな・・・」

十代の説明を聞きながらレイを見る時谷

「そんじゃな!! 行こうぜ、レイ？」

「あ・・・うん・・・」

十代達に連れられ、立ち去るレイ

「なあ・・・実由・・・レイって・・・」

「うん・・・多分・・・時谷君の思ってる通りだと思うよ？」

「何か、事情があるのかな？」

レイを見ながら、そう話す時谷達

「さて、もうすぐ朝礼だな・・・放課後にブルー寮でも聞いてみるか・・・」

「うん！」

「わかった・・・」

そう言って、教室に向かう時谷達

「毎年恒例、北にある姉妹校・・・『デュエルアカデミアノース校』との“友好デュエル”が近づいてきております・・・」

朝礼にて、校長からの連絡が伝えられる

「去年は、誰か一人を選抜していましたが・・・今年の新入生には優秀な生徒が大勢いるため・・・誰か一人というのも惜しい・・・そう考えた結果、今年は男子三人、女子三人の計六人を選抜してチーム戦を行うことに決定しました」

校長の言葉に、生徒達がざわめきだす

「まだメンバーは決定していませんが、誰が選ばれてもいいように皆さん？ 日々努力を怠らないように・・・」

それだけ伝えると、朝礼を終える校長

「男女あわせて六人か・・・」

「時谷なら・・・間違いなく・・・メンバー入りするんじゃない？」

小さく笑いながら言う進

「さてね・・・まあ、選ばれたら全力を尽くすさ」

「時谷君らしいね？」

「うん・・・」

時谷の言葉に、笑い合う実由と進だった・・・

TURN 26 (後書き)

どうも！

という訳で、新しい精霊「ピケル」と「クラン」の登場です！

いや〜いつか出したいと思っていたんですが・・・なかなか無理矢理・・・

正直、進君からもらってもよかったんですけど、せっかくならと精霊にしました！

マナとマハードですが、今後のデュエルではあまり使用しないと思います

さて、今回はまたしても「横取りデュエル」！ 相手は皆さんお分かりでしょうが・・・

さてさて、それでは今回もみなさんにアンケートです！

ズバリ！ ノース校の生徒の使うデッキはどんなものがいいか？

キーカード、カテゴリ、なんでもアリです！

レシピは必要ありません

こちらで考えてみます。その際、自分の考えたようなデッキではな

いかかもしれないことだけ、ご了承くださいたく思います

注意点は、毎度おなじみ

・チューナーモンスター、シンクロモンスター、エクシーズモンスター、オリカは無し！！

これともう一つ・・・

・ガチデッキはご遠慮願います

この二点です・・・ガチデッキだと、本校の生徒に勝ち目はないか
と思いますので・・・

感想、若しくはメッセージでも受け付けていますので、お願いしま
すね～

活動報告でも同様の告知をしましたが、それと少しだけ変更が・・・

締切を26日に設定していましたが、伸ばします

来月10月の10日までにしたいと思います

執筆の関係もあるので、これぐらいが限界です

ひとつも応募が来ない場合・・・いつの間にか万丈目君が戻ってる
可能性が・・・

まあ、それは無くても一気に飛ばす可能性はありますけどね！！

逆に、六人以上集まった場合、別の形で登場することもあります

みなさまのご応募、お待ちしております！！

ではまた次回！！

TURN 27 (前書き)

さて、今回は横取りです！

相手はお分かりでしょうが・・・書いてて難しいな・・・オリカつて・・・

TURN 27

《一途な思いをデュエルに乗せて・・・》

オベリスクブルー男子寮にて・・・

予定通り、放課後に手分けして聞き込みを開始した時谷達
何人かの先輩に話を聞いた時谷達だが、一向に手掛かりが見つかっていなかった・・・

「誰一人知らないなんてな・・・」

《嘘は言っていないわよ!!》

唸る時谷に克蘭が怒鳴る

克蘭とピケルをそれぞれ時谷と実由がもち、聞き込みをしている

「わかってるよ。克蘭達が嘘をつく意味がないからな・・・」

《あ・・・う・・・わ、わかればいいのよ!!》

「ふむ・・・あれ？」

考えこんでいると、何かの物音が聞こえた

「あっちだな・・・行くか!!」

《あ! 待ちなさいよ!!》

音のしたほうへ走る時谷と克蘭

「あそこは・・・亮さんの・・・?」

たどり着いたのはカイザー・丸藤亮の部屋だった

「誤解だってばく!!」

「往生際が悪いぞ!!」

「十代!？」

部屋に入ると、十代が三人のオベリスクブルーの生徒に押さえられていた

「お前等、少しは人のこと信用しろって!!」

「勝手に部屋に忍び込んだ奴のことなんて信用できるか!!」

引き摺られながら入口に運ばれてくる十代

「待ってください!」

「な、なんだ!？」

「十代は、泥棒なんてしませんよ・・・なにか事情があるはずで・・・」

「うるさい! 下級生が口を出すな!!」

時谷が間に入ろうとするが、突き飛ばされる

「放してやれ・・・」

「「「え?」」」

亮が三人を引き止める

「十代、出るときは玄関から出る・・・ドアはあっちだ」

そう短く告げる

「あ．．．お騒がせしました〜!!」

「あ、十代!」

ドアから走り去る十代を追いかけていく時谷

寮玄関にて．．．

「ちえ．．．ひどい目にあっただぜ．．．」

「何してたんだよ? 亮さんの部屋で．．．」

一緒に出てきた時谷が質問する

「いやさ．．．レイの奴が入って行ってさ．．．」

「レイが．．．? 部屋の中にはいなかったみたいだけど．．．」

「先に逃がして、俺は逃げ遅れたんだよ．．．」

などと話しながら、レッド寮に向かっていく時谷と十代

「ところで．．．そいつ誰だ?」

「《え．．．?》」

クランを指さしながら聞いてくる十代

「ああ。実はな．．．」

十代に軽く事情を説明する時谷

「そっか・・・ひでえ奴がいるんだな・・・」

「ああ・・・」

「よっし、克蘭！俺も協力するぜ！！」

《あ・・・ありがとう・・・》

十代の明るさに押されながらも礼を言う克蘭

「それも大事だが・・・まずはレイのほうだな・・・」

「ああ・・・でもまさか、レイが女の子だったなんてな・・・」

「俺や実由達はすぐに気づいたぞ？」

「え！？ そうなのか！？」

「ああ・・・克蘭達もな？」

《そうね・・・》

時谷が聞くと克蘭も頷く

「とりあえず、レイを探そうか・・・」

「ああ！・・・って、あれ？」

頷く十代だが、すぐに首を傾げる

「レイ！？」

振り向いたところに、当の本人が立っていた

「ちょっと・・・いいか・・・？」

そう言って、二人を連れて歩き出すレイ

【亮SIDE】

灯台の下で、ある人物を待っている亮

「あの・・・何か・・・？」

「ああ・・・わざわざ済まないな・・・」

亮が呼び出したのは実由だった・・・

「少し・・・相談があつてな・・・」

「私に・・・ですか？」

「ああ・・・というか、知り合いの中では君ぐらいにしか聞けないだろう・・・」

そう言って、実由にあることを聞き出す亮・・・

【時谷SIDE】

岸壁に着き、互いに向き合う三人

「お前・・・なんでボクのことを黙ってたんだ？」

「さっきのか？」

レイの言葉に、質問を返す十代
レイも俯いてしまう

「女の子が男の格好でこんなところまで来るなんて・・・」
「何か、事情があるんだろ？」

時谷も話しかける

「言うな！ さっき見たことは、絶対人に言うんじゃない！！」

声を挙げるレイ

「人に物を頼むときは、まず事情を説明するもんだ」

「それは確かにな・・・」

十代の言葉に頷く時谷

「それは・・・できない・・・」

首を振るレイ

「なら、デュエルだな？」

「え？」

時谷の言葉に首を傾げるレイ

「デュエルにはその人の人間性が現れる、言葉を交える必要はないからな？」

「そうそう！ ほら！」

「あ・・・」

そう言って、レイにディスクを渡す十代

「どっちがやる？」

「俺！」

「お前がいい・・・」

十代が手を上げるが、時谷を指差すレイ

「俺？　なんで？」

「お前・・・この間テレビでやってた大会に出てただろ？」

『KCグランプリ』を見ていたようだ

「大会で殿堂入りするぐらいなんだ・・・強いんだろ？」

「まあ、それなりには・・・」

「なら・・・」

「分かったよ・・・悪いな？　十代」

「ちえ・・・それじゃ、次は俺な？」

そう言って、離れる十代

【翔SIDE】

「ええ！？　レイって女の子だったの！？」

「びっくりなんだな・・・」

時谷達を見かけたので、あとを付けてきてきた翔と隼人

「あ・・・翔君と隼人君」

「あれ？　実由ちゃんとお兄さん？」

「レイちゃん・・・時谷君とデュエルしてるんだ・・・」

そこに、亮と実由が到着する

【時谷SIDE】

互いに向き合う時谷とレイ

「それじゃ・・・」

「行くぞ!!」

「「デュエル!!」」

レイ	LP	4000
時谷	LP	4000

「レディーファースト・・・そちらからどうぞ？」
「それじゃ・・・ボクのターン・・・ドロー!!」

引いたカードを見て小さく笑うレイ

「恋する乙女、召喚!!」

レイの場に、ドレスを着た少女が召喚される

恋する乙女 攻撃力 400

「わぁ! かわいい!!」

恋する乙女を見て、にやけている翔

「ターン終了!!」

レイ LP 4000

場 恋する乙女 攻撃 400

伏せ無し

手札五枚

「俺のターン、ドロー!!」

手札を確認する時谷

「(レイのモンスターの攻撃力は400・・・何か効果が・・・?)

だが、怯んでもいられないな・・・)俺は手札から、終末の騎士を召喚!!」

終末の騎士 攻撃力 1400

「終末の騎士の効果! 召喚に成功したとき、デッキから闇属性モンスターを一体墓地に送る!! 俺は、ネクロ・ガードナーを墓地へ!! そして、バトル!! 恋する乙女に攻撃!!」

手に持った剣で恋する乙女に切りかかる終末の騎士

「勝負にならないよ」

「どっちの応援してるんだ?」

翔の言葉に思わずそう聞いてしまう隼人

「でも、恋をすると、女の子は変わるんだよ?」

《はぁ!!》

《きゃぁ!!》

破壊されずに吹き飛ばされる恋する乙女

「くぅ!!」

レイ LP 4000 ↓ 3000

「恋する乙女のモンスター効果! 攻撃表示でいる限り、戦闘では破壊されない!!」

「ちいっ!」

《若・・・》

(ん? どうした、ゼラート・・・)

《あれを・・・》

(あれ・・・?)

ゼラートが指差す方を見ると・・・

「は・・・?」

《お、お嬢さん・・・大丈夫ですか?》

膝をついて、恋する乙女に駆け寄る終末の騎士

《うう・・・》

《あ・・・》

恋する乙女の涙に、（顔は見えないが）困惑している終末の騎士

「おい！？ 何やってんだ！？」

思わず声を挙げる時谷

「時谷君・・・急にどうしたんだろう？」

「あはは・・・」

翔と隼人が首を傾げるが、時谷のしているものを同じく見えている
実由は苦笑いしていた

「恋する乙女のもう一つのモンスター効果。バトルした相手に乙女
カウンターを乗せる！！」

恋する乙女から、ピンク色のハートが終末の騎士にヒットし、胸に
ハートマークが付けられる

「乙女カウンター？」

終末の騎士 乙女カウンター1

「よくわからないが・・・俺は、カードを一枚セットして・・・タ
ーンエンド！！」

時谷 LP 4000

場 終末の騎士 攻撃 1400 乙女カウンター1

伏せ一枚

手札四枚

「ボクのターン、ドロー!! 手札から装備魔法『キューピッド・キス』を発動!!」

恋する乙女の頬に、キューピットがキスをする

「バトルよ! 『一途な思い』!!」
「なに!？」

攻撃力の負けているモンスターでの攻撃に驚く時谷
それと同時に、周囲の雰囲気も変わってしまう

《終末の騎士さ〜ん! 私の一途な思い・・・受け止めて〜!!》
ゆっくりとかけてくる恋する乙女

《あっ!!》

しかし、終末の騎士は身体をずらして避けて転倒してしまう

《ひ・・・ヒドイ・・・ヒドイわ〜!!》
《す、すまない・・・そんなつもりでは・・・》

泣き出す乙女に慌てて近づく終末の騎士

そして、乙女の投げキッスを受ける

「なんだ・・・？」

終末の騎士の様子が変わったことに気づいた時谷

《私の言うこと・・・聞いてくれるわよね?》

《もちろんだ!!》

手を取り合ってそんな会話をしている二人

《じゃあ・・・時谷に攻撃して!!》

「はあ!?!」

《もちろん! 君のためなら!!》

そう答え、時谷に切りかかる終末の騎士

「ふざけんな! 墓地のネクロ・ガードナーの効果! 墓地から除外して攻撃を一度無効!!」

幻影が剣を弾く

「おいこら! どういうつもりだ!?!」

終末の騎士を怒鳴りつける時谷

《ふん! 愛のためなら、主だろうと関係ない!!》

「あんなあ・・・」

終末の騎士の言葉にさすがの時谷もげんなり・・・

「乙女カウンターの乗っているモンスターを攻撃してダメージを受けたとき、そのモンスターのコントロールを得る!」

「なに!?!」

レイ LP 3000 ↓ 2000

「カードを一枚セットして・・・ターンエンド!!」

レイ LP 2000

場 恋する乙女 攻撃 400 (キューピッド・キス)

終末の騎士 攻撃 1400

キューピッド・キス(恋する乙女)

伏せ一枚

手札四枚

「くそ! 俺のターン! 手札を一枚捨てて、装備魔法『D・D・R』を発動!! 除外されているネクロ・ガードナーを特殊召喚!!」

ネクロ・ガードナー 攻撃力 600

「さらに、ネクロ・ガードナーを生け贄に、ダーク・パーシアスを召喚!!」

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900

「ダーク・パーシアスは、墓地の闇属性モンスターの数×100ポイント攻撃力をアップする! 墓地の闇属性モンスターは一体! よって攻撃力を100ポイントアップ!!」

ダーク・パーシアス 攻撃力 1900 ↓ 2000

「バトル! ダーク・パーシアスで、終末の騎士を攻撃!!」

終末の騎士の騎士へ突撃するパーシアスだが

「リバースカード、オープン！！ 永続罠『ディフェンス・メイデン』発動！！」

終末の騎士の前に、手を広げて立ちふさがる乙女

《きやああ！！》

パーシアスの剣を受けて弾き飛ばされる乙女

「『ディフェンス・メイデン』の効果により、ダーク・パーシアスの攻撃は恋する乙女に向かう！！」

「なんだと！？」

レイ LP 2000 ↓ 400

「うわぁ・・・」

再び場の空気が変わる

《パーシアス！ 貴様、こんな可憐なお嬢さんに向かって！！》
《くっ！！ 私としたことが！！》

終末の騎士の言葉に、頭を抱えるパーシアス

「おいおい・・・パーシアス・・・お前もか？」

パーシアスの様子を見て落ち込み始める時谷

《大丈夫ですか!?!》

《自分を責めないで・・・戦うことは宿命なのだから・・・》

そう言って涙を流す乙女

そして、パーシアスの何かが弾けた

《ほ・・・惚れたー!!!》

「惚れんなあ!!!」

パーシアスの叫びを全力で突っ込む時谷

ダーク・パーシアス 乙女カウンター1

「ああもう! ターンエンド!!!」

時谷 LP 4000

場 ダーク・パーシアス 攻撃 2000

伏せ一枚

手札二枚

「僕のターン、装備魔法『ハッピー・マリッジ』を発動!!!」

鐘が鳴り響き、恋する乙女の服装が白いウェディングドレスに変化する

「その効果により、終末の騎士の攻撃力分、恋する乙女の攻撃力がアップ!!!」

恋する乙女 攻撃力 400 ↓ 1800

「なに!？」

「バトル! 恋する乙女でダーク・パーシアスに攻撃!!」

《パーシアスさま!!!》

そのまま、パーシアスに向かって駆け出す乙女だが

《きゃあ!!!》

何かに弾かれる

「え……?」

「……墓地のネクロ・ガードナーの効果だ……」

幻影がパーシアスを包んでいた

《パーシアス様……ヒドイ!》

泣き出す乙女

《す、すまない……そんなつもりでは……》

パーシアスが駆け寄ろうとするが、幻影から出られないでいた

《くそ! ここから出さないか!!!》

《それはできん相談だ……》

怒鳴るパーシアスに答えるネクロ・ガードナー

「くそ!! ターンエン・・・」

「エンドフェイズ、罨発動!!」

「え!?!」

時谷の突然のチェーン

「罨カード『ライバル登場!』!! 相手の場のモンスター一体を選択し、手札から同じレベルのモンスターを特殊召喚する!!」

レイの場にはレベル2の恋する乙女とレベル4の終末の騎士がいる

「俺が選ぶのは・・・恋する乙女!!」

「え!?!」

「恋する乙女!?!」

「つまり、レベル2・・・」

「そんなカード、時谷君のデッキにあったっけ?」

時谷の宣言に驚く隼人、亮、翔の三人

「あ・・・もしかしたら・・・」

そして、なにかに気づいた実由

「そうだよな・・・男をけしかけるからダメなんだよな・・・だったら、ここは女の子に頑張ってもらおうか・・・」

「何を・・・?」

フツと笑う時谷にレイも首を傾げる

「恋する乙女と同じレベル2のモンスター・・・黒魔導師クランを特殊召喚!!」

《やあ!!》

黒魔導師クラン 攻撃力 1200

「クラン!？」

「時谷・・・あんなカード持ってたんだな？」

時谷の呼び出したモンスターに驚いている翔と隼人

「やっぱり・・・入れてみたんだ・・・」

《クランちゃん! 頑張ってー!!》

ピケルも応援している

「ターンエンド・・・」

レイ LP 400

場 恋する乙女 攻撃 1800 (キューピット・キス、ハッピー・マリッジ)

終末の騎士 攻撃 1400

ディフェンス・メイデン キューピット・キス(恋する乙女) ハッピー・マリッジ(恋する乙女)

手札四枚

「俺のターン！ このスタンバイフェイズ、克蘭の効果発動！！
相手の場のモンスター一体につき、300ポイントのダメージを
与える！！」

「え！？」

克蘭の効果に驚くレイ

「レイの場にはモンスターが二体・・・」

「つまり600ポイントのダメージ・・・」

「ってことは・・・」

《このっ！ このっ！！ このお！！》

手に持った鞭でレイ側のモンスター達を打つ克蘭

《いたゝい！！》

《ひゝ！！》

そして、なぜか恋する乙女には執拗に攻撃を続けていた

《可愛い子ぶって・・・人様のモンスターたぶらかしてんじゃない
わよ！！》

最後には手に持った鞭を投げ捨て、思いっきり乙女を引っぱたくク
ラン

《あう！！》

とんでもない余波がレイにも届く

「きゃあ!!」

レイ LP 400 ↓ 0

「克蘭・・・お疲れ・・・」

《ふん!! あんたたちも、後でオシオキだからね!!》
《《ひい!!》》

終末の騎士とパーシアスを睨みつける克蘭

二体は完全に震え上がっていた

それを横目に、座り込むレイに駆け寄る時谷

「時谷・・・ボク・・・」

「別に言わなくていいよ・・・それに、それを言う相手は俺じゃない・・・」

そう言いながら、亮の方に目を向ける時谷

「後ろの奴に言ってやれよ？」

「え・・・？」

十代の言葉に振り向くレイ

そこには、デュエルを見ていた亮達が降りてきていた

「さ・・・出番ですよ？」

「あ・・・」

「男の責任・・・です!」

「あ、ああ・・・」

実由に背中を押されてレイのもとに向かう亮

「亮サマ!!」

「う・・・うむ・・・」

珍しく言葉に詰まっている亮

「ごめんなさい・・・さっき寮に忍び込んだのは・・・ボクだったんです・・・十代はそれを止めようとしてくれただけなんです」

「分かっている」

頷きながら答える亮

「亮サマが、デュエルアカデミアに入学なさってから、ずっと会いたくて会いたくて・・・やっとここまで来たの・・・!」

レイの告白に顔を赤くしている翔と隼人

「さっきのデュエルには負けちゃったけど・・・亮サマへの気持ち
は誰にも負けない!!」

まっすぐに亮を見つめる

「乙女の一途な思い・・・受け止めて!!」

手を開いてそういうレイ

後ろに恋する乙女が見える

「ぬう・・・」

「へへっ！ さすがのカイザーもタジタジだな！ しかしスゲー迫力、デュエルと同じだな？」

十代がからかいながらそう言うのと
レイも困った表情で

「デュエルじゃないよ・・・」

「そうだね・・・」

そう答えると、実由が一步前にでる

「一途な思いは素敵だよ？ でも今、あなたが言ったように、さっきの時谷君のモンスター達のように、本物の男の人は、ウインクや投げキッスじゃダメだよ？ デュエルも恋も、気持ちがぶつかって、初めて実るんだよ？」

そう教える実由に対しレイは

「あなた、亮サマのなんなの！？ まさか・・・恋のライバル！？」

そう怒鳴る

「ええ！？」

さすがに実由も想像していなかった言葉に後ずさる

「違うよ！？ それに・・・私には・・・その・・・もう心に決め

た人が・・・」

顔を赤くしながら時谷を見る実由

「うう・・・」

時谷も顔を赤くする

「レイ！ お前の気持ちは嬉しいが・・・」
「亮サマ！！」

一歩前に出た亮に実由を押しつけて近寄るレイ

「今の俺には、デュエルが全てなんだ・・・」
「亮サマ・・・」

亮の言葉に悲しそうな目をするレイ
そんなレイに、落としていった髪留めを手渡す亮
そして・・・

「故郷に帰るんだ・・・」

そうはっきりと伝えた

「そこまで言わなくても・・・」
「レイはここには居られない・・・」

時谷の言葉を遮りそう告げる亮

「なんだ？ レイにはまだ秘密があるのか？」

十代がそう聞くと

「レイはまだ小学五年だ・・・」

「「「「え・・・？」」「」「」」

その一言に、時谷、実由、十代、翔、隼人が固まる

「えへへ！！」

苦笑いするレイ

「つまり・・・俺は小学五年に苦戦したのか・・・？」

遠い目をしている時谷

「ごめんなさい・・・でも、デュエルは楽しかったよ？」

「あっはは・・・そうか・・・」

時谷も乾いた笑いで返す

次の日、レイは本島へ戻ることになり、見送りに来た時谷達（忘れられていた進も来ている）

「来年卒業したら、またテスト受けて合格するからねー！！」

大きな声でそう告げるレイ

「ですって・・・亮さん？」

「その頃には、俺は卒業だ・・・」

からかう時谷にそう答える亮

「待っててねー！ 時谷サマ〜！！」

「「はぁ!?!」」

レイの放った一言に固まる時谷と実由

「な・・・なんで・・・」

「あとは任せた・・・」

「頑張れよう？」

「じゃあね〜」

「ゆっくり、見送ってあげるんだな〜」

固まる時谷を放って戻っていく進以外の他の男子陣

「あ・・・おい・・・十d・・・!?!?」

十代を呼ぼうとして、背中に悪寒が走る時谷

ゆっくりと振り返ると、そこには眩しい笑顔の婚約者が立っていた・
・

「時谷君・・・?」

「み・・・実由・・・待ってくれ・・・ご、誤解だから・・・な?」

「うん・・・わかってるよ? でも、船が見えなくなるまで見送ってあげるのが、男性の嗜みだよ・・・?」

「ド・・・ドンマイ・・・時谷・・・」

それだけ言うと、笑顔のまま立ち去る実由とビクビクしながら付い

ていく進

「あ・・・実由！？　ちよつと・・・進も・・・」

取り残される時谷に、無常にもレイの「時谷サマ」という声がずつと響いてくる

《若・・・油断しましたな・・・》

《今回は・・・時谷様が悪いかと・・・》

《実由さん怖い・・・》

《絶対に、怒らせないようにしましょう・・・》

《あつはは！　でも、クランちゃんも人のこと言えないよね》

《ふむ・・・一理ある》

思い思いの感想を言っている精霊達

それからしばらく、実由に頭の上がなくなった時谷

ついでに、時谷のデッキのモンスター達もクランにはタジタジになつてしまった・・・

TURN 27 (後書き)

どうも!!

さて、今回はクラン初デュエルでフィニッシャーな回でした!!

久しぶりに効果ダメージ勝利・・・実由ちゃんとのデュエル以来です
ね・・・

レイのデッキはことごとくオリカのせいで書くのが難しいです・・・

さて・・・今後はクランもメインで戦ってもらいましょうか・・・
闇デッキの中でどれだけアイドルらしくできるのか・・・そこが問
題だ・・・

次回は、どうしようかな・・・とりあえず、今のところは代表を決
定させる予定ですが・・・デュエルするかどうかは未定です・・・
6人分やると時間がかかるので・・・

さて、アンケートの締切もあと少しですね・・・と言っても、キー
カードのアンケートは引き続き行います

「OCGのこんなカード使ってみて欲しい」というようなご要望が
あれば、できるだけ答えていきたいと思っています・・・

ではまた次回!!

TURN 28 (前書き)

今月二回目

悩んだ結果、デュエルすることになりました

TURN 28

《代表決定・来る友好デュエルに向けて》

レイが学園を去って数日

休み時間や放課後にクランとピケルの元の持ち主を探していた時谷と実由だが、一向に手掛かりが見つかっていなかった・・・

「これだけ探していないなんてな・・・」

「名前さえ無いんだもんね・・・どういふことなんだろう・・・？」

昼休み、購買の飲食スペースで話している二人

「あ！ 時谷君と実由ちゃん！ ここにいたっス！！」

「探したぜ？ 二人とも」

そこに、翔と十代がやってくる

「なんだ？」

「午後の授業のはじめに、校長先生から今度の友好デュエルの代表が発表になるっス！！」

「あ・・・そうなんだ・・・」

翔の話にそう答える実由

「仕方ない・・・もどるか・・・」

そう言って、購買を後にする時谷達

教室にて・・・

「今回、皆さんに集まってもらったのは他でもありません・・・来るノース校との友好デュエルの代表者6名を発表したいと思います」

校長の第一声に、生徒がざわめく

「今年は、全員一年生で行いたいと思い、その中から厳選した6名でノース校とデュエルをしています・・・」

クロノスが、代表者の名前の書かれた用紙を校長に手渡す

「まず男子・・・一人目は遊城十代君！」

「お！ やったぜ！！！」

呼ばれた十代は飛び跳ねて喜ぶ

「次に二人目・・・光坂進君！」

「・・・・・・・・え・・・・？」

呼ばれてしばらく呆然とする進

「そして・・・北上時谷君！！」

「俺か・・・」

静かに答える時谷

「続いて女子・・・一人目は・・・天上院明日香君！」
「はい！」

返事を返す明日香

「次に・・・鈴原実由君！」
「は・・・はい！」

緊張気味に答える実由

「最後は・・・宇佐美彰子君!!」
「ひゃ・・・ひゃい!!」

最後に呼ばれ、囁みながら答える女子生徒・・・宇佐美彰子・・・

「宇佐美・・・？ 誰だ？」

「お前・・・同級生の名前ぐらい覚えろよ・・・」

十代が首を傾げると、時谷が呆れて答える

「宇佐美彰子さん・・・ブルー女子の中でトップ5ぐらいの実力・・・
だったはず・・・お父さんは考古学会の重鎮で小説も出して・・・
妹さんが何人か居るみたい・・・あと女子の間での愛称は
『ウサミン』・・・だって・・・」

「進・・・詳しいな？」

「まあ・・・宇佐美さんとは・・・図書館でよく会うし・・・」

「

時谷の言葉に、顔をそらす進

「そして、デュエルの形式ですが・・・シングルデュエルを四つとタッグデュエルを一つを予定しています」

「シングル四つにタッグ一つ？」

「だから6人なんだ・・・」

校長のもう一つの報告に、納得する実由

「つまり、計5回のデュエルで、三勝した学校の勝利という訳か・・・」

「私からの連絡は以上です・・・では、代表に選ばれたみなさんは、本番に向けて、準備をよろしくお願いします・・・」

それだけ言うと、教室を出ていく校長とクロノス

「よし・・・彰子!!」

「ひゃい!？」

何かを思いついた十代が彰子を呼ぶ

突然の大声に驚く彰子

「な・・・なんですか・・・？ あ・・・光坂さん・・・」

「や・・・」

十代に振り向くと、進を見つけてどこか安心している彰子

「お前も代表に選ばれたろ？ 俺とデュエルしようぜ！」

「どういう理屈だよ・・・」

突然の申し込みに、時谷はまたも呆れる

「なくに。同じ代表としては、仲間のデッキも把握しておきたいしさ!!」

「っていう建前で、単に宇佐美さんの『トップ5に入る実力』に惹かれたんだろうが・・・」

「たはは・・・」

凶星だった

「まあ、誰かはタッグを組まなきゃいけないしな・・・そういう意味では、必要かもな・・・」

十代の行動に、そう判断する時谷

「えっと・・・その・・・実は・・・私・・・辞退しようかなって・・・」

「・・・え？」

「そりゃまた・・・」

彰子の突然の辞退宣言に驚く進と時谷

「私なんかが出ても・・・みなさんに迷惑が掛かりますし・・・」

「そんなことは・・・」

「いえ・・・きっとそうです・・・」

俯きながら進に首を振る彰子

「あの噂も勝手に流されて・・・私の実力じゃ・・・天上院さんの

足元にも・・・」

「だったらなおのこと・・・デュエルしようぜ!!」
「え・・・?」

十代の言葉に首を傾げる彰子

「明日香の実力をこの眼で見た俺が、見極めてやるからさ!!」

十代が胸をドンと叩く

「でも・・・」

「やってみたら・・・? 宇佐美さん・・・」

「光坂さん・・・」

進が彰子を後押しする

「大丈夫だよ・・・宇佐美さんなら・・・きっとね?」

「・・・・・・・・わかりました・・・受けます!」

進の言葉に頷き、申し出を受ける彰子

「よっし! それじゃ早速・・・」

「それじゃ、午後の授業を始めるのにゃ。十代君? 席に着くの
にゃ」

教室を出ようとしたところで、大徳寺がやってくる

「あ・・・授業忘れてた・・・」

十代の言葉に、苦笑いの代表達だった・・・

放課後・・・

許可を貰い、ブルー用のデュエルリンクを使うことにした十代達

「よし・・・それじゃ改めて・・・」

「よ・・・よろしくお願いします!!」

互いに構える

「「デュエル!!」」

十代	LP	4000
彰子	LP	4000

「俺のターン・・・ドロー!! 俺は手札からE・HERO スパークマンを召喚!」

E・HERO スパークマン 攻撃力 1600

「カードを二枚セットして・・・ターンエンド!!」

十代 LP 4000

場 E・HERO スパークマン 攻撃 1600

伏せ二枚

手札三枚

「わ、私のターンです・・・ドロー!」

緊張しながらカードを引く彰子

「わ、私はセイバーザウルスを攻撃表示で召喚します!」

彰子の場に、赤色のトリケラトプスが召喚される

セイバーザウルス 攻撃力 1900

「ば、バトルです! セイバーザウルスで、スパークマンを攻撃します!」

まっすぐスパークマンに突進していくセイバーザウルス

思い切り角で吹き飛ばされるスパークマン

「ぐう!!」

十代 LP 4000 ↓ 3700

「この瞬間、暴発動! 『ヒーローシグナル』!! 『E・HERO』が戦闘で破壊されたとき、デッキからレベル4以下の『E・HERO』を特殊召喚する! 来い! クレイマン!!」

E・HERO クレイマン 守備力 2000

「それなら、カードを三枚セットして・・・ターンエンドです!」

彰子 LP 4000

場 セイバーザウルス 攻撃 1900

伏せ三枚

手札二枚

「俺のターン、ドロー!!! 手札から魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動!!! 場のクレイマンと墓地のスパークマンを除外融合! 現れるE・HERO サンダー・ジャイアント!!!」

E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃力 2400

「サンダー・ジャイアントのモンスター効果! 手札を一枚捨てて、こいつより元々の攻撃力が下の相手モンスターを破壊する! 『ヴェイパー・スパーク』!!!」

「きゃあ!」

セイバーザウルスに雷を落とすサンダー・ジャイアント

「実由・・・大丈夫なのか?」

「うん・・・ソリッドビジョンだから」

サンダー・ジャイアントの雷を見て、心配になった時谷が実由に声をかける

「時谷君のダーク・クリエイターの雷だって大丈夫だったでしょ?」
「そういやそうだったな・・・」

最初のデュエルを思い出している時谷

「バトル！ サンダー・ジャイアントでダイレクトアタック！！」
「ボルティック・サンダー」！！」

「り、リバースカード、オープン！！ 罠カード『化石発掘』！！
手札を一枚捨てて、墓地から恐竜族モンスターを特殊召喚します」

「蘇生カードか・・・」

「セイバーザウルスを蘇生して、ダメージの軽減かしら」
「ううん・・・違う・・・」

明日香の解析に首を振って答える進

「どういう意味？」

翔が聞こうとすると

「蘇生するのは・・・ブラック・ティラノ暗黒恐獣！！」

「何！？」

彰子の場に出てきたモンスターに驚く十代

出てきたのは、漆黒の恐竜だった

暗黒恐獣 攻撃力 2600

「どうして！？ 墓地にはセイバーザウルスしか・・・」
「『化石発掘』を発動するために一枚墓地に捨てたろ？ それが、

あのカードだったってことだ」

「『手札を捨てて発動』するから、発動する前に、墓地のモンスターが一枚増えることもあるんだ」

時谷と進が翔に教える

「バトルは中断・・・ターンエンド!!」

十代 LP 3700

場 E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃 2400

伏せ一枚

手札二枚

「私のターンです・・・ドロー!」

引いたカードを見て頷く彰子

「私は永続魔法『一族の結束』を発動します!」
「うえ!?!」

十代が驚く

「墓地のモンスターの種族が一種類のとき、場の同じ種族のモンスターの攻撃力を800ポイントアップします!」

暗黒恐獣 攻撃力 2600 ↓ 3400

「攻撃力3400!?!」

「あのカードは本当にやっかいだよな・・・」

「並大抵のモンスターじゃ勝てなくなるもんね」

巨大化した暗黒恐獣を見ながら驚いている翔と、落ち着いて話している時谷と実由

「さらに、手札から大きくしゃみのカバザウルスを召喚します！」

紅色の大型のカバが召喚される

大きくしゃみのカバザウルス 攻撃力 1700 ↓ 2500

「バトルです！ カバザウルスで、サンダー・ジャイアントを攻撃
！！」

思い切り息を吐き出しサンダー・ジャイアントに攻撃するカバザウルス

「リバースカードオープン！ 『攻撃の無力化』！！ 相手モンス
ターの攻撃を無効し、バトルフェイズを終了させる！」

サンダー・ジャイアントの前に壁が出来、息を防ぐ

「うう・・・ターンエンドです・・・」

彰子 LP 4000

場 暗黒恐獣 攻撃 3700 (化石発掘)

大きくしゃみのカバザウルス 攻撃 2500

化石発掘 (暗黒恐獣)

一族の結束

伏せ二枚

手札無し

「あの十代をここまで苦しませるとはな・・・」

「さすがだよね・・・宇佐美さん」

十代相手に未だノーダメージの彰子のデュエルに驚いている時谷

「俺のターン、ドロー！！ よっしゃ！！」

引いたカードに喜ぶ十代

「手札を一枚捨てて、サンダー・ジャイアントの効果だ！ カバザウルスを破壊する！ 『ヴェイパー・スパーク』！！」

雷を落とされ、破壊されるカバザウルス

「さらに、墓地のE・HERO ネクロダークマンの効果！ 墓地にあるとき、手札の『E・HERO』は一度だけ生け贄なしで召喚できる！！ E・HERO エッジマンを召喚！！」

E・HERO エッジマン 攻撃力 2600

「それでも、暗黒恐獣には・・・」

「いいや！ さらに魔法カード『R－ライトジャスティス』を発動！ 場の『E・HERO』の数だけ場の魔法・罠カードを破壊する！ 俺の場には二体のヒーローがいるから、『化石発掘』と『一族の

『結束』を破壊する!!」

HERO二体から光が放たれ、カードを破壊する

「暗黒恐獣が・・・」

『化石発掘』の効果で出された暗黒恐獣も一緒に破壊され、彰子のモンスターが全滅する

「行くぜ! サンダー・ジャイアントでダイレクトアタックだ!」
『ボルテック・サンダー』!!」

「きゃあ!!」

電撃を受けて、後ずさる彰子

彰子 LP 4000 ↓ 1600

「エッジマンで、さらにダイレクトアタック! 『パワー・エッジ・シュート』!!」

腕を突き出し突進するエッジマン

「り、リバースカード・・・オープン!! 罠カード・・・『生存本能』!!」

「罠!？」

十代も驚く

「墓地の恐竜族を任意の枚数除外して・・・一枚につき400ポイントのライフを回復します・・・墓地の三体の恐竜族を除外して、

1200ポイントのライフを回復します・・・ごめんなさい・・・」

カードに謝りながらポケットにしまう彰子

そんな彰子の周りを恐竜の幻影が飛び交い、彰子の中に入っていく

彰子 LP 1600 ↓ 2800

「だが、エッジマンの攻撃は続行だ!!」
「きやあああ!!」

エッジマンの攻撃に吹き飛ばす彰子

彰子 LP 2800 ↓ 200

「持ちこたえたか・・・」
「危なかったね・・・」

時谷と実由も二人のデュエルに見入っている

「惜しい! ターンエンドだ!!」

十代 LP 3700

場 E・HERO サンダー・ジャイアント 攻撃 2400

E・HERO エッジマン 攻撃 2600

伏せ無し

手札無し

「なんとかしないと・・・私のターンです！　ドロー！！　あ・・・」

引いたカードを見て、目を見開く彰子

「なんだ？」

「何を引いたの？」

時谷と明日香が彰子の様子に首を傾げる

「私は・・・この子を召喚します！　ディノインフィニティ！！」

一体の恐竜が召喚され、周囲に光が飛び交っている

「この子の攻撃力は、除外されてる私の恐竜族モンスターの数×1000ポイントです」

「えっと・・・さっき除外したのが三体だから・・・攻撃力は・・・」

光が体内に入っていく

ディノインフィニティ　攻撃力　3000

「3000!？」

「行きます・・・ディノインフィニティで、エッジマンを攻撃します！　『インフィニティ・ファンク』！！」

エッジマンを噛み砕くディノインフィニティ

「ぐう!!」

十代 LP 3700 ↓ 3300

「まだ終わりじゃないです! 罫カード『異次元からの帰還』!!
ライフを半分払って、除外されているモンスターを可能な限り特
殊召喚します!!」

彰子 LP 200 ↓ 100

「除外されたこの子達を再び召喚します!」

彰子の場に、三体の恐竜が並ぶ

セイバーザウルス 攻撃力 1900

大くしゃみのカバザウルス 攻撃力 1700

暗黒恐獣 攻撃力 2600

「除外されてる恐竜が居なくなったので、ディノインフィニティの
攻撃力は減少します」

ディノインフィニティ 攻撃力 3000 ↓ 0

「ま、まだバトルフェイズです! 暗黒恐獣でサンダー・ジャイア
ントを攻撃です!!」

咆哮しながらサンダー・ジャイアントに突進し、噛み砕く暗黒恐獣

「ぐわあ!!」

十代 L P 3 3 0 0 ↓ 3 1 0 0

「さらに二体のモンスターでダイレクトアタックです!!」
「ぐわあああ!!」

十代 L P 3 1 0 0 ↓ 0

「か・・・勝てた・・・」

勝ったのがわかると、力が抜けたのかその場でへたり込む彰子

「大丈夫? 宇佐美さん」

「あ・・・はい・・・」

駆け寄る実由に答える彰子

「十代、負けたな?」

「くっそ〜! あと少しだったのにな〜!!」

時谷の言葉に悔しがる十代

「あ、あの・・・ごめんなさい! 大丈夫ですか!??」

「ああ・・・ガッチャ! 楽しいデュエルだったぜ?」

立ち上がり、彰子に決めポーズで答える十代

「負けてもそれするんだな」

「へへっ! 勝ち負けなんて関係ないぜ! デュエルは楽しむもん

だからな!!」

あまりにもポジティブな十代だった

「しかしまあ、これでわかっただろ？」

「え？」

「勝つとか負けるとか考えないで・・・自分のデュエルをしたらいい・・・ってこと？」

「そういうことみたいだな・・・」

「自分のデュエル・・・」

十代の言葉に少し考え込む彰子

「そ、そうですよね・・・わかりました・・・私、やってみます！」

何かを決心し、頷く彰子

「よし！」

「それじゃ、早速デッキを考えてみるか・・・ひとつはタッグだし・・・そのへんも考えなきゃな？」

「そうだね・・・」

時谷の提案に、頷く実由

（クラン、ピケル・・・悪いけど・・・）

《別にいいわよ？》

《はい！今はそっちに集中してください》

時谷は二人に謝るが、クランとピケルは頷いて答える

「そんじゃ・・・これやろうぜ!!」

そう言って、十代が手の平を下にして差し出す

「ふむ・・・いいかもな」

「うん・・・」

時谷と進も差し出す

「ほら、宇佐美さんと明日香も!!」

「ええ」

「は、はい!」

実由に促され、明日香と彰子も差し出す

《面白そう! 私達も!!!》

《そうだな・・・戦うのは我らも同じだな》

《では・・・》

《うむ》

マナ、ゼラート、ケルビム、マハードも手を添える

《お前達もどうだ?》

《《え?》》

ゼラートが克蘭とピケルにも声をかける

《そうですね、二人ももう私たちの仲間です》

《みんな一緒にね?》

《克蘭ちゃん・・・》

《しょうがないわね・・・》

渋々ながら、手を伸ばすクランとピケル

背が低いので、精一杯背伸びしている

「こんな時はなんて言うんだ？」

「ベストを尽くす」でいいんじゃないか？」

「そっか……. そんじゃ……. ベストを尽くして…….」

「ファイトー!!!」

「「『お、オー……』」

「オ・・・」

「おいおい、彰子と進！
もつと声出せって！」

「す、すみません・・・」

「ごめん・・・」

十代が二人に注意すると、二人揃って謝るのだった。

その後、教室で互いのデッキについてとタッグをどうするかを話し合う代表達だった・・・

TURN 28 (後書き)

どうも！

という訳で、代表が正式に決定しました！

五人はある程度予想できていたと思いますが、六人目には、TFで最も優遇されていると言われている宇佐美さんにしました！！

宇佐美さんは、TF初期からの作者の一番のお気に入り的人了

TF5と6では、真っ先に発信器を付けるストーカーっぷり・・・
だって強いんですもの・・・恐竜さん・・・

さて、この小説でデュエルすると、十代が軒並み負けるという状態に・・・友好デュエル大丈夫かしら・・・

タッグ一つとシングル四つの五回戦・・・長丁場になりそうですね・・・
・・年内にセブンスターズまでいけないかも・・・？

次回から友好デュエルの開始です！

皆さんの送ってくださったデッキがどうなっているのか・・・お楽しみ！！

ではまた次回！！

TURN 29 (前書き)

さうて、今回から友好デュエルのスタートです！

が、今回はデュエルはありませんよ！

TURN 29

《友好デュエル開始！ 思わぬ再会》

代表が決定した翌週

それぞれの代表が自身のデッキの調整をしたり、いろいろな組み合わせでデュエルをしたりして来る本番への準備を進めていた

「いよいよ明日だな・・・」

「うん・・・」

時谷の部屋で、デッキの最終調整をしている時谷と進

「どんな相手が来るかな？」

「そうだな・・・まあ、代表っていうぐらいだからな・・・かなり強いとは思うけど・・・」

「でも・・・負けるつもりもない・・・でしょ？」

「もちろんだ・・・」

時谷の言葉を先取りする進

「さて・・・そろそろ寝るか・・・」

「うん・・・」

デッキをホルダーにいれ、お互いのベッドに入る時谷と進

「お休み・・・時谷・・・」

「ああ・・・」

そして、そのまま眠りにつく二人だった・・・

翌日・・・

「おはよう！ 時谷君、進君！！」

「ああ、おはよう。実由」

「おはよう・・・宇佐美さんと天上院さんも」

「ええ」

「は、はい！！！」

港に続く道で合流するブルーの五人

ノース校代表を出迎えるため、少し早めに出てきたのだ

「おーい！」

「あ・・・遊城君・・・」

手を振りながら走ってくる十代と、その後ろから翔と隼人もやってくる

「いよいよだな？」

「頑張ってるね！」

「ああ」

六人を激励する翔と隼人

「一体どんな相手が来るのか・・・ワクワクすんなー！！！」

「お前はここ一週間そればっかだな・・・」

「あはは・・・でも、少し楽しみなのは確かだよね？」

向いながら話をしている十代と時谷、実由の三人

その後ろには

「うう・・・き、緊張してきました・・・」

「大丈夫よ・・・宇佐美さん・・・」

「明日香さん・・・？」

肩を震わせている彰子に声をかける明日香

「緊張してる人間なら・・・あそこにもいるから・・・」

そう言って明日香の指差す方向を見ると、手と足が同時に出ている
進の姿があった

「あの・・・こ、光坂さん？」

「な・・・なに・・・？」

上擦った声で返事を返す進

「大丈夫なの？」

「ちよつと・・・危ないかも・・・」

明日香も声をかけるが、進は小さく答える

「な〜に言っただよ進！ この前言ったろ？ “楽しくデュエル
すればいい” って!！」

「そうだな・・・いつもどおりやってりゃ、結果なんて自ずと付いてくるさ」

「うんうん!!」

緊張をほぐすために進達に寄ってきた十代達

「そう・・・だね・・・ごめん・・・僕ってすぐにマイナス思考になっちゃって・・・」

「私も・・・ごめんなさい・・・」

そう言って謝る進と彰子

「気にすんなって・・・お？　もうみんな来てるな」

「ほんとだ」

港につくと、校長を始め本校の生徒が船を待っていた

「おお・・・来ましたか、皆さん」

「ノース校の代表達は？」

「まだなノゝネ」

校長とクロノスが6人を迎える

「あ、あれじゃない？」

「潜水艦・・・？」

翔が近づいてくる船・・・潜水艦に気づく

まっすぐこちらに迫り、停止して、中からメガネをかけ、やや頭皮が後退している男性が降りてくる

「おお・・・よくいらしましたな？　一ノ瀬校長」

「しばし、ウチのクルー等がお世話をかけますが、よろしく願いますよ？」

「いや、私の方こそ・・・」

握手をしながら挨拶をする鮫島校長とノース校校長の一ノ瀬校長

「ところで・・・」

「は・・・？」

「トメさんは、お元気ですか？」

突然、購買のトメさんの話になった

「もちろん・・・トメさんはこの友好試合には欠かせませんから」

校長もそう答える

「なんでトメさんが・・・？」

「さあ・・・？」

後ろで聞いていた時谷と実由が小声で話している

「校長先生！　挨拶はその辺にして、早く向こうの代表紹介してよ！！」

十代が二人に近づいて催促する

「これ、十代君・・・行儀が悪いぞ・・・」

困った顔で十代を注意する鮫島校長

後ろで時谷達も苦笑いしていた

「でも俺、早く対戦相手に会いたくてさ……」

「そうか……君が噂の十代君か……」

笑顔で名前を確認する一ノ瀬校長

「よろしく！ おっさんがノース校の校長先生！？」

思い切り“おっさん”呼ばわりする十代に、一ノ瀬校長もずっとこける

「これ、十代君……」

「さすがにそれはまずいって……」

鮫島校長と時谷が再度注意する

「ねえねえ！ 誰なんだ！？ 俺達の相手って！！」

ワクワクしながら一ノ瀬校長に聞く十代そこに……

「俺達だ！」

「ん？」

「どこかで聞いた声のような……」

「もしかして……」

聞き覚えのある声に、首を傾げる十代、時谷、進の三人……

潜水艦の中から、6人の男女が出てくる

「お前は!!」

「ま、万丈目君!？」

そこには、かつて十代や時谷に敗北し、アカデミアを去ったハズの万丈目準が立っていた・・・

「おお!! 万丈目だ!!」

「万丈目“さん”だ!」

「万丈目・・・お前が・・・ノース校の代表の一人なのか？」

「万丈目“さん”だ・・・」

「“さん”だ!!」

「お前等! さっきから聞いてりゃ、万丈目さんのことを呼び捨てにしやがって!!」

代表団の一人の女子が時谷達を睨みつける

「やめておけ・・・」

そう言って、止める万丈目

そこに、突然風がふく

「な、なんだ!？」

「ヘリコプター・・・？」

「それに・・・あのマーク・・・」

「・・・“万”・・・？」

近くのヘリポートに、ヘリコプターが二台降りてきていて、その機体には“万”と書かれていた

「『万丈目グループ』か・・・」

時谷がそうつぶやくと

「そうだ!!」

「久しぶりだな! 準! 元気にやっているのか!?!」

ヘリには二人の男性が乗っていて、万丈目に向かって叫んでいた

「あの二人は・・・」

「確か・・・万丈目グループの長男と次男だな・・・」

少し前に顔を見た覚えがある時谷と実由

「それって・・・つまり・・・」

「万丈目さんのお兄さん達ってことですか?」

「そうなるわね・・・」

「長作兄さん! 正司兄さん! 何しにきたんだ!!」

「もちろん、お前の勝利を祝福するためにさ!」

「あまり心配をかけるなよ? 準!」

少し、怒りを見せながら二人に聞くと、当然のようにそう答える二人

「どうでもいいけど、よくヘリの音の中で会話できるな・・・」

「時谷君・・・」

それを聞いていた時谷はそんなことを思っていた・・・

「はーい、いいお顔！ この画、もらいます!!」

「2カメ、次は万丈目君のアップ拾うよー!」

突然現れた報道陣

「どっから湧いたんだ・・・」

「これは、なんの騒ぎですか?」

一ノ瀬校長がスタッフに聞くと

「ありゃ? 聞いてないんスか? 今年はこの対抗デュエルと、テレビで大々的に報道するんスよ!!」

「テレビ中継!？」

「なんで!？」

時谷と実由、そして、他の皆も驚く

その後、それぞれの代表の準備のための時間が用意され、時谷達も部屋に集まっていた・・・

「ど、ど、どうでしょう!？」

「・・・テレビなんて・・・聞いてない・・・」

慌てている彰子と進

「落ち着けよ、二人とも・・・」

「そうだよ？」

「お二人はなんでそんなに落ち着いてるんですか？」

ケロッとしている時谷と実由に彰子が聞くと

「まあ、取材ぐらいなら受けたことあるし・・・」

「俺、この間似たような大会出たしな」

それぞれがそう答える

「そういえば・・・そうだったよね・・・」

「ま、試合が始まっちゃえば、そんなの気にならなくなるって！」

「そうでしょうか・・・」

「ああ・・・それに・・・」

時谷が視線を横にずらすと

「すっげー！！俺のデュエルが日本中に放送されるのか！！」

「あいつはもうノリノリだしな・・・」

「「あ・・・はは・・・」」

十代の様子を見て苦笑いする進と彰子

「それで・・・天上院さんは、どうして落ち着いてるの？」

「緊張はしてるわよ？でも・・・気にしたってしょうがないでしょ？それで、私のデュエルが変わることもないわ」

「そうなんですか・・・」

案外、落ち着いている明日香に頷き返す彰子

「僕・・・ちよつとトイレ・・・」

「ああ・・・なるべく早くくな？」

「うん・・・」

そう言つて、部屋を出ていった進

そして、数分後・・・時間になり、戻ってきた進と共に会場に向かった時谷達

デュエルリンクにて・・・

「さあ皆さん！ いよいよ始まります！！世紀の友好デュエル団体戦！！ 拍手も応援もよろしく！！」

テレビのスタッフが、メガホン片手に実況していた

「さあ・・・各校の代表チームの入場だ！！」

両サイドの扉が開き、右から万丈目達ノース校の代表が、そして左から時谷達本校の代表達がそれぞれ入場してくる

そして、互いにリンクに上がり向かい合う

「それでゝわ、試合を始めるノゝネ！！」

主審のクロノスが進行する

今回の友好デュエルは、午前にシングル前半戦を二回、昼食を挟ん

でタッグデュエル、シングル後半戦二回を行う形式になっている

それぞれの校長には出場選手の名前は知らされているが、誰が何番目にデュエルするのは本番まで知らされていない

そのため、お互い誰と当たるかの予想が立てることが出来ていないのだ

「まずは『先鋒』・・・前に出るノ～ネ!!」

クロノスの言葉に、それぞれの先鋒が壇上に上がる

「実由! しっかりな!!」

「頑張ってね・・・」

「うん!」

時谷と進に答えながら、中央まで進む実由

「まずは本校先鋒・・・セニョ～ラ実由!!」

「よろしくお願いします!!」

「対するは・・・ノース校先鋒・・・セニョ～ラ理恵!!」

「よろしくお願いしますぴょ～ん!!」

実由の相手は、とてつもなくノリの軽い女子生徒

思い切り手を振ってアピールしている

「初めまして～! 山谷理恵だぴょん!!」

「えっと・・・鈴原実由です・・・よ、よろしくね?」

理恵のノリに若干押され気味の実由

「それでゝは・・・第一試合・・・開始なノゝネ!!」

クロノスの言葉に互いにディスクを構える実由と理恵

「デュエルだぴょん!!」

「デュ、デュエル!!」

ここに、デュエルアカデミア対抗デュエル大会が始まった・・・

TURN 29 (後書き)

どうも！

という訳で、サンダーとの再会のお話・・・

さて、まずは実由ちゃんからスタートであります

相手の山谷理恵さんですが・・・使用するデッキはタッグフォースを1からやっている人にはすぐわかるかと思います・・・が、あえてここで答えは言いません！

感想での回答もご遠慮下さいね！

ではまた次回！！

ふと思いましたか・・・あとがきで「今回の最強カード」みたな企画でもやろうと思いますが・・・需要ってありますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8586p/>

遊戯王デュエルモンスターズGX 闇に選ばれし者

2011年11月14日09時48分発行